
魔法少女リリカルなのは ～羽根を持つ者～

白湯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～羽根を持つ者～

【Nコード】

N2588R

【作者名】

白湯

【あらすじ】

小学3年生の春先。

両親を失った少年「翔」

そして、手に入れたのが先へ進む力。

「魔法」と呼ばれる代物。

親から託されたこの力を使い、進む。

自分が何をしたいかを探すために。

第19話 A'S編開始

第36話 s'trikers編開始

第1話 始まりの始まり（前書き）

はじめまして、

白湯です

初の二次創作小説です

いたらない所もありますが、よろしくお願いします

誤字脱字とか、文法が変
とかあれば教えてください

第1話 始まりの始まり

朝は決まって7時起き

「眠い…」

いつもの変わらない日常が始まる

なのに、目に入る日光は清々しくて、気持ち悪い

両親はすでに家を出ている

そして今机の上にある置き手紙を見ると帰るのは夜遅くらしい

こんな事は今に始まった事じゃない

そう、これは変わらない日常なのだから

そして小学校指定の制服に着替える

いつそ私服の方が楽で簡単であるがそうは問屋が卸さない

(私服で行ったら校門に入れてくれなかった)

着替えてる間に、

あらかじめ両親が作って行ったご飯をレンジで暖める

食べ終えたら、家を出て鍵を閉めて「海鳴西通り」

のバス停に向かう

そして8時に出る私立聖祥大附属小学校のバスに乗り込む

8時きっかりにできるので1秒でも遅れたら置いていかれる
いつも通りのルーチンワーク
この生活がひどく嫌いだった

毎日同じことの繰り返し、

「飽きてきた…」

つぶやきに答える者は今はいない

今日の授業は将来の夢

自分の将来の話だ

みんな好き勝手に意見を述べる

先生、お花屋さん、野球選手、消防士、お医者さん、警察、トリマ
I e t c …

挙げ句の果てには戦隊ヒーローものまでがでる始末

でもその中にはピンと来るものは無い

これが将来の夢だ！

と断言する事ができない

「かけるくんは何かあるかな？」

先生は優しい口調で聞いてきた

それに対して俺は

「無いです」

即答

「にははー…。それはないよ」
後ろの女子が言うが気にしない

あ、でも先生涙目だ

やばい！泣きそうだ！

「…あー。でも、」

「でも？」

俺が言おうとして先生が聞き返す

「…パイロットになりたいです」

それを言うってから何も覚えていない

何で言ったんだるか？

空に憧れたから？

鳥に憧れたから？

そうだ。鳥に憧れたんだ！

さすが俺！

「鳥でもいいです！」

「せめて人間の形をお願いします！」

先生とのコント(?)に笑いが起こる

ちょっと楽しいとか思っちゃったりした

…そんな、未来の夢があるような、無いような
そんな毎日が続いた

ある日、事態は急変する

ショックのせいか、記憶が断片しかない
そりゃそうだ

両親が死んだんだから

あの雨の日に

「—————！」

酷い罵声が聞こえた、と思ったら血だらけの父が自分を抱き締めて
いた

母はもういないらしい

「まだ、――！――？――探せ！」

続く男達の声

自分には理解できない

そして父は自分の手に何かを握り締めさせた

そして耳元で

「ごめんな」

、と消えそうなのに力強い声で言っ

死んだ

その次の瞬間、渡されたものが自分の右腕にリストバンドみたいに
なあって巻きついた

色は黒

そしてそのリストバンドがしゃべる

「Please, escape! (逃げて!)」

悲みはなかった、

でもこの場から逃げろと言われた

そして両親がいなくなった俺は

雨の中を走り抜ける
あても無く走り出す
それ以外やることがわからないから

そして気づいたらどこかの病院に寝かされていた。

「ー。バイタルはー。これではーない。」

医者かな？白衣を着た人が喋ってる気がした

そして心の病への配慮か、

一週間の間、精神科の病院へ通わされた
結果として、問題はなかった

両親は死んだのに何も感じなかった自分が異常なのかもしれない

でも所詮はそんな付き合いだった気がする

高町という家が引き取ってくれたそうだが
これからは、

名前が変わって

高町翔となる

そして新しく飛び立てる気がした

第1話 始まりの始まり（後書き）

続きます

一応、

はい…

更新は遅れそうですが…

せっかく始めたし頑張ってみます

第2話 久しぶりの日常（ルーチンワーク）（前書き）

どうも白湯です

少ないですが、一歩前進

コーヒーなどを持ってゆっくりお読みください

……文の量があんまりないんで

誤字脱字の報告とかあれば教えてください

第2話 久しぶりの日常（ルーチンワーク）

目が覚める

周りにはピンクの壁

久しぶりのベッドの上

いつもの慣れた電子音が聞こえない

「そっか、もう高町さんの家に住んでるんだっけ？」

ぼーっとした頭が徐々に覚醒する

昨日、明日から学校だから早く寝よっつて言ったから病院から帰ってすぐ寝たんだった…

そして置き時計で時間を確認

7時30分

住む場所が西から東に移動した
おかげさまで睡眠時間が増えた
こんな楽だったことはあるうか、いやない。

「反語を使いこなすのはいいが、早く起きてくれよ？」

高町家の長

士郎さんが起こしにくる

「…すみません。テンションが変になったただけです」

病院で目覚めた俺が初めてみた人もこの人だった。

父親同士、仲のいい関係だったらしいのだ

今回の引き取り手になる話も2つ返事でOKを出してくれた。

なので高町家の住民になれたらしいのだ。

「早くしないとご飯覚めるぞ」

「あ、今すぐ行きます。」

そうして、ご飯を食べるためにダイニングへ降りる

「おはよう、翔」

「おはよう」

降りた時、一階のフロアにいた全員から声をかけられる

「…お、はよう」

泣き出しそうになって声が詰まる

孤独が一瞬で埋まった気がした

でもここで泣くわけもなく、こらえて椅子に座る

俺が椅子に座ってご飯を食べていると

二階から高町家の住人が降りてきた

「うゅ…おはよ…」
なのはだ

「遅いぞなのはー」

みんなすでに食べていて、恭也さんなんかすでに木刀の素振りによく始末

あ、高町さんが階段でこけた

「我が家には流派があるからね」と、美由希さん

あれ？喫茶店経営はどこへ…

「道場だけじゃ…、稼ぎが、ね？」

高町家の母桃子さん

でもブラックな話は後回しが良かった…

「…いただきます」
泣き声でなのはが椅子に座る

あれ？誰もなのはのフォローに行かなかったなこの家

「「「いつも通りなんで」「」」

3人の同時発言
おお、ハモった

「あ、なるほど」

「うう、かけるくんが冷たい…」

涙目でなのはがご飯を食べ始める

そうして朝の雑談も終わり、バスが来る

バスに乗る前、

「私の事は、高町さん、ではなく、なのは、って名前で呼んでね」

なのはからの申し立て

「家の中はみんな高町だから。わかるように…ね？」

上目づかいで聞いてくる

そう言われたら、断る訳もなく

「た…、なのは…さん？」

妥協してさん付け

さすがに名前は恥ずかしい…

「なーのーはー！、だよ？」

さん付けすら許されない？！

「な、なの…は？」

「うん。よくできました」

手を伸ばして、背伸びして頭を撫でてくる

「ご褒美、だよ？」

ま、まあなのはがいいのならいつか

「……………」

あれ？なのはと一緒に登校しただけなのにこの殺意はなんだろ

気のせいかな？

なんかみんな怖いよ？

みんな小学生だよね？

「……………」（明後日の方向を見る）

ごめん、誰か助けて

あ、無理ですか

さいですか

…帰りたい

そうして人生初の

「高町翔」

としての学校への登校

それは波乱しか産みそうになかった

バスの中で出会った二人の女の子

名前はすずかとアリサ

なのはの親友らしい

バスにはいつも乗ってた気はするが、
知らなかった

この学校にいる人間なんて、見る気もしなかったから

基本学校ではその子達と遊んだ

新しく友達を作るのは明日から
まずは馴れよう
という算段だ

朝のショートでは名字が変わった事についてみんなから聞かれる

みんなからしたら

「ずっと休んでた、学校に来たら名前が変わってた」
ぐらいの認識

俺が無視を通したらみんな諦めた

そうして1人、また1人と外に遊びにいった

「あなたは少しはしゃべりなさいよ！（パシーン！）」

ハリセンの音が聞こえ、頭に激痛が走る。

こ、これは痛い

「…どこからハリセン出したの？」

俺のまともな質問はなのはとその親友たちにスルーされた

みんなが、冷たいです

でもつらいことばかりじゃない

授業中に後ろのなのはと筆談したりとちょっとした楽しみも増えた

学校は楽しいのかな？

そう思い始めた

そしてなのははずか達と帰り、俺は1人帰路について休む

1日にいろいろありすぎて、脳内がパンクしそうだった

しかしこれから起こる出来事は待ってくれない

高町なのはと、魔法の出会いは
それくらい唐突だった

第2話 久しぶりの日常（ルーチンワーク）（後書き）

ふ、伏線ははったぞー！

これで次回から魔法がでます

なのはと翔

どんな魔法使いになっていくのか（未定）

では次回をお楽しみに

第3話 静かな夜に（前書き）

どうも

白湯です

今回はちょっと手間取ってしまいました

誤字脱字があるかもしれません
あれば教えてくれたら嬉しいです

第3話 静かな夜に

ここは海鳴市

今、結界が広がるこの街の中で、詠唱が聞こえる

「風は空に、星は天に」

たどたどしいが、一字一句正確に

「不屈の心は、この胸に」

詠唱は続く、

「この手に魔法を！」

それは、新たな扉を開くかけ声

「レイジングハート、セットアップ！」

Standby ready・Setup

そして一連の動作を終えて、詠唱者、なのは、は言う

「ふへ？ふえええ？！」

…ここまでの雰囲気は吹き飛んだ。

…まあいきなり服が変わったり手に杖があつたら焦るわな

彼女の目の前には地球の生き物では無いものがある

それはまさしく異形であった

「！」

”それ”は獣のようにうめき声を上げてなのはに突っ込んで来た

そうして戦闘が始まった

しかしなのはのカウンター攻撃が決まってしまう。

Shoot!

ドンツという爆音と共に”それ”は空に舞い上がる。

しかし勝てないと判断したらしくその場で3つに体を分割して逃走を図る。

「追いつけない…、あんなのが人の入るところに出て行ったら！」

Mode change . Cannon mode .

なのはの声に応えるように、杖は射撃に適した形に姿を変える

それを聞いたなのはは砲撃ができる見晴らしがいいビルの屋上に立つ

そうしてなのはの足元に光り輝く魔法陣が描かれる

なのはがゆっくりと引き金に手を触れると杖から羽が舞い上がる。

そうして魔法陣が収束音と共に光を増していく

ロックオンのマークが表示された時に、

「…っ！」

なのはは引き金を引く

それを撃った直後なのはの体は宙を舞う。反動を殺しきれなかったらしい

それもそのはず、

屋上の地面はえぐり取られ

そこからもうもつと煙が立ち込める

N i c e S h o o t

そうしてなのはは初めてにも関わらず、

ロストロギア異性体3匹を撃ち落とす

その身に降りた、奇跡の出会いと魔法を使って

なのはが家に帰ると一緒にフェレットみたいな物体A(?)を連れて帰っていた

みんなで物体Aをつつき回し、

(美由希さんの喜びようは異常)それを飼う準備をしていた

そしてどこで捕まえたか聞こうと、足早に去ったなのはの所へ行く

「疲れた〜。うにゅ〜。(バタン)」

なのはは満身創痍で布団にダイブする

そして思い出したのか、

おもむろに起き上がりネックレスを外す

…あれ？着けてたっけ？そんな赤い宝石？

「それ、どうしたの？」

宝石を指差して、聞く

Don't worry. I don't do harm
to you.

答えたのは、なのはではなくて、宝石

しかも小学生3年生に英語を使われても…。

やばい…。なんて言ったのか意味わからんぞ

「おー、おー、はるー。さんきゅーぐっばい？」

テレビで聞いたことあるような英語で挨拶する

「…かけるくんには英語は無理だったかな？ならレイジングハート。
日本語でしゃべれる？」

なのはが提案した
すでにその間には絶対の信頼があるようだ

All Right・Master・Set Language
Japanese

また、宝石から声が漏れる

「出会っていきなりさよなら言われちゃ困るしね」

全くです

その宝石が言った
ん？れいじんぐはーって言ってたな

「君の名前はレイジングハート？」

そうです。かける。それと良ければ、私にあなたの自己紹介を

レイジングハートからの提案

拒否をする意味もない

「高町翔。それが俺の名前」

いい終わると広がる沈黙

……

「……」

何か期待した目で見てるなあ…
何かボケると？

「えっと…。じつは火星に住んでました」
それは意外です。どうやって来たのですか？

「いやいやいやいや！」

レイジングハートさんに冗談は通じないのか！

「いや、ね。他には何か言わないのかな？名前以外で」

「……………以上です」

「ほら…、えっと…、好きな食べ物とかは？」

「カレーです」

子供らしいって？

子供だもん！

「じゃあ好きな動物は？」

「猫。犬嫌い怖い」

「犬が苦手なんだね。じゃあ…好きな教科は？私は算数！」

理数系つてのは聞いていた。確かアリサが言った気がする

「俺は体育」

身体を動かすのは得意だしな

「次は…えっと…」

「…ちよつと待って。なのは」

「うん？何？」

なのはを手で制してから一呼吸おいて言う

「…レイジングハートのための質問タイムなのにレイジングハートが何も聞けてないよ？」

はっ、となのはが我に帰り
レイジングハートを見る

そんなレイジングハートは

マスターの質問タイムのおかげで私には翔の好き嫌いがよくわかりました

大人の対応をしていた。

すげえ。できる人（？）だ。この人（？）

「次はレイジングハートから質問しなよ。できる限りはなんでも答えるから」

では、お言葉に甘えて

レイジングハートからの質問に身構える

あなたのデバイスと、魔力について。よろしいですか？

一瞬にして部屋に静寂が訪れる

静かな夜だな…

いい夢が見れそうだ

「では、おやすみ」

「待つてええええええ！」

全力でなのはが止めに入る

いいじゃないか

子供は長い時間起きてちゃいけないんだぞ

「かけるくんも魔法が使えるの?!」

「…も?つて事はなのはも?」

「うん!なんで教えてくれなかったの?!」

「え、いや。魔法使えないし。てか魔法って何?」

一般人な対応

実際何か知らないし

「…そもそもデバイスって何?」

その腕についてるものです。

右腕を見る

そこには両親の形見とも言えるリストバンドがまいてある

「…これ？」

リストバンドを恐る恐る指差して聞く

それです

間違いは無いようだ

「…はああああおお?!」

今度はこっちが驚かされる番だった

そして

聞こえてはならない声が聞こえる

さつきから宝石と意思疎通していたのだ

おかげである程度態勢はあったが、腰を抜かした

… Good morning . My master .

自分のリストバンドが俺の苦手な英語でしゃべりだしたから

第3話 静かな夜に（後書き）

ようやくレイジングハート登場

遅いかもしれませんが、これが私の書き方です。
すみません（・・・；）

急展開すぎてもあれなんで…ね？

次回はどうなることやらか
お楽しみに！

第4話 黄色い髪の少女(前書き)

更新遅れました

ゆっくりお読みください

誤字脱字がありましたら、教えてくれたら嬉しいです

第4話 黄色い髪の少女

「…で、あるからにしてここではここにある三角形を利用して…」

今は学校の授業の中。

あれから、美由希さんがフェレット（物体A）を籠の中に入れてなのは部屋に来たから、そこでお開きとなった。

詳しい事は今日の放課後に話してくれるらしい。

あれから一度もリストバンドは話すことは無かった。

たぶん幻聴だったんだ。うん。

と、考えておく。

だって無機質な物が喋るわけないじゃん！

とりあえず今は算数の図形問題。

これは難しそうに見えて実は頭の体操のような問題である。

実は俺が図形問題を好きなのも、計算をほとんど使わず、発想を変
えるだけで解けるからである。

国語もこんな簡単だったら…。と何度枕を濡らした事か

「じゃあ、この教科書102ページの問題を……高町！答えてくれ！」

担任が「高町」に頼んだ。

先生はわかっていなかったのか、このクラスに高町は二人いるって事を。

とりあえずなのはが立ち上がって。

「わ、私ですか？それともかけるくんですか？」

と聞く。

先生は思い出したように、

「あ。ごめんごめん。…じゃあせっかく立ってもらったし、なのはさん。よろしく」

先生はいい笑顔でなのはを指名した。

その瞬間、みんなが声をだして笑った。

そして放課後

信じるか信じないかはあなた次第、

の話を聞く約束だった。

これからずかたアリサはリムジンに乗って塾に行くそうだ。

それを学校の校門でなのはと俺の二人で見送る。

話を聞くために家に帰ろうとしてたとき、なのはが急に立ち止まった。

「どしたの？なのは？」

「この反応…、ジュエルシード?!」

それだけ言うと、山の方に走っていく。

俺も気が気でないから追いかける。

なんなんだ！ジュエルシードって！

ここはとある山の中。

その中で一匹の黒猫が、ジュエルシードに触れて、発動した。

そこには黒猫の面影は無く、そこにいるのは羽を生やした一匹の黒

い虎だった。

俺たちがたどり着くと地表からは黄色い光の柱が立っていた。

「な、なんなんだよ。これ。」

「かけるくんは離れてて！すぐに戻ってくるから！」

そう言っただけなのは赤い宝石を取り出して天に掲げて、唱える。

「レイジングハート！セエーツト、アップ！」

そうしてなのはが桃色の光に包まれたかと思ったら、一筋の桃色の光が飛び出していった。

おそらくあれが、なのはなんだろう。

と、思いながら眺めるしかなかった。

「だけどね…。」

ひとりになった俺はつぶやく。

「こんな状況で！一人待ってられるかよ！」

そう言った後は早かった。

そのまま光の柱がある所に走って行った。

黄色い髪の少女が戦つ。

その様子はまさしく雷光。そして、着実に黒い虎にダメージを与えていた。

黒い虎も必死だ。

これは殺し合いに発展していると認識したようだ。

その間に静かな空気が流れ込む。

そしてその勝負は、第三者の手によって均衡は崩された。

それは飛んできた勢いそのまま、飛んでいた黒い虎を地面に叩きつけた、
なのはだった。

叩きつけたままの状態、なのはが上に乗る、杖をかざして唱える。

「ジュエルシード！封印！」

しかし黒い虎は上半身と下半身を分離する事によって状況を打開した。

そして上半身が空へ飛んだ。

しかしそこに待ち受けていたのは、

鎌を構えていた黄色い髪の少女だった。
彼女もなのはと同じように、

「ジュエルシード！封印！」

と、言つて

黒い虎を頭から真つ二つに切り裂いた。

切られた虎は、悶え苦しむように吠えた後に、爆竹のように身体が
弾け飛んだ。

その後に残ったのが、水色の宝石。

これからの鍵となる存在。

ジュエルシードだった。

第4話 黄色い髪の少女（後書き）

はい。

タイトルが

黄色い髪の少女

なのに

出番が少ないフェイトについてです

この話を3つくらいに分けて書こうとしてたら2つの方がまとまりはいいのでは？

と思ったからの短縮です

そろそろ主人公出さないと…ね？

フェイトファンの皆さんごめんなさい

ではまた次回で会いましょう

第5話 目覚める力（前書き）

朝、外出前に開けた窓から雨が入り込み、ベッドがびしょびしょになって寝袋を用意する羽目になりました。

白湯です。

誤字脱字があれば教えてくれたら嬉しいです。

……もう五回目だしこれ入力しなくても大丈夫かな？

第5話 目覚める力

俺は何かよくわからない生き物が切られるのを見た。

そしてそれをやったのは少女という事もわかった。

なのではない、別の少女。

そしてその生き物が爆発した後には青い宝石が浮かんでいた。

「
」!

「
」。

「
」。

ここからは彼女達の声が一切聞こえない。

そして自分の中ではなんの前触れも無く、黄色い少女がなのはに黄色い球を撃った。

地面に当たったそれは、地表で爆発を起こす。

なのはとその少女が戦いだしたのだ。

二人は戦っているがどうみてもなのはの方が分が悪い。

というかなのはは攻撃という攻撃をしていない。

「やっぱり、今の俺にできる事は何も無いのか！」

そうやって1人声を押し殺し、俯きながら言う。

すると頭の中にかすかに声が流れてくる。

「力が欲しいですか？」

願ってもない提案がされて顔をあげる。声からしてたぶん女の人だろう。

「欲しい！今すぐに！」

力の限り叫ぶ。

「…なら、あげるよ。全部。」

そう頭の中で聞こえると同時に、青い宝石が落ちた場所に右腕が引っ張って行く。

その過程でリストバンドが黒い手袋に変化する。

そして落ちた青い宝石を躊躇わず掴む。

それに触れた瞬間、俺を中心にして光の渦が荒れ狂う。

そうして、自分の中の時間が一瞬止まる。

そしてかすかに声が聞こえる。

「…来ちゃったんだ？」真っ白な世界の中で聞こえたのは1人の女の人の声だった。

「…誰？」

「やっぱり私を起動させちゃったね。まあ起動させるために渡したんだけど。」

そうして立ち尽くしたままの俺に近寄ってくる。

「あなたがあの人の子なのね。あの人に似てなかなか男らしいですね。」

「だから誰なんだよ！ここはどこなんだよ！」

そう叫ぶと、そこにいた女は少し微笑んで答える。

「私のマスターは静かなイメージだったのですが…。…まあいいです。識別番号は無し。固有名称は”神聖な翼”という意味の”ブレストウイング”です。よろしく願います。」

「ブ、ブレストウイング？」

たどたどしくその名をつぶやく。

「はい。マスター。」

また彼女が微笑む。

純粹なその微笑みは見とれてしまうほど可愛らしかった。

そんな考えをしてる時に、彼女は続けて話す。

「ここはあなたの深層意識。この空間はあなたの物だけど、私にも開く権利があります。」

自分には理解できない言葉が返ってきた。

「つまりはここはあなたの心の中。…さて時間圧縮にも限界はあります。お話タイムはここまでのようです。」

そうして彼女が指をパチリと鳴らすと、周りの風景が目の前に徐々に戻ってくる。

「私はあなたの剣となります。あなたが力を欲したので。」そうして視界が戻る。

彼女が視界から消えた後に残ったのは、

自分の右手には青い宝石は無く、代わりに握られてるのは黒くて長さは60cmくらいの通常より少し短い日本刀だった。

そして服はさつきまで着ていた小学校の服ではなく、黒を主体として青いラインが入ったジャージミみたいな服だった。

右腕には指先から肩まで黒の甲冑が装着されていた。

少女二人は戦闘を中断して、こっちに見いつていた。

なのは目をこすったりして何度も確認して驚きの声をあげる。

「かかかかかかけるくんが？！」

「…っ！」

そんななのはを横目に黄色い少女が飛び出してきた。

「返せ！それは私の母さんの！」

そういつて鎌を振りかざすがその刃が届く前に刀で受け止めようと上に構える。

しかしその時に右腕のリストバンドがあつた場所から声が漏れる。

A s s i m i l a t i o n M o d e ・ S t a n d b y ・

そうして彼女がその刃で日本刀を触れた瞬間に黄色い刃は霧散して大きく空振る。

「えっ、なに！」

彼女は驚いて目を見開く。

しかしそのまま体勢を崩したままのわけもなく、空中に再び舞い上がる。

その際彼女の周囲にはさっきなのはに撃つたような黄色い球が浮い

ている。

そうしてある程度浮上した所で杖で俺を指す。

「貫け！ファイア！」

そう叫ぶと球は俺の所目指して飛んでくる。

しかしさっきと同じように刃に触れた瞬間に玉は霧散する。

ダメージは、無い。

「くっ！アルフ！ごめん、一回離脱する！」

そう言っつて少女は飛び去っていった。

残ったのは

空に浮いたまま啞然となっているのはと。

T a r g e t N e u t r a l i z e .

また何かの言語で喋る…ブレストウイング。

そして何があつたのか半分理解できない俺と。

「大丈夫?!なのは!…っつてあれ?」

喋るフェレットだった。

∴ 物体Aの異名は伊達じゃ無いようだ。

訪れるほんの少しの静寂。その後はお互いごまかしの笑い声しか無かった。

第5話 目覚める力（後書き）

決して主人公のあれは「とある」のそげぶでは無いんですよ。はい。

今回はそこらへんの補足説明中心になると思います。

さて、どうなることやら。

次回をお楽しみに！

第6話 プレストウイング(前書き)

こんにちは

白湯です。

forceとvivid買いましたか？

あれはいいものです

この小説もそこまで書きたいな……

ではじっくりお読みください！

第6話 プレストウイング

M o d e r e l e a s e .

二人の持っているものから機械音声が聞こえて服装が元に戻り装備が光の粒子になって消える。

そうしてフェレットのいる

「かけるくん魔法使えたの?!」

なのはが目を見開いたまま聞く。

「いきなりなっただよ。それよりもこれは…?」

対して俺は地面を指差す。

そこにはフェレットがいた。

間違いはなければこいつは喋ったはずだ。

「こ、これも魔法なのか?」

「…じゃあまずは僕から話すよ。」

そういつてフェレットは口を開く。

「なのはは二回目になるけど、もう一度話すね。僕の名前はユーノ・スクライア。」

我が家のフェレットこと物体Aはユーノと名乗った。
今度からユーノって呼んであげよう

「さつき見つけた青い宝石。あれがジュエルシード。僕が故郷で遺跡発掘したんだ。」

頭の中で想像してみる。

フェレットがツルハシもって鉱石を採掘したり、
トロツコで石材を運ぶ。

その光景は…

「逆に和む。」

「ふえ？かけるくん何が和むの？」

「いやいや。採掘するフェレットがいい感じに。」

「えつと…話を進めてもいいかな？」

おっと、話は聞かなきゃこれからわかんなくなる。

「それはとても危ないものだから管理局に保護してもらおうと次元船に乗せたんだ」

ここまで問題無し。って感じかな？

「でもその船が事故にあつて21個全てがここ、第97管理外世界”地球”に落ちたんだ。」

「それを集めるために、ここに来た。」

「……君は？」

「俺の名前は高町翔。そしてたぶんこれはブレストウイング。」

そう言っつて右腕のリストバンドを見せる。

Hello .

「は、初めまして。高町なのはです。あ、あとレイジングハートです。」

初めまして、ブレストウイング

手にレイジングハートを持ったなのはがブレストウイングにむけてお辞儀をする。

「ブレストウイング。実は日本語で喋れたりしない？」

レイジングハートが日本語で喋ったから、思い出したように聞いてみる。

俺にはこの言語は理解できない。

…設定完了。日本語使用、できます。

「管理局内で日本語はマイナーなんだけど、最近日本食とか隠れた人気だからあったのかもね。」

「管理局？」

「かけるとなのはは知らないのかな？まあ簡単に言ったらどんな世界にもいる警察みたいな感じ。デバイスは主にそこで作られるんだ。」

「ふーん」

「あ、あとプレストウイング。ジュエルシード返して。」

ユーノがプレストウイングに手を広げる。

しかしいくら待っても排出しようとしなない。

すみません。それはできません。

「僕はそれを集めにここまで来たんだ。」ユーノが説得を試みる。しかしプレストウイングは一向に返さない。

「…返せない理由があるんじゃないのかな？」

なのはが質問する。

…ジュエルシードは、私が食べました。

「…食べたあ?!」

ユーノがその場にへたり込む。

私の原動力、エネルギーは周りから吸収する事により活動できません。

たんとんとブレストウイングが説明する。

出会ってからさっきまで空っぽだったので

「あ。だからあんまり喋らなかつたんだ。」

「腹ペコで止まるって人間みたいだな。」

座り込んだユーノ置いてけぼりで二人で話を続けていった…

夜の街。

公園で少女が1人通信端末を開いて座って会話している。

「アルフ。ごめんね。私が不甲斐ないばかりに。」

「いいさ。取られたのなら取り返したらいいし。こっちは発動前の
を1つ。今夜中にはこちら一帯をサーチできると思っけど」

そういつてアルフは懐からジュエルシードを取り出す

「でもやっぱり昼間のあれはいただけないね。まさか管理局じゃないよね?」

「違うと思うよ。1人は初心者だったし」

「もう1人のはなんだい？魔力無効化かな？」

「そうなるね」

金髪の少女フェイトとアルフは冷静に分析する。

次へ繋げるために

確実に自らが叶えるべき夢へと進むために

第6話 プレストウイング（後書き）

今回説明ばかりでした
すみません

次回はちゃんと進めます

第7話 戦いに必要なもの（前書き）

どうも

白湯です

地震、大丈夫ですか？

こっちはガスが止まって料理が出来ない始末です。

皆さんの無事を祈ってます。

指摘があつたため、文章を訂正をしました。

1〜6話。投稿した文章全部です。

暇があれば読み返してみてください。

まだまだ不満があれば言ってください

第7話 戦いに必要なもの

翌朝、

なのはと俺はデバイスを持って人気の無い山の中に走り込んだ。

「なのは達…、本当にいいの？」

ユーノが何度目かわからない質問をする。

「いいの、っていうか私に手伝わせて、ジュエルシード集め。」

「レイジングハートが魔法の使い方を教えてくれるらしいしな」

走りながら答える。朝だからか、吐く息が白い。

全力で承ります

「ユーノくんも教えてね。私に魔法の上手な使い方を！」

イメージトレーニングと魔力運用。

その2つを基本的にやるらしい。

長々としたユーノの説明のあとにレイジングハートがなぞなぞをだしてくる。

…戦闘には、速度やパワーも必要ですが。それよりもさらに必要なものがあります。それは何だかわかりますか？

なのはと俺は2人で首を傾げる。

「んっ…、…負けないうって、気持ちとか？なんだろかけるくん」

「んー…。敵から目を離さないこと？」

どちらも好ましい回答ですが、それ以外に

「えっと……」

”知性”と”戦術”です

レイジングハートの言葉には妙な重みがあった。

それと基礎固めです。基礎が無ければ応用もできません。

プレストウイングも追加で補足する。

そうして朝の説明は終わり、学校へ赴いた。

それから数日が過ぎた。

朝起きたら魔力運用。

放課後はイメージトレーニング。夜はジュエルシード探し。そんな日が続いていった。

「なのはちゃん達…。また来れないの？」

練習の5日目くらいの放課後の帰り道ですずかがなのはに声をかける。

「ごめんね。すずかちゃん、アリサちゃん」

「別にいいわよ！大事な用事なんでしょ？」

先を歩いていたアリサが声を荒げる

「ごめん…」

なのはは謝るばかりである。

「謝るくらいなら事情くらい聞かせてほしいわよ！」

「アリサちゃん…」

すずかが仲介に入る

「じゃあさ、今度アリサの家に遊びに行こう。みんなで」

俺はアリサのオーラのせいであっちゃんくなりながら提案する。

「そ、そうだよ。そうしよつよ！」

すずかもその提案にのる。

しかしアリサは

「今度つて、いつにする気なのよ！いくわよ！さすが！」

それだけ言い放つとアリサは先に言ってしまった。
すずかは謝ってアリサの後について行った。

少し時間が経ってからなのはに声をかける。

「なのは。」

「なに、かけるくん？」

「絶対に行くぞ。アリサの家。ジュエルシード集めが一呼吸ついたらな。」

「うん。。。」

「暗くなるなって、明日には機嫌は治ってるって」

子供ながらの発想だがそうしか言えなかった。

「うん。わかった。せっかく時間を作ったし、早く帰って練習しよう？」

なのはは何か吹っ切れたらしく帰路についた。

しかし次のジュエルシードの発動は、
今夜という事はだれも知らなかった。

時刻は19:43

大人達が家に帰る時間。

子供は家で親の帰りを待つ時間。

そんな時に市街地の中心部で歩く子供2人

「この辺りだと思っただけど…。」

周囲のサーチがまだまだ苦手な俺は、なのはと一緒に行動している。

「うん。反応は確かに。」

離れた場所にいるユーノからも声が聞こえる。

念話という脳内の電話みたいなものらしい。おかげで離れていても会話ができる。

「でも見つからないな…。この辺りらしいのに…。」

しかし俺達が見たのは、
青い宝石。ジュエルシードでは無く、
天を貫く勢いの魔力砲だった。

風がうねりをあげて、雲は月を隠す。
辺りは一気に暗くなり、雷が落ちる。

まるで開戦ののろしが上がったようだった。

「こんな、街中で?!」

ユ一ノは驚きの声をあげるも一般人に被害を出さないために結界を張る。

「行くよ！レイジングハート！」

Standby ready・Setup

「ブレストウイング！」

OK・Fire at will

戦闘用の服に着替えたのはは空へ、

俺は右手に刀を持って大地を走る。

そうしていきなり次のジュエルシード争奪戦が始まった。

第7話 戦いに必要なもの(後書き)

短めです。はい。

次回は戦闘メイン(予定)です

果たして、どうなる！

お楽しみに。

第8話 出会い再び（前書き）

どうも

白湯です

誤字脱字やご意見あれば教えてくれると嬉しいです。

第8話 出会い再び

時刻は19:43

夜の街のビル群の一番高い場所に

黄色い髪の少女と

その使い魔”アルフ”がいた。

「たしかにこの辺りだ」

彼女達もジュエルシードを探していた。

「でも細かい位置が特定できない。ちょっと乱暴だけど魔力流を撃ち込んで強制発動させるよ」

「大丈夫かい？」

「平気だよ」

そう言つて黄色い髪の少女は持っている杖を空に掲げる。

そうして黄色い柱が空に上がった。

その場所を中心に風がうねり雲が集まり雷が落ちる

そうしていくらか雷が落ちたときに一部で青い柱が1つ立ち上る。

「…見つけた」

「あつちも気づいてる、フェイト。」

使い魔が彼女を”フェイト”と呼んだ。

魔力流を撃ち込んだ少女、フェイトは落ち着いた様子で答える。

「大丈夫」

Ray form・Get set?

「私、強いんだから。」

フェイトは射撃形態になった杖を持って空に舞った。
目標はジュエルシード。

「なのは聞こえる？あの子より早く封印を！」

ユーノは現地に向かいながらなのはに指示する

「わかった。レイジングハート！」

Canon Mode.

レイジングハートがそう言うつと以前使った砲撃型になった。

「かけるはなのはが封印してる時に彼女の相手を！」

「つまりはあの子の場所に行けばいいんだな。了解！」

行きましょう。マスター

「おう！プレストウイング！」

そうしてまだまだ走り続ける。

なのはが空中にて収束に入る。

一撃でジュエルシールドを封印させるつもりなのだろう。

見る見るうちに杖の前に魔力が集まっていく。

そして魔力が溜まった時にトリガーを引く。

D i v i n e b u s t e r

「デイバイン、バスター！」

大きく振りかぶって砲撃を発射

桃色の光の塊がジュエルシールド目掛けて飛んでいく。

反対側でもフェイトは収束を完了していた。

S p a r k s m a s h e r

フェイトも砲撃を撃つ

着弾は、同時。

燦然とした輝きを放つジュエルシードに二方向からの攻撃。
それによりジュエルシードは初めに見たあの青い宝石のようなもの
に戻っていた。

「後ろから桃色の光が襲ってきたと思ったが目の前で爆発が起きた
んだ！何が起きたか（ry）」

「とりあえず落ち着きましょう。マスター」

ブレストウイングに言われた通り、少し立ち止まって深呼吸する。

「ふう。でも、封印は完了したみたいだな」

そのようですね

俺は彼女の元に走ろうとしたその時だった。

「さあせるかよおー！」

空から人が降ってきた。

拳を構えていたためとっさにバックステップで回避する。

そのため空からの拳は地面に突き刺さる。

爆発音と煙が立ち込め、即席のクレーターの中では女の人が立っていた。

「フェイトの邪魔は、させないよ！」

そういつと身体を巨大な狼に変身させて雄叫びをあげる

「それよりも…、」

彼女の名前はフェイトっていうようですね。

「だよね…。」

妙に納得していると彼女、獣が飛び込んできた。

「物理攻撃、これなら魔力無効化はできまい！」

M o d e c h a n g e · S h i e l d m o d e ·

ブレストウイングはそう言うのと右手の刀は消えて、代わりに自分の身体はゆうに隠れる大きさの盾が現れた。

色は相変わらずの黒に、白と青のラインが入っていた。

自律稼働ができるらしく、宙に浮きながら彼女の攻撃をすべて防いでいた。

彼女の言う通りです。守りながら進みましょう。今のあなたと私じゃ、勝てません。

「つまり、なのはのところにいかないように足止めか？」

その通りです。

「…よし。やってやるぞー！」

その意気です

ジュエルシードを間に挟んで少女二人が立つ。

フェイトは街灯の上に立っていた。

「この間は自己紹介できなかつたけど、私なのは。高町なのは！私立聖祥大附属小学校の3年生！」

しかしフェイトには言葉は通じないらしく、鎌を構える。

「ジュエルシードは諦めてって、言ったはずだよ。」

「それなら私の質問にも答えて！まだ名前も聞いてない！」

それを聞いたフェイトは少し頬が緩んだが、すぐに悲しそうな目つ

きに戻った。

そうしてフェイトの射撃から戦闘が始まる。

「なんでジュエルシードを集める！」

彼女の攻撃を盾で受け止めながら問う。

「じゅちゅちゅちゅるさい！」

彼女は攻撃が通らない事に苛立ってきたらしく力任せに殴ってきた。

しかしそこで彼女の目つきが変わる。

視界にジュエルシードに近づいているユーノの姿が見えたのだ。

「フェイト！早く封印を！」

空中でなのはの砲撃を凌ぎきったフェイトは加速してジュエルシードのところに飛ぶ。

それを見たなのはもフェイトに負けじと飛ぶ

封印しようと杖を限界までジュエルシードに近づける。

しかしその時にジュエルシールドが発動してしまった。

地面を半球状に青い光が覆い尽くす

辺り一面に暴風が荒れ狂う。

視界は青一色でそまり暫く身動きが取れなくなる。

彼女達と彼女達のデバイスはそんな衝撃に耐えられるはずもなく、

デバイスには見るも無惨にひびが入り、吹き飛ばされる。

なのはが飛ばされた勢いでその場所のアスファルトが砕けちった。
バリアジャケットが破れている事から並の威力じゃないことがわかる。

フェイトは空中に飛んで勢いを殺すがとても大丈夫とは言にくい
状態だった。

側にいたユーノはバリアを張ってなんとかしのいだらしい。

…私の出番ですね

そうブレストウイングがぽつりとつぶやく。

「…また、食べるつもりなのか？」

はい。あなたは右手でジュエルシールド掴むだけです。

言われた通りにジュエルシードのところまで行ってそれを掴む。

アルフは阻止しようと攻撃するも盾が全ての攻撃を弾く。

…補食終了。終わりました。マスター

手を開くとそこにはジュエルシードはなかった。

アルフは人間の身体に戻ってフェイトを抱き上げる。

「…絶対に取り返す。」

それだけ言うと睨んで消えてしまった。

そうして二度目の少女フェイトの出会いを終了した。

第8話 出会い再び（後書き）

…長い！

今まで1500文字程度だったのに2000文字越え…

次回が極端に短くなるか、また長くなるか…

次回をお楽しみに！

第9話 見習い魔法使い（前書き）

もすもすひねもす？

どじも口湯です

投稿めっちゃ遅れました。すんません

m ((m

第9話 見習い魔法使い

昨日の戦闘でレイジングハートが壊れてしまった。

なのははショックからか、譫言のように

「私のせいでレイジングハートが……」

と、言い続けている。ちょっと暗い感じがしていつもの元気がない

美由希さんは

「君ユーノって名前なんだ。なのはから聞いたよ。」

とユーノを愛でる。

恭也さんと土郎さんは

「俺の妹（娘）に何をしたあ！」

「何もしてませんって！」

朝からこんな感じ。

桃子さんは

「あらあらまあまあ」

……救済してくれる気はなさそうだ

朝食を食べていつものバス停へついた。

まだまだなのはは暗いままだ。

「……おい、なのは」

「なに、かな？かけるくふにやう?!」

なのはが喋ってるにも関わらず両方の頬を全力全開で引っ張る。

「ひゃみいえよ〜(やめてよ〜)」

力を緩めず引っ張る。

マスター……。そろそろ止めてあげましょうよ

「ひょうらよ〜(そうだよ〜)」

なのはの頬を引っ張りながら言う。

「なのははね…」

「ひゃひゃひゃ…」

「1つの事を自分1人でやろうとしてる」

マスター…

「レイジングハートは無くなったわけじゃないんだ。自分で1日修理したら治るって言ってたじゃん」

「…うゅっ」

「それに今は俺がいる。まだまだ見習いだけどできる事はある。」

「だから、笑って?」

「そんな顔しているとアリスも心配するよ」

そう言い終わると手を離す。

なのはは両手を頬に当てて俯いたが、いつもの明るい顔に戻って

「ありがと…かけるくん。これからもー…」

最後に言った言葉はバスが来た音で聞こえなかった。

「じゃあ行くか。なのは」

「うん!」

…私は?

「あ、ブレストウイングは校内では喋るなよ」

えっ…？

ブレストウイングの泣きそうな声に二人して笑った。

そうしていつも通り元気よくおはようございますを言った

放課後

家に帰ってユーノとレイジングハートと相談して方針を考える

レイジングハートは修復中という事で、なのははユーノと魔力運用の練習。

俺は山の中でブレストウイングと戦闘訓練という事になった。

「昨日は盾みたいな装備が出たじゃん」

出ましたね

まるで他人ごとのような返事をブレストウイングはする。

「他には何か武器はあるの？」

そう言うとブレストウイングは武器を展開する

学校の制服がいつも通りの戦闘服”バリアジャケット”に切り替わる

右手には刀、

空中に盾が浮く。

同時展開も可能らしい。

今はここまでです。

ブレストウイングは打ち止めを宣言した。

「まだあるんでしょう？なら出して戦った方が…」

あなたが使いこなせません

はっきりと言われてしまった

ちょっと心が傷つく

私は”基礎固め”を教えます。

言われてはっと気づいた。最初の訓練で言われた事を。

「なら…、俺はどうしたらいいか。教えてくれ。ブレストウイング」

それが正しい質問です。ご褒美に”羽根”を差し上げましょう

そうブレストウイングが言つと身体が宙に浮いた。

これから必要なのは、空中戦の練習です。

「…なんで？」

彼女：フェイトの戦闘スタイルは空中を主体としています

「…地上では戦えないって事？」

その通りです

「アルフっていう狼との戦闘は？あれは地上戦じゃないの？」

「これからの戦い、常識は通用しません。常にあらゆる戦略を考え
てください

「空を飛ぶかもしれないという事が」

はい。では練習開始です。

空中に的が現れる。あれに近づいて切りかければいいらしい

「了解！任せとけ！」

そう言っつて俺は空を舞う

見習い魔法使いから人を守る魔法使いに成長するために

第9話 見習い魔法使い（後書き）

冒頭のもすもすひねもすは田村ゆかりネタです。みんなIS見てね〜

今回は高町家サイドでしたが次回はフェイトサイドです

…上手く書けるかな。

では、お楽しみに！

第10話 時の庭園（前書き）

どうも白湯です

シリアス書きたく無いよー（泣）

と心の中で叫んだが答えてくれるのは脳内嫁だけだった
心の中だしね

第10話 時の庭園

とある廃ビルの中、フェイト達はここを本拠地として地球での活動をしていた。

今夜は月明かりが綺麗な夜だ

自分の手のひらのしわまで見分けがつく

「空気が澄んでるからかもしれないねえ」

アルフがフェイトの身体に包帯を巻きながら答える

身体に大したダメージは無いのだが、愛機バルディッシュが壊れてしまった。

「バルディッシュ。ごめんね。」

Don't worry. It recovery was
finished soon.

「うん。回復するまで一回母さんのところに帰ろう。」

「ジュエルシード集めは一回お休みかあ……」

「休みがあるのはいい事だよ。アルフ」

世の中には休みしか無い人がいるの知らないフェイトである
大人はみんな働いてると思ってるらしい

「明日の昼に”時の庭園”へ。着いたら母さんに集めたジュエルシ

ード渡して休む。この計画で」

「私はフェイトの使い魔だからね。主にはついていくぞ」

「ありがとう」

時の庭園に着くとフェイトは真つ先に大広間へ向かう

時の庭園と言っても、庭ではなく要塞のようである

「母さん、帰ってきたよ」

フェイトはそのドアを開ける

アルフはドアの外で待機している

「おかえりフェイト。ジュエルシードは？」

この椅子に座って悠然と構える人がフェイトの母、プレシア・テスタロッサ

「はい、全部で……7個。残りの11個は……まだ」

「あとはほとんど海の中よ。地球は大抵が海に覆われてるからね。」

「……海？」

「あなたからみたら大きな湖みたいなものよ。違つのは塩分がとけてるくらいかしら」

「そんな所が地球に……。」

「あと、管理局が動いたわ」

フェイトがびくつと身体を強ばらせる

やっぱりあの衝突の時に時元震が発生していたのだ
それを目指して管理局が動き出したのだ

「バルディツシュが治つたらすぐに海に向かって回収してきて頂戴。
捕まらないようにね」

その後フェイトはバルディツシュを自動修復させて久しぶりに布団
の中で一夜を明かした

朝起きたら台所で調理をするプレシアの姿があった
いつものような白衣ではなく紫を貴重としたワンピースにエプロン
姿だった

「なに、作ってるの?」

「今朝は久々にサンドイッチ作ったから昼にピクニックに行きまし
よ」

プレシアはランチボックスをもってにまっと笑っている

「久しぶりに母さんと食べる気がするな」

「今まで頑張ったフェイトへのご褒美よ。存分に楽しみなさい」

「うん！母さん！」

そうしてフェイトはプレシアと一緒にピクニックとして花の咲いた小高い丘に登った

10個あった小さなサンドイッチ

その半分がなくなったところにプレシアが質問を投げかける

「そろそろフェイトが生まれて9年だけど、なにか欲しい物はあるかしら？」

フェイトがタマゴサンドを口に加えながら小首を傾げる

「私、お姉さんが欲しいな」

「えっ……」

「私よりもしつかり者のお姉さん。そしたら母さんが研究に忙しくても私は遊べて寂しい思いをしないですむから」

「そう…あなたも、なのね」

そういつとプレシアはサンドイッチを口に運ぶ。

その表情には少し涙が見えたがフェイトは気にしなかった

夕暮れ時、海鳴市の港町の倉庫の外に魔法陣が描かれる
そこから二人の人が現れる

「これから海に行つて調べようと思つたけど…」

「この反応はジュエルシード、だね」

「発動前だし拾つて帰ろうか。フェイト」

「そうだね」

しかしこの判断が次なる再会を果たす

「今度は、ちゃんと話を聞いてもらうから」

直つたばかりのレイジングハートをフェイトに向ける

「あとちよつと、あとちよつとだけだから邪魔しないで」
フェイトも身体の周囲に魔力弾のスフィアを発生させる

二人とも臨戦状態だつた

「今日とはつちめつてやつからね！」

「なのはには、出だしさせない」

こちら二人も一発触発状態だった

「…だが、残念だけどそこまでだ」

青い魔法陣。そこから現れたのは

「時空管理局のクロノ・ハラオウンだ。戦闘をやめて、連行させてもらおう」

デバイスをもった局員だった

「無駄な抵抗はしないでくれ、あなたたちにはまだ弁解の余地はある」

そういうと4人全員の腕が急に現れた青い輪が自由を奪う

「繰り返す。君達を連行する」

管理局員は静かに言った

平穏がさらに崩れ去っていった

第10話 時の庭園（後書き）

主人公名前すら出ないずっとフェイト親子のターン（笑）

ほのぼの系は書いてて楽しい

プレシアの今後はいかに…！

次回をお楽しみに〜

え、更新が遅い？

…毎日更新の方がいいのかな

でもだんだん文章量増えてきて（ry

第11話 アースラ（前書き）

どうも白湯です

趣味はサイクリングです

まあ何はともあれ、どうぞー！

第11話 アースラ

「残念ながら、そこまでだ」

「君達を連行する。」

フェイト達は諦めていないようで激しく身体を揺さぶるがなにも変化がない

なのはなのはで状況が理解できてないらしい

しかし1人だけ、規格外がいた。

「…なんだこれ？」

その輪をプレストウイングが吸収して身体の自由を取り返す

「なあっ?! バインドが!」

クロノは驚いた表情をした。それと同時に杖をこちらに向けて魔力を収束する。

「それでも、喰らえ!」

発射まで1秒かかっている。威力は無いがなのはよりは早い

しかしそれも刀に触れた瞬間に霧散する

「えっと…。ごめん。捕まる訳にはいかないんだ」

そういうとクロノに刀を振り下ろす

「くっ！」

P r o t e c t i o n

クロノの前に魔法陣のかかれた盾が現れる。

しかし、彼の刀は魔法を吸収する。

その盾を水飴のように切り裂いて

クロノのデバイスをへし折った

その時になのは達の自由は戻った

なのははその場にへたり込み、
目を見開いたまま固まってる。

「逃げるよ！フェイト！」

アルフがフェイトをお姫さまだっこして飛び上がる。

「ま、待て！」

「じゃあね！管理局員！」

そう言っで空中で転送魔法を使って離脱した。

そんなやりとりの間にジュエルシードはまたブレストウイングが食

べた。

満腹という言葉は辞書にないのか

「かけるの馬鹿！」

ぽかっとユーノが殴りに来る

ポカって可愛らしい音の割にはすごい痛い

「管理局の人に攻撃してデバイスまで壊すなんて！」

「いや…、正当防衛？」

「よくその単語知ってたね！でもやりすぎ！」

「いきなり現れて動き拘束して襲いかかる方が悪い！」

「あれ？襲われてないよ？ね、レイジングハート？」

確かに。かけるの過剰防衛かと

「おっ、おほん！」

この話の中心人物のクロノがあからさまな咳をして注目をそっちに
向ける

「なにはともあれ、君達をアースラで保護する」

そういうと足下に魔法陣が出る。

あ、これは転送されたっと思ったらすでに船の中だった。

「デバイスが壊れたあ!？」

「すまない…。エイミィ」

「でも、折れただけだからいつか。いいよいいよ。これくらいならすぐ直るよ」

「ありがとう。あ、君達もデバイスはここで回収するよ。」

「はい」

なのははバリアジャケットを解除して赤い宝石”レイジングハート”を渡す。

「君も、さあ早く」

「…返してくれるんだろな？」

「メンテナンスだと思えばいい」

「ブレストウイング。いいか？」

いざとなれば自爆して船を沈めます

「それは、ちょっとやり過ぎだよ」なのはが遠慮げみにいう

でも敵意は無いようです。マスターも少しリラックスしてください

「そうか、じゃあはい、と」

ブレストウイング…もといリストバンドをクロノに渡す。

「丁寧に扱わせてもらうよ。あとそれから」

クロノはユーノをちらと見る

「ここでは変身魔法は解除してもらうから」

「ああそうだったね。忘れてた」

「は？」

「へ？」

啞然となる二人を置いて変身を解くユーノ。

緑色に光ったフェレットは小3くらいの男の子になった
…なんで？

「なのははこの姿を知ってるはずなんだけど…」

「かける、耳を塞げ」

「了解」

「ふええええええええええ?!」

なのはの絶叫を抜群のチームワークでしのぐ

ユ一ノは床に倒れて泡を吹いていた

…なにこの音響兵器

「リンディ艦長。3人連れてきました」

「お疲れ様。クロノ執務官。冷蔵庫にプリンあるから食べてもいいわよ」

「休憩時間に食べます」

「そこはわーいとか言って喜びなさい」

目の前で漫才を見ている間はポカーンとするしかなかった

「まずは自己紹介、かしらね?」

リンディ艦長が抹茶を作りながら聞く

「あ、私はなのは。高町なのはです」

「次は私の息子を正当防衛で吹き飛ばした、」

「高町翔です」

「あら？高町つながり。兄妹なの？」

「…まあ、そんなものです」

説明するのも面倒なのでそう受け答える
それよりも

「…抹茶？」

「ええ抹茶よ。苦いから甘くしなきゃ」

そういつて砂糖とミルクを入れる

「コーヒーじゃないのに…」

「じゃあ次は君だ」

「僕の名前はユー（P i P i！）ん？なにこの音？」

途中でユーノのセリフが途切れた

クロノに通信が入ったからだ

相手はさっきクロノと話してたエイミイって人だ

「海上に魔力反応！おそらくさっきの金髪の方！」

戦いはまだ、続く

黒幕が計画を発動させるまで

「フエイト……」

かけるは俯きながらつぶやいた

第11話 アースラ（後書き）

リンディさんは俺の中では楽しいキャラなんです

キャラ崩壊…してないよね？

1st編終了が近いです

…大丈夫かな

第12話 脱出(前書き)

そろそろ名前の紹介いらないかもなの
白湯です

まあ何はともあれ、どうぞー

第12話 脱出

「フェイトか…！」

ユーノの自己紹介は後回しのようだ
目の前にモニターが空中に浮いて現れる

「雷を…海に打ち込んでる？」

「はっ！まさかまたジュエルシードを強制発動させるつもりか?!」

「…ジュエルシード？」

クロノが怪訝そうな顔をする

海中から水の柱が立ち並ぶ。その数7本

「クロノ！プレストウイングを返してくれ！早くあそこに行かなきゃ！」

「クロノくん！私にもレイジングハートを！」

「それは…」

「艦長として、それは許可できません」

リンディさんが立ち上がる

「なんで！」

「子供は戦う必要はありません。あの子が疲弊したところをこっちの魔導師が確保します」

「そんなの許しておけるか…！あの子だってまだ子供だ！」

「かけるくん…」

「だから、確保よ。納得して。クロノ、ブリッジに戻るわよ。戦闘員を転送ポートに集めておいて」

「はい、艦長」

「…そんなんで、納得できるかよ！可愛そうじゃないのか！」

「”これが”管理局のやり方なの。納得しなさい」

「そんなのって…ないよ」

なのはもつぶやく

「悪いな。なのは、かける」

クロノがこっちの目を見て答える

「あとはこっちの問題だ。君達は心配する必要はない」

クロノとリンディさんが部屋を出た、二人に甘い抹茶が目の前にあるまま

「ユーノ…。転送魔法、使える？」

「そうだけど、なにか？」

「デバイスをここに、持ってきてくれ」

「レイジングハートも！」

「なのははダメだ。俺ならまだ罪は着れる」

ならば、デバイスの暴走って事にしましょう。そうしたら罪は全て私の物です

艦内の放送がそつつぶやく

転送ポート3番へ移動してください。私を忘れないでください

「まさか、アースラの制御を乗っ取ったのか?!」

ユーノが驚きの声をあげる

これから起こるであろう事に比べたら朝飯前です。さあ、早く!

「いくぞ!なのは!」

「ふええ?!いや、行くなってさつきかけるくんが…」

「あー!いいから来い!あの子にお前の思いを伝えるんだ!」

なのは手を引っ張ってデバイスルームに走る

到着した時にはブレストウイングは管理局員にとり囲まれていた

「おい！早くアースラの制御を戻せ！強制終了するぞ！」

……

デバイス一つにハッキングを許したのが癪なのか苛立っている
ブレストウイングは黙ったままだ

「シャッターを開ける！戦闘員がでれないじゃないか！」

……

「貴様の持ち主を拘束している。殺されたくなければ制御を戻せ！」

…

管理局員が脅しの発言をし続けるが反応無し
そんなデバイスが不意にぼつりと喋る

… 時間は稼ぎましたよ、マスター

「ありがとう。それで十分だ」

後ろで声が聞こえて慌てて振り返る

管理局員の後ろにはレイジングハートを握りしめてバリアジャケット
トを着込んだ
なののがいた

「デイベイイン、バスター！」

ジュエルシード封印の時に放った収束砲撃

しかし砲撃が放たれずフラッシュみたい眩しい光と音がでる
溜め無しのデイバインバスターはスタングレネードのような効果を
局員にもたらした

「ぐっ！目が、目があ！」

……ジブリにそんな事を言う悪役がいた気がする

「行くぞ！プレストウイング！」

プレストウイングを取り出し右手にはめる

はい。マスター。3番転送ポートは3分後に起動します。急いで
ください

そうして俺達は船からすぐにまた地球へ戻った

船での滞在時間25分

抹茶からはもう湯気は消えていた

モニターで見た時には7本あった柱は5本になっていた

「なのは、かける。彼女たちの目標はジュエルシードの確保だ。彼
女たちより先に回収するんだよ！」

「邪魔、すんなあぁ！」

アルフが飛び出してきた。でも相手をするのはかけるではなく

「違う！僕達は戦いに来たんじゃない！」

防御の盾を張ったユーノだった

「先に行って！こっちはこっちで片付ける！」

そう言われて二人向かい合って頷く

「なのは！フェイトの所へ！俺はジュエルシードを回収する！」

「わかった！レイジングハート！」

Standby ready.

セットアップを終了するとフェイトめがけて一目散に飛び立つ

「ブレストウイング。俺達も」

Fire at will.

セットアップを完了して水の柱のある所を見る

その数は5本に減っていた

「そっいえばアースラどうでしょうか」

転送機能を使った後は元に戻ってます。後の心配はせず今の事を

考えてください

「わかった。1つずつ確実に回収しよう」

刀を目の前に構える。右足は前で左足は後ろに引くいたって普通の
剣道の構え

空中でやるとシユールだがこれが一番しっくりくる

「なのはにああ言ったんだ少しはかっこいいとこ見せなきゃね」
はい。マスター

頬に当たる海の風が冷たかった
まだ昼なのにあたりは暗く、今にも月がこの惨状を照らしそうにな
っていた

第12話 脱出（後書き）

いつもより文字数が多い割には物語進まなかった…

フェイト見つける

アースラから脱走

…あれ本編では5分とかかかってないぞ

…大丈夫かな、俺

次回に期待！

第13話 回収終了(前書き)

お久しぶりです

やべえ、最初決めてた原案とぶれてきた…

小説書くのってこんな感じなのかな…

第13話 回収終了

フェイトとアルフは海上にいた

「管理局が出てきたか…」

「母さんの言った通りだね。少し急がなきゃ」

「管理局の足止めは私がする。フェイトはジュエルシールドを」

「魔力流を海に撃つ、ここは広いけどだいたいの目星はついてるからそこを狙う」

「了解」

フェイトの足元に魔法陣が現れてスフィアがその下にいくつも現れる

「ファイア！」

フェイトがそう言うとスフィアから雷が海に目掛けて落ちる

連鎖的に1つ2つと青白い柱が立ち並ぶ

光を放っているからだけでなく、海の水を吸い上げて作った柱だった

「7つ全部反応したね」

「全部集めなくていい。あと3つくらいでいいはずだから3つ集めたら撤退しよう。後始末は管理局がしてくれる」

「…黒いね。フェイト」

「捕まるよりも母さんを助ける方が先だもの」

フェイトは余ったスフィアを使って柱に雷を放つ

するといとも簡単に柱は海に落ちてジュエルシードを吐き出す
落ちた衝撃で水しぶきがあたり舞う

「まずは、1つだね」

でた1つをアルフが掴む

「もう一度、ファイア！」

先ほどと同じように吐き出されたジュエルシードをアルフが回収する。

「と、そうこうしてるうちに管理局が来たみたいだよ」

「アルフ、お願い。」

「任せてフェイト！」

「あと1つ。必ず集めてみせる！」

「それにしても…」

水の柱に刀を突き刺す
当たった手応えが無い

切ったそばから元通りになる

「相性最悪なんじゃなからうか」

気づくのが遅すぎです

攻撃できないし反撃もされないジレンマに悩んでいた

「この水の柱は魔力が使われているはずだ。普通じゃないし」

魔力を吸収して元の水に戻す、と？

「そういうこと。まあやってみよう」

魔力吸収を起動させて刺す

するとその部分から元の水に戻っていつて落ちていく

「…地味」

一番言っではいけない事を…

「あ、ジュエルシードみつけ」

周りの水が剥がれ落ちてジュエルシードが剥き出しになる

一個、確保です

「センサー復帰しました。映像出ます」

アースラの想舵手がモニターにアルフとユーノの戦闘、かけるの戦闘、なのはとフェイトの会話をメインのモニターに拡大表示する

「二人の安否を。その後ジュエルシードの封印ができてるかを確認して」

「了解しました」

「クロノはデバイス直ってるはずだから取ってきて待機してなさい」

「はい。艦長」

「あの子達、もつかしらね…。それよりあの子達の関係って何なのかしらね…」

「そうなんですよね…」

エイミイがリンディの目の前にモニターを出す
そこには高町家の家系図が表示されていた

「なのはちゃんのお父さんやお兄さんとかの戦闘能力は驚くべきも

のがあるけど…」

「…あるけど？」

「無いんですよ…かけるくんの名前」

「はあ…。2人、いや5人の保護が目標です。アースラはそのために出動します」

「了解！」

アースラの中に局員の凜とした声が響く
彼らの仕事はこれから始まるのである

「あと1つなんだけど…やっぱりあなたを倒さなきゃ前に進めないよね」

フエイトは杖を下ろして、

目の前にふわりと舞い降りたなのはに狙いを変える

「私は、まだあなたの名前すら聞いてない」

「そんな質問のために来たの？」

「ううん。私はあなたを助けに来たの」

魔力受け渡し開始します

レイジングハートがなのはの魔力をフェイトの身体に魔力が行き渡るようにまんべんなく与えていく

「えっ…なんで」

「二人で仲良く、はんぶんこ」

フェイトはいまだに理解できてない

なのはが話していると二人の後ろから水の柱、ジュエルシード目掛けて魔力で作られた緑色のチェーンが伸びる

つられるようにオレンジのチェーンも伸びて水の柱の動きを制限する

「ユーノくとアルフさん、かけるくんも頑張ってくれてる」

B u s t e r m o d e .

レイジングハートが砲撃型に変化する

「二人でせーの！で封印。行くよ！」

ここは従ってまとめてジュエルシード回収が得策と考えたフェイトはさつきもらった魔力を使ってスフィアを増やす

「4個同時封印。いけるね？レイジングハート」

あなたがそれを望なら

「「せーの!」「」

二方向からの同時砲撃

その砲撃は周囲を桃色と金色の光で埋め尽くした

「なんか向こうで桃色の光が集まっているのは気のせいだろうか」

フェイトさんもなぜかこちらに狙いを定めてますね

「どうしようかジュエルシード回収したほうがいいのか」

装備を盾に切り替えて離脱すべきかと

「でもなのはに集めるって言っちゃったし」

プライドと命。どちらが大切か…

「命です!離脱する!」

はい。マスター

手に持った剣が消えて盾が2枚現れる

「まだ死にたくないって！」
ダッシュでその場をあとにした

「終わった、のか？」

4つ封印完了ですね

「よし。回収に行くぞ！」

「あ、かけるくん！」

なのはが遠くで手を振る。隣でフェイトは嫌そうな顔をしていたが敵意は無いようだ

「これでジュエルシード集め終了だ」

4つのジュエルシードを3人で輪を組んで囲む

「フェイト」

自分の名前を言われてびくっと身体を震わせる

「なんでジュエルシードを集める。封印のためか？」

「…言わなきゃだめ？」

嫌われてる割には戦闘意欲は無いらしい

「教えてほしい」

「私も、教えて」

「終わったら全部、全部話すから！」

そう叫ぶとジュエルシードを全て握りしめアルフのいるところに飛ぶ

「アルフ、転送を！」

「りょーかい！」

隣にいるユーノを投げ飛ばしフェイトと合流して転送をする

「このっ！待て！」

Booster set up .

足になのはみたいに羽根が付く

違うのは色が白ということで魔力ではなくて金属的な何かでできている様子

「届けええー！」

「ええ？！」

フェイト的には異常な速度で接近してくるかけるに驚いたらしい。

「えっ？フェイトどうした？」

アルフは間抜けな声をあげつつも足元にオレンジ色の魔法陣が現れる。アルフが魔法陣を輝かせ転送を開始する。魔法陣に入ったかけるを巻き込みながらもう発動は、止められない

そのすぐ後には何もなく、風が通りすぎていった

「ふえ？」

「はっ？」

残ったのは、なのはとユーノだけだった

第13話 回収終了（後書き）

とりあえず少し頭冷やしてきます

次回は時の庭園でのお話です

大丈夫かなあ…

まずは目の前の仕事片付けてからですね

第14話 アリシア（前書き）

エイプリルフルに嘘をつきまくって同僚をいじめまくったら気づいたら騙されてたのは俺だったというどんでん返しを喰らいました
白湯です

嘘はいけないね。うん

第14話 アリシア

目を開けると、そこはロビーのような広い部屋だった

「……ここは？」

部屋の様子ですね

ブレストウイングと2人で話していると後ろから声が聞こえる

「どうするフェイト……。送り返す？」

「うん。早くやっちゃってアルフ」

2人のやり取りの後、かけるの足元に魔法陣が現れる

「……って！いきなり帰らせる気か！」

「だって……ねえ？不法侵入だし」

「不可抗力だ！」

「はあ……母さんに聞いてみるのが一番かな」

「もういるけどね」

目の前に紫の髪の女の人が見えた！

1、戦う

2、道具を使う

3、逃げる
どうする！

「……だれ？」

まさかの第4の選択の”お話ししてみる”

「私はフェイトの母のプレシアよ」

首を傾げて微笑む

「こ、こんにちは。プレシアさん。」

「あら、挨拶できるのね。かけるくん。感心したわ。」

割と馬鹿に見られていたらしい

あと敵意はないようで安心した

急に転送しようとした後ろの二人とは大違いだと思った

「なんのことかな？」

後ろから…殺気が来たのは気のせいだろう

脳内を察するなんて魔法の力はすごすぎる

「えっと…まずは何から聞こうか？」

ジュエルシードを集める理由を聞いてみてはどうかと

「あ、そうか。さすがブレストウイング。なんでジュエルシードを集めてるんだ？」

「その前に私から質問ね。あなた管理局の犬かしら？」

「違いますか？」

「母さん。たぶん本当に違うと思うよ。局員切りつけてたし」

「まあいいわ。全てを話すわ」

そういうと奥の部屋に1人入っていく
その後につられて俺も入っていく

少し開けた部屋についた
その部屋の中央には水槽が見えた

「あれは…。フェイト？」

そしてフェイトそっくりの子供が水槽の中に入れられているのが発
見した

「そう、フェイトの姉の」

なんだかややこしくてめんどくさい話になりそうだと本能が告げて
いる

ねえ…？帰っちゃだめ？

「アリシアよ」

「とりあえず、かけるくんの所にいきたいの」

「わかったから杖を突きつけないでトリガーから手を離してくれ」

なのはは海上で駆けつけたクロノに射撃モードのレイジングハートを突きつけていた

「どこかに転送されたと思うんだけど…」

「まあ…。とりあえずバリアジャケット解除したらアースラまで連れて行ってあげるから」

「はい」

なのはは正直にバリアジャケットを解除して落ちる。
それを慌ててユーノが拾い上げる

「何してるんだ君達は…」

「はうっ…。お姫様だっこ…」

「…転送開始」

クロノはここまでに至った経緯を無かったことにして先に進む事にした

なんだかめんどくさそうな感じがしたからである

そして客は1人減ったがアースラについた
そこにはまたリンデイさんがいた

「いきなりだけど質問に答えてね」

「アースラをハッキングしたのはかけるんです」

「簡単に友達を売ったわね…」

「友達？ううん。お兄ちゃんだよ」

「ああ…。またややこしい事に…」

後ろのモニターの目の前でエイミーがうなだれる
意気消沈といった所か動く気配がない

「あなた達の保護が私の目的。教えて。あなたたちの目的を」

後ろでぐでつとなったエイミーを無視してアースラの艦長は単刀直
入にはつきりと聞いてきた

「うん。最初はね、ジュエルシード集めだったけど…」

なのははぼつぼつ言葉を繋ぐ

「なのは…」

ユーノはただ彼女を見つめるだけだった

「今はかけるくとフェイトちゃんを助きたい。」

「目的は…一致したわね。あなたをアースラの臨時隊員として認めます」

リンディはにっこりした顔で笑って

「助けてきなさい。協力が必要なら手伝うから」

「はい！」

「これ……。標本か？」

「そうよ。今は抜け殻みたいな状態ね。死んでるわ。」

「フェイトはあまり驚いてないがこれを知ってたのか？」

「リニス教えてくれたから」

話を聞くに、リニスっていうのはフェイトの教育係の使い魔らしい猫らしい
会ってみたいな

「んで。何をしろと。お涙頂戴？」

ちよつと冷たくいい放つ
こうした方が相手を挑発できると思ったから
それは予想以上の効果をみせた

「ええ。頂戴。あなたの持っているジュエルシードを。それらを使
つて蘇らせるの。あるべきはずの日々と、アリシアを！」

「…プレストウイング、どうする？」

何も考えられなくなりプレストウイングを頼つてみた

まあ…。無理でしょうね

「大丈夫よ。私の計算は確実だもの」

プレシアが胸をはる

ただの1デバイスに言われたのが癪だったのかちよつと怒りが見える

…因果は絶対。過ぎ去つた運命は変えられない

プレストウイングは語り出す

これから変えるのは未来のみ。今を生きる私達は常に先を見据え
続ける。

「戯れ言を。機械が何を言うか」

プレシアは嘲笑する

はい。探せばどんな本にも書いてあるし、歌にもあるかもしれない。でもこれはあなたの父の言葉です。かける

「父さんの…？」

いきなり名指しをされて啞然となる。父が自分にくれたメッセージなのかもしれないと思ったりしてしまっただため戸惑う

「あなたは…何が言いたのよ！」

それはかけるが答えます。ヒントは出しました。答えを導くのはかけるです

ブレストウイングがかかるに全てを一任する

かけるは考えた

小学校に入りたてほやほやだが、いろいろ考えてはいた。だが今は父が残した言葉を頼りに考える

常識は通用しない。これも父の言葉なのだろう。

そしてしばらくして1つの真実にたどり着く

結果さえ見えたら過程は後からどんどんついてきた

「…フェイトか」

その通り

「わ、私？私は何かなるの？」

フェイトは慌てふためいた

それこそさっきまで蚊帳の外だったためあんまり考えていなかった

「フェイトはどうして産まれてきた？」

「アリシアの細胞を使ってクローンしただけだけどそれがなにか？」

フェイトの代わりにプレシアが答える

「やっぱりか…」

「ね、ねえ。いったいどうしたの？」

二人の目をみてかけるは答える。言うてはならないような言葉を言い放つ

「アリシアが復活したら…、フェイト。お前は消える」

「えっ…？」

フェイトの戸惑いの声を聞いたら背筋が冷たいような気分になった

第14話 アリシア（後書き）

さて、たぶんそろそろ無印終了です

真実の果てに見えるのは何か

真実とかいう言葉使うと厨二臭がするのは過剰反応しすぎなのか

ではでは次回にご期待ください！

第15話 突入（前書き）

誰か才能をください
白湯です

スタートはプレシア視点だから気をつけてお読みください

第15話 突入

私、プレシア・テストロッサが自らの実験により作った大型魔力駆動炉”ヒュードラ”

これが完成したら大量の魔力を扱う事ができて、特許により一生遊んで暮らせるぐらいの金が入るはずだった

しかし、実験を待たずしていきなり本番に導入された

管理もすべて今まで制作に加わった人間ではなくて会社の上層部から来た人間で行われた

彼らはいきなり駆動炉の限界を試した

すぐにも結果が欲しかったのだろう

いい結果が出たら全て手柄を全権を掌握したプレシアではなくて、上層部が功績を握ろうとした

そんな目の前の事しか見てない上層部には失敗しか残されていない
予想通りに恐れていた駆動炉暴走が発生した

消化できなかつたエネルギーが周囲を襲った

人はもちろん、動物すら死に絶えた。

身体はそのまま。寝ているのと見間違えそうにもなる

問題があったのは生物のみ。建物など魔力が影響を及ぼしてないものは残り、

その場所にはただただ静寂しか残らなかった

その事故により唯一の娘アリシアを失った

テストロツサ家は実験場の近くにあったのだ。

通勤に便利という理由からあったがあまり家に帰って休み時間は無かった

その中にいる子供アリシアはなすすべもなく。ただただ死んでいった

事故処理班が伝えたのは嘘だと思った

事故で失った自分の名誉と尊厳は雪のように消えて無くなっていた
会社は解雇。責任をプレシアに押しつけた

後は墮落するのは簡単だった

酒に溺れ、煙草をふかし、麻薬を使って気を紛らわしたりしたりもできた

だがそれらはできなかった

目の前にアリシアの遺体が搬送されてきたのだ

そうして誓いを立てた。

私は、なんとしてでもアリシアを蘇らせるの、と

自分が自分で有り続けるための唯一の希望だった

「たぶん…アリシアが復活したらフェイト。お前は消える」

「えっ…」

「なぜそこに至ったのかしら」

プレシアがそういうと同時に、室内の電気が一回暗くなる
そして放送が響く

庭園内に侵入者が入りました

「自動迎撃を開始して。くっ…。ここも限界ね。ここでおちおち言葉遊びをするつもりはないわ。」

了解しました。マスター

プレシアの下の地面が割れて、アリシアの入った水槽が落ちる

「お別れよ。私は発動させるわ。そして、取り戻す」

落ちた水槽を追いかけるようにプレシアも穴へ飛び込む

「待てっ！」

しかし後ろでフェイトのデバイス”バルディッシュ”が突きつけられた

「あなたは、ここで私が止める」

その目はまっすぐかけるを見据えていた

「フェイト！それでお前は納得するのか！」

「私は母さんを信じてるから」

その目に迷いはもつない

彼女達が長年追い続けた成果を邪魔されたくないのだ
心変わりはないと決めた

「…正直に言って誰が死のうとは関係ない。だけど」右手に剣を、
空中に盾を待機させる

「娘の心配をしない母を止めなきゃならない」

「庭園の位置特定完了！すぐにでも転送できます！」

エイミーがコンソールを恐ろしい速さで叩きながら艦長のリンディに伝える

「わかったわ。戦闘員と彼女達を送って。転送を許可します。」

「了解！」

あらかじめ配備されていた転送ポートに青白い光が灯るのがモニターから見える

「難しい事は全部大人に任せて、子供は自分がしたい事をしなさい」

リンディがそう誰にでもなく言った言葉は誰かに聞こえたかもしれないし聞こえなかったかもしれない

転送ポートに彼等の姿はもう残っていなかった

周りにはなのはとユーノがいる

なのはは着いてから少し感傷に浸っていた。

最終決戦になるだろう場があまりにも静かで静寂という音楽がなっていたから

武装局員はクロノと一緒に先に行ったので今にはいない

「庭つて聞いてたけど…要塞みたいだね」

はい。マスター

「リンディさんも言ってたけど自分達がやりたいことをしなきゃね」

それを聞いてレイジングハートは少し戸惑う

…あの子ですか？

「うん。私はね。レイジングハート。あの子、フェイトちゃんと」

なのはは瞳を閉じて自分の中の心に聞く

これで、正しいんだよね？

そのため少し間が開く。

そうして目を開いたと同時に言い放った

「友達になりたいんだ」

「なのはー！行くよー！」

隣にいた半分空気になりかけてたユーノが叫ぶ

「うん！すぐに行く！」

このすぐ後に庭園の中で地震が発生した

庭園の崩壊が始まる

終わりが、刻一刻と近づいてきた

第15話 突入（後書き）

まさかのかけるVSフェイトな感じに

本来書く予定だったなのはVSフェイトはまたの機会に書きます
…はい。頑張ります

さて次回はどうなることやら（更新日含め）
お楽しみに！

第16話 激突(前書き)

白湯って「さゆ」って読むんですよ

……友達が「しらゆ」って読んだときは泣きそうになった

第16話 激突

今日は平日

普通の小学生なら学校に行ってるはずである

「なのはちゃん。今日休みなんだって」

「ふ〜ん。かけるも一緒なんて仲の良い事ね」

アリサとすずかが休憩時間になのはの机に集まって話していたその席の主、なのはは休みらしい

「家から今日は休むって連絡があったらしいよ」

「ふん。あのなのはがね。いつもより静かで清々しいわ」

そう言っただけアリサはそっぽを向く
悪態をついているが本心は寂しいらしく、ちよっと残念そうな顔になる

「帰りにお見舞いに行かない？なのはちゃんの家に」

「い、いいわよ。別にあんなやつ心配なんか。ほっといたら帰ってくるわよ」

「そう？じゃあ私だけ行くね」

「ちよっ、ちよっと待って！」

急にアリサが慌てたようにすすかを止める

「わ、私も行くわよ！それじゃ私が悪者みたいじゃない！そ、それにだいたいかけるも気になるし…」

「そっか。じゃあ放課後一瞬に行こうね」

フェイトはかけるを広い場所まで誘導する

かけるも黙ってついてくる

しばらくすると天井の高さも床の低さもわからないほどの縦に長くて広さは半径200mくらいの円柱のような部屋のようにだ

「ここなら、誰にもじゃまされずに戦える。破損による被害の心配はない。」

フェイトはかけるの方を見ながらバルディッシュを刃が魔力で作られた鎌の形にして構える

「できれば戦いたく無いんだけど…」

かけるは刀を右手に持って待機する

作戦はカウンターヒットに決めていた
相手が攻撃してきたら防いで迎撃する

かけるにとつて一番効率的な戦い方。

フェイトは鎌を持って突撃してくる

それにあわせるように盾をフェイトと自分の間に構えて隙を伺う

ブレストウイング曰わく

魔力吸収ができるのは本体のみ、バリアジャケットも武器も吸収する事はできるが手から離れるなど武器が自分の身体から離れると吸収はできなくなるそうだ

だから宙に浮いた状態の盾に鎌がぶつかっても吸収はできない

その盾にかける自ら触れて武器とする事によって吸収する事ができる

「はああ！」

フェイトは予想通り切りかかってきた

しかし想定外が発生

フェイトはその鎌の刃だけ飛ばして来た

それが盾に触れた瞬間に爆発した

とつさの爆発に反応できずに一瞬固まる

しかしそれが致命的だったのか、フェイトは盾の内側に入り込んでいて自分との距離は、あと2mもなかった

フェイトは鎌から斧に形を変えたデバイスを振り下ろす

それを刃で押さえるも押し切られて後ろの壁まで吹き飛ばされる

「痛っ！」

マスター！

ブレストウイングが自分を呼ぶ

まだ、意識はある

帰ったら少し防御の練習をしましょうね

「ははっ……。いつでも練習メニューの事考えてるんだな」

いえ、あなたの事を考えての事です。傷の回復はできないので頑張ってください

足に羽が装着される

移動はそれで行ってください。予想以上の加速があるので注意してください

「了解。」

壁の中からフェイト目掛けて飛び出る

フェイトとの距離5mくらいになった時に立ち止まって言う

「やりたい事が、見つかったから戦うんだ」

「君は何を言ってるの？」

フェイトはかけるの言葉の理解はできない

でも目の前に母さんの邪魔をするいけない子供がいるくらいの認識があった

「まずはお母さんだな。次はフェイトだ」

フェイトはしびれを切らしたか、持ち前の速さでかけるの前に飛び込んでくる

しかしそれ同様の速さでかけるが離れてまた先程と同じ程の間隔が開く

「お前にあわせたい人がいる、フェイト。」

空中に浮遊したまま問いかける

「アリシアに会わせてくれたら文句は言わない」

素早く冷静にフェイトは答える

「いつもお前に話をしたがってたやつだ」

「リニス？でもリニスは……」

フェイトは武器を下ろして考えて戸惑う
そのフェイトの予想は外れる

「なのはだ」

「えっ？」

かけるが言った言葉に呆れるフェイト

そんなフェイト目掛けて急加速で距離を縮めて切りかかる

フェイトは慌てて盾を張る

しかしそんな魔力でできた盾はかけるに関係ない

それを水のように切り裂いてフェイトのバリアジャケットに傷を与えた

フェイトの左腕から血が滴り落ちる

左腕でとっさに急所を守ったのだろう

そこからフェイトは右手の中にすぐさま魔力球をつくりかけるの腹にねじ込む

かけるの身体が魔力弾の直撃を受けて吹き飛ぶ

そこからなんども打ち込みがあった

かけるも下手に攻撃したらやられると思ったのか盾で守りながら

4回くらいの衝突の時にフェイトは右肩に傷を受けて、かけるは胸元に魔力弾の直撃を受けて壁に飛ばされる

内臓が傷ついたからか、かけるの口から血が吐き出される

そしてかけるが瓦礫の山から這い出た先にあったのは、
光の雨

その全てが目標目掛けて降り注いでいた

「フォトンランサー。ファランクスシフト」

フェイトの周囲が気がぼやけるが大量のスフィアがあるのがわかる
そのスフィア全てから弾が吐き出される

それを盾で防ぐ

しかし圧倒的力の前に盾は意味をなさない

その盾が少しずつ削られて端から紙のように破れていき、かけるに
弾が届きダメージを与えていく

バリアジャケット、刀が魔力を吸収するが爆発する弾の威力は押さ
えれずに回避もままならない状態で、ダメージを受けていく

盾を守る力が無くなったのを見計らってフェイトはかけるにバイン
ドをつける

魔力吸収は弾の方で精一杯なのか、解けない

後は、貫くだけ

フェイトはスフィアを集めて振り上げた右手の中に黄色の細長い一
本の槍を作り上げる

散々に斬りつけられたら右腕は傷が開いて血が落ちる

そして魔力収束の頃合いを見てその腕を振り下ろす

「スパーク、エンド」

その槍がまっすぐ直線を描いて、かけるの身体に直撃した

音もなく静かに放たれた槍は、フェイトにとって戦いを終わらせる
十分な力を持っていた

第16話 激突（後書き）

まだまだ決着つかない！（長い！）

まあ…、次回にはさすがにつくよたぶん

やばい予定が狂っあばばばばば

次回お楽しみに！

第17話 繋いだ手（前書き）

白湯です

納得いかないかもしれない終わり方になってしまったかも…

第17話 繋いだ手

一撃一撃が致命傷を与える威力を持っている

気を許すと、負ける

厄介なのはあの盾と、魔力無効化

そこさえ崩せば勝てる！

なら、100000の攻撃力を持った攻撃1回より、1の攻撃力を持った攻撃100000回の方が勝算有りかもしれない

ならば使う魔法は限られてくる

防御を潰すための魔法

フォトンランサー、ファランクスシフト
リニス gave くれた私の最高攻撃魔法

この力で私は勝つ

部屋の中はフェイトの荒い息づかい以外の音がしない
あれだけの大技

消費魔力も多く、フェイトの身体の中の魔力を根こそぎ持っていった
槍が役目を終えたからか、消える

フェイトは確認のためクレーターのようによく削られた壁に近づくと

土煙が舞い上がり、目視しにくい

やがて少しずつ土煙が晴れてゆく

そしてそこにある物の正体が明らかになる

「えっ…？」

フェイトは見てはいけない物を見たのか驚きで固まっていた

「まだ…。まだ勝負は、ついてないぜ？フェイト」

そこには

右腕にあった装甲は弾け飛び、

刀は根元から折れて、

加速に使った足に付いてた羽は右と左で形が変わってしまった

身体にはひとつやふたつじゃない切り傷から血が流れていて

口から血を吐いた痕もあった

焦げ痕のついた左腕は使い物にはなりそうにない

しかし目にはまだ輝きがあった

「絶対に…。諦めたらダメなんだ」

「な、なんで？」

フェイトは戸惑う

なぜまだ立ち上がるのか

フェイトの心が次第に恐怖に染まる

「なんで、まだ立つの？なんで、戦うの？」

「戦う理由は…、ある。まだ伝わってないもんな」

「まだって…、もう私の勝ちだよ？」

「だから！」

かけるは奇跡的に唯一無傷の右手をフェイトに向ける

そこには折れた刀が握られていた

折れた刀は武器としては機能しないはずなのになぜか威圧感を感じる

「伝わるまでが！」

その刀をフェイト目掛けて投げつける

フェイトは何事も無かったようにそれを回避する

回避先が読まれていたのか、そこにはかけるの姿があった

「俺の戦いだ！」

武器の無い状態。攻撃は殴るしか思いつかなかった

渾身の力のボディーブロー

そして当たった瞬間に加速をする

背後にある壁に突っ込んだ

フェイトは魔法を使わなかった

使えなかった

すでに魔力吸収を右手のリストバンドからしていたから

そうして身体から直接魔力を吸い取られたフェイトはそのままかけるの肩によりかかった

その顔には戦いの意志は無く、1人の少女の安らかな寝顔があった

お疲れ様でした。マスター

「…ありがとう。ブレストウイング」

少し、休んで行きますか？

「いや、行く」

わかりました

するとブレストウイングはバリアジャケットを一新させた

そこには武器は無く、足の羽だけ残された

彼女も、でしょ？

「ああ」

フェイトを背負う
傷に触れて痛い
でも今は少し我慢

先に進みたいから進むだけ
そう思ってプレシアがいるであろう地下に向かった

「ジュエルシードで足りない分は動力炉で補うはずだったのに……」

プレシアは悪態をつく
目の前の管理局員は退くことなく詰め寄る

「ああ。計画は終わりだ。ロストログアの不正所持。巡洋艦への攻撃。それらの件についてあなたへの逮捕状が出ている。武器を捨ててこちらへ来てもらおう」

クロノが杖を突きつける

「研究者としてどうかと思うけど……、私は神に祈ってみるかしらね」

プレシアの周りを全てのジュエルシードが一つの大きな円を描くように回りだす

「私はこれに賭ける！さあ、アルハザードへの道よ。開け！」

そのプレシアのかけ声に反応するように輝きを増す
周囲の壁が崩れて禍々しい色が溢れ出す

「まさか、虚数空間?!」

床も崩れ落ちてそこから虚数空間が現れる

「う、うわあああ!」

局員がその存在を恐れて、離脱するために逃げ帰る

クロノも手出しができなくなった

もし、落ちたら待つのは死

魔法が使えない空間とは魔導師にとって死を意味する

それがこの部屋中にあるとしたら動けない

しかし状況は一変する

ジュエルシードが、撃ち落とされた

「何が!」

プレシアは慌てる

その間にも、もう一つジュエルシードが撃ち落とされる

その方向には、なのはがいた。

穴の開いた天井から狙い撃っていた

プレシアはなのはを睨みつける

しかしそれに臆せずまた新しく標準を合わせる

「発動前に全部封印。いけるね？レイジングハート！」

あなたが望むなら

「シユート！」

なのはの砲撃は3つ目のジュエルシードを封印した

残りはあと6個

しかしそこまでだった

なのはのいた天井もとい床が抜け落ちた

そうして重力に従って落ちてクロノの隣に立つ

「あなた達はいつも私の邪魔ばかり！」

ジュエルシードがプレシアの負の感情に応えたのか、青色に輝いていたジュエルシードは黒ずんでいく

「もう、終わらせる。なにもかも！そして取り戻す！私のただ一つ

の幸せを！」

プレシアが言い終わると同時にプレシアのいた床が抜け落ちた

「危ない！」

なのは手を伸ばすが届かない

プレシアの身体が足から落ちていく

「間に合え！」

かけるの右手がプレシアの右手を掴む
落下が止まった

「…なにをしてるの？早く手を離さないとあなたも落ちるわよ？」

「這い上がれ！プレシア・テストロッサ！」

プレシアが目を丸くする

しかしプレシアが言った事も事実

かけるの力じゃもうもたない

傷だらけの身体が悲鳴をあげる

「早く！」

かけるが叫んだ

そしてプレシアの目にはかけるが背負ってるフェイトが映った
こんな状況なのに目を瞑ったまま起きる様子は無い

その姿を見て考えた

私がこの手を話したらその子はどうなる？

私がこの子と一緒に落ちて死んだらどうなる？

答えは、決まった

「…私はね。アリシアとそっくりでアリシアじゃないその子の事が、嫌いで嫌いで仕方なかった」

「何を…！」

プレシアは悟ったように語る

「でもね、生きて欲しい」

プレシアの目から涙がこぼれ落ちる

「アリシアの妹…フェイトを、よろしく」

そう言っただけ名残惜しそくに手を離す

崩壊のガラガラと崩れる音が鳴り響いていたはずの空間の音が消えた気がした

ただ、落ちていくのが見えるだけ

ジュエルシールドもアリシアも一緒に落ちていく

「帰ろう、フェイト」

そう一人呟いてかけるは立ち上がった

迷う必要はない

たったさっきあつたばかりの人に、彼女の全てを任されてしまった
終わってみたら呆気ない

何かしつくりこない

でも、わかった事はたくさんあつた

こうしてアースラに帰り、後にPT事件またはジュエルシード事件
と言われる事件は終結した

第17話 繋いだ手（後書き）

状況終了しました！

今回はエピソードみたいなものになります

とりあえずそれからの話ですが

たぶんA・sやります

うまくまとまるといいなあ…

第18話 友達（前書き）

いかん…

ちよつといろいろぶれた

とりあえず無印終了です！

第18話 友達

目が覚めたら目の前に真っ白な天井が広がっていた

でも電気が消してあってちょっとくらい

敵の本拠地か、なら脱出して帰らないと

そう思つて立ち上がるうとしたがそこでお腹にある重みに気づく

なのは…だっけ？

その子がベッドの左側のパイプ椅子に座ったまま前屈みで寝ていた
必然的にお腹に頭が乗る

そこで落ち着いて周りを見ってみる
どうやら病院のような施設らしい

両腕には包帯が巻かれてる

服装はバリアジャケットじゃなくて白い服に着替えられていた

はあ、と

ひとつため息をつく

敵なのにここまでする親切さに呆れた

ふと右にあるカーテンを開けてみる

シャーという心地よい音と一緒に向こうのベッドで寝てるかけるの
姿が目に入る

左腕にギプスが見えた

その時に戦いを思い出した
「そっか……。私負けたんだ」

なんであそこまで傷つく必要があっただろう

なんであんなに自分の事を考えないんだろ

なんであれほどの力がありながら、手加減したんだろ

普通に考える

彼の武器は、刀、

魔力無効化だけと思っただら切断能力もあつた
そのせいで傷がついた

でも、本気になれば右腕くらい切り落とせばはずだ

身体のどこかに刺したら私の行動の障害ができたはずだ

なんで、しなかつたんだろう

知らない間に彼に向かって右手がのびていた

でも届かない

私はこの人と話がしたい

なのはの頭を腹からどかして動けるようにする

一回降りて行くのはまどろっこしいからそのベッドに猫のように飛び移る

ベッドがギシリと軋む

そのまま彼の上に覆い被さるような形になる

そんな激しい動きはしてないはずなのに鼓動が早まる

息がつまりそうになる

しだいに、私はこんなに苦しいのに寝てるかけるが腹立たしくなってきた

頬をつついたりしてみる

でも起きない

うーとひとしきり唸っていみたがダメだった

諦めて寝る事にした

ここは居心地がいい

久しぶりにいい夢を見れそうな気がした

目が覚めると天井があった

あのままアースラに搬送されたんだっけ？

治癒魔法がまるで効かないから直接治療

外れていた肩を入れた時の痛みは二度と忘れられない思い出となった

右腕を試しに持ち上げる

サラサラという音がして右腕から金色の髪の毛が流れ落ちる

忘れない

間違いなくフェイトの髪の毛だ

おかしいと思い身体を持ち上げようとするが、持ち上がらない

フェイトの身体が掛け布団一枚挟んで自分の身体の上にあった

右手をフェイトの頭にのせる

「んっ…、…かける？」

「起きたかフェイト？」

「うん…。おはよう」

「かける君！起きたの?!」

カーテン越しになのはの音が聞こえる

なのはがカーテンを開ける

そこにはフェイトがパイプ椅子に座ってた

フェイトよ。寝起きでその素早さは反則だ

「フェイトちゃん！ベッドにいなかったから心配したんだよ」

「うん…ごめんね」

「でも、これでようやくお話できるね」

3人の中の誰かから漏れた笑い声
それが3人の中に広まっていく

「小学生になりたての頃にね、」なのはが口を開く

「1人ぼっちな時期があったんだ」

そこからどんだん言葉が溢れる

士郎さんの事故のこと

家には誰もいなかったこと

桃子さんがいつも慰めてくれたこと

そして、俺が家に来たこと

「あの時はね、本当に嬉しかった」

そうやってこつちを見て微笑む
その後フェイトを見つめる

「私はね、友達になりたいんだ」

なのはがフェイトの目を見て言う

「わ、私なんかが友達になっていいのかな？」

「うん！」

「あ、でも……」

「ん？どうした？」

フェイトが口ごもる

「私はもっと酷い事をしたよ？傷つけたよ？」

涙が膝に落ちる

「それでも……いいの？」

「なのはから友達になりたいって言ってるんだ。いいじゃないか」

「うん！私はいいよ！」

フェイトが顔を上げる

「でも、どうやって友達になるの？」

「え？簡単だよ！」

なのはが一呼吸おく

「名前を呼ぶんだよ。まずはそこから」

「えっと…かける？」

「ああ。フェイト。…あれ俺から？」

話の流れからなのはの名前を呼ぶと思っていたかけるはなんとも言えない顔をしていた

「フェイトちゃん！」

「なの、は？」

「うん！」

「かける！」

「フェイト。…これ思ったより恥ずかしいな」

その後はずつと恥ずかしがりながらもお互い名前を呼びかけあっていた

しばらくしたらリンディさんがご飯を持って部屋にやってきた

後ろにはユーノとアルフがいた

アルフはフェイトに飛びついて心配したんだよと泣いていた

アルフは突入隊と出会った時に管理局に保護されたらしい

ユーノは持ち前の分析力から庭園の構造を把握して短時間で駆動炉制圧をさせたらしい

なのはと俺はそんな事もできたのかとびっくりしてユーノを尊敬の眼差しで見たらすごい照れてた

待遇の話が一番長かった

まあ理解できなかったからリンディさんの話の後にユーノに簡単に説明してもらった

フェイト 1年間の保護対象

なのは 管理局の魔導師にならないか？

かける 事情の説明

…俺から何を言えと

デバイスの方からだいたいの話は聞いたらしいけどやらそれと照らし合わせて真実かどうか確かめるとか

まずは高町家にお世話になってる事を話した

フェイトがリンディさんの養子になるが一緒にどうかと言っていたが断った

良くも悪くも俺は俺で高町の名前が気に入ってるからと言っただけだし、ぶしぶ下がってくれた

次に魔力吸収の話をした

フェイトは無効化じゃないのと言っていたが半分スルーした

吸い取った魔力はブレストウイングの原動力になるとも言った

その後はほとんど他愛もない話だった

好きな子とか、将来の夢とか、好きな食べ物とか e t c …

管理局に入らないかとも聞かれた

答えは「はい」しかなかった

怪我は骨折などで、後は地球の病院で対処できるレベルらしい
帰った所は高町家の玄関だった

「なのは？」

家の奥から来た桃子さんが玄関先で迎える
2人揃って抱きつかれた

「何か言うことは？」

「うつ…。ごめんなさい…」

さすがにあれだけの間家にいなかったのはまずかったと思ったのか
なのはが謝る

「違うわよ」

くすりと笑って抱きつく力を強める

「ただいま、でしょ？」

腕の事を聞かれたから転けたと言ったら笑って許してくれた

しばらくしてアリサとすずかが来た

腕のギプスを見てアリサが異常なほど心配をしたがそのままいつもの
仲良し組の会話に戻った

「なのはちゃん達がない間にね、私ね。友達増えたんだ」

「すずかちゃんも？私もできたの。今度紹介するね」

「名前はフェイト・テストロツサっていう女の子だ」

「私の方の名前は、八神はやてって言うんだ。読者好きな同い年だよ」

第18話 友達（後書き）

∴ フェイトがデレたのが書きたかつ（ry

次回から闇の書が大活躍の予定

キャラのおさらいとか書こうと思いましたがここで書くのもあれだし希望があればちょっとずつ書いていくって感じにします

それにしても…、携帯だから楽に入力して楽に投稿できると思っただらそんな事はないですね

では次回からは新しいパートが始まりますが、是非ともよろしくお願ひします！

第19話 新たな始まり(前書き)

白湯です

A・S編、始まります

第19話 新たな始まり

夢を見た

一匹のカラスの夢

どんな場所にも飛んでいける翼を持っている

でも行く先に居場所は、無い

一本の木が見えたから休むためにそこに止まる

でも止まったきり動かなくなった

飛び方を忘れてしまったのだ

それっきりその場から動けなくなった

でも、叫ぶ事はできた

「私は、ここにいるよ」

それは、酷く寂しい夢に見えた

「スターライト！」

なのはが仮設空間の中にある魔力を限界まで自分の目の前に収束する

「バインドがなければそんな大魔法は当たらないよ！」

フェイトが自分の中で温存していた魔力でバインドを引きちぎって回避行動に移る

「っ！ブレイカー！」

フェイトが回避した方向はわからないが余波で潰そうと考えたなのはは構わず放つ

十分距離を取ったフェイトは落ち着いて防御態勢に入る。

直撃でなければ防ぐのは簡単である

魔力砲を受け流す

そのため少し斜めに盾を張る

「でも…、威力は桁違いだね」

外れたスターライトブレイカーがレイヤー建造物を蒸発させる非殺傷設定が聞いて呆れる

「でもここまで届かない」

フェイトも収束を開始する

なのはと最初に戦った頃とは違う戦い方

あれから訓練はたくさんしてきた、大丈夫だ。できる

そう思つて一閃必中の槍を作るために右腕を天に掲げる
その先に体内と体外の魔力を使って前回よりも早くその形を顕わに
していく

そして振り下ろす

「スパーク、エンド！」

なのははスターライトブレイカーを撃ち終わつて満身創痍
レイジングハートも内部冷却のために動けない
そこに、黄色の閃光が届いた

フェイトの勝ちが決定した

模擬戦が終わつて医療班とかける達が戦闘フィールドに集まる

「きゅ〜」

なのはは目を回していた
体内魔力は残り3%未満で危ないと判断して医療班が即搬送するが
なのはの魔力の3%は一般戦闘員の50%らしいので問題は無いと
は思つ

「これで1勝1負だね」

フェイトがガッツポーズをこっちに向けてくる

最初の一戦こそはなのは戦略勝ちだったが、また同じ作戦を今回に持ち込んだのは間違いだった

フェイトはちゃんと対策を練っていたので勝つことができた

「お疲れ様フェイト。というか最後のあれ、体外の魔力収束はいつ覚えたの？」

「なのはの戦いを見て思いつきだったんだけどね、あれは私には向いてないよ」

「なんで？」

「私のメインの速さが生かせないから」

なるほどと頷いてその場を後にする

あれから一年が過ぎようとしていた

なのははリンディさんの勧めで囑託魔導師となっていた

海鳴市に異変がある時、アースラから任務がある時に出勤となるらしい

フェイトは一年間の保護監査

ジュエルシード事件に参与したとして裁判にかけられたりもしたが、フェイトの母プレシアが自白、その後死亡となったため管理局は全ての黒幕はプレシアであり、フェイトは第三者に過ぎないとした

言ってもほとんどクロノとリンディさんの手回しのおかげだ

おかげでフェイトは軽い罪状で済んだ

「かける？空見てないで早く戻るよ？」

ふいに声をかけられて少し反応が遅れる

「あ、ごめん」

「もう、かけるったら…」

そう言っつてフェイトは笑う

フェイトはあれから笑顔が増えて嬉しい

もう、あの悲しい顔は見たくない

「ユーノ、転送頼む」

「わかった、じゃあ送るよ」

俺の方は正直言っつて厳しかった

管理局員への攻撃

次元航行船へのハッキング

管理局が魔法を使っつてこの世界を保っているのにその魔法を吸収して無効化した拳げ句、それを自分の力に変える力
質量兵器の使用

まだまだ他にもいろいろあったがこの4つがでかい

しかしここでもリンディさんの力がまとめてくれた

あの人のバックボーンは強すぎると思った

簡単に言うと魔力吸収をとしたのだ希少能力
魔力吸収、通称・レアスキル・保持者となり個人情報などに特秘事項をかけたのだ

管理局員への攻撃だけではどうにもならなかった
おかげで1ヶ月の拘束の後に保護監査となった
本来拘束はそんな短くは無いのだが、子供で判断力が欠けていると判断されたらしい

「まあ、これで日常とかけ離れた日常が過ごせるわけだが…」

不満ですか？

ブレストウイングが不安そうに声をかけてくる

ブレストウイングの武器は質量兵器なのは確定
だがデバイスの待機状態、という事で難を逃れた

「うんや、楽しくて嬉しいよ」

ならいいです

拘置所から出た後は囑託魔導師になれた。

保護監査役はグレアム提督と、その補佐でクロノだとか

それを聞いたクロノは苦虫を噛み潰して尚かつ、それを飲み込んだ
ような顔をしていたが気のせいだ

「訓練お疲れ様って所かしらね」

アースラに到着して休んでいるとリンディさんが手を後ろに回しながら入ってきた

「はい。今日は私の勝ちです」

フェイトが小さくガッツポーズする

「フェイトちゃんは無駄な動きが無くて洗練されてるわね」

「ありがとうございます」

少し照れながら受け答えをする

「でも最後のあれはダメだわ」

人差し指を立ててメツと叱る

「一対一だから使えたけど魔力温存するんなら回避に徹するとか、最後決まるかわからない一撃に魔力を使い切るといのはちょっとね」

「はい、ごめんなさい……」

「でも、今回はいい戦いだったのでいいですよ。エイミィ？みんな

にお茶をお願い」

リンディさんが叱るとフェイトはちょっと嬉しそうだった
自分の事をこんなに見てくれて嬉しいと思ったのだろうか

そしてエイミィさんにさらっと雑用押し付けた気が…

その後はエイミィさんが持ってきたお茶を飲んでまったりしていた

「ではそろそろ戻ります」

なのはが回復してこっちに帰ってくるのを見計らって立ち上がる

「次回からはまた基礎訓練よ。なのはちゃんにそう伝えといて」

「わかりました。じゃあまたな、フェイト」

「うん。またね、かける」

フェイトが手を振ってきたのを返して転送ポートに向かう

こんな感じでフェイトとなのはは毎日個人訓練。

週末はみんな集まって全体訓練となっていた

俺は学校から帰ったら高町家の道場で稽古をつけてもらう形になっ
ていた

道場に行かせてくださいと頼んだら士郎さんは歓迎してくれた

「あいつの息子を教え子となる日がくるとわな…」

恭也さんもすごい喜んでた

ちよつとハードだけどすごく楽しい
それが新しい日常だった

12 / 3 18 : 30

「はやては？」

玄関で赤髪の10才くらいの女の子が靴を履く

「今はシャマルが迎えに行ってるが、もうじき帰ってくる」

玄関でピンクの髪をポニーテールに結んだ20才の凜とした空気がある女が答える

「そっか、なら早く行かなきゃな」

そう言って立ち上がる

「じゃあ行ってくるシグナム」

「後でザフィーラも向かう、封鎖領域は合流してから張れ」

「おっけー」

そう言って家を出る

「今日は昨日見つけた大物を狙う。任せとけって」

「わかった。くれぐれも早まるなよ」

戦いは終わらない

これから続くのは新たな物語

近づく未知の脅威

すれ違う目的、それらはどこへ収束する？

また新たに物語は始まる

第19話 新たな始まり（後書き）

さて、冒頭の夢の部分ですが

あの夢を見てるのは誰かというのはまた後ほど、という事で

原案もちゃんと書いてやってますが絶対アドリブで何か追加して終わり方が初期案と変わるのとは事故だと思う

では次回は戦闘…かな？

お楽しみにー！

第20話 夜の帳（前書き）

白湯です

そろそろ暑い季節がやってきました

しかし小説の中では12月
寒いよ〜

第20話 夜の帳

「じゃあ今日の稽古はここまで」

士郎さんが竹刀を置いて正座をする

背筋を伸ばし凜とした洗礼された形は美しいものがある

「ありがとうございます」

それに合わせてかけるも正座して体を前に倒す

道場での決まり事

それは礼はきちんとする事

これを守らなければ即破門らしい

「冬とはいえ、少し汗臭いから風呂に入ってからご飯を食べるとし
よう」

「はい」

そう言っつて風呂に向かう

途中

「なのはに嫌われるぞ」
とからかわれた

当の本人は

「山の中で訓練してたら操作間違えて空き缶が頭の上に落ちてきた
の」…なにしてるんだろ

晩御飯を食べ終わり寝間着代わりのジャージに着替えてソファに座りテレビを見ていた

恭也さんと美由希さんのチャンネル争いは恐ろしいものがあった

しかしなのはの希望で「哲、この部屋」という番組となった

今回は最近人気の歌手が出ていてその人を着に話すトークショーだった

これはちょっと面白いかも

「かけるくんにサプライズプレゼント」

そう言って桃子さんがテレビの電源を切って身体の後ろにある物を隠しながら来た

なのはがあつと名残惜しそうな声をあげたものすぐにこっちに食いついてきた

「なにになに〜？かけるくん」

はいと言って桃子さんが黒いものを渡してきた

「…携帯電話？」

「そうよ、確か持ってないって言ってたわよね」

恐る恐るそれに手を伸ばす

ズシツとした重量がある

スライドして開くとボタンがずらり

「いつも黒のリストバンドつけてるからその色に合うように黒にしてみたの」

「母さん！これスマートフォンじゃん！いいな〜」

美由希さんが羨ましそうに目を星にして見ている
よっぽどすごいものなのか

「ありがとうございます」

それを胸の前でぎゅっと握りしめて礼をした

「かけるくん！私がい方教えてあげようか？」

なのはも目を輝かしている
でも自分よりは詳しいだろう

「お願いなのは」

「うん！任してー！」

「なのはずる〜い！私も触りたい〜」

美由希さんはこの際スルーしよう

なのはに電話の仕方とメールの仕方を教えてもらい続きはまた明日という事で自分の部屋に戻った

早速椅子に座り机に向かってちょっとずついじってみる

電話帳（？）を見ると6件登録してあった

高町家

士郎さん

桃子さん

恭也さん

美由希さん

なのは

「明日アリスとかにも聞いてみるか…」

…マスターの

おもむろにプレストウイングが喋る

「ん？なんだプレストウイング？」

マスターの浮気者！

ブレストウイングがまさかの発言

「いや、意味がわからないから…」

通信程度私にもできます！なぜ頼ってくれないのですか！

「うっ…。ごめんなさい」

…とレイジングハートが言えと

「黒幕はレイジングハート?!」

すみません。でしゃばりました。私はまだダメデバイスのままです
すね

「いやいや、ブレストウイングはよくやってくれてるよ」

手に持つてる携帯電話を机の上に置く

そうですか…。あ、その携帯電話は私と違って充電が必要です。
寝る前に充電台にセットが必要です。注意してください

「…充電台？」

明日桃子さんにもらいましょう

「やっぱりそうなるのか…。今日はなののを借りるか」

そう言っって部屋を出てなのはの部屋に入る

しかし部屋になのはの姿は見当たらない

布団の中には人形があるだけでなのはは見当たらない

トイレかな？と思って一階に降りる

「おかしい…、なのはどこか誰もいない」

慌てて靴を履いて外に出る

夜の冷たい風が心地よい

しかし人も猫などの動物も見当たらない

結界が張られていますね

「なのはが発動したんじゃ…無いよな？」

そうですね。彼女はまだそこまで技術がありません

「なら早めに向かおう」

するとさっきまで着ていた寝間着代わりにジャージがバリアジャケ
ットに切り替わる

嫌な予感しかなかった

市街地方面。魔力反応2つ…いや6つです

「…1対5はもはやイジメだろう」
そうばやいてから空を舞った

「なのははここで回復に専念して」

なのはが敵魔導師に撃墜された

ユーノが治療の為の魔法陣を展開する

フェイトはすでにシグナムと言われていた敵と交戦中

フェイトの攻撃を回避して体格差を使った攻撃をしてくる

あまり長くは持たないだろう

早く増援が来ることを祈るしかない

それよりも

「ベルカ式魔法陣にカートリッジシステム……」

なぜ世界は今使用者の少ないはずのベルカ式が使われてるのか？

今ではミッドチルダ式の魔法が主流というのに

なぜ近接に特化した魔法なのか

遠距離特化の方が柔軟な戦闘スタイルにできるのに

「えっと…、なんでフェイトちゃんとユーノくんはここに？」

なのはが横たわったままの姿勢で苦しそうにしゃべる

「えっと…、かけるから連絡があったんだよ。それにしてもレイジングハートが折れるなんて…」

ユーノは話をすぐに切り替える

なのはの手には折れて2つになった魔法の杖、レイジングハート、があった

すみません。私が不甲斐ないばかりに

本体にも罫が入り、もう戦闘はできないほどのダメージがある

「レイジングハートはよくやったよ」

「なら…、私のせいなのかな？」

なのはが恐る恐る口を開く

「違うよ。今回は相手が悪かった。また後で対策を練ればいい」

ユーノがなのはを励まそうとする

「…うん、わかった。今は少し休憩する」

そう言ってあとは話さなくなった

「時間稼ぎだ、ヴィータって子の動きを止めよう」

ユーノはおもむろに立ち上がり空へ舞った

今は1人の少女の安息を守るために

「魔力反応の分析は？」

完了しました。なのは、フェイト、ユーノ。残りはUnknownが3人です

「あんのうん？」

かけるが首を傾げる

正体不明という事です

「なるほど」

フェイトとユーノは各々Unknownと戦闘中

「なのはも正体不明と？」

いえ、距離も離れてるのでそれはないかと

「ならそっちとの戦闘に入ろう」

了解。武装展開

ブレストウイングのかけ声で右手に刀、背中に盾、右腕に甲冑が装備される

背中に盾があるのはフェイトの案

不意打ちからの防御と操作するブレストウイングの負担を減らすためだ

戦闘に入ったらいつものように動かして戦うとのこと

「あとどれくらいで出会う?」

113秒後にエンゲージ。向こうも気づいて近づいて来てるのでさらに早いかと

「えんげいじ?」

またわからない単語だ

かけるは首を傾げる?

そんな言葉は聞いたことは無い

いろいろ意味はありますが、今回は遭遇するということ意味です

ためになった今度あんのうんと一緒に使ってみよう

「また子供か…。この街には子供の魔導師が多いのか」

目の前に1人の男が立つ

「…誰？」

かけるが聞く

知り合いに犬みたいに耳を生やして尻尾が生えた筋肉質の男はいない
女はいる気がしたが気のせいだろう

「私は盾の守護獣ザフィーラ。我らが悲願を叶えるために」

拳を右に突き出して構える

「貴様を倒す」

「まずは話し合いを…」

突然殴られたらたまったものではない

「断る」

「俺には助けたい仲間がいるんだ。頼むから道を開けてくれ」

「断る、と言ったら？」

「道を作るだけだ」

刀を下段に構えて、盾を目の前に広げる

「近接戦闘型か。少し楽しみだ」

「ああ、そうかい！」

ザフィーラがそう言ったのが合図となって戦闘が始まった

まだまだ夜は始まったばかりである

第20話 夜の帳（後書き）

物語の途中なのは見てた

哲、この部屋

は

徹○の部屋

もじってただけだったりします

元ネタはとあるドラマより抜粋

さて、また戦い

どちらが勝つのか？！

次回をお楽しみに！

第21話 夜明け（前書き）

ゴールデンウィークを有意義に過ごせてますか？

白湯です

久しぶりにあった友達が急に金持ちになってたら普通はびっくりします（経験者は語る）

第21話 夜明け

真っ白の空間の中で1人の女性が立っている

「ふう……。大丈夫かな？」

長くなった髪を後ろでポニーテールにして結ぶ

そうして上を見上げる

その瞬間、白い空間は山の中になった

木々が生い茂り、足元には草が生え、生き物の声が聞こえる
ジャングルに迷い込んだ気分だ

「うん。ばっちり。空間把握と構成が一瞬でできるなら問題は無い
ね」

指をパチリと鳴らす

すると先ほどの真っ白の空間に戻る

「私を使い始めてからそろそろ一年。いろいろあったけど私はもう
これだけあるなら十分」

その手の中にはジュエルシールドが8個

それをおはじきのように手の上で投げて遊ぶ

「もうリミッターを外そうかな。そろそろ欲しがるはずだもの」

そしてジュエルシードを全て床に落とす

それらは全て床に吸い込まれるように消えていく

そして彼女の手の中には一本の小さな鍵だけ残った

「不思議なものだよね。こんなちっぽけなものが力を得るために必須だなんて」

右腕を身体の右に伸ばし何かを探す

すると何かにぶつかる

目に見えない何かがある

「この封印作るのにこの時間で10日はかかったのに壊すのは一瞬なんだよね」

右腕の先にあるものが姿を現す

そこには黒く高さ150cmくらいの棺桶が1つ直立していた

「あなたのお父さんがこれを作り出した」

頬が自然に緩む

またあれが見れるのかと考えると楽しみで仕方がない

「あなたは、どう使うかしら？」

その後、女性は姿を消した

残ったのは棺桶と粗末に落とされた1つの鍵だった

ユーノの治癒魔法が発動している

ユーノの治癒魔法は身体がぼかぼかしてなんだか気持ちいい
身体の傷はほぼ癒えたが目に見えない心の傷は治らなかった

「レイジングハート：私、また何もできないのかな？」

なのはは少し立ち上がりながら戦闘状況の確認をする

フェイトはさつき参戦したシグナムって人と戦闘中

ユーノは私が負けたヴィータっていう子の足止め

「私やっぱりできないみたいなんだ」

自分の無力さに呆れる

あの、誰も救えない小さな手のひらが嫌だったから魔法の力に憧れて強くなっていった

でも今はその魔法のせいで苦しんでる

みんな戦ってるのに自分だけのうのうと回復

そんなのは、許せない

何をしたいですか？

「え？」

あなたは、今何をしたいですか？

レイジングハートは折れた箇所を修復して元の杖に戻る
しかしひびが入ってるからか、見るからに痛々しい

「私は…みんなを助けたい！」

自分は何かしたいかは決まってる

自分を心配してくれるみんなに何かしてあげたい
そのためにまずは…

この結界を破りましょう

レイジングハートが自分の考えと同じ事を言う
ユーノが残した魔法陣が消えるその代わり目の前にみるみる魔力が
収束していく

「スターライト、ブレイカー？」

はい。私に時間をください。発射準備ができれば、引き金を

カノンモードに切り替わり
小さな引き金が露わになる

「うん」

その銃身を握りしめて引き金に指をかける

「私の中の魔力を使って、威力を最大まで底上げして」

了解しました。マスター

スターライトブレイカー

発射まであと35秒

発射したら襲撃者は逃げるしかなく、なのは達は助かる

運命の一撃が放たれようとしていた

「む、これは…。あの少女はお前の仲間か？」

ザフィーラが拳を下げる

そしてなのはがいる方向を見る

「…誰の事だ？」

マスター。左の方向です。なのはが収束に入った模様

「なのは！無事だったのか！」

プレストウイングに言われて左を見る

そこにはピンクの魔法陣の上側がビルの陰から見える

しかもあれは見覚えがある

フェイトが落とされたなのはの全力全開な魔法

「スターライトブレイカー、なのか？」

「ほう、ブレイカー…破壊する魔法か。なるほど。結界を破るつもりだな」

ザフィーラはこっちを見ていない
すでになのはの方向に飛んでいる

しかし、先ほどの戦闘でわかった
速さならこっちが上だ

ザフィーラの前に身構える形で飛び込む

「やはりこう来たか…。ならば倒させてもらおう！」

飛んでいた勢いも追加された跳び蹴りがくる

それを難なく盾で防ぐ

直線的に飛んでくるし、距離もあらかたあるならいなせば簡単に止められる

「今の一撃を止めたか。だが」

今度は回し蹴り、盾を強引に払いのける

「縛れ、鋼の頸木！」

ビルの壁という壁から白い三角形の魔法陣が現れる
そこから魔法でできた剣が伸びてくる

その剣が盾の動きを阻害して盾を無力化する

自分の周りにも伸びてきた
それが身体を貫こうとする

吸収

ブレストウイングが一言そうつぶやくと魔力刃は吸収して消えてなくなる

「魔法が通じないのか?!」

ザフィーラは驚き、追撃のために振り下ろそうとしていた拳を下げようとする

その隙を狙ってザフィーラの左腹をかけるの刀が削ぎ落とした

「ぐっ！うおおお！」

しかしザフィーラは苦痛に顔をゆがませても身体をひねって殴り飛ばす

鳩尾には入ったはずだかなぜか口が笑っていたのが見えた

空中に飛ばされたかけるを見て聞く

「何がおかしい？」

かけるは静かに右方向を指差す

「時間稼ぎは終わりだ」

「なに！間に合わなかったか！」

小さいけどはつきり澄んだ声で聞こえる

スターライトブレイカーの詠唱がもう終わる

勝ったと思いのほを見る

ポロポロのレイジングハートと破れたバリアジャケット

なのはも苦労したんだろな

早く終わりにしよう

しかしなのはの動きが止まる

それに続いて見ていた人全て動きが止まる

おかしな光景をみていた

なのはの胸から手が生えていた

ワントempo遅れてザフィーラがかかるとなのはの間立つ

それだけでわかった
あれは敵の攻撃なのだ

「次は、お前の番だ！」

ザフィーラがかかるを後ろから羽交い締めにする

「やはりな。消せるのは魔法だけで物理攻撃には無力というわけか」

身長差は軽く30cmはある

逃げれないという絶望感がひしひしと迫ってくる

足をバタつかせたりしてみるもたいしたダメージはない

次第に諦めが考えを支配する

刀が手から自然と滑り落ちる

しかし目の前をピンクの光が通り過ぎて我に返った
スターライトブレイカーが発射された？

あんな状態だったのに？

自分もなんとかしなくては！

もう諦めない！

「ブレストウイング！」

わかっています！

バリアジャケットが弾ける
いや、炸裂する

「なんだと！自爆か?!」

ザフィーラが怯む

そうしてできた隙間から抜け出る

ザフィーラと距離が開くとバリアジャケットを着直して刀を中段に構える

「これで逆転だ」

見るとザフィーラの筋肉質な腕は火傷の痕が目立っていた

あれではもう戦えないだろう

「ああ、逆転だな」

ズルリという耳につく音がして腕がかけるの胸から現れた

「お前はそこで逃げれば良かったのだ。戦おうとするから」

生えてる手の先にあるものには見覚えがある

確かユーノが教えてくれたはず、リンカーコア…だっけ？

「墜ちるのだ、幼き魔導師よ」

その白銀の光を放っていたリンカーコアがみるみる小さくなっていく

そうしてザフィーラの言った通りどこかのビルの屋上に落ちた

痛みはなく、そこまでしか覚えてなかった

第21話 夜明け（後書き）

…戦闘シーンもっと書きたかったな

原案通り書いてたらこうなった

「少ねえな、もっと俺のフェイトの活躍とか妻のなのはの活躍書けよ。」

とか言われたらさすがに追加します

というか真っ先に謝ります

さて今回は戦闘終わった後日談からみたいなのをスタート予定
えっ？最初の？

まあそれも含めてまた次回！

いかん…

酒のんでるからまともな事書いたからわからん…

第22話 鍵の意味（前書き）

ゴールデンウィークの間帰省していて全く書けてませんでした
すいません

とりあえず次回からは頑張ってみます

では

どろどろー！

第22話 鍵の意味

「…失礼します」

フェイトはアースラに設置された医療室にいた

彼女自身に怪我は無い

今日はお見舞いという形で来ていた

あの襲撃から一夜明け、今回の被害者は囑託魔導師2人

以前から局員が襲われていたのは一部話題となっていた
しかも被害者は皆リンカーコアを一部吸い出されている

顔ぶれは分かってないが、犯人は4人以上いる

これにアースラのチームが担当する事になった

アースラのスタッフ達は休日が潰れたといい悪態をついていたが
ちゃんとんだかんだで仕事をしている

「…まだ寝てるかな？」

フェイトはまっすぐにかけるのベッドに向かい顔を覗き込む

本当にただ眠っているだけ

リンカーコアの修復も始まっていてもう大丈夫とのこと

「なのは…」

次にかけるのベッドの隣にいるなのはのベッドへ向かう

なのはは一度目が覚めて、今は様子見といったところ

傷ついたレイジングハートを見て一番悲しんだのはその持ち主でもある彼女だった

フェイトのバルディッシュもあわせて今は修理中

その間なのは魔法の使用を控えるとのこと

ブレストウイングはなぜかかけるの腕から外れなかった

まるで縫い付けられたようにびくともしない

「かける…、目を覚ましてよ」

そう言ってかけるの右手をフェイトの両手が覆う

こうしてないとかけるがどこか行きそうだったから

そばにあるパイプ椅子に座る

それでも手は離さない

「そういえば母さんも私が眠れない時にこうしてくれたな…」

少し感傷にひたりながらそのまま手を握りしめていた

「…どこだこじこ？」

かけるは真っ白な空間の中に1人立っていた
右腕にリストバンドは無い

見覚えはある

思い出そうとすると目の前に女の人立っていた

「ブレストウイング？」

「はい。マスター」

はっきりと澄んだ声でブレストウイングは答える

「ちなみにマスター」

「なに？」

「今日は趣向を変えてポニーテールにしてみました」

くるりとその場で一回転

ふわりと髪やスカートが舞い上がる

ついでにいい匂いもする

「かわいいでしょうか？」

「…かわいいよ」

恥ずかしくなったからか少しごにょごにょという形になってしまっ

「本当ですか！やっぱり私はかわいいですか！」

「それで、なんのようだ」

「いいじゃない細かい事は。今はいつか見たドラマについて語りましょうよ」

何故この世界につれて来たのかは今は答える気はないらしい

だから今は少しブレストウイングとの会話を楽しむ事にした

そんな他愛もない話をいくらか繰り返してふと一区切りついた時に聞いてみる

「なんでまた心の世界に？」

するとブレストウイングははあとため息をついて諦めたような顔をとる

そしてゆっくり近づいて来て、鍵を渡してきた

ちやりと金属音をたててかけるの手に収まる

見ると昔の南京錠の鍵みたいだ

「さて、なぞなぞです。マスター」

ブレストウイングは一步下がりに聞く

「鍵はなんであるでしょう?」

「…ドアを開けるためじゃないの?」

「うーん。一般的にはそれでも正解ですが今回は違います」

なんだろうか

少し情報が足りない

「時間切れです」

ブレストウイングは両手を上げて万歳をしている

なんだろうか、少し腹がたってきた

「まあまあ、答え教えますから落ち着いてくださいマスター」

「…わかったよ」

「答えは、大切な物を守るためです」

そう言うと周りが真っ黒な空間に変貌した

寒さのせいか、鳥肌が立つ

「そろそろ起きましよう」

ブレストウイングがゆっくり自分に近づいて抱きついてくる

「Awake on」

ブレストウイングが耳元でぽつりつぶやく。

自分には理解できない

「さあ、あなたの魔法を今日覚めさせました」

だんだん真っ黒な世界が自分の存在を奪っていく感覚に襲われる

「あなたの魔法。私の魔法ではなくあなたの魔法」

自分はなんなのか。わからなくなる

「それが、鍵、です」

そう言うと身体の周りにあった温もりが次第に消えていった

そうして真っ白な空間に棒立ちしていた

その手の中に鍵はもう無かった

「…うん？」

目が覚めたら見たことある天井に

「…フェイト？」

フェイトが自分の手を握っていた。
なんかデジャヴな予感がする

「あ、起きた？」

フェイトは手をさっと離して椅子に背を伸ばして座る

「いったい何があった？」

「身体はまだ万全じゃないから魔法は使えないらしいよ」

「はあ…。夢じゃなかったか」

そう。あの襲撃が夢であって起きたら無かった事になっていれば良かったのに

「途中からフェイトも戦闘に参加したのか？怪我とかしなかった？」

「大丈夫だよ。私はリンカーコアにダメージは無いし、身体に傷も無いよ」

ざっと見るだけでも怪我は無く、元気なフェイトそのままだった

「良かった、なのはは？」

「なのはもかけると一緒。リンカーコアを一部奪われてる」

「そうか…」

「あ、でもかけるもただけどすぐに回復するらしいよ！さっきお医者さんが若いからか回復は早くなって驚いてたし」

「ははは。若いにも程があるって」

まだ10才。

されど10才だ。いろいろな事がありすぎるけど

ふと部屋の隅にある紙袋に目がいく

そこには”かけるとなのはへ”と書いてある

「なにかプレゼント？」

「あ、アースラのスタッフには渡したんだけどかける達にもって」

フェイトが紙袋の封を開ける

その中にはイチゴのショートケーキが入った箱があった

ちよこんと乗ったイチゴが可愛らしさを醸し出している

「これを、渡そうとしたんだ」

「うん？」

「かける達にサプライズだって思って持ってきたんだ」

フェイトの手が微かに震える

そうして顔も下にあるケーキの方を向く

「そしたら結界が街に張ってあった」

「アルフに頼んで管理局に連絡してもらってその間に私とユーノは時間稼ぎも含めて中に入ったらなのはが倒れてて！」

「なのに私は！こんな時にも私は助けられなかった！」

フェイトの声が病室に響く

「母さんも助けられなかった！ジュエルシードも結局全部集められなかった！」

沈んでた顔がこちらに向く

「かけるの救援も自分の事でいっぱい行って行けなかった！」

「もういいー！」

「うっぐ、ひっく……」

いつもは泣かないフェイトが泣く

珍しさからか少し驚く

その涙が箱に落ちて染みを作る

「もういいから！」

フェイトの手を力を込めて握りしめる
痛いかもしれないけど我慢してほしい

そして、聞いてほしい

「今は、終わったんだ」

「今はゆっくり休んで、また挑もう」

そういつてフェイトのケーキを自分の手元に引き寄せる

「なのはも呼んでこれを食べよう」

「…いいの？」

フェイトはさっき言ってた通り、自分に非があると思っているのだ
ろう

「いいもなにも」

でもそんな考えは愚問だ

答えは出ている

もう半年以上前から答えはある

「友達だろ」

フェイトはびっくりした顔のまま固まる

そして微笑む

「なのはは呼んでもいいけど…」

「ん？なんかあるか？」

「…なのはに泣き顔は見せたくない」

ハンカチをポケットから取り出して涙を拭く
その顔はもう泣き顔ではなかった

今はただフェイトはかけるの前で笑顔でいた

リンディはかけるの病室に向かっていた

かけるが気になるのはあるが、今はフェイトにお礼をいいたかった

「……ね」

リンディは病室のドアをひっそりと開ける。

今までの行動からして、フェイトは間違いなくかけると一緒にいる

そう考えて覗く

するとそこにはフェイトがかけるの手を握っている形で寝ている姿
があった

「あらあら……」

そう言っって一枚この光景を写真に取る

ケーキのお礼は後で言おう

それと、私の中では大丈夫だけど彼女がどういっかわからない
フェイトを養子として自分の家に迎え入れる事

この事件が終わったと言おう

そう考えて病室を後にした

第22話 鍵の意味（後書き）

半分実話

というか経験談

みんな怪我しないように

さて次回はようやくあの人が登場！

…遅い？

ごめんなさい

第23話 引越しと訪問（前書き）

みなさん、5月病は人類最強の敵です

気をつけてください

ではごきげん

第23話 引っ越しと訪問

「すみません！買い出し遅れました！いつものオリーブ油が置いて無くて」

そういつてシヤマルが台所に入る

「ええよ、別に。みんなも連れて帰って来てくれた事やし」

電動の車椅子に乗って冷蔵庫から離れてこの家の主”八神はやて”が答える

「いつもヴィータかシグナムいないけど、今日はみんないるから頑張って作るで！」

「すみません。主はやて」

シグナムがリビングに入る

「ええよ、別に。あ、シグナム。食器運んでくれるか」

「わかりました」

こうして、少し遅めの八神家の食事が始まった

みんなが寝静まった頃、シグナムはリビングに降りて1人ソファ―

に腰掛けていた

「どうした？」

その場にいたザフィーラが聞く
今は狼の形態のようだ

「ああ。なかなか寝つけなくてな」

「今日の戦闘か？」

「察しがいいな、お前は」

そう言つて服をめくり上げる
腹に傷が一本入っていた

「お前も、か」

ザフィーラが人型に姿を変える

両腕には火傷

横腹が一部無くなっていた

「なんだその傷は?!」

ザフィーラは盾の守護獣の二つ名を持っている
騎士の中で防御に関してはトップクラスであった
しかし、そのザフィーラがここまでダメージを負った

はつきり言つてシグナムには異常としか思えなかった

「やつとの戦闘中にわかった事がある。やつに魔法は効かない。そもそも魔力を消し去るみたいだ」

なぜ身体の一部がダメージを受けても回復しないのか

理由は簡単

その傷を回復するだけの魔力を削り取られたから

「やつとの戦闘は極力避ける。蒐集もしたしな」

「肝に命じておこう」

「一応、一晩も寝たら回復はする。明日からも蒐集には参加する」

「無茶はするなよ」

不安そうな顔のシグナム

「ああ。だが主が無事である事が最優先だ」

そう言って二人は眠りについた

アースラのブリーフィングルームにその乗員と関係者が集められる

かけるもその場にいた

「今回の事件は1つの魔導書が原因だ」

アースラのスクリーンに一冊の本が写し出される

「えっ？」

かけるが声をあげる

「どうしたのかけるくん？」

隣にいたなのはが不意に声をあげたかけるを気づかう

「いや、なんでもない……」

「そうか、なら話を続ける。この本は”闇の書”と言われるロスト
ロギアだ」

その後からの話は頭に入ってこなかった。
自分の中で一つの仮説が立ってしまったからだ

「と、言うわけだ。今回は発生地が地球という事なので、
地球に本拠地を置く。以上だ」

「なのはちゃん達には引っ越し準備をしてもらいます」

リンディさんがにっこり微笑む

「はい？」

どつちら怪我をゆっくり治す暇はなさそうだ

「はい！やったあ！」

なのはよ。なぜそんなにつこり顔なんだ

「だって、これならフェイトちゃんも地球に来れるもの！」

「へ？」

当のフェイトの頭にははてなマーク

「そうよ、フェイトちゃんはこの本拠地で暮らしてもらおうわ」

リンデイさんの説明を聞いて、フェイトはようやく理解したのかなのはとハイタッチしていた

数日後、高町家の近くにあるマンションの一角に宅配便が届いた家具一式と服やらその他もろもろ

「うわー、冷蔵庫おっきい！」

なのはは自分の家の何倍もの大きさの冷蔵庫を見て少しテンションが上がってる

「冷蔵庫？」

「この中に入れたら中の飲み物とかが勝手に冷えるんだよ。あ、動力は電気ね」

「こんなものがあるんだ…」

まだ地球の情報に疎いフェイト

さつき冷蔵庫のドアを撫でたりしていた

細かい所はエイミーがちよくちよく教えていく

「ここがフェイトちゃんの部屋よ」

そう言ってリンディさんが部屋の案内をしていく

このマンション、かなり広いらしい

なのははそれだけですでに驚いていた

「最後にこれが秘密のすぐれ物よ」

そういつてテレビのリモコンのような物のスイッチを押す

するとアイスラの中みたいに、空中に操作パネルが浮かびキーボードが出てきた

「アイスラの中の設備をちょっと持って来ちゃいました」

てへっという感じに舌を出す

しかしすでにこれは未来型なマンションになってしまった

初めてこの部屋を一般人が見たら100%びつくりするだろう

一段落置いて机を囲んでみんなでオレンジジュースを飲んでいた

「かける遅いね？」

フェイトが壁に取りつけられたら時計を見てなのはに聞く

「え？今日はかけるくん来ないよ？」

なのはの発言にフェイトの顔が一瞬固まったのは気のせいだろう

すずかと一緒にはやて家へ行くことになった

今はその道のりを話ながら歩いている

今日はブレストウイングはアースラでメンテナンスのため、右腕に黒いリストバンドは無い

「図書館で会おうと思ったけどかけるくんが来るって言ったらはやてちゃんが家に来てよって言ってね」

「まあ本なんかまともに読んだ事なんか無いしね」

「いつ以来かなあ。やっぱり…」

「はやての誕生日祝い、だろ？」

あの時は楽しかった

リンディさんが頑張ったご褒美と言って隅から隅までたくさん
の企画を立てていたがはやてが「私の家でご飯食べに来てくれ」と
言っ
て譲らなかったのはいい思い出

同年年なのにあそこまでできるのはすごいと思う

本当に、楽しかった

「あ、着いたよ」

以前と変わらぬ形の家

インターホンを押す

ピンポンという心地良い音と「はいはい、今行きます」という声

そして、ドアが開いた

そこにははやてはいなくて、いたのは金髪の女の人だった

黙ってドアを閉める

間違えた

たぶん隣の家だ

表札に八神と書いてあるがたぶん間違いだ。

「すずか、たぶん間違えてる」

「え？あれはやてちゃんの親戚のシャマルさんだよ」

もう一度ドアを開く

すると今まさにドアを開けようとしていたはやてと鉢合わせになった

「えっと…久しぶり？」

「お久しぶりやな。かけるくん。ようこそ！私の家へ！」

髪に付いてる髪飾りが彼女が動いたたびに揺れる

そうだ。これが俺が知ってる、

八神はやてだ

「さっきはシャマルが驚かしてすまんかったな」

そのシャマルさんは今ペットと散歩中

謝ったら少し戸惑っていたが許してくれた

「今日はなんで会いに来てくれたん？」

はやてが紅茶に口をつける

この紅茶とすずかが持ってきたチョコクッキーとの相性は抜群である気がする

「久しぶりに会ってなかったから顔を見に来たんだよ」

「おろ？私の事がそんな心配なん？」

「そりゃそうだろ」

普通に歩いていたらこけて立てなくなってその日以来車椅子生活を強いられるようになったのなら

「んで、本音は？」

「宝物を探しに来ました」

たぶんだいたい合ってるはずだ

「そうかあ。かけるくんの将来の夢はジョーンズ博士になることか」
なんだか盛大に勘違いされた

「あの本の事だ」

それを聞くとびくつとはやての身体が震える
どうしたのだろうか

やっぱりあの本はそうなんだろうか

「なんの本や？家にはハードカバーから文庫本まで多数取り揃えて
おるからよくわからんよ」

「鎖で嚴重に閉じられた本だつて」

「ああ。あれか。まあ見に来たんなら見せてあげるわ。ついてき

て」

はやてが電動の車椅子を走らせる
それに黙ってついて行った

以前ひっそりと連れて来られたらこの部屋

以前と同じ場所に本棚があり、机、室内灯がある

ベッドの上には女の子らしく人形がたくさん置いてある

「広いね。はやてちゃんの部屋」

すずかも驚いてる

「ううん。すずかちゃんの部屋にはかなわへんよ。あれは広すぎや
と私は思っ」

すずかの部屋の広さを思い出したらその時の事もたくさん出てきて
なぜかみんなで笑ってしまった

ひとしきり笑った後にははやてが車椅子を本棚の前に移動させる

「この本の事か？」

「それだ。ちょっと貸してくれ」

はやてが飾ってある本を一冊手に取る

そのままはやての手を經由して自分の元に渡される

それは確かな重量があり、禍々しさを放っている
以前と違う点は鎖が切れている事

普通の本にはない、圧倒的存在感

間違いない。これは

闇の書だ

そしてこの持ち主は、八神はやてだ

そう確信した

第23話 引っ越しと訪問（後書き）

…はい

初登場なはやてですから、少しインパクトを強くと思っていたんですが…

あんまり上手くいってないですね

そしてだんだん空気になっていくユーノとアルフ
登場する機会追加しようかと考え中

次回もまた今回みたいな戦闘が無い日常が続くはず
お楽しみに！

第24話 学校の意味（前書き）

もう布団いらないかも？

白湯です

日焼けして真っ黒になってしまいました
痛くて湯船に入れません

またちょっととした日常です

ではごっごっ

第24話 学校の意味

「そろそろ返してもらってもええか？」

闇の書のページをめくって読んでいるときに声をかけられた

すずかに至ってはチンプンカンプンらしく肩をすくめてお手上げだった

実際魔法陣とか書いてあるのがわかるくらいで自分にもよくわからないが

「返すよ。はい、はやく」

「うん。ありがとな」

はやくは車椅子を動かして部屋を出る
そして再びリビングでお茶会を続けた

「そっかあ。すずかちゃんの家にはそんなに猫がおるんか」

「本当にいっぱいいた。あれは一種の楽園だ」

「かけるくん猫の飼い方上手いんだもん。自然と猫がよってくるんだよ」

「ほなら、家で飼ったらいいのに」

「家が喫茶店経営で…」

「つまりは？」

「ペット飼うのは禁止なんだ」

「そりゃ残念な事やな〜」

はやてが牛乳を飲む

紅茶には飽きたらしい

そんなこんなで16時くらいまでいた

話してたら時間はあつという間に過ぎ去った

「そや、かけるくん携帯持ってるの？」

玄関で靴を履いているとはやてが聞いてきた

「一応、ね」

ズボンのポケットから取り出す

「番号とメアド教えてくれるか？」

「いいよ」

「あ、私にも教えて」

「さすがも携帯を出す
みんな結構携帯持つてるんだな」

「メアド交換をした後で徒歩で帰宅した」

「あ、なのはただいま。」

「かけるくん。おかえり。今日はどうだった？」

「なのはが間髪入れず聞いてくる
闇の書の話はしない方がいいだろう」

「はやて元気そうで何よりだよ」

「こっちからはフェイトちゃんからの伝言があるの。」

「あ、フェイトも居たんだけ。なんて言ってた？」

「えっと明日翠屋に来るって」

「わかった」

「何するんだろうか
今から明日が楽しみだ」

朝、毎日恒例となった道場に行く

そして竹刀を手に取り、振る

「1!2!3!4!」

振ることだけに集中し、数えなくなる
重要なのは振った数ではなくいかにかにまっすぐ力を使わず振ることができるか

次第に腕が重くなる
腕の疲れに負けないように握る力を強くする

「そこまで!」

土郎さんの声が道場内に響く
そして自分の元に近づいてくる

それを迎えるように自分は正座して体の左に竹刀を置く

「今朝は早いな」

「いろいろと聞きたいことがあったんで」

「なんだ」

士郎さんか竹刀を取り、自分の目の前に正座する

「最強の技とはなんですか？」

それを聞いた時に一瞬動きが止まる

それから上を向いたりして考えているのかと思ったたら自分の方を見
てきた

「”矛盾”という言葉を知ってるか？」

「はい、意味だけは」

「この言葉は”どんな防御も貫く矛”で”どんな攻撃でも弾く盾”
を攻撃したらどうなるか。という昔の故事が元になっている」

士郎さんが手を使って表現する

「かけるなら、どうなると思う？」

「えっと…できないから矛盾なんじゃ」

自分の解答に間髪いれずに士郎さんは話す

「私なりの正解はこうだ。矛は刺さらず盾は碎けない、だ」

「なにが言いたいんですか？」

首を捻るがどうも巧い手は浮かばない

「攻撃と防御は”攻撃は最強の防御”と言われるように似たような存在だ。故にその二つは交わる事は一切無い。あるのは攻撃、または防御のみだ」

「つまりは？」

「まあ落ち着け、姿勢を正せ」

無意識にだったが少し前のめりになって聞いていたらしい
一度立って屈伸をしてからまた正座に戻る

「攻撃するときは攻撃、防御するときは防御。その切り替えができるようになった時に最強の攻撃は生まれる」

士郎さんは一呼吸置く

「盾で攻撃はできるし、矛で防御できない道理はない。ようは切り替えが重要なのだ。」

士郎さんは立ち上がり竹刀を腰の横に添える

「まあそれは私が考えているひとつだ。深くは考えるなよ」

「はい！」

自分の中ではちゃんと思い浮かんだ事はある
それを物にできるかどうかが問題だが

「今日は翠屋に誰かくるらしいな？」

士郎さんが話題を変える

「え？あ、うん。はい！」

フェイトが来ることは知られていたのか。

頭の切り替えがうまくいかなかったからか曖昧な解答をしてしまう

「女の子を待たしたらいけないぞ。だからこの質問一つで今日の訓練は終了する」

「はい、ありがとうございます！」

自分が道場の出口に立つと士郎さんがこっちを向いて手を振っていた

「いつてらっしゅい」

「いつてきますー！」

それに自分は全力で答えた

靴を履こうと玄関に行くとなのははすでに靴を履いて立っていた

「早く行くよ！かけるくん！」

なるほど。女子がこっついう日はテキパキ行動するから早めに待ち合わせ場所につくのか

「はいはい、今行くって…」

今日はお茶会だけと思っていたが疲れ果ててしまいそうだ

「待ち合わせ場所は？」

「翠屋に直接来るらしいよ。なんだってリンディさんが顔出しに来るらしいの」

「わかった」

リンディさん…

仕事は大丈夫なのだろうか

あ、お休みかな？

そんな事を考えていたら翠屋についた

「さて、頑張りますか…」

そう誰にも聞こえないようにぼつり呟いて扉を開いた
カランカランとドアについた鈴が鳴る

まだまだ外は寒いから中からくる温かさは心地よい

「あら？早かったのね」

桃子さんがカウンターから顔を出す

「先に来てるわよ」

「おはよう、かける」

リンディさんとフェイトが奥のテーブル席で手を振っているの見える

「フェイトちゃん！昨日ぶりだね」

「うん。かけるは…」

「アースラで会った以来だろ？」

最後に会ったのはあのブリーフィングルームだ

「そっだね」

すると桃子さんがお茶を5つ持ってきた

「まずはフェイトちゃんの話が聞きたいな」

「え？私のですか？」

「あ、そうか。お母さんはフェイトちゃんのことあんまり知らないんだっけ？」

「わかることはなのはの友達って事よ、それでどこから来たの？」

桃子さんはなのはの頭をつんと人差し指で押した後、フェイトへの質問を開始した

しばらくして

「宅配便です。リンディ・ハラウンさんはいらっしやいますでしょうか?」

緑色の服を来た宅配業者が翠屋に入ってきた

「あらあらようやく届いたのね」

リンディさんが立ち上がって宅配業者の所に小走りで行く

それから帰ってきた時に大きめの白い箱を持っていた

「うん。危険物では無いわね」

そりゃ仮にも次元航行艦艦長なのだから危険物には十分注意するの
だろうか

命は大切なもの

「これは、フェイトちゃん宛てで間違い無いわね」

そう言っつてフェイトに箱を渡す

「私宛て…ですか?」

「私からのプレゼント。きっと喜ぶわよ」

「はあ…」

半信半疑でフェイトが箱を開ける

桃子さんは箱を見た瞬間になるほどと言って今はフェイトの顔色を見ている

中身がわかったからその反応を見てるのだろうか

なのはもわくわくしながら見ている

「よいしょっと…。ってあれ？服？」

フェイトは首を傾げた

白の服。ただそれだけなのになんの意味があるんだろうかと考えているのだろうか

「それって…学校の制服？」

気づいたから言ってみた

フェイトがえっと声を漏らしてこっちを見る

「ピンポーン。私立聖祥大附属小学校の制服です」

「よかったじゃないフェイトちゃん。ね？なのは。あそこはいい所よね？」

「そうだよ！フェイトちゃん！これで同じ学校に行けるよ！」

「あ、ありがとうございます」

フェイトは目の前に出したその服を静かに抱きしめる
顔も紅潮して泣き出しそうだった

「よかったな。フェイト」

そう一言だけ言った

一年前は学校に行くのが嫌で嫌で仕方なかった自分だ。
そんなに喜びは共有できそうにない
でも生涯初めての学校なのだ

初めての学校

新しく始まる人生に期待して胸を踊らす

自分にもこういう時期はあったんだろう
そう思っつてフェイトにかけた言葉だった

でも今はなのはやフェイトなどたくさん友達がいる。
そんなメンバーがいる学校はすごい楽しい。

それだけは、自分の中ではわかっていた

「エイミィ先輩」

後輩のマリエルが泣きついてきた
おかげで地球からアースラへ戻ってきた

マリエルは今のデバイス技士である
今回の担当は子供3人のレイジングハートとバルディッシュとブレ
ストウイング

「とりあえずこれを見てくださいよ」

今回呼ばれた理由はこれだ

この3人がエラーを出したまま他のコマンドを受け付けないらしい

「エラーはつと…、えっ？パーツ不足？」

よくある話だ

パーツを追加で渡して組み込めば大抵この手のエラーは止まる

「でも、そのパーツが…」

マリエルがキーボードを叩いてそのパーツの図面を出す

「まさか…本気？」

CVK-792

通称ベルカ式カートリッジシステム

「追加でプレストウイングにはこんなものが…」

設計図と必要素材と使用魔力量など様々なデータが表示される

「これはなんなのいったい…」

「でも、デバイス技士としてこんな注文は嬉しいです！もうだいた

「い完成しましたし」

「はあ……」

「しょうがない

あつちからの注文なのだ、遠慮はいらない

逆に遠慮せず全力で迎え撃ってやろう

「明後日までに頼んだわよ」

「い、いいんですか？」

「もうお構いなしにやっちゃって」

そうして私はこのデバイスからのむちゃくちゃな注文にGOサインを出した

後ろで鼻歌を歌いながらパーツを発注する後輩の姿はとても嬉しそうだったから自分としてもそんなものが見れたからちよっと満足だ

第24話 学校の意味（後書き）

…はい！

たぶん日常編終了です

次回からは戦闘がかけるかな？

アニメ見て携帯の分厚さに焦った

スマートフォンとか時代の最先端行き過ぎたる

まあいつか。二次創作なんだし

と、自己完結してみる

今回ははやての出演無いかも

はやてファンのみなさんごめんなさい

ではお楽しみに〜！

第25話 海鳴市市街戦（前書き）

やっぱり布団は必要です

白湯です

まだまだアニメ的には4話くらい

大丈夫かな？終わるかな？

なのはGODの発売日と価格が発表になりました
みなさん是非予約しましょう

アインハルト、トーマの声も決まったので確認してみてください

では、少し宣伝みたいになってしまったけど本編には全く関係あり

ません

どうぞ〜

第25話 海鳴市市街戦

またあの夢だ

でも続きがある？

私は目を凝らす

何も見逃さないように

カラスが一羽、木に止まって鳴いている

周りの果物はなくなりもう食べ物も水もない

力尽きて墮ちるのを待つだけ

でもそこに1人の男の子が来た

彼の手にはたくさんの食べ物と薬があった

その子は黙って自分の右腕を差し出す

せつかくの助けなのだ

その腕に助けてもらおう

そう思って木から飛び降りた

しかしあるのは冷たい地面

あれは夢だったのか

自分が己に見せた幻だったのか

もう、立てない

自分の見た夢のせいで落ちてしまった

目蓋を閉じると二度と開かなかった

今は冷たい地面が、

心地よい

「市街地に敵守護騎士の反応！数は2と断定しました！」

アースラのスタッフが答える

そのモニターには確かに本を持った敵の映像がある

この前は敵の張った結界だから自分達は見れなかったが今回はアースラ側から張った結界

後は、捉えるだけだ

「全員に到達」

リンディ艦長の声がアースラ中に響き渡る

「結果班はこのまま維持を。現地にいる囑託魔導師の高町なのはとフェイト・テストロツサは戦闘に参加。指揮は現地のクロノ・ハラオウンがとってください。」

「了解しました」

クロノが通信越しで答えて画面が消える
作戦を開始したのだろう

「あー…」

恐る恐るリンディさんに聞いてみる

「かけるくんはデバイスの調整へ。今回新しいシステムを多数搭載してます。それになれるためにまずは訓練ね」

「はい」

戦闘に参加できないのは確かにつらい
だが話に聞いたらブレストウイング自らのシステム変更だとか
それに応えてあげないと

そう思つて訓練室へ行つた

リンディはその様子をドアを出るまで見送っていた

「さて、クロノが動いたわ。戦闘員は転送ポートへ。アースラは今作戦のバックアップに当たります」

「了解！」

頼もしいスタッフからの返事

このアースラは老朽化が進んでる

もしかしたらこの事件が担当する最後の事件になるかもしれない

みんなそれに薄々気づいてる

だからこそ、頑張らないと

そう思って艦長が座るべき椅子へ腰掛けた

「管理局め…、手の込んだことをやってくれる」

「ザフィーラ！大丈夫か?!」

ヴィータが心配そうに声をかけてくる

最初の局員の攻撃からヴィータを庇った結果身体にダメージが来た

「安心しろ。まだ戦える」

まずは分析だ

結界を外側から強化

これでは内側から破るのは無理だ

しかも魔導師が結界の中にいる

自分達を弱めた所で確保か

「今日こそ、お話聞かせてもらおうから！」

局員の1人がこちらを見ている

やはりまだ子供だな…

「またあいつらかよ…懲りないな…」

ヴィータは自分のアームデバイス”グラーフアイゼン”を肩に担いでこつちを見る

冷たい目をしているヴィータ

恐らく自分もそんな顔をしているのだろう

向こうにあるビルの屋上で2人がセットアップを始めてる

確かにまた彼女達か

あの少年はいないようだな

管理局は人手不足なのか？あんな子供ばかりに戦わせて

「違うな。デバイスを強化して来たのか」

「へっ！どんな小細工しても勝てるわけねーじゃん！」

「そうだな、今までも。そしてこれからもそうだな」

拳を構える

恐らくシグナムが増援で来るはず

シグナムは黄色い髪の少女

ヴィータは茶髪の少女

との戦いだろう

ならば自分は結界の起動点を見つけてそこを叩いて脱出しよう

「ヴィータ、後は頼んだぞ」

「任せろ！鉄槌の騎士の名は伊達じゃねえ！」

そう言っただけに入った

さて、こちらでも行動を開始するか

少しでも戦闘時間を抑えないといけない

アースラの中で待機とは言われたが外が気になる
闇の書の持ち主ははやてなのだ

いつはやてが自分からこっちを攻撃してくるかわからない

そもそも、そうなった時に自分は動く事ができるのだろうか

そしてなのはとフェイトは敵として認識できるのだろうか

マスター。訓練開始時から魔力の乱れがあります。何かありましたか？もしつらいのなら医務室へ

「大丈夫だ。訓練を続ける」

そう思って新武装に手をかける

今回の作戦の映像は休憩室で見れます。休憩がてら、どうですか？

ブレストウィングが提案してくる

「自分から調整して欲しいって言って、サボれって言われても…」

全力を出してないあなたと調整したって無駄です。明日に回してもいいくらいです

「まあ…確かにそうか」

ブレストウィングの言うことも一理ある

少し飲み物でも飲みに行こうと思ってバリアジャケットと武装を解除して休憩室に向かった

今は口の中にべたつくような甘いオレンジジュースが飲みたい

そこにはもう何人が居た

みんな画面を食い入るように見ている

そこには知り合いの囑託魔導師2人が戦っている最中だった

カートリッジシステムの有無だけでこんなに戦闘に違いがあるのか
というかなのはとフェイトの方が押してる
これは勝ったかもしれないすると

「チャンネルを変える！11番だ！クロノ執務官が敵を捕獲してるぞ！」

「なんだって！」

その場にいた整備員の誰かが入り口で騒がれた情報を元に急いで変える

「リンディ艦長。敵をバインドによる拘束を完了しました」

クロノの足元に緑髪の女の人倒れている

見覚えがある

確かはやての家で会っている

バインドから抜けようともがいてはいるがビクともしていない

「ありがとう。闇の書は？」

「はい。ここに」

クロノが闇の書を持っている

これは決定打なのでは？

つまりこれをアースラに持ち込めばあとは封印処理だけ

勝利確定だ

そう思っているとクロノが画面から消えた

変わりにいるのは仮面の男

何かを守護騎士に言っているらしいが聞こえない

そもそもクロノが地面に叩きつけられた後に連絡がない

そういうしている内に、結界の一部分から白い光の柱が立つ

少したつと結界が破れて消えていった

自分達はただ画面を見ているだけだった

周りから声が拳がたっていく

「敵は何人なんだ」

「クロノ執務官が一撃で…」

「サーチャーに反応がなかったらしいぞ」

「そんなのがあと4人…いや、ひよつとしたらそれ以上いるのか」

休憩室からざわめきが起こる

そして恐れていた一言が放たれた

誰かはわからない、でも確かに聞こえた

「…俺、アースラから降りる」

「な、何言っただよお前！」

「こんなの、命がいくつあっても足りないじゃないか！」

仲間の1人がなだめるが聞く耳を持たない

「高収入だし、楽だっけ聞いたから入ったのにこんな所で死んでたまるか！」

静まり帰った

さっきまで勝利の喝采で満ちていたのに

「俺も…」

他の局員が言おうとした時に誰が入ってきた

「お前はどっするのだ？」

老けたおじさんだった

しかし覇気がある

誰だ？見覚えはある

その人がその局員の肩を掴む

「貴様らはなんだ？」

握られた箇所が痛いのか、ただ単に恐いのか
顔から汗が出ている

「まさか、子供1人倒されただけで貴様らは闘う意志を無くすのか？」

その局員を壁に叩きつける
老人と思えない力だ

「私はそんなようにこの管理局を作った事はない！子供が無茶して
頑張ってるのにそれを貴様らは無碍にする気か！」

「は、はい！申し訳ありませんでした！」

手を離す
すると局員がへたり込む

「謝るより先に行動しろ。私の気は短いぞ」

諭すように言っているが無駄だ

あの局員の目には恐怖しかなかった

他の局員も感化されたのか、休憩室を走って出て行く

「君が、高町かけるくんかね？」

その人が唾然として立っていた自分の元に来る

さつきとは別人みたいな顔をしている

満面の笑みだ

「はい」

「私はギル・グレアムだ。君はいい素質があるとリンディから聞いている。」

あ、確かフェイトの保護監察官の人だ

ちよつとずつこの人が誰か思い出してきた
すごい偉い人だった気がする

「ちよつと模擬戦をしないか？」

「へ？」

「いやいや。若い子の様子はたまには見ないとな」

「あの〜。フェイトとなのはの様子を見に行きたいんですが…」

「大丈夫だ。相手が守護騎士ならば殺しはしない。ちよつとした怪我のみだろ」

「えー…。一回だけですよ？」

そして訓練室まで引つ張られた

今はクロノに任せろだの

自分は訓練が仕事と言われたのだろうか

屁理屈とは思いつつもついて行かなくてはならなくなった

「さあ、私も全力を出そう」

杖型のデバイスを展開する

「少し老体には堪えるが、その分君も頑張ってくれよ」

「平和主義なんですけど…」

「なに、魔導師ランクが不明とあるなら戦って調べるしかないな」

口実はあるらしい

ならおもいつきり新武装で戦おう

「はい。お願いします。ブレストウィング、1から6展開。そのまま待機」

同時にフィッティングと初期設定を行います。この訓練でこの装備を自分の物にしてください

「わかった。無茶するからそつちも気をつけて」

了解。Fire at will.

さっきまで闘う気は無かったのに

新しい力はどこまで通用するか

それが楽しみで少し身震いしてしまった

第25話 海鳴市市街戦（後書き）

まさかのサブタイトルが市街戦なのに主人公参加しない罫

昔から思ってたんですよ

なんでなのはやフェイトやはやてはstrickersでワーカーホリックでとりあえず模擬戦なのか

恐らく上司がそうだったのだろう

そう思って書いてみました

グレアムさん…、闘えるのかな？

とりあえず次回をお楽しみに！

第26話 無限書庫の開放（前書き）

雨にはいい思い出がありません

中絶です

じいじ

第26話 無限書庫の開放

「ん？どないしたん？シグナム？」

シグナムのご飯を食べる箸が止まっている

「あ、いや。少し考え事をしていました」

シグナムはそう言っているがやっぱりちよくちよく止まっている

シヤマルもヴィータもなんだか暗い

「みんな、どないしたん？」

食べる事を止めてみんなを見る

主だからわかる。いつもは心から温かいのがわかるのに、今は冷め
きっている

「嘘はあかんよ？主やからわかる。みんな話してみ」

「…はやてはち」

ヴィータが俯きながら言う

「はやては、自分の足で…歩きたい？」

何を言うかこの子はみたいいな目でシグナムが見てる

そっか…、みんな私の事を心配してたんか

「私はな、足なんか治らんでええ。」

伝えなきや

「みんなと一緒に過ごす。それができたら他に望む物は何もあらへん」

「だから蒐集もしなくてええ」

みんなの顔が少し反応した

たしかに彼らは蒐集のために呼び出されたんだ

でも、そんなんいらぬ

「主の唯一の願いはみんなと仲良く過ごす事や」

それと、感謝を

「ありがとうな、みんな。私のここに来てくれて」

いい終わって少し静寂が訪れる

するとヴィータが急にご飯をかき込みだした

みんな呆気に取られる中で食べきってお椀をこちらへ突き出す

「はやて、おかわりちょうだい」

そうだ。みんな気持ちを出すのが不器用だった

そんな所がかわいらしい

「主はやて、こちらも頼む」

ザフィーラもお椀を出す

不器用だけど、それなりにする事はする

「み、みんなはやてちゃんばかりに仕事押し付けて！
シヤマルが慌ててお釜を取ってくる
そうしてドタバタしながら団欒が帰ってきた

「そっかあ……。私は幸せやなあ……」

こんなにも、愛されてる

「ん？みんなが暗かったから私はあんな夢を見たんか？」

不意に思い立った

「夢？」

「そっやあ。鳥が死ぬ夢や。なんだか無性に悲しくなってな、朝起きたら泣いてるんよ」

「はやても？」

ヴィータも聞き返す

「ヴィータもか。なんかあるんかな？これ」

「たぶん魔力リンクがあつてみんな誰かの夢を共有してるんじゃない？私じゃないとは思っけど」

「まあ夢の話さ」

シグナムがお茶を一口飲む

結局不思議な事もあるものだと思って笑って済ましてしまった

夢のことより笑顔が戻った事がはやての中で一番嬉しかった

「闇の書の確保に失敗。敵に奪われてしまった」

クロノが昨夜の反省をアースラに帰還した次の日にまとめる
仕事は早く助かる

前回アースラで開かれたメンバーは全員参加している
今回はグレアムさんも一緒だが

「第三者からの介入を想定していなかったのもまずかった」映像が
出る

仮面をつけていて表情はわからない
声からして男だ

「こちらのサーチャーに見つからず攻撃してきた。かなりの手練れ

だ。目標は闇の書の完成らしいが、よくわかっていない」

「あと私からも報告。あの子達の名前がわかったの。赤くて、私の相手をしたのがヴィータっていうらしいの」

なのはが言う。

確かに今はどんな情報でもほしい

「私の方はシグナム。恐らく使い魔かな？青いのはザフィーラ、あと1人はシャマルだと思う」

フェイトも言う

2人が2日戦ってくれたおかげで戦闘データも集まってきた

デバイス強化と各自の反省でだいぶ強くなってるから言うことは無しだと思う

「ああ、その守護騎士についてだが、

」

その後もクロノ中心で話が進んでいった
そして5分の小休憩を挟んで再開

しかし新しい作戦は出なかった

「やっぱり情報が少なすぎるよ」

エイミイが音を上げる

確かに予測の部分が多すぎる

「あの仮面の男もよくわからないしな」

「やっぱりお話をしなきゃいけないと思うの」

なのも言う

なのはいつもそうだったな

戦う前にまずはなぜ戦うのか話をする

今回もそうだった

ヴィータと戦った後にちょっとした話をしたらしい

でも結果は名前と目的がわかったくらいだった

向こうも止める気は無いらしい

「調査の必要があると思うわ」

リンディさんが立つ

「自分にやらせてください!」

誰か1人乗組員立ち上がる

「ありがとう、その意志でも受け取っとくわ」

「まあ、待てリンディ。本人がやりたいと言うのだ。気が済むまでやらしてやれ」

グラムさんが割って入る

あ。あの人は昨日休憩室にいた人か

「はあ……。くれぐれも怪我の内容に、ね」

「了解しました」

それだけ言うと立ち上がり行ってしまった。
もうここにいる意味は無い、という事かな？

「調べなくてわ、ならなくなったか……」

グレアムさんが椅子から立つ

「“無限書庫”の解放をする。だれか検索魔法が得意な者はおらんか？」

「僕もそれは考えていた。ちなみに心当たりもある」

クロノが指を指す

その先には

「えっ？」

「ユーノ・スクライア。君の得意分野だろ」

「貴様の人材収集力は素晴らしいな」

今はアースラのブリッジにリンディとグレアムの2人しかいない

「お褒めいただき、ありがとうございます」

「あのなのはとフェイトという少女。あれはじっくり育てたらSランクぐらい簡単に手に入れるだろう」

「あの子達が聞いたらきつと喜ぶでしょうね」

「しかも偶然、見つけたらしいな」

少し皮肉をかけていう

「ええ。ちょっとした悲しい事件のお釣りですよ」

しかしリンディはものともしない

「あの高町かけるとやらはなんだ？こちらの砲撃を右手1つで止めたぞ。しかもバリアを簡単に引き裂きおつて。終いにはデバイスを切り落としおつた」

カランと床に転がり落ちる二つになったデバイス

「通常なら自己修復が働くはずだが、もう動く気配がない。これを見て確信したよ。魔力無効化することができるな」

「惜しい。でも半分正解ですよ」

「使い手も使い手ならデバイスもデバイスだ。あんな過剰戦力を普通は持たせん。化け物とでも戦わせる気か？」

「あれはオプシオンですよ。最近ついたものですけど」

それを聞くとグレアムは顎髭をいじりながら少し考える

「あれはロストロギアと考えてもいいのか？」

「いいえ」

グレアムの言葉を聞いてすぐ反応したリンディはグレアムの目を見てはつきりと告げた

「マスターに一途なかわいいデバイスよ」

グレアムはくだらんと笑いながら言っつてその場を去っていった

「ここが無限書庫だ」

クロノはその扉を開ける

その中にユーノとグレアムの使い魔ロツテとアリアが入る

2人は猫に化けることができ、かわいらしい一面もある
今は現役最強のアタッカー兼教導官である

「本のいい匂い」

アリアが顔をほころばせる

中には天にも届きそうな高さの本棚
それが一列に並べられている

「この中には星の数ほど本がある。今ではデータで管理してるけど
昔の事ならこっちの方がくわしい」

クロノが補足の説明をする

ロツテは一番高いところまで行くと行って飛んでいってしまった

「一応いくつか検索魔法は持ってきたけど…かなり時間かかるよ？」

「弱音を吐く暇があるならちゃちゃとすましちやいなよ！」

ロツテが頭に5冊ちよつと、両手には数えきれないほど持ってきた

「そつだ。頑張れよ。」フェレットもどき」？

クロノが妙に意味深に言った

「ロツテ！落ち着いて！」

「ユーノはフェレットか？そつだよね？そつなんだよね？」

ああ。もう目が猫化してるこの人は本当にやばいんだ
そつ思つてため息をひとつついた

第26話 無限書庫の開放（後書き）

…戦闘また無しです

次回こそは！と

というかはやてがああのセリフを言うタイミングが違う気がする

そしてまさかの今回見直し無しです

ミスとか、文法の間違い、読みにくいというのが必ずあります
連絡ください

では、次回また会いましょう

第26・5話 閑話休題（前書き）

…まさかのオーディオコメンタリー企画勃発

書き始めが6/4、21時です

間に合わないかもで急ピッチで書きました

少しでも楽しんでもらえたらって思ってます

では、どうぞ〜

第26・5話 閑話休題

かける「とりあえず、夜になったが…」

なのは「はやてちゃん、誕生日おめでと〜」

はやて「ありがとうな〜。うわっ、花束まで？ありがと〜」

作者「とりあえず今回ははやての誕生日にあわせて、ちょっとした設定資料の公開という事にしました」

は「うわっ！誰これきしょ！帰れ帰れ〜（塩をかける）」

な「はやてちゃん…、作者にそんなことしたら出番減るよ？」

は「えっ！それはあかん！無かった事で」

か「作者泣いて帰っちゃったよ？」

は「まずい…。strickers編で出番減らされるかも…」

な「ただでさえ少ないのにね」

は「（ぐちゃっ）」

か「あ、はやてが動かなくなった」

作「さてそんなかけるくんですが」

か「はいはい。なんですか」

作「こんな感じですよ（紙を机の上に出す）」

高町 翔

使用デバイス
プレストウイング

年齢
なのはと同じ

身長
なのはより2cm上

顔
黒髪黒眼
日系の顔
おしとやかな感じ

魔力光
白銀

体つき
肩は出てなくがっちりしてない
柔らかい感じ

魔力
ミッド式

は「いたって普通？」

作「そうだと信じてます」

な「身長とかわからんって言われてたしね」

か「デバイスの説明は省くの？」

は「そやさや。それは気になってたし」

作「ちょっとまだまだ出してない能力があるので」

な「もったいぶらせたら後々プレッシャーが…」

作「気にしない気にしない。怖いけど」

な「質問もあつたり。なんで名前は漢字で翔つてあるのに、かけるつて平仮名表記がデフォルトなんですか？」

作「はい。答えます。なんかこの物語名前が3文字の人が結構いて漢字一文字は浮いてしまうと思ったからです」

は「まあ読みにくいつて言われたりするけどな」

「ちょっとトイレ休憩」

作「今夜は特別ゲストがいます」

な「誰？どこの子？」

は「私も気になるな」。フェイトちゃんかな？」

？「呼んだ？」

作「呼んだよ。おいで」

ブレストウイング「はる」。みんな元気？そしてかける久しぶり」

（かけるを後ろから抱きしめる）

か「へ？えっちょおまつ」

な「かけるくんが一発でノックアウト…。うわっ、顔真っ赤だよ」

は「えええ！あんた出てきても大丈夫なん？！」

ブ「うん。だってこれ時間軸ぐちゃぐちゃだし、次元とか狂ってもしかたないじゃん。はやてちゃんの誕生日なんだし」

は「なんか最後私のせいにされていらって来た…」

な「ブレストウイングさん」

ブ「なあに」（かけるの頬を引っ張る）

な「次、私で」

か「……………えっ？」

ブ「あらあらまあまあ。でも今は私の番よ」

は「…なあなあ作者」

作「ん？なんですか？」

は「キャラ崩壊って知ってるか？」

作「だからさっきブレストウイングが言ってたじゃないですか。時間軸が（ry」

は「もうええって！ほら、キャラ紹介やろや！」

作「まあこんなやつです（紙を出してみんなに見せる）」

ブレストウイング

身長

striker'sのなのはくらい

髪

長い。腰くらい

天真爛漫。お茶目な感じ

趣味

模様替え

服装

特に決まってるない

普段は動きやすい服

勝負服あるとか

魔法の使用

未定

は「趣味模様替えて…」

ブ「昨日の自分をすっかり忘れたいの」

な「それは…ちょっとね？」

か「いつもはどこに住んでるの？って聞かれました。どう答える？
ブレストウイング」

ブ「マスターの心の中について言っといってください」

は「病んでるんちゃうんか実は…」

か「他にも質問。胸はあるんですよね？って聞かれた」

な「お、女の人の魅力は胸じゃないんだよ！」

ブ「それこそどうなの作者さん？」

作「なんのために設定資料の公開か。言いますよ。胸は……………forceのはやてと同じくらい」

は「…あ、私？」

か「らしいよ」

は「というか私strickersとforceで大きさ違うっけ？」

作「気分です。なんか大人って感じがします」

な「作者さーん。私も質問！」

作「なんですかい？」

な「なんで身長とか基準ほとんど私なの？」

作「…いや、みんなにわかりやすいかなーって」

は「まさかなのはファンでちょっと鼻屑にしてるんじゃない？」

作「いやー…。さて、みなさん楽しかったでしょうか？」

な「あ、流した。聞かなかった事にした」

ブ「なのはちゃん。かけるくんいじりすぎて疲れたから私帰るね。」

は「かけるくん…。壮絶な戦いがあったんやな」

な「私の番は…」

ブ「まあ大人になってからにしなさい」

な「はい！」

か「…眠い」

は「まあ…、もう寝る時間か」

な「あ、まさかこれ間に合わないって事は…ないよね？」

は「作者…。今、夜の11時やけど大丈夫か？」

か「はやて…、誕生日おめでとう」

は「うん。ありがとうな。でもそれなんで今のタイミングで半分寝ぼけつつ言うかな。台無しやん」

作「では、これからも”魔法少女リリカルなのは”羽根を持つ者”応援よろしくお願いします」

な「ではみなさん、よい夜を」

は「おやすみなさい〜」

ブ「っっていう夢を見（ry」

作「いや…、現実だから」

第26・5話 閑話休題（後書き）

…はい、なんだこれ

フェイトファンのみなさんごめんなさい！

え？ユーノファンにも謝れ？

…すみません

という訳で設定資料でした

A・Sが一段落したらデバイスのこと書くかも

では、お疲れ様でした

次回をお楽しみにー！

第27話 砂上での戦い（前書き）

オーディオコメンタリー風味の26・5話は楽しんでいただけたでしょうか？

白湯です

今回あれが出ます

はい

では、ごうござい

第27話 砂上での戦い

「フェイトが戦いに行ったって本当？」

つい最近引越してきた知り合いがいるマンションにけるは飛び込んだ

「うん。今シグナムと交戦中。さっきなのはちゃんもヴィータの所に行ったよ」

エイミーさんがキーボードを叩きながら答える

「フェイトちゃん…大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。弾も10発くらいあるし」

「まあでも腕としてはあっちの方が上だと思うからなあ…どっちかに行く？」

「なのははヴィータの所に行ったのか？」

「うん。ヴィータと話がしたいんだって」

「なら邪魔したら悪いな。フェイト側に行くよ」

エイミーさんが頷く

「フェイトちゃんは1対1の対決…決闘っていうのかな？をするらしいから手は出して欲しく無いらしいけど、敵から増援が来たらど

うしようもない。なのはちゃんは遠距離砲撃型だから近接戦闘が主な敵なら有利に戦えるはずだよ」

なのはに心配は無さそうだ

あの仮面の男もどこまで介入してくるか

目標はなんなのかはつきりしてないのはやばいけどな

「なら、フェイトの所へ行ってきました」

とりあえず部屋を後にした

目的地は転移魔法で10分だとか

服だけセットアップしてアルフさんに送ってもらった

…アルフさんが子犬みたいになっててびっくりしたのは俺だけじゃないはず

「ヴィータ、聞こえるか？」

飛行中にシグナムからの念話が来た

「闇の書を一旦そつちに預ける。例の子と戦闘中だ」

「おっけー。…ってあれ？」

何か目の前に見覚えがある奴がいる

「やべえな。こっちにも出やがった」

高町な……には？

あれ？名前なんだっけ？

なにはじゃなくて……なかの？

「そいつからは一回蒐集してる。同じリンカーコアから二回蒐集はできない。離脱してくれ」

「まあ…、それはそうだな。なら闇の書を預ける。必要になったらまた連絡くれ」

手に闇の書が現れる

その場で止まってページを開く

666ページ集まればはやては完全な存在になり、最強の魔導師になる

あと103ページ

早く集めないと

「着いたー！」

戦闘があるんですから気を引き締めてください

気分はちょっとした遠足気分だったのをブレストウイングが咎める

あたり一面砂漠

雲一つない空

照りつける太陽

「暑い…」

さっきまで冬だったのに夏の環境に放り出された
汗すら出ない

エイミーさん。行き先は夏とか言ってくれたらいいのに…

「熱射病になる…。フェイトは大丈夫かな？」

とりあえずフェイトの魔力反応を頼りに飛んで行こう

陽炎で景色が歪んで見えるのは気のせいじゃないはずだ

あたりに遮蔽物は無いからすぐに目視できた

お互いに魔力弾はほとんど使わず切り込み続ける
持久戦かな？

いや、そろそろ決着がつぐんだ

そのタイミングをお互い狙ってるんだ

静かにその時を待つ

マスター！魔力反応追加でもう一つ！

「なんだって？！どこにいる！」

転送魔法を繰り返し使って距離も場所もわかりません！

「守護騎士じゃなくて、味方じゃないとしたら！」

仮面の男しない

「行き先は！」

！
おそらく今フェイトが戦っている場所！こっちにも来る可能性が

フェイトの方を見る

気づいていない

そりゃそうだ

気を抜いたら負けるのだから

「俺が迎え討つ！」

右手に刀

背中に盾が現れる

次回転送到着場所は…、フェイトがいる場所と同じ座標！

「…えっ？」

つまりは、フェイトの所へ一直線

そしてそれはフェイトの背後に現れた

あいつだ

間違いない

そしてフェイトの背後からリンカーコアを取り出した

いつか見たなのは光景によく似ていた

「お前！」

最高速でフェイトがいる戦場へ向かう

「…かける？」

フェイトの虚ろな声が自分の名前を呼んだ気がした

いや、確かに聞こえた

「フェイト！お前！フェイトから離れろ！」

刀を振りかざす

「待て」

そう言うか先か、バインドが一瞬でつけられて不恰好に不時着する

だがこんなバインド。引きちぎれる

ブレストウイングに吸収してもらいながら身体の自由を取り戻す

「今、この子を魔導師として生かすも殺すも俺次第だ。とりあえず下手な動きはするなよ」

そう言われて何もできなくなる
大人しく刀を待機させる

向こうにいるシグナムもなんだか険しい表情だ

「おい、烈火の将」

「貴様にはいろいろ聞きたい事がある。私達の仲間なのか？」

「俺達の目的は闇の書の完成だ。協力はするさ」

「あくまで味方ではないという事だな……」

「そんなことより、早く蒐集しろ」

「貴様…、まさか」

「早くしないといけない理由が、あるんだろ？」

「なぜ主の事を知っている!」

「知っているさ。あの子はもうそろそろ死ぬからな」

「…はやてに何する気だ」

話が読めてきた
はやてに異常が迫っている

だから守護騎士は闇の書を完成させようとしているのか

「管理局の犬の馬鹿なのに主を特定していたか。素晴らしい」

「貴様、いつから」

「つい最近知った。シグナム。後で話を聞かせろ」

シグナムがさつきから男を睨みつけている

しかしそれを気にせず男は語る

「ああ。その子のいう通りだ。闇の書はここにある。さあ、早くしろ」

俺はフェイトが蒐集されているのをただただ見守る事しかできなかった

蒐集が終わるとシグナムは本を仕舞ってカートリッジの数を数えていた

シグナムがひとつつため息をついた後に念話が来た

「その少年、あの仮面を剥がすぞ」

意味を理解した

ブレストウイングもそれに答えるように刀をもう一度展開してくれた

「私のカートリッジはもう少ない。だからこれを全て使ってトドメの一撃を放つ。それまでの時間稼ぎを頼む」

シグナムが念話を終えると同時に男が言った

「蒐集は終わった。さあ、もう連れ帰ってやれ。さすがに若いとはいえすぐ病院で見てもらえ」

仮面の男が腕をフェイトから抜いた瞬間、切りかかった

「なにっ!」

慌てて身を引く

「管理局員に手を出しといてただで帰れると思うなよ!」

それらしい理由をつけて攻撃する

早くこいつを倒してフェイトを連れて帰る

「餓鬼が、うるさいんだよ!」

上段の蹴り

空中にいる相手には確実にダメージを与えられる
しかしこっちには盾がある

それによりはじかれるがすぐに体制を立て直す

「こんな盾、砕いてやる!」

身体を宙に浮かべ殴りかかってきた
殴るというより重力の自由落下を追加した突撃に近い
だが、奥の手はある

「展開！1から6！アンロック！」

ブレストの吸収能力ではなく、自分だけの魔法
それを使うための鍵を言った

瞬間、敵が殴った盾が砕け散った

そしてそれは6つのパーツになってまた新たに空を舞った

「まさか！」

「遠距離操作可能な武器だ。ブレストウイングの第二形態。」

それら全てが刃物を光らせて敵に突っ込む

それをギリギリでかわす

「モード、ブラスタービット」

変更。盾から剣へ

「さあ、飛び回れ！」

しかし、なんだかんだ言っただけで結局はブレストウイングが操作している

これ動かすのは本当につらい
頭が痛くなる

パーツはだいたい同じ形で、真ん中にある銃にそって青竜刀のタイプの刀がとりつけられている

おもにこの刀で切り込むのが攻撃方法でも砲撃もできるから戦略の幅が広がった

今は確かに回避しきれているが、途中から入る俺からの攻撃によってパターンは崩れるから徐々にかするようになる

「こんなのは卑怯だ！」

「戦いに乱入して蒐集した奴が言うセリフじゃないな！」

もう、あと少しだ

だんだん雑になってきていて、空中に浮いてるからわかりにくいけど、足はもう動かせないほど傷ついている

「右に避ける」

念話が聞こえた

この声は…、シグナム！

そうだとわかるとすぐさま逸れる

「駆けよ！隼！」

シュトウムファルケン！

あれは…弓？

剣使ってなかったっけ？

だがそんな事をしている間に熱風が過ぎ去りすぐ後ろで爆発音がした
直後火球が生まれる

回避します！

ブレストウイングがとっさに地面まで飛んでくれたから助かったけど…

オーバーキルじゃない？

その火が収まるまで少し時間がかかった
さっきは出なかった汗が今更大量に出てきた

魔力反応ロスト。死体が無いため確実性は薄いですが、殲滅を
認

「…協力に、感謝する」

シグナムが自分の元に来て声をかけてくる
その手にあるのはやはり弓だ
そして肩にはフェイトがいた

「いや、そっちは大丈夫？」

「カートリッジを3発も使ってしまった。これ以上の戦闘は無理だ。
どうする？私を連れて帰るか？」

シグナムが両手を上に上げる

弓は待機状態になったのか、その場に無い

「フェイトは連れて帰るさ。シグナムまで連れ帰る余裕は無い」

ブラスタービットを回収して待機状態にする

「ただ、話が聞きたいな」

「…明後日の夜に病院へ来い。管理局ではなく、はやての友人として」

どこの病院かは言わず転送を使って去っていった

救援信号SOSを送りました。じきに管理局が来ます

「ありがとう、ブレストウイング。武器も仕舞っていいよ」

刀と地面に刺さったままのブラスタービットが消えた
改めてフェイトの顔を見る

フェイトの顔は本当にただただ寝ているだけに見える

なのに、どこことなく苦しそうだ

プレシアは自分にフェイトを頼むと言ったのに何もできなかった

今はただ、この小さな身体を抱きかかえるしかできなかった

第27話 砂上での戦い（後書き）

…まあいろいろと説明は割愛します

疑問があるなら質問（感想？）コーナーまで

そしたらまたまたオーディオコメンタリー開くかも

ブラスタービットの形はガンダム00の映画に出てきたダブルオークアンタについてあるやつが一番想像に近いかと

さてさて、次回ははやての病院へ訪問する話になりそうです
お楽しみに！

第28話 You got mail (前書き)

やばいやばい

ラノベ20冊まとめ買いしたら財政難に

どうも

金欠の白湯です

アリアがロツテがどっちがどっちかわかんなくなった事件

では、どござー！

第28話 You got mail

無理矢理転送したからか、変身はとけてしまった

どこともわからない場所だったが地面に横たわったままいるのをアリアが見つけくれた

自慢の髪も焼けて少し短くなったかも

アリアが早く助けに来てくれなかったら本当に死んでたかも

両足には力が入らなくて、右肩から手の先まで焼け爛れて感覚がない

あの守護騎士…馬鹿みたいな魔法使いやがって

次回会ったら…、次回ってあるのかな？

私、死ぬのだろうか？

死にたくない

でも目蓋が重い

もう、無理だ

ごめんね。アリア

ごめんなさい。マスター

願わくば

次に見る光景が闇の書が封印された

もう誰も悲しまない世界でありますように

アースラに戻ったらフェイトはすぐさま医務室へ運ばれた
俺は事情聴取のためブリーフィングルームへ連行された

「やはりあの男が現れたか…」

クロノ達にはシグナムとの約束以外の全てを話した
納得はしていないようだが

「私の所にも来たの。遠くからのバインドを決めてきたり、私のデ
イバインバスターを止めたし。魔術師としてのスキルとしてはかな
り高いと思う」

なのはの所にも来たが蒐集はしなかったらしい

ユーノが以前調べた物と合わせて考えたらここは1人の人間からは
一度しか蒐集できないと考えるべきだろう

「なのはちゃんの所からフェイトちゃんの所の移動までかなりの短
時間だしね。さっきのかけるの話だと転送魔法が考えられるけどそ
れでもやっぱり早すぎるよ」

エイミーさんは水を飲んで喉を潤す

乾燥は喉の敵らしい

「かける、ちよつと聞くが」

「なに？」

「お前1人でもあの仮面の男を倒せれたと思うか？」

「…たぶん。時間はかかるだろうけど」

「だろうな。かけるの話を聞いてるとそんな気がする」

「すごいね。かけるくんは」

なのはが感嘆の声をあげる

しかしすごいのはブレストウイングであって自分じゃない気がする

「とりあえずそれで疑問が浮かんだな」

「なにかあるの？」

クロノは何か思いついたらしい

とりあえず聞いてみる事にした

「守護騎士と仮面の男は仲間なのかもしれない」

みんな驚く

その発想は無かった

「この件で仲間ではない事を印象づけさせて、付け入る気かもしれない」

「でも、なんのために？」

「向こうから戦いを誘って、カートリッジを全て使ってまで技を使う。普通なら離脱用に一つや二つ持って置くべきだろう」

確かに

あそこで全力で戦う意味はない

この世の中2対1で勝てる人間などいやしない

「さらに、トドメを撃つたらしいが当たったのか定かじゃ無い。爆発に便乗して逃げたかもしれない。」

「それは…、そうだけど」

「だいたい魔力反応ロストって事は逃げられたという事だ。君は敵を」

「まあクロノ、少しは落ち着きなさい」

リンディさんが割って入る

でもクロノが次に言うセリフはわかる

自分は敵を倒して無いのだ

「しかし…」

「全ては推測に過ぎないわ。今は彼らを休ましてあげてもいいんじゃないの？」

そう言って自分の前に抹茶が出される
いつも通りたくさんのミルクとお砂糖が入った甘い飲み物だ

「疲れた時は甘いものよ。それを飲んで少し休みなさい。お疲れ様、今日は帰っていいわよ」

言われた通り飲む

甘いが抹茶のさっぱり感があって美味しい

「でも一応最後まで聞きます。それから地球に帰してください」

「わかったわ。じゃあ次、ユーノ君から闇の書について今わかった事を全て教えてもらおうかしら」

「はい」

机のディスプレイにユーノの顔が浮かぶ

ユーノは今無限書庫に缶詰めのため通信でやり取りしている

「ロストロギア、闇の書。本自体を破壊しても別世界に転生・再生し、何度でも蘇り、封印・破壊は不可能と言われている。」

「

「この量をそんな短時間で調べたのか」

クロノは半ばあきれている

闇の書の力のすごさもあるがユーノの情報収集のすごさ

「まあ、結局主が見つからない事にはどうもできないってことね」

「でも、これが正しく起動した事が無いのも確かだな」

「今回も…そうなるのかな？」

「世界の破壊をする闇の書。でも元は普通の魔導書なんだね」

「夜天の書…か」

夜天の名を彼らは覚えてるのだろうか？

プログラムの書き換えで忘れさせられてるのだろうか？

常にあの本は闇の書と呼んでいた気がする

明後日聞いてみよう

「…まあ今日は解散ね。クロノには後で話があるから艦長室へ」

「はい」

リンディさんが部屋を出る

それにつられてみんなも出て行く

「かけるくんはどつする？」

なのはがこつちに駆け寄ってくる

「一回フェイトの様子を見に行こう。もしかしたら意識が回復してるかもしれない」

「うん」

そうして、一回フェイトの様子を見に行った

結局家に帰ってきた

フェイトはまだまだ寝ていて起きる気配はなかった
なのは看病すると言って残った

夕方だから西日が差して部屋中オレンジ色に染まっている

冬休みだけど恭也さんと美由希さんは2人ともお出かけ中らしい

高町家は広いからか、この中に1人は少し孤独感があって寂しい

この沈黙を紛らわそうとテレビを付けた

しかしいざつけてみると元の静けさが名残惜しくなりたまにテレビを消したりしてみる

正直明後日が気になって上の空だったからテレビは半分聞き流していた。

天気予報では来週は雪と言っていた所で玄関の鍵が開く音がした

桃子さんが帰ってきたらしい

「あら？帰ってきたの？」

「はい、えっと…おかえりなさい？」

「ただいま。かけるくん。それはそうとなんで携帯電話を携帯しないの？携帯が泣いてるわよ？」

「あ」

携帯の事完全に忘れてた…

いつからだろ

はやての家に行った時しか記憶がない…
いや、確認ぐらいはしてたかな？

「はあ…、とりあえず常に持ち歩くこと。いい？」

「はい。ごめんなさい…」

それだけ言って台所に入っていた
夕飯の支度をするらしい

「うわっ…。マジかよ」

携帯のディスプレイには”新着メール34件”と書かれていた

モテモテですね。マスター

「確かに全部女子からだけど…って、え？」

フェイトから来てる

というかフェイト携帯持ってたっけ？

あ、携帯買ったっていう知らせか

アリサからは

『早く帰ってきなさい！寂しいわよ。すずかが』

…って命令口調か！

アリサらしくてほっとする

たぶんアリサも寂しいんだろうな

たまには顔出さないと

すずかからもあるし

はやてが入院したって話か

なるほど…。だから守護騎士は躍起になって…

あれ？

待ち合わせの病院ってここか

えっと…海鳴大学病院か

後で地図見ておこう

ざっと見て一息つく、たぶん残りが正念場だ

残りの全部、全体の約2/3ははやてからだった

あのメールアドレスをあげた日から毎日朝起きた時と寝る前に送ら

れている

『かけるくんはなかなか返信をしてくれないので日々の愚痴を送りたいと思います』

メールアドレスをあげた2日後にこのメールが来ていただからたくさん来ていたのか

『最近みんなの帰りが遅い。不安や』

… 守護騎士の事かな？

『昨日、とっておいた冷凍庫のアイスが無くなっていました。犯人はヴィータと思う。これは間違いない』

なんだか日記みたいだな
そう思っつて次々見ていく

『最近胸が痛い。成長期やるか？』

そんな性的な事書かれても

『みんな同じ夢を見ていた。なんだか繋がってる気がして嬉しかった』

夢って…なんだろうか？

寝るとき見る方？目標とかの方？
どっちだろ

『あかん。本当に胸が痛い。恋患いかも』

恋患いか…

好きな人でもできたのかな？

『昨日倒れたらしい。今海鳴大学病院で懐かしい光景を見えています。別状はないとか』

胸に麻痺が来たんじゃないのか？

下半身だけでなくとうとうそんな所まで蔓延していたのか

『今日すずかちゃんが見舞いに来てくれました。早くかけるくんも来てな』

…行くさ。必ず

約束は明後日だが明日行っても大丈夫じゃなかるうか？

『シヤマルが手作りのゼリーを作ってくれた。食べたら入院期間が伸びた』

シヤマルさんは毒でも盛ったのかな？

まあ守護騎士だからそりゃないか

『最近わかったけど、この胸の痛みは恋患いでもなく成長期でもなく、私の最後が近いサインらしい。ならちよつとでもいいから長くこの世界を見てみたいな』

闇の書を完成させたらはやてはどうなる？

生き残れるのか？

それとも破壊しかもたらさない暴走体になってこの世界を消すのか？

『シグナムが明後日の夜にお見舞いに来るらしい。最近顔見てない

から楽しみや』

これが最後のメールだった

返信を打って今日はもう休もう

そろそろ晩御飯だ

『明日朝一番に行く。楽しみにしといて』

「送信つと…」

それだけ入力して送った

積もる話は明日しよう

検索しました。 9時00分から入れます

ブレストウイングが病院が開く時間を調べてくれた
助かる

「ありがとう」

「かけるくーん！ご飯だよ！」

不意に声がかかる

「うん。今行く」

なのはが下から呼んでる

いつの間にか帰ってきてたのか

机の上に携帯を置いて、みんなが待つ一階へ降りた

第28話 You got mail (後書き)

一回やりたかったメール

たぶんチャンスがあるまで二度とやらない

タイトルが英語はちよつと異色すぎたかな？

さて、冒頭で猫さん死にかけてます
たぶん最後まで復活予定は無いかも

リーゼ姉妹ファンの方々ごめんなさい

独自解釈がだいぶ入ってる(汗)
まあそれも二次創作の醍醐味！ おい

次回は病院編

どうなるか、作者にもわからない
お楽しみにー！

第29話 海鳴大学病室にて（前書き）

難産すぎる

白湯です

更新遅れてごめんなさい

とりあえず

ごうごうー！

第29話 海鳴大学病室にて

「艦長、話とはなんですか？」

クロノは艦長室に入ってドアが閉まった事を確認して聞いた

「ここでは2人つきり、母さんでいいわ」

「はい、母さん。それでなんですか？」

「実はロツテの事なんだけどね…。昨日事故にあって今重体らしいのよ」

「ユーノからさっき聞きました。アリアが回復魔法をかけてるから今は1人で探してると」

「さて、かけるくんが仮面の男を撃墜したかもしれないっていうのも昨日ね」

「何か関連がある？」

「そうじゃなくて、薄々は気づいてたんでしょ？」

リンディが悟ったような表情になる

「調べて履歴を消してもサーバーには情報を引き出した形跡は残るのよ。あの仮面の男がリーゼ姉妹の変装魔法と考えてるんでしょ？」

「…はい。あんまり考えたくはないですが」

「あらかじめ同じ格好の人間が離れた場所において、それが違う時間で現れたらそれは長距離転送と思うわね」

「かなりの力の持ち主として牽制することもできるから…ですか？」

「今回負傷したのがフェイトさん側。つまりロットテなら反対側なのはさんにはアリアね。アリアならあの長距離バインドも納得だわ」

「でも…、信じたくない」

クロノが俯く

「あの2人がやってるなら…黒幕はそのマスター…」

「グレラムさんになるわね」

「違うと信じたい、でも正しいかもしれない」

「それを追求するのが、管理局よ？父さんの件もあるけど頑張ってるね。クロノ」

「はい」

その声に少しだけ覇気があった気がしたからリンディは少し安心した

「じゃあ私はフェイトさんの様子を見てくるから」

そう言ってリンディは部屋を出て行った

起きた

たぶん目が覚めた

身体は重いがなんとか起こせそうだ

「んっ…」

目を開けるとそこにはリンディさんがいた
ベッドにはアルフもいた
でも寝ちゃってる

一晩中起きてたんだろうな

「目が覚めたかしら。具合はどう？」

「少しぼーっとするけど、大丈夫です」

身体を起こして答える

するとリンディさんが額に手を当ててきた
体温を診るためだったのだらうけどとっさの事で身体がびくつと
震える

「あら？嫌だったかしら？」

リンディさんが手を引つ込める

普段から意識はしては無かったがリンディさんの所へ養子に行く話

たぶんそれを考えての行動だったのか

でも気には咎めなかった

ならそういう事なんだろう

「いえ、いきなりだからびっくりして…」

「気を悪くしたらごめんなさいね」

「あ、あの？」

「何かしら」

「かけるは…どこへ？」

私が倒れる直前に見たかける

それより看病に来てもいいんじゃないだろうか

私は毎日欠かさず行っただけかけるはそうじゃないのか

いけない

なんだか片思いなのがづらい

「あらあら」

意味深なあらあらだ

言われて

うー、とうなっでごまかそうとする

顔が紅いのを押さえるのに必死になってしまう

「一回こっちに来た後、地球に戻ったわ。明日の昼には帰ってくるわよ」

「はい。わかりました」

あ、一回来てくれたんだ

それを意識して心拍数が跳ね上がる

その後

脈が急に高まったので…

と言うことで起きて数分で医者が飛んできた

終始リンディさんが笑いをこらえてたように見えた

そしてそれでも起きないアルフ

本当に疲れてたんだろな

「それとあの話、考えてくれたかな？」

「いえ、…まだ」

空気が動かない

確かにこれはお互い言い出しにくい

「起きたばっかりだけど何か食べたい物あるかしら？持ってきてあげるわ」

察したのかリンディさんは立ち上がる

「なら…、いや。なんでもいいです」

わかったわと言ってリンディさんは外に出て行った

「アルフは…どうしたらいいと思う？」

頭をちよつとなでる

「すー…、すー…」

「寝ちやってるか…」

たぶんリンディさんが肉系の食べ物を持ってきたら起きるだろう
匂いで

それを想像すると笑いがこみ上げてきて仕方なかった

朝の鍛錬を済ませ、家を出る

病院まではそう遠くないから歩いて行く
街は来週のクリスマスのための装飾が施されていたのでそれが見た
かった

でも電飾は朝だから光っていない

恐らく夜はきれいになるだろう

病院とその周辺はまだまだ装飾は無かったのは少し残念だった

「すみません、八神はやての病室はどこですか？」

受付で場所を聞く

「あら？お友達かしら？」

「はい。そんなものです」

「…恋人？」

「へ？」

何を言ってるんだこの女医さんは

「はやてちゃんが言ってた男の子って君ね。はやてちゃんの場合は
書いといたから。はい」

そう言っって紙を渡された

紙には病室の部屋番号が書かれていた

「失礼しまーす」

音を立てないようにゆっくりドアを開ける

「はやてー、ってまだ寝てるのか」

「寝顔を覗く趣味があるとはな。私は選ぶ人間を間違えたかもしれない」

「え？シグナム？」

シグナムが部屋にいた

パイプ椅子に腰掛け腕を組んでいる

「約束は明日のはずだが…まあいい。何かの縁だ。話をするとう
う」

シグナムは違うパイプ椅子を出してきて向かいに置いた
そこに座る

はやてが起きるまでに話をすまそう
というか向こうは話したいんだろうな

「まず最初だ、はやては年を越せない。つまりあと13日程度で麻
痺が心の臓に至り死ぬ」

矢継ぎ早で喋るシグナム

今管理局が血眼になって探してる情報を片っ端から言った

「次に蒐集はあと89ページで終わる」

「今はヴィータ達が集めているがザフィーラは不参加だ」

「最初に貴様につけられた傷が響いたらしく、今は主はやての家の警備に当たっている」

そこで一息ついた

「正直つらい。取れる所から取り尽くしたからか、もう雀の涙しか集まらない」

「身体にもガタが来てる。十分には戦えない」

シグナムはまだまだ話したそうだがこっちからも聞かなきゃ

「こっちからも質問…いい？」

「構わん」

シグナムが喋らなくなったからか、部屋に静けさが戻る

「仮面の男とは仲間なの？」

「違う。そしてやつは私の騎士道を汚した。フェイトとは本気で戦いたかったからまた機会があればいいのだが」

横槍を入れられたのが嫌だったのだろう
悔しそうだ

「闇の書が完成したらどうなるか知ってる？」

「主はやては完全な存在となる。ようは最強の魔法使いだ」

破壊しかもたらさなくなっているのは知らないらしい
改竄はやはり守護騎士には及んでいない
ならアレを聞いとくべきだ

「最後に1つ」

「なんだ？」

「昔にあつた本なんだけど”夜天の魔導書”って知ってる？」

「…すまん。かなり前から、ベルカの乱戦の前よりも前からいたが
それは知らない。今度ザフィーラに聞いてみよう」

シグナム知らないと言った

忘れるはずが無い記憶をもっていない
つまりは何も知らず蒐集してる

真実を言うべきか…

ここに来て言う真実は残酷だ

偽善者になるつもりはない
だからこそ、止めれない

「…ありがとう。わかったら教えて」

シグナムはわかったと言つて部屋を出て行こうとした

「まだ蒐集するの？」

「…我々は常に主の命を行ってきた。しかし初めて自分で主のため
にできることがあるのだ」

「我々に心をくれたのは、主はやてだ。その人を助けるために騎士の心まで捨てた」

「もう、止まれんのだ」

それだけ言っただけで出て行った

涙が見えたのは気のせいでは無いはずだ

ベッドにいるはやて

何も知らない

主要人物なのに知らない

知らなくてもいいのかもしれない

この世界に魔法があつて空を飛べること

その魔法で戦うこと

闇の書は世界を滅ぼすということ

身の回りにたくさんの魔法使いがいること

「…いつから起きてた？」

鎌を掛けるつもりで聞いたが返事はない

寝てるのを幸いに起きてたら話せない事を言っておこう

「もし、この事件が終わったら全部話すよ」

「それでもし魔法使いの素質があるのなら一緒に管理局に入ってほしい」

「みんなも歓迎するから」

時計を見ると11時を回っていた

昼から作戦会議があるそろそろ戻ろう

写真でも撮って帰りますか？マスター？

「やめとく」

盗撮だろ

どうせ撮るなら寝顔より先に笑顔を撮りたい

第29話 海鳴大学病室にて（後書き）

ちよつとシリアスも無かった

今回は決戦前のお話みたいな
でもそれがあとちよつと続きます

嵐の前の静けさ

静かであればあるほど反動がデカいというわけでは無い気がする
では、お楽しみに！

第30話 クリスマスイヴ（前書き）

今回ちょっとだけシリアスかも
白湯です

大丈夫かな？

では、どうぞ！
半年ぐらい時間ズレてるけど

第30話 クリスマスイヴ

暗がりのはやて家のリビングでシグナムは守護騎士を全員集めて会議を開いた

「主はやては今病室だ。恐らく死ぬまで帰って来ないだろう」

「はやてちゃん…大丈夫ですかね？」

「我々がなんとかしないとダメだろ」

「これからも続けて蒐集するのか？」

ヴィータが聞く

その手には残り70ページの闇の書

「シャマルとザフィーラはここで待機だ」

「わかった。傷を治癒魔法で治さないのか？」

「それこそ主の負担になる」

ザフィーラの発言にピシャリと言い切るシグナム

「ここが正念場だ。少し遠出をする。シャマル。バックアップはまかせた」

「わかった」

「なら、言ってくる」

シグナムはバリアジャケットを着て出撃した
それに続いてみんなも配置についた

これから12日

何をしようがしまいが12日

大切に使わないと

12/24

世間ではクリスマスイヴと言われる日
夜は雪が降ると言われていた

「はい、皆さん。今年最後のホームルームを始めますよ」

そんな日に学校は終業式だった

午前中で終わるらしいから気は楽だ

「では将来の夢を書いた紙を返しますね」

出席番号順に取りに行く

そして自分の席に帰って見る

『鳥になりたい』

そう言えばそんなこと書いたね

それを後ろで見たのはは笑いをこらえていた
いいじゃないか、別に鳥になっただって

「次に来年の目標の紙を渡します。これは正月に書いてくださいね」

目標か…

特に決まっていなかったな

そうして先生からのありがたいお話を聞いて、冬休みの諸注意を聞いて長い長い2学期は終わった

…まあ学校にいた時間は短かったりするけど

そうこうしてる内になのはの机の周りにいつものメンバーが集まった

「これから行くよね？」

アリスが自信満々に聞いてくる

隣でなのはがはっとした後に合掌してきた

「えっと…、どこへ？」

「ふふん。とぼけるつもりね？ヒントは今日はクリスマスイヴよ」

「…ケーキの注文？」

空手チョップを喰らった
理不尽だ

すずかとなのはが話をしている
なのはが何か言ったあとすずかはなのはの頭をバカバカ言いながら
殴り始めた

「クリスマスパーティー？」

「それは明日。… あんた、まさか本当に知らないの？」

「アリサちゃん！」

なのはが割って入る

「かけるくんに言い忘れてたのを今思い出したの」

「あんたって子はあああ！」

アリサがなんか暴走し始めたからとりあえず羽交い締め
に
落ち着いたところでやり直し

「今日ははやてちゃんの所にクリスマスのプレゼントを渡しに行く
って話だよね」

すずかが提案したらしい
サプライズらしく向こうは知らないらしい

なのはは久しぶりに会えるとテンションは右肩上がり

俺は最近ちよくちよく会いに行ってたからそこまでは上がらなかつたけど

「フェイトも行くの？」

「うん。昨日夜中にメールが回ってきてね」

フェイトは学校にすぐ慣れた

というよりこの学校では転校生はもみくちや（内容はご想像にお任せします）にされるのがルールらしい

それですぐに学校のテンションに慣れたとか

「メール着てなかった気がする……」

開いて見ても昨日の夜ははやてのメール一通だけ

「私が伝える話だったんだけど……、睡魔に」

そこまでいうとハリセンがなのはの頭に飛んできたそれを握ってたのはアリサ

「どこから出したかは聞かないお約束らしいよ」

と、すずか

もう、好きにやっちゃってください
と内心諦めてた俺だった

しかしそこにメール1つ

「…管理局から？」

『アリアです。あなたのデバイスに関して伝える事項があります。今は学校と思われませんが今日中にアースラまで来てください』

なのはに黙ってそのメールを見せる

管理局から連絡が来たところにする事にしてる

念話、まだまだ使えないんです

「かける、大変だね」

フェイトがお疲れ様といった感じに見てくる

「ほんじゃ、あとはなのは任した。アリサ。ちょっと用事が出来たがらまた後で」

それだけ言って教室を出た

後ろでなんなのよーって叫び声したのはなんだっただんだろうか

待合室にいるとかでそこに向かう
すでにアリアさんは着いてるとか

「遅れました。アリアさん」

「アリアでいいわ。そこに座って」

言われた通り座る

「あなたのデバイスのプラスタービットには魔力無効化の付与はついてないのね」

「はい。あと無効化ではなくて、吸収です」

なんだかアリアがびっくりした顔で見てる

「え、じゃあ吸収した魔力は…」

「ブレストウイングの燃料です」

リストバンドを見せつける

「ふむふむ、なるほどね。だからバインドが一瞬効いたのは吸収までのタイムラグね」

「まあ、そんな所です」

「消せるのは魔力だけ？」

「はい。魔法で作られたものも魔力を抜き取って吸収する事ができます」

「なるほどね」

ふむふむといいながら自分の後ろに回り込んで来た

「なら、これは効くわね」

その手には、黒いスタンガン
黒い固まりを首に押しつけられ放電

「電撃は魔力じゃないしね」

椅子から転がり落ちる

「な、何を……」

朦朧する意識の中アリアの方を向く
そこにアリアはいなかった
いたのは、仮面の男

「今日、闇の書は完成する」

ブレストウイングが反応しない
まさかさっきのでやられたか？

「あなたはそのため」

今度は腹に押しつけられ放電される

「生け贄よ」

目蓋はもう、開けなかった

起きる

「暗い…」

どこかの倉庫の中なのか
何があっただんだっけ？

そうだ

アリアにスタンガン喰らって

それから…気絶かな？

記憶がないや

右手を持ち上げようとするが上がらない

左手も何か固定されている

しかしこれは

「磔か…」

生け贄らしい、まさしく十字架に磔になっていた

しばらくブレストウイングとコンタクトを求めてみたが無理だ
電話は鞆の中に入れたまんまで今はいじれない

そしたら足元に魔法陣

これは覚えがある

転送魔法だ

あたりが真っ白になる

次にあつたのは夜空

しかし雲が所々にある

その中に月は無い

「ふん。起きてたか」

仮面の男がこちらを見る

「しかし、まだ喋れそうにないな。ならば見ているといい」

右手にはナイフ

「私が望む、終わり方を」

ビルの屋上の真ん中に魔法陣

それを見て初めてここは空高いビルの上なんだと認識する

しかしそんな考えも中断され、思考がクリアになる

「…はやて?」

「え、かけるくん?なんでそんなところへおるん?十字架なんて似合わへんて」

はやてもいきなり転送されたのか?状況を理解してないらしい

「遊びはここまでだ」

仮面の男が割って入る

「後ろを見てから物を言え」

はやてが後ろをみる

「シグナムと…シヤマルの服？」

「ああ。要らないから消した。これで良かったろ。負担が減って」

「ど、どういふことや？」

「この狼も、悪あがきしてくれたが」

ザフィーラの腹を蹴り飛ばす

人形のように転がり、フェンスにガシャンと乾いた音を立てて止まる

「仕留めるのはたやすかったよ」

「ヴィータは、ヴィータはどうしとんや？あの子は」

「ああ、あのガキ。死んだよ」

胸が貫かれて血まみれのヴィータを首根っこを持って掲げてビルから落とす

「あ、ああ……」

はやてが悲痛の叫びをあげる
ビルの下は真っ暗でよく見えない

「次はお前の目の前だと思ってな。呼ばさせてもらっただよ」
ナイフを構え直す

「ただ、殺すだけじゃつまんないから痛ぶってから殺すよ」

「は、いや？ちょっと待て！」

「いい声で鳴いてくれよ？」

叫び声虚しく、右手にナイフが突き刺さる

「
」

子供の甲高い声が響く

はやては耳を塞ぎ下を向いている

この姿は確かにあんまり見られたもんじゃない

「渋といな。子供なら失禁ものだぞ？」

次は右腕の関節

嫌な音がして関節が悲鳴をあげる

痛いってもんじゃない

「
」

「なんだ、できるじゃないか」

それだけ言って滅多刺し
見えるが、痛覚は無い

喉が潰れたか、もう声が出ない
口を限界まで開いているが出ない

「もう、やめて…」

はやてが泣き声で言う

「なんで、そんなひどいことするん？」

「止めたければ力づくで、どうぞ？」

ナイフを逆手に持ち替えて胸を差した
痛みが無いからか、実感が無い

「あっ…、あっあ…」

はやては下を見ている

しかし次にはベルカ式魔法陣が出て、一冊の本”闇の書”が現れた
そして何事か本がつぶやいて

魔法陣が濃い紫に染まる

「うっ、う、うあああああ！」

響く

はやての叫び声

はやての目は、青から赤になっていた

いつの間にか手の紐は切られてて違うビルに跳び移りをしていた
違う、仮面の男が運んでるんだ

退避させてくれてる？

着いた時に自分がいたビルの屋上を見る

空に向かって伸びる黒い光の柱

その中には

「…誰？」

「闇の書の意志だ」

仮面を取ったアリアが答える

「主とユニゾンして、魔力が使える最適な身体になる」

ユニゾンって何よ

合体？

「つまり…あれははやて？」

「そうだ」

なんだか、長い長い話しになりそうだ

以下、悲しみに満ちた闇の書の呟き

「また、全てが終わってしまった」

「一体幾たびこの戦いを繰り返せばいい？」

「我は闇の書。我が力の全ては主の願いをそのままに」

第30話 クリスマスイヴ（後書き）

はい。ちょっと字数的に辛くなったからカットした部分1つ

たぶん途中なんの脈絡無く出てくる
かもしれない

書いてて辛かったりする
なんとすごい事に元の自分が書いたシナリオからあんまりぶれてい
ない気がする

シナリオの時点でユーノ無い件について
あ、無限書庫にいるからいいのかな？

では、次回戦闘あるかも
ブレストウイングいつになったら動くの？
ではお楽しみに！

第31話 永遠の無い夢（前書き）

夏至が過ぎ去りました

白湯です

暑いときこそ熱い飲み物

白湯を飲んでみてはいかがですか？

では、どうぞ！

第31話 永遠の無い夢

闇の書は暴走を開始した

今ははやての身体を借りて現存している

なのはとフェイトもいるが、バインドを解いてる最中だった

「ちょっとやり過ぎちゃった」

アリアが苦笑いして俺の右腕を見る

刺し傷みたいなのは初めて

本当に意識が飛びそうになった

「ごめんね」

変身はとけていつものアリアに戻っている

「というか、まだ喋れないね。あんだけ叫んだんだから」

そう言ってアリアは少し苦笑いをする

「闇の書が動くまでまだ時間はある。だからこれだけはさせて」

足元に魔法陣が現れる身体の傷が有るときに光が集まっていく

回復魔法…？

なんだか冷たい
でも逆に頭に登った血が引いていく感じがある

ユーノとは違う回復だな

「たぶんもう喋れるよ。私回復魔法は身体の細胞活性化を助けるタイプの魔法だからね。喉はすぐよくなるよ」

「んっ…、がほっ！げほ！」

言われた通り喋ろうとしたが血を吐いた
床が赤く染まる

「あー。肺に血が集まってたかな？でももう吐いたからあらかた喋れるでしょ？」

「…はい。」

「良かった。次は腕だよ。と言っても外傷しか無くて筋肉とか骨に異常はほとんどないけど」

「え？なんで？」

あんなに刺していたのに
というか有り得ないほど痛かったのに

「痛いのはちよつとした薬で神経を敏感にしたんだ」

「え、それだけ？」

なんだか最近、魔法に依存していたからわからなかった
この身体は薬や電撃は効く身体なんだ

「あとこれ。このナイフ見てごらん」

そのナイフを左手にもつ

「…？、軽い？」

「うん。おもちゃだもん」

地面に差すと刃先が引っ込んで中から赤い液体がでる

「スタンガンを地球に行つて買いに行つた時にロツテがふざけて買つたの」

ロツテ…

確かりーゼ姉妹のもう1人の方が

「まあ傷つくように刃先だけは本物だけどね」

「そこは、抜かりないんですね」

ちよつとギャグを言つて場を和ませようと思つたらアリアが暗くなつてしまったのでなんとか言い訳してその場をしのごく

「あなたがロツテを倒しちゃった時はどうしようかと思つた」

「いつ？」

まずロツテさんにあんまり会ってない気がする

「フェイトちゃんの所に仮面の男が現れて戦いになった時があったでしょ？あれ、ロツテの変身なんだよ」

「そうだったんですか」

最強の前線タッグが相手ならさすがのクロノもお手上げだし、仲間だからサーチャーに引つかからない訳だ

しかし子供がビルの屋上に横たわり、その横で回復魔法を泣きそうな顔でかけてる構図は絵にならない

「ロツテの意志も一緒にと思ってたのがこの作戦だった。魔法が効かないなら物理的攻撃しかない。案の定、電撃は効いたし、薬も効いた」

「らしいですね。さっき知りました」

この人はやっぱりすごい
弱点をすぐさま見つけてきた

あとはアリアがポツポツ喋るのみ

さっきの屋上ではやてちゃんの周りにあつた守護騎士達はアリアが作った人形で、今彼らは闇の書の中にいること

ロツテは今グレラムさんが頼んだ病院へ連れて言ったこと

クロノの父さんの事

管理局に来るまでのなれそめ

実は体重がアリアの方がロツテより軽いとか

…最後のいらなくない？

「さすが子供。回復早いね」

「まあブレストウイングも手助けしてくれたらしいし」

「え？どういうこと？」

「魔力吸収モードをオフにしていたみたいです。だから喋らないですよ？」

そう言っつて右手のリストバンドを見せる

「…ごめんね。許してとは言わない。私が悪いんだから」

回復魔法は終了して、右手は自由に動かせる

曲げ伸ばししたが何も問題はなかった

「でしょ？クロノ？」

気づいたら後ろにクロノがいた

「悲しみの連鎖は私の悲しみで終わらせる。そう思ったんだ。でもダメみたい。封印のための魔力が残ってないや。傷つけ過ぎちゃった」

アリアが泣き泣き言う

「今、グラム提督と話をしてきた。君達はここで手を退いてほしい」

クロノは静かにデバイス”S2U”を突きつけて言う

「…ただ、わかって欲しかった。クロノの父さんの事もあるし、あの本は無くすべきだって」

一枚のカードを取り出す
あれは、デバイス？

「こうなることがお父様にはわかってたのかもね？使用者権限はクロノ。あなたにもあるんだよ」

「氷結の杖デュランダル。あなたはこれを使って好きにするといい。自分がしたいように。頼んだよクロノ」

「ああ」

クロノがそのカードを受け取る

アリアの涙がその上には乗ってたがそれを拭い取り展開して杖にする

「リーゼアリア。君を保護する」

クロノはアリアをアースラに送っていった

次はこっちの番だ

「起きて。プレストウイング」

はい。少し時間がかかりましたが大丈夫です

バリアジャケットと武装が同時に展開される

刀はプレストウイングが考えてか、いつもより軽く感じる

闇の書は戦いを始めいた
なのはとフェイトが戦っているがその差は歴然だ

広域殲滅型のようです。1対多数を得意とします。勝てますか？

「みんながいるんだ。大丈夫さ」

それでこそマスターです

「行くぞ！」

了解！

そう意気込んで空を飛んだ

頬にあたる夜風は乾いていて冷たかった

しかし離れて見てるだけでもヤバイ

デイバインバスターの強化版を身じろぎせず止めた

さらにそこからのカウンター攻撃

バインドも一切効かない

「何が効くの？」

マスターみたいに物理攻撃に弱いのでは？魔力吸収があるのでこ
つちに被害はないですし

「なるほど。なら急襲だな。不意打ちは一回しかできないから」

…なんだかフェイトのハーケン殴ってやりあってるのは見なかった
事にしようかな

「咎人達に、滅びの光を」

闇の書が右手を上げる

その先にはピンク色のミッド式魔法陣

まさかミッド式とベルカ式両方使えるとは

「…って、魔力収束？」

「星よ、集え。全てを撃ち抜く光となれ」

闇の書の背丈を軽く越えてさらに大きくなる魔力の塊

「スターライト、ブレイカー？」

なのは信じられないような目で見てそう言った。
なのは自身があればスターライトブレイカーというならそうなんだから

「貫け、閃光」

いつ弾けてもおかしくなくらい固まっている

「攻撃より先にあれを潰すのが先じゃない？」

同感です。フェイト、なのはの一時戦線離脱を確認。今の内に

「おっけー！」

足にブースターをつけて急加速する

あの距離なら3秒もかからないだろう

「スターライト」

闇の書が発射させようと構えた

まだ、間に合う

「そいつは待ったあー！」

魔力塊の真上から刀を差し込んだ
もちろん吸収は全力全開で

「なにを?!」

闇の書はいきなり降ってきたのに驚いたのかたじろぐ

しかしなかなか小さくならない
そこまで圧縮してるんか、これ…

「なら、追加でこれで！」

盾を逆の左手に持って押しつける

表面積が増えれば吸収も早くなるだろうという考え

「くっ、ブレイカー！」

闇の書は撃った

先に少しでもダメージを与えるために撃った方がいいと考えたのだ
ろう

しかし吸収が幸をそうしたのか

放たれたのはディバインバスター程度の威力だった

「なぜ、邪魔をする」

ごもつともです

「あんなものに当たったら普通は死にます。フェイトが身を持って
経験してるんで」

すると闇の書はくだらんと言った風に俯く。
どんな目をしているのか見えない

「我が主はこの世界が、自分が愛する物達を奪った世界が悪い夢で

あつてほしいと願った。我はただそれを叶えるのみ」

「間違つたことをしてゐるって自覚はないんだな」

スターライトブレイカーを吸収仕切つて無くなつた事を確認して闇の書の前に立つ

「我は魔導書。ただの道具だ」

「お前がどうなるうとは関係無い。はやてを返せ。」

脅すために刀を向け、ブラスタービットを展開していつでも攻撃できるようにする

「主には穏やかな夢の中で永久とわの眠りを」

そう言つて闇の書は宙にういてる本をこちらに向けてくる

「お前も、もう眠れ。」

本から一条の光が伸びる

まっすぐ自分の元に延びてくる

「えっ？あ、あれ？」

それを浴びるたびに次第に、身体が薄くなつてきて存在が無くなつていく

まずい、消える

消される

わかっているのに抵抗できない

やばい

こんな状況なのに、眠い

「全ては安らかな眠りの内に」

そうして静かにどこへともなく祈る闇の書が一人だけ夜空に残った

周りが暗い

灯りが見あたらなからかな

「でも、見たことあるな…」

これは…

ブレストウイングが居た場所と一緒だ

ということはあれか

深層意識

心の中か

いろいろ考えていると不意に目の前に人がいた

現れたのではなく始めからそこにいたみたいなきこでここにいるのが正しいみたいなきこ

「…夢は無いのか？」

透き通った声
頭が痺れそうになる

「夢？」

「私は夢を叶えるためにいるのだ。だが、あなたの心の中に何も無い。あるのはそれこそ闇だけだ」

彼女は俺に夢が無いと言った

白く長い髪

赤い目

白い肌

黒のインナー

その全てが俺の存在を認めようとはしなかった

だけと言ったところ。

「俺に夢はない。この日常で十分だ。でも強いて言うなら夢がある人達の手助けをしたい」

「そうか、子供なのに…。すでに全てを考える事を諦めたか」

「違う。お前の夢が、俺の夢だ」

「な、何を」

「よく言った！私のマスター！」

戸惑う闇の書は無視して上からブレストウイングが振って来た
そして俺と闇の書の間割って入った

「ここはお前のいる世界と同じ類だからな。いつ来るか待ってたよ」

「ありがとうございます、マスター。そしてお久しぶり、夜天の書
よ」

ブレストウイングは握手をしようと右手を差し出す

「夜天の書は闇の書の中で生きてたのか…」

でもなんだかブレストウイングと知り合いみたいだ

「…まさか、あなたは！」比翼の使い手”の、」

夜天の書は何か悪い物を見たような顔をして一歩後ずさる

「その名前は棄てたわ。昔にね。今はブレストウイングと呼んで頂
戴」

しかし追い討ちをかけるように左手に刀をセットアップして夜天の
書の鼻の前に突きつける

「…わかった。大変だったんだな」

「お互い様よ」

刀をしまい2人握手する

「あ〜。置いてかないでくれ」

「ああ。マスターもして欲しいですか？むぎゅ〜」

そう言って抱きついてきた

ちよつと、胸が胸が

「あなたは変わって無いんですね」

夜天の書が諦めたように言った

昔からこんな性格だったのかよブレストウイング

「あら？これでも自重してるわよ？」

それからそつと俺から手を離す

「あなたは…大丈夫？」

急にブレストウイングが心配そうに夜天の書を見る

「ばれましたか。あなたには隠し事は何もできませんね」

諦めたように一冊の本を出す

「これが私の全て。言わばこの本に書いてあるものが私です」

そう言ってはやての家にあった本と同じ物を差し出す

違うのはページ数

もう5ページしかない

「あとは暴走プログラム”闇の書”に持って行かれました。あなたと出会った記憶があるのはそれを守ってたんですね。無意識の中で」

「それこそ夢よ」

ブレストウイングがこっちを向く

「ねえ、マスター。さっきの言葉は本当？」

夢の話か

「ああ。ブレストウイングの夢も俺の夢だ」

「なら…、お願い。私はやりたい事があるの。今決めた」

「闇の書のプログラムの破壊。この子に全てを返してあげる」

「私の、ために？」

夜天の書はブレストウイングを見たまま目をそらさない

「もっと話をしたい。たくさん。だから…力を貸して、マスター」

それが俺のデバイスが求めた夢だった

第31話 永遠の無い夢（後書き）

独自解釈多すぎかも

次回こそ独自解釈のオンパレードですが

何度闇の書をリインフォースと入力して書き直したことが

フェイトも闇の書に吸収されるのか?!

その他色々

次回をお楽しみに!

第32話 夢の終わり（前書き）

皆さんの夢はなんですか？

べんも口濁です

…ちゅっちゅりすきだっ？

んは、んはー！

第32話 夢の終わり

なのはは展開の速さに正直あんまりついていけてなかった

フェイトが横から正しい情報を言ってくれているが、考えられない。

スターライトブレイカーを闇の書が撃とうとしたから回避距離をた
くさん取った

しかしかけるが吸収して放たれたのはカートリッジ無しのデイバイ
ンバスター以下の威力の砲撃

これを機に反撃に回ろうとしたら民間人を発見。それは同級生の月
村すずかとアリサ・バニングスだった

魔法を使っていることがバレた
秘密にしていたのに

かけるが帰ってこないから連絡したら通じない

アースラにて安否の確認は取れた。しかし闇の書が吸収したと告げる

どれでもいい。ひとつくらいは嘘であってほしい

「ひとつ覚えの砲撃。加速からの斬撃。貴様らの戦う手段はそれだ
けか？」

闇の書が言う

確かに全て効かなかった
戦略が、浮かばない

マスター。手段はあります

「あるの？レイジングハート？」

エクセリオンモードです

「駄目だよ！そんなの使っちゃったらレイジングハート壊れちゃうよ！」

なのはは自分のデバイスを握りしめる
赤い宝石が点滅を繰り返す

使える手段は全て使いましょう。だからお願いします

壊れるのは自分なのにそれを気にも止めないレイジングハート

「…わかった。レイジングハート、エクセリオンモード！ドライブ！」

Ignition!

レイジングハートは見る見る形を変えて、槍のような形に変わる

フェイトも何か覚悟を決めたのか、バルディッシュを持ち直す

「バルディツシュ。ザンバーフォーム、いける？」

はい、サー。ザンバーフォーム

「いい子だ」

バルディツシュのカートリッジが2つロードされる

『バルディツシュは斧であり、槍であり、全てを断ち切る閃光の刃でもあります』

不意に頭の中に、昔リニスがバルディツシュを私に渡すときに言ってくれた言葉が蘇った

「わかってるよ。ザンバーフォームは私のためにリニスがくれた切り札なんだよね」

その手にはさつきまでであった杖ではなく、大きな魔力刃でできた両手剣があった

展開完了

「ありがとう、バルディツシュ。行くよ！なのは！」

「うん！フェイトちゃん！」

二人並んで闇の書の目の前に対峙する
場所は海上に移した

「お前も、もう眠れ。」

闇の書は諦めるとなのは達に言っているようなものだった

「いつかは眠るよ。でもそれは今じゃない。今ははやてちゃんとかけるくんを助ける。それと、あなたも！」

「過去の出来事はやり直せない。でも今なら変えられる未来がある。そのための魔法だ！」

ザンバーフォームになったバルディッシュを振り上げてそれを闇の書に向けて切りかかる

それが開戦の合図だった

夜天の書が先導して案内する

「ここだ」

そう言っただけで暗闇の中に手を突っ込む
それを右へ持っていく

カーテンみたいになっていて、確かに触ると布みたいな感じがある

「ふーん。ページを跨いで移動するんだ。さすが本の中」

ブレストウイングは興味津々であたりを見回している

「あなたはこの中に入ったのは初めてだったか？」

「いや。あなた誰も中に入れなかったじゃない。私には入ったっていうのに」

「あ、あれはあなたの空間が一番広かったからみんな遊びに！」

「あなたは2番目に大きかったのねー。ケチだったもんね」

「あの一、すみません」

ちよつと無理矢理割って入る

「はやて、いました」

何枚か超えた先に車椅子があつた

そこにははやてが座っている

というか寝ている

そのはやての前には…

「…人？」

夜天の書が立っていた
もう1人いたのかな？

「とぉー！」

それを迷うことなくプレストウイングが飛び蹴りした

なんだか身体が横にくの字に曲がって飛んでいくそっくりさん
あれは痛い

夜天の書は頭を押さえてる

「あの一…あれは？」

恐る恐る夜天の書に聞いてみる

「暴走プログラム。つまり壊れた方のもう一人の私だ」

「あれ？二人いても大丈夫なの？」

意志が2つあれば喧嘩するんじゃないかならうか

「詳しく言うと私は夜天の書であり、あれは闇の書。バックアップ
データとしていた夜天の書を取っていたけど闇の書が押し込んでで
れないようにしてただけだ」

「なるほど」

あんまり理解してないが

つまりあつちが悪者でこつちが正しいのか

「さあマスター。邪魔ものは抑えました。次に行きましょう！」

そう言うてはやてを揺さぶる

首がガクガク揺れてなんだか逆にいたいたい

「…ん？なんやこ。暗いなあ」

その甲斐あつかはやての目が覚めた

「おはよう！今の夜天の書の主さん」

ブレストウイングがいつものテンションではやてに手を振っている

「えっと…あなたは？」

はやての質問も最もである

目が覚めたら知らない人がいたから

「私の事はブレストウイングと呼んでください。あ、マスターの奴隷です」

なんか聞き慣れない単語が聞こえた

訂正しておこう

「デバイスな？誤解招くから止めような」

「かけるくんまでおるんか。なんか幸せな夢を見とんやな。それとその後ろは？」

「夜天の書の管制人格。自己紹介しといたら」

「夜天の書だ。我が主はやて」

夜天の書がそう言った

「うん。私はいつの間にか奴隷持ちになっとなったんか」

そこから誤解をとくのに時間がかかった

まず魔法の説明からしないといけないなんて…

「まあええわ。何したらええん？魔物でも倒しに行くんか？烏助けに行くんか？」

はやては無理矢理納得してそう言った

まあいきなり理解は無理だな

「なんの話だ」

はやての頬を指でつつく

あうつと声を漏らした後に抵抗せずされるがままになる

「いやな。夢の中って毎回戦いばかりやん」

はやてが俺の指を押さえてから言う

「ふーん。それが闇の書の意志ね」

ブレストウイングが手を顎に添えて頷く

夜天の書にはなんの事やらよくわかってないっばい

「どづいう事？」

「いくら願いを叶える本と言ったってそれが全てが全て世界の崩壊から生まれる事じゃない」

「たとえば王になりたいと言ったら主より上の實力を持つ人を抹殺しなくてはならない。反感を生む人も全員死ぬ必要がある。これなら願いの内容が世界の崩壊でもできるわね。だってこれが一番手っ取り早いし」

ブレストウイングは淡々と説明していく

「もし人生の1/3を占めてる夢の中が戦いばかりなら願い事はそっちに偏り易いって事よ」

寝ている間の夢は盲点だった
願い事の刷り込みをしたわけか

「…私のせいなんか？私がそう願ったから！」

「そうよ」

ブレストウイングは軽く答える
息をのんだはやてに向けて続けて話す

「はやてちゃんの願いを叶えるのがこの本の役目。今はそれを止めるの」

「止めれるのか？」

ブレストウイングに聞いたがその隣にいた夜天の書が答える

「闇の書は暴走してる。暴走を止めたらプログラムは終了するはずだ」

かけるへ向けての言葉だが、目ははやての方を見ていた

「方法はあるんだな？ブレストウイング」

「新しくプログラムを作る。それが確実よ」

ブレストウイングが提案する

「わかった。そうしよう」

夜天の書もそれに賛同した

方法はそれしか無いのだろう

「はやて」

かけるがはやての名前を呼ぶとびくつと身体を震わす

今回の事件は全部自分のせいだと考えてその責任を感じてるのだろう

「…なにかな？かけるくん」

「はやては何がしたい？」

「へ？」

「これからする事にははやての力が必要だ」

管理者ははやてだ
その力で新しいプログラムを作る

「はやては来る？」

「…そんなん、選べるはずないやん」

若干涙声になっている
ブレストウイングと夜天の書は黙ったままだ

「私がやらなきゃみんな死んでまう。そんなんは嫌や！」

「みんなを傷つけたんわ私や。みんなを助ける力を持つてんのも私
や」

「…俺は、はやてを許す」

「…っ！」

「間違いを犯すのは誰にでもあるさ。だから残りはどれだけみんな
を守るかだ」

「こんな、こんな私でもええんか？みんなを助ける事を望んでもえ
えんか？」

泣きながらこつちを見る

「はやての夢は何？一緒にそれを叶えたい」

「わ、私は。みんなを守りたい！」

「なら、早く行こうぜ」

車椅子に座ってるはやてに向かって手を伸ばす

握手するつもりだったのにはやてはその腕を引っばって無理矢理立ち上がり、こっちに抱きついてきた

まだまだお互い子供

急な体重移動に耐えられずかけるが下になる感じで転けて寝そべる

「ひっく…、ぐずっ、ありがとうな。ありがとうな」

はやてはしばらく泣きながら謝り続けた

泣き止むまでと思いつつ、頭を撫でてあげた

「んで、何したらええん？」

はやてはしばらくして泣きやむと、ちよこんと床(?)に座り込む

「まずはここを現実であって夢だと自覚して」

ブレストウイングがさらっと言っ

「え、夢やないの？」

「うん。魔法が使われた現実だよ。試しに頬引っ張ってごらん。痛いよ？」

「はやてが自分の頬を引っ張るもち肌？」

「なのはより弾力ありそうだな」

「…確かに痛い。あとかけるくんガン見しすぎや。恥ずかしいやん」

「な…！いいいや！ちよつと待て！そして夜天の書はそんな目で見ないでくれー！」

「さて、マスターはなんだか壊れかけてるのでスルーしましょう。じゃあプログラム作りを始めましょう」

「ブレストウイングが夜天の書を見るそれにつられてはやてとかけるも見る」

「…？みんなどうかしたか？」

「はやくあなたの本を出しなさい！」

「ブレストウイングがチョップする」

「あ、痛そう」

「頭を押さえつつはやてに残り5ページになった本を渡す」

「これに何したらええん？」

「白紙にして、新しくプログラムを書くの。はい、鉛筆。」

鉛筆なんかで大丈夫なのか…？

「えつと…。名前と、おろ？プログラムの内容は？」

「機能は元の夜天の書と一緒にいいのなら、私が書いておこう」

夜天の書が言う

まあ本人に任しといたら大丈夫だろう

「…名前？」

気になったからプレストウイングに聞いてみた夜天の書じゃだめな
んだろうか？

「違うプログラムとして上書き保存するからね。そこは重要でしょ。
といっても管制人格の名前だけだね」

「わ、私は、私自身の名前をいただけるのですか?!主はやてから
!」

なんだか夜天の書はすごい嬉しそうだ

「私はトンヌラとか黒飴とかオススメよ？」

なんだかプレストウイングが黒い

というかネーミングセンス0なのかも

はやては唸っていたが、即決したらしく夜天の書を見る

そして夜天の書のミニスカートを引つ張る

「な、なにしてるんですか？主はやて？」

「は！マスターは見ちゃだめー！」

なんかブレストウイングに目隠しされた

「マスターは見ちゃだめ！下着とか太ももとか胸とか太ももとか！」

「なんか太もも二回言った！」

大慌てのブレストウイングを後目にはやてが気まずそうに声を出す

「いや、あの…。座ってほしくて」

なんだかみんな『ああ、なるほど』みたいな空気になってブレストウイングが目隠しを外して夜天の書ははやての前にはやてと同じように膝を崩して座る

「ちょっと待つといてな。すー、はー。」

はやては深呼吸をして夜天の書を見る

「夜天の主の名において汝に新たな名を送る。強く支える者。幸福の追い風。祝福のエール。」

一呼吸置いて、その名を告げた

「リインフォース」

辺りが一気に静まり返る

「夜天の書”リインフォース”は頬を染めたまま動かない

ブレストウイングはいい名前だと泣いていた

トンヌラとか黒飴とか出してたのは気にしないべきなのか

「新名称”リインフォース”認識」

しばらくして口を開いたのはリインフォースだった

「さあ、後は上書きと同時にこの場を出るわよ」

ブレストウイングはこっちを見る

「さあ、マスター。早くここから出ましょう」

「…えっと、どうやって?」

リインフォースとはやてはなんだか抱き合ったまま動かない

「魔力砲で壁に穴を開けるんです。練習はしてましたよね? 砲撃魔法の」

そう言ういつもの武器の刀とブラスタービットが出る

「あれ、やるの?」

「はい。ち、びんぎびんぎ。」

ブレストウイングが闇の先に手を向ける
たぶんあそこに撃てばいいのか

「なのはちゃん以上の高い威力でやっちゃって！」

なんだか諦めた

というか始めからこのつもりだったのだろう
そもそもはやてが大半の問題はクリアしてるし

「はあ……。いきます！」

刀を狙うべき先へ突きつける

「頑張つてかけるくん！」

はやてが声援を送る

これに答えなきゃなと思いき気持ちを引き締める

「6つの刃よ。神が作りし束縛の縄の贅となれ」

ブラスタースピット同士が魔力の糸で結ばれていき、輪になる
それを自分の目の前に持つてくる
その輪の中心に向けて6つの銃口が向けられる

「6つの砲火よ。六花を作りだせ！」

全ての銃口から魔力砲撃を放つ
自分の魔力光が銀色なので砲撃も銀色になり、すごく眩しい
それが輪の中心でぶつかり合う
目的は、魔力収束。

「グレイプニル、クラスター！」

輪の中心でできた塊が小さくなる。

それを見計らって刀を持っていない左手で殴りつける

音も無くまっすぐに伸びる光の筋

しかし空気を削り取りバリバリという音もする

手応えは無かったが、一瞬にして辺り一面に罅が入る

そこからは体力の光が漏れて、砕け散った時に眩しすぎて目を閉じてしまった

視力の回復には少し、時間がかかりそうだった

そんな中、ありがとくと聞こえたのは気のせいじゃないと思う

第32話 夢の終わり（後書き）

終わらなかつたー！

タイトルで終わるみたいなこと書いてて終わらなかつたー！

うん。わかつてる

2つにわければ終わったのに

あ、主人公が必殺技使いました

ブラスタースピットには魔力があらかじめ充填してあるんです

それを使った砲撃魔法

魔法吸収を持つてるかけるに توسطして体外発動の魔法なら使えるので

す 結論

グレイプニル

” Gleipnir ”

意味は「貪り喰うもの」

後は Wikipedia で

え？次回予告？

その前に！

strickers 編をみなさんは見たいですか？

ちよつとしたアンケート企画です

答えてくれると嬉しいです

「見たくないです」とか「見たいです」の簡単な解答でも構いません
よろしく願いします

期間は7/1までとします

さてようやく次回予告

今回は…秘密で

お楽しみに！

第33話 聖夜の贈り物 上(前書き)

7月になりました

七夕が楽しみな白湯っす

アンケート結果はあとがきにて

今回はなんか果てしなく長くなったので上下編になっています

まずは上から

では、さようなら

第33話 聖夜の贈り物 上

アースラの待機室にクロノとアリアが入る

「アリア…」

グレアムが娘を見る目でアリアを見る

「すまんかった。私のためにここまでしてくれて」

「ごめんなさい…。闇の書の凍結封印できませんでした」

「もういいんだよ」

グレアムがアリアの言葉を遮る

そして手をアリアの頭に乗せ、労いの言葉をかける

「ここまで頑張ってくれたのだ。ありがとう」

それを聞いたアリアはごめんなさいと顔を隠して泣き始めた

「後は、クロノ達が決める番だ。デュランダルは持っているんだろ
う?」

「はい」

クロノは今は待機モードで、カード状になったデバイス”デュラン

ダル”を見せる

「私が管理局の力を使い、作り上げた氷雪系最強の杖だ。今回の事件もあるがこれからも役にたつだろう」

「さて、クロノは現場に戻りなさい。後は私に任しといて」

リンディが入ってくる

今の彼女は艦長のため逆らえない

「わかりました」

そう短く言ってクロノは部屋を出て行った

「さて、後は若い者に任して」

リンディは後ろから抹茶を取り出す

「少しお茶でも飲みましょう。後は世界を殺すも救うもあの子達しだい。未来はまさしく彼等の手のひらの上にあるわ」

「そうだな。私はかなり重い物を託したかもしれんな…」

「元から私達は子供の手助けをするためにいるんです。あれくらいは普通ですよ」

リンディがさらっと言ってグレアムの目が丸くなる

「私も老いたな」

そう言つてグレアムはリンディ印の抹茶を飲んで咽せた
さすがに飲めないらしい
それを見たアリアが大笑いしていた

この空間にはほのぼのした空気が戻り始めていた

目を開けると、そこにはいつか見た雲がかかった空が見えた

「…かけるくん？」

後ろからなのはの声が聞こえた

後ろを振り向くとなのはが飛んできていた

さらにはやても隣にいた

「えっと…、ただいま？」

「うん、おかえり！はやてちゃんも！」

はやてを見ると服がさっきまでの寝間着姿から白色主体のバリアシ
ジャケットに変わっていた

帽子を被っていてその手には杖、そして本が握られていた

「おおきにな。というかこれは夢なん現実なん？」

はやてがこっちを向いて聞く

「最初から現実だ。夢だった時はひとつも無い」

なのはには何を言っているかわからないらしく首を傾げていた

「かける帰って来たんだ」

フェイトも自分を見つけたのかこっちに来た

しかし、目が怖い

「…帰って来ない方が良かった？」

何か悪いことしたっけ？

いや。まあはやてが主だって事は隠してて言ってなかったけどさ

「心配したんだよ！」

「死んじゃったのかと思っただから！」

なのはとフェイトに言い寄られながら辺りを確認する

「いきなりスターライトブレイカー吸収のために特攻したり、刀でぐさぐさ刺されたり、終業式の後いなくなるし、アースラに鞆だけ置いてどっか行くし…」

海の上にいるのか

…空飛べなかつたら水没かよ

寒いじゃん

「ちょっと！聞いているの？かけるくん！」

なのはが首根っこ掴んでガクガク肩を揺らす
ちよっ、止めて、意識飛ぶ

そんなかけるを、はやては小さく笑って見ていた

「ん？…あれは？」

視界に入っではいけないものが入った気がする

海上にドーム状にある黒い物体

禍々しさが半端じゃない

「あ。あれはね…、」

なのはが一回手を離して説明する

フェイトは言い足りなかったみたいだが少し黙り込む

話を纏めるとこんな感じ

最初はフェイトのザンバーフォームで攻撃

そこからなのはのエクセリオンモードでバリアを貫く攻撃

それらを繰り返しても目立ったダメージは無かった

しかし急に闇の書が止まった

そばにあった本が一回閉じて1ページ目から開き直していく

そして最後のページになった時本から白銀の光が出て闇の書が苦しむ

そして闇の書は狂ったようにページをむしり取り、海上に落とした

するとそこからあれが作られた

「余った本が光り続けて球体ができて、それが砕けたら2人がいたんだよ」

フェイトが言う

「2人？」

そうだ。リインフォースはどこ言った

プレストウイングは毎回デバイスの中に引っ込んでるけど

「かけるとはやてだよ」

やはりリインフォースの名前は無い

リインフォースって名前知らないからまあ闇の書とかいうかもだけど

「はやて、リインフォースはどこに？」

「ん？リインフォースはここにおるよ」

「リインフォース？」

なのはとフェイトは首を傾げる

「夜天の書の管制人格の名前。はやてが名前つけたんだよ」

「へっ、いい名前だね」

フェイトが誉めるとはやてはそれほどでもと照れていた

「…でも、いないよ？あ！この本がリインフォース？」

なのはが本を指差す

「ちがうて。それは”夜天の魔導書”や」

「じゃあ、杖？」

フェイトは剣十字の杖を指差して聞く

「それは”シュトロベクロイツ”。リインフォースやないんよ。だから言うてるやん。ここにおるて」

はやては杖を持っていない左手で胸をを押さえる

「心の中？」

「うーん。半分正解。というかその言い方だったらリインフォースはお星様になつたみたいない方やん。というかかけるくんならわかつとるんやない？ブレストウイングとそついう関係じゃないの？」

そうか。ブレストウイングもお星様になつたのか
つて、それは無いか

「…デバイスと魔導師の関係を超える事つてあるの？」

フェイトがびっくりしたように聞く

よせよ。その言い方なら恋人みたいじゃないか

「いや。リインフォースは融合騎なんよ。ブレストウイングは違うん？」

「いや。違うと思う。というか融合騎？」

初めて聞いた単語だ

フェイトは驚いて見ている

「聞いてはいたけど初めてみたよ。あ、だから髪が白いんだね」

さっきまで暗がりがよくわからなかったが確かに茶髪が白くなっていた

目の澄んだ青は…元からだったけな？

そして羽

羽が、ある

黒く小さい6枚の羽

「改めてみたら、はやてじゃないな」

「そうや。私は八神はやてであり、リインフォースや！」

杖を掲げる

一瞬、シュトロベクロイツが光った気がした

「まだまだあるんよ！管理者権限発動！」

「な、何するつもりなの?!はやてちゃん！」

「守護騎士プログラム発動！おいで、私の騎士達！」

「シグナム達を再召還する気か！無茶だ！いきなり！」

リンカーコアについでた呪縛がようやく解けたんだ

いきなり守護騎士召還はリスクが高すぎる

魔力を吸い尽くして死ぬかもしれない

はやてはわかってくれたのか動きを止めで杖を下ろす

しかし、なのは名残惜しそうにしている

まあヴィータとはいろんな意味でお話したかっただろうしな

「はやて？どうしたの？」

フェイトがはやての異変に気づいた

はやては信じられないものを見ているかのように夜天の書のページをめくっている

それこそ殺気だっている

そして途中で開く手を止める

そこではっとしてページを何度も見返す

「どうした、はやて？」

「嘘や……」

「だから、何があったんだ。はやて？」

するとページから目を離してこっちを見る
その目は驚愕に染まっていた

「守護騎士プログラムが、無いんよ」

黒い空から1人降りてくる
あれは、クロノか

「突然だがすまない。時間が無いから簡潔に説明する。闇の書の防衛プログラムが暴走を開始する。それを何らかの方法で止めなければならぬ」

「クロノ…、空気読めよ」

「な?!君は帰ってきていきなり何を！」
正しい事を言ったはず

まあ守護騎士プログラムについて思い返してみよう
リインフォースがプログラムを作ったはず
そのリインフォースがそんな大切なプログラムを付け忘れるはずがない

「フェイト、とりあえず君だけでもいい。何か方法を考えてくれ。このままじゃ」

「大丈夫。作戦を考えるのがクロノの仕事だから。はやて、関係無いかもしれないけどあれは？闇の書が破ったページ。あれに守護騎士プログラムがあつたんじゃ」

「それだと私も思うの。」

フェイトとなのははクロノをスルーして話を進めていく

「クロノ。今までの会話記録を聞き直せ。たぶんそしたら謝りたくなる。」

「大丈夫。かけるに言われる前に始めている。…ふむ、融合騎があつたのか」

クロノに助言したが無駄だったようだ
さて、どうやってプログラムを取り替えすか

「つまり、防衛プログラムを破壊したら守護騎士プログラムも破壊しちゃうってこと？」

なのはがはやてに聞く

「そうなるみたいや。防衛プログラムの一部に組み込まれてるからもう守護騎士プログラムは防衛プログラムみたいなんよ…」

「すまなかつた！」

「クロノくん。うるさいの。新しく守護騎士プログラム作れないの？」

なんだかみんなクロノを邪険に扱うな…
でもなのは提案は一利ある

「作れるけど…、シグナムやヴィータにはならへんのよ。私はあの子達がええんや。」

「方法は、無い。すまないがあきらめてくれ」

ユーノが急に現れた画面に映る
後ろには本が見える

まだ、無限書庫で調べてくれていたのか

「そもそも、防衛プログラムの破壊さえ怪しい。無理かもしれない。防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層式。それを破らないと攻撃は一切通らない。破るにはいずれにしても高火力が必要だ」

「…方法は2つある」

クロノがこつちを見て言う

「1つ。極めて強力な氷結魔法で行動を停止させる。2つ。軌道上で待機している艦船アースラの魔導砲”アルカンシエル”で消滅させる。どちらにしても守護騎士プログラムの回収は難しい。でもどちらかを行わないと、世界は崩壊する」

「アルカンシエルってそんなすごいのか？」
なのはが聞く

確かにバリアがあるのにそれを無視して消滅させるなんて

「今現在、最強の反応消滅魔導砲。周囲も被害が出てしまうのが難点だよ。海鳴市はもちろん、この国が消し飛ぶかもしれない」

ユーノがその問いに答える

というよりそれを聞いた瞬間みんな却下した

「凍結も無理みたいや。主ごと凍結なら確かに活動は止まるけどあれ単体は無理や」

ボソツとはやてが「私ごと凍結したら終わる。いや、いつそのこと事件の中心の私達が凍結されたら」と言った瞬間みんな却下した

…手が無い

「火力が足りないのが、問題か」

さらにみんな闇の書と闘っていたから魔力消費が尋常じゃない
大出力は一回くらいしか撃てない

「いや。守護騎士プログラムも回収したいな…なんて」

はやてはそう言うが、恐らく無理だろう
問題がありすぎる

「みんな！暴走開始まで15分切ったよ！どうするの?!」

選ばなければならぬ

どちらか、1つを

「ねえ。マスター。エイミーが言った”みんな”の中に私は入っているのかなあ？」

声が聞こえて顔をあげるとブレストウイングがいた

周りが真っ白な所をみると心の中か

…心の中？

「ブレストウイング。もしかしてお前、融合騎だったりする？」

「しますよ？」

「…あら？」

たしか初めて会った時にはデバイスだと言ったはずだ

「意志がありますよ。私には。そこらへんの屑なデバイスみたいに言われたまま従うだけでなく、自分のために自分で動きますよ」

自分の周りを歩きながら言う

「リインフォースもそうですよ。彼女は夜天の書の管制人格。私もそんなものです」

「おかしいと思いませんでした？稀な能力を持っている時から
最初、から？」

「まああの艦長は気づいてたみたいですけど、黙っていたのはそういう事でしょう。まだ正体を出すなと」

リンデイさんは気づいていた？

「私が頼んだ武器。あの第2形態は私が考えた武装です」

ブラスタービットか

∴ 盾から分離する事で発揮する力

「だいたい、あなたは今ユニゾンしてる。だから魔法が使えない。魔法を使うそばから私に吸収される。魔力吸収は私の力なんですよ」

ブレストウイングの手のひらから光り輝くものが現れる

「あなたのリンカーコアから魔力を吸収する。だからユニゾンしてられるし魔力吸収の能力があなたにも使える」

「ユニゾン解除したら、魔法が使えるようになるのか？」

「はい。でも魔力吸収は消えます。でもユニゾン解除をするかしな
いかは決めるのは私です。だから、させません」

「今もこれからも、魔力吸収の力だけ貸します。それだけであなたの目標を貫き通してください。私は見たいんです」

それは、ユニゾンは死ぬまで解除しないとということ
しかし強大な力はすでに握っていると言うこと

「あるのか？防衛プログラムを破壊してなおかつ守護騎士プログラムを回収する方法」

「あります。だから考えてください。みんなが救われる方法を」

いつか見た黒い棺が現れる

「鍵は、あなたの手にある」

それだけ言われて気づいたら元の世界に戻っていた

第33話 聖夜の贈り物 上（後書き）

…全く物語が動いてません
でも重要なキーワードはちらほらと

はやての即興ネーミングセンスはすごいと思う

ブレストウイングは融合騎だった事件
わかってた人はわかっていたみたいだけど

さてさて、この状況を打開する作戦とは？
すごい突拍子もないからみんな啞然となるにかも。でもこれくらい
しかないかも

アンケート結果
s t r i k e r s、やります

では次回後編お楽しみに！

第34話 聖夜の贈り物 下(前書き)

最近土日出勤で休日がいささか減った気がする
白湯です

1日あけての下です

楽しんでいただけたら幸いです
では、どうぞぞ！

第34話 聖夜の贈り物 下

あれからみんなが黙ったままになった

みんなも選びたくない決断をしようとしているからか、躊躇っている

「あと10分！大丈夫？みんな！」

エイミイさんが急かす

「やっぱり、私が犠牲に……」

「ダメだよ！はやてちゃんを犠牲になんてできないよ！」

「じゃあ、この街を消すんか！なのはちゃんは私にそうさせたいんか！」

「違うよ！でも、でも！」

はやての提案をなのはが引き下ろしたが言い返せない
だんだんみんなの絆が崩れていく感じがある
そりゃそうだ。他に方法が無いから
でも、大丈夫だ

「3つ目の方法がある」

みんながこっちを見る

確かに他の提案は嬉しい

「あれを別のデバイスのプログラムに組み込む」

持っている刀を黒いドーム状の防衛プログラムに向ける

「同じデバイスならできるはずだ」

はやてはそれを聞いて少し考える表情になった
リインフォースにいく負担を考えてるのだろう

最悪、また振り出しに戻るかもしれないのに

「でも、夜天の魔導書は、リインフォースはもう！」

やはりもう限界だったか

「だったら違うデバイス内で処理する。いけるか？プレストウイン
グ」

当たり前です。私を誰だと思ってるんですか？

「無茶だ！あのロストロギアの闇の書でさえ持て余したプログラム
を！」

クロノが真っ先に反応する

そつえば闇の書はロストロギア扱いだっただ

でもその原因はあの防衛プログラム

だから闇の書は普通のデバイスのはずだ

「できるん？かけるくん？」

はやてが聞いてくる
心配そうだ

防衛プログラムの恐ろしさは一番知っているリインフォースとユニゾンしてるから思考回路が被るのだろう

「リインフォースに聞いてみて。たぶんできるっていうよ？」

はやてに聞き直してみる

「リインフォースは…、『変わってないな…』って。へ、どういう事？」

頭を抱え唸ってるリインフォースが目に見えなくなる

「そのデバイスって、いつからあるの？」

フェイトもあ然

ちよっと一回このデバイス調べる必要がある気がする

「まあ夜天の書と同時期らしい。そこらへんどうなの？プレストウイング」

ノーコメントで

「なんとなくか…。とりあえずじやんの？」

エイミィさんが聞いてくる

シュミレートして成功確率を調べるらしい

「まずはバリアの順に高出力魔法をぶつける。まずははやてが攻撃。次にフェイト。残った魔力を収束してなのはのスターライトブレイカー。これで残るは物理バリア。これは俺が突撃して割る」

みんな静かに聞く

「突撃なんかで割れるかどうかわかんないけど…まあクロノが助けてくれるだろ」

期待の目をこめて見てみる

しかしクロノはこっちを見ていない

「僕は今回サポートに回る予定だったから、まあできる限りはするさ」

「んで、バリア破壊した後はどうするん？」

「まあ…、そのブレストウイングで吸収？」

「なんで自信なさげなのかな…」

なのはよ

そんながっかりしなくても

「まあ、かけるくんの物理攻撃手段の強化があればなんとか実現可能かな？後は運だのみだし」

エイミィさんがキーを叩きながら言う

まあ、問題はそこなんだよね

「私みたいに大型の魔力刃にしたら？」

フェイトがザンバーフォームのバルディッシュを掲げる
魔力のできてる分伸縮自在だ

「いや、俺魔力刃使えないし」

「簡単だよ？まず型を決めてその形に魔力を固めていくだけだけど」

フェイトが教えてくれた通りにする

…できない

作ったそばからプレストウイングが吸収していく

というより形出来てるの？これ

魔力あるけど魔法使えない人間ってそうそっいないよね…

「あ、それはどうなん？」

はやてがブラスタースタービットを指差す

「ちょっと残った魔力量見てみる。えっと…、だいたい全部残り60%くらい」

魔力砲撃したら30%近く持っていていかれたのか…

「魔力あるんならこれで魔力刃作ればええんやないの？」

「その手があつたか！」

ブラスタースピットの第2の形って刃だったのか！

「残り60%全部使って作ったらかなりの大きさと威力になるだろうし」

フェイトも補足をつける

「じゃあそれで決定だね！」

なのはも決まって大喜びしている
決まったのはバリア破壊の方法ではなく作戦の方だろう

「エイミーさん。いいですか？」

画面越しに聞く

「計算上は可能だよ。成功確率も72%と高いし。あ、でも作戦総指揮はクロノくんだからそっちに聞いてみて！」

「やってみるに越したことはない。でも10分だ。暴走開始から10分たって防衛プログラムが残っている場合アルカンシエルをそこへ撃つ。これでもいいならやる」

クロノはこの作戦を実行するらしい

アルカンシエルが撃たれたらこの町は…
いや。考えるのは止めよう

「10分以内に終わらせればいいんだな」

「ああ。1秒だって待ってやらないからな」

クロノのギャグセンスはたまに世界を滅ぼす気がする
いや、リアルな意味で

「暴走開始まであと3分切ったよ！みんな！準備して！」

はい！、と魔法少女3人組が元気よく声をあげる

「あ」

忘れてた

「どうしたのかけるくん？」

なのはが聞いてくる

いや、結構重要なんだが

「魔力刃のやつ技名考えてない……」

みんな自分の妄言を無視して持ち場へついた
しかしはやてがこっそり耳打ちする

「……ってのはどうや？」

「はやてのネーミングセンスはすごいな。すぐにこんな思いつく
なんて」

「ありがとな。じゃ、頑張るか！」

2人でパチンと音がでるほど強くハイタッチして持ち場についた

「始まる」

時間が来ると、クロノが小さくつげる

それと同時にモニターにあった10分のカウントダウンが動きだした

「夜天の書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の闇」

続いてはやてがそう言うのと黒い球体が弾けて、中から化け物と呼べる最たるものが現れた

蒐集したリンカーコアを全部ひっくるめてあの姿なんだろうか

「まずははやてちゃん！お願い！」

「了解！」

なのはの声にしっかりあわせるはやて

本のページが自動で開き、ひとつのページで止まる

なのははもうこの時からカートリッジをロードしてスターライトブレイカーのチャージに入った

「最初から全力でいくで！響け！終焉の笛、ラグナロク！」

はやての前にベルカ式魔法陣が出て3ヶ所で魔力収束が始まる

「ブレイカー！」

はやてのそのかけ声と同時に発射される砲撃

防衛プログラムは動く気配が無い

起動したてのタイムラグか？

ほどなくしてミシミシとバリアの割れる音が聞こえ、砕け散った

まず1枚

まだ1枚

「次！フェイトちゃん！」

「わかった！行くよ、バルディッシュ！」

Get set!

カートリッジが2発ロードされる

「はあ！」

ザンバーを振り回し、風を作り上げぶつける

かまいたちってやつだっけ？

それを受けた訳のわからない触手達は無残にも切り裂かれていく

「撃ち抜け！雷神！」

Jet Zamber

儀式魔法によって力を高めたザンバーフォーム
それを振り下ろす

上手く貫通してほしい

だが、願い叶わず

最初の物理バリアは一瞬で砕けたが魔法バリアで行き詰まる

フェイトは魔力刃を解除

刀身が消える

その魔力は全て最初からチャージしていたのはの元へ行く

「次！なのは！」

「わかったよ！フェイトちゃん！」

Starlight Breaker

10分の時間は短い

みんな間髪入れずに攻撃を回していく

クロノも何かぶつぶつと詠唱を開始している

そのたびに周りにいる触手が氷ついていく

こっちも魔力刃だけは作っておこう

作る形は、剣

下手するとなのは体外収束に巻き込まれるからブラスタースタービットを並べるだけだけど

「全力全開！スタースターライト」

なんだか、あの魔力球。なのはの身長の5倍は軽くある気がするあれほどまでに収束をしたのか

「ブレイカー！」

魔力球が一瞬、点ほど小さくなりそこから砲撃が放たれる轟音を上げながら放たれるスタースターライトブレイカー

…レイジングハート、壊れないの？

なのはの砲撃が撃たれた時から魔力刃を作り上げていく

「癒せぬ傷を与える魔の十字剣よ。報復を開始せよ」

6つのブラスタースタービットのうち4つが直線に並び、頭から数えて3番目の所へ、垂直に1つずつ左右対象になるようにつける

その形はまさしく十字架

先の方へ重点的に魔力刃を作る

「行って！かけるくん！」

「了解！」

その刃を防衛プログラムへ向ける

「切り裂け！アンサラー、フラガラツハ！」

A n s w e r e F r e a g a r u h a c h

大きさはフェイトのザンバーとまでは行かないが、その分速さで力
バーする

その姿は剣よりは、一本の矢に似ている

勢いだけじゃ、割れないだからちよつとした細工をする

常に刃先の一部に微震動を発生させる

これなら切れないものでも切れる

魔力の最後の一滴まで使い切ってもいいから、届いてくれ！

飛ばした刃の後ろからついていく

不安だった火力不足は補えたらしく、バリアに触れてすぐしたら切り裂いた

バリアが消える

そして防衛プログラムに突き刺さる

しかしバリアがしがらみだったのか、防衛プログラムは羽を生やして空を飛ばうとする

「まずいー」

逃げられる！

そんな事ができるだなんて考えてなかった

「悠久なる凍土にて、永遠の眠りを与えよ」

クロノの詠唱で我に帰る

防衛プログラム見ると足元が海と一緒に氷結して飛べなくなってる

「凍てつけ！」

E t e r n a l c o f f i n

その氷は防衛プログラムの全身まで達して、完全に動きを封じた

「サポートが僕の役目だ。君は君のことをするんだ！」

「了解！」

ブラスタースピットは役目を終えたからか、刃から元の盾に戻っている
それを空中で拾い上げて右手でしっかり握り、前面に掲げて飛び込む

その盾が氷を砕き、防衛プログラムに触れた

「後は任せた！ブレストウイング！」

了解！

残り時間、残り4分53秒

「すごい…。」

はやてが呟く

アースラのチームも見ていた
その光景を

闇の書の闇
その闇が消えていく様を

化け物の翼が消えて、口が消える
このあたりから異変が生じた

羽がかけるの翼に現れた
白く光る羽

「まさか、防衛プログラムに逆に乗っ取られてるじゃー！」
クロノが言って止めさせようとする
しかしそれを無言ではやてが止める

「無理だ！作戦は失敗した！かけるを退避させてアルカンシエルを
撃つー！」

クロノは焦る

しかしそんなクロノを見ずにはやてが答える

「見るんだ」

クロノは驚いた

はやての声じゃ、無い？

「やはり彼女はユニゾンを捨ててなかったんだ」

なのはとフェイトもはやての場所に集まる

「えっと、リインフォースさん？」

「ああ。やっとその名で呼んでくれるのだな」

なのはの発言にリインフォースは笑ったらしくはやての表情に笑みが浮かぶ

「あれは、なんですか？」

みるみるうちに大きくなる2枚の白銀の翼

それが防衛プログラムを覆っていく

「ユニゾンには二つの方法がある」

リインフォースがやはり他のメンバーを見ずに言う

みんなはなんでこのタイミングでそれを言うかわからなかった

「え、主と融合騎がユニゾンするだけじゃないの」

「ああ。そうだ。テストロッサ。しかし本人主体か融合騎主体かで変わる」

「まさか、かけるは！」

「ああ、常にユニゾンしている。本人主体でな。まあ理由は知らないがそうしなきゃいけない事情があるんだろう。」

かけるの体格が変わっていく
9才の少年から20の女性へ

胸の膨らみや腰のくびれから性別も変わってるのがわかる
短く切っていた黒髪は長く伸びて茶髪になる

服装もかけるがいつもつけてる青色主体のインナーから澱みのない
白の袈裟のような服になる

離れていて表情はよくわからない

「やはり融合騎主体のユニゾンに組み直してるのか。ああ、もう一度見られた。あなたの光が。」

はやてが愛おしそうにその羽をみる

その目には涙が浮かんでいた

ユニゾンが完了したらしくプレストウイングが右腕を天にかかげる

すると盾だったプラスタービットが6つに分離して直線に結合し、
1つの槍に形を変える

それを右手でしっかりと握りしめる

「消える。そして我が血潮をなれ」

ブレストウイングはそれだけ言っただけでその槍を突き刺した

離れていたが聞こえた

澄んだ声が

それから翼が防衛プログラムを全て覆うと光の球になり一つの点になり、消える

一瞬何が起きたかわからなかったからか、みんな固まる

「エ、エイミィ。防衛プログラムの反応は？」

「えっと……。今計測中。闇の書の防衛プログラム。完全消滅を確認
！」

時間は残り18秒だった

アルカンシエルを使わなくて本当に良かったと落ち着いていた

防衛プログラムがいた場所がキラリと何か光った気がした

「かけるくん！」

なのはがそれを見つけ、飛んでいく

遅れてフェイトも行く

さっきのように翼が生えたブレストウイングじゃなくて、今はみんな

ながよく知るかけるの姿に戻っていた

「リインフォース、ありがとうな」

はやてはリインフォースから意識を返してもらい、そこで二人を見ていた

自分の融合騎に感謝をしながら

遠くで聞こえる声があまりにも儂く聞こえる

「かけるくん！大丈夫！」

「終わった…みたいだな」

「無茶しすぎ！かけるはもっと自分を大事にしないと！」

「いや、あれ勝手にやったのブレストウイングだし。ほら、大丈夫だって。腕も動くし」

「そついう問題じゃないの！」

「かけるは怪我したらだめなの！」

「いや、だから」

そんな二人の声を遮ってクロノが通信を入れる

「状況終了だ。みんなお疲れ様。医療班をすぐに手配する。みんなはしっかり休んでくれ」

その声を聞いて解散に移った
終わった

そう思うと脱力感が来る
座り込みたいくらいだ

「あ、元気そうだからかけるは事情聴取だからまっすぐ艦長室にきてゆっくりお話をしてくれ」

ちょっと骨でも折つとけば良かったと一瞬でも思ってしまった

第34話 聖夜の贈り物 下（後書き）

はい。まあ闇の書の間。消えちゃいました
…補足説明は次回キャラの会話でします

フラガラッハ

”Freagaruhach”

またまたどこぞの神話から借りてきました
かなりのチート性能な魔剣です
暇があればWikipediaでちらっと思ってください

え、逆ユニゾン（？）たしか出来たはず
そして彼女の姿のイメージ的には普通に天使です

片翼とか流行りですがちゃんと両方ついてます

アンケート結果を慌ただしくてほとんど触れてなかったです
というか2行ってどうなのさ

まあ、1票しか来なくて心が碎けそうになりましたが

はい。やります！ strikers！

その1票の中にこんな一言が

『かける君、フラグ立てすぎじゃない？』

ごもつともです！

書いてるとキャラが1人歩きして手が着けられないんです 言い訳

自分の中ではハーレムルートは作らない予定だったのに…！

…いや、まだ大丈夫！（のはず）

次回はその後、エピソードです
お楽しみに！

第35話 スタンバイレディ（前書き）

みなさん待ちに待った七夕です
願い事は短冊に書いてちゃんと笹の葉にかけてきましたか？
白湯です

A・S編最後の物語

でも、まだまだこれからです

では、ごっごぞー！

第35話 スタンバイレディ

それからすぐさまアースラへ移動した

アースラに着いたらすぐさま健康チェックが入った
特にはやては念入りに

自力で歩けるようになったり魔法の行使はできるようにはなっていないが、やはり心配なのか

闇の書の束縛がまだまだあるか確認するのが目的だとか

「なあ、リインフォース。この検査いつまでやるんやろな」

ベッドで横になりながらユニゾンを解除して今はそばに立っている
リインフォースに問いかける

「おそらく少しかかるかと。その後は事情聴取です。休憩と
思いましょっ」

「そうかあ…。あ、1つ聞いてええ？」

「はい。なんででしょうか」

「私の現実はいつから現実なの？」

今日の事だろう

今は現実と理解しているらしい

「本の中であなたの目が覚めてから夢だった時は一時もありません」

「なら、かけるくんとあの中にも現実でブレストウイングさんが蹴飛ばした事も現実なんか？」

ブレストウイングが仕出かしたあの光景を思い出したのか少しリンフォースの顔に笑みが戻る

「はい。間違いありません」

「なら、夢の事もか？私が毎晩見た、夢」

ブレストウイングが言った通り、戦いの夢は闇の書の防衛プログラムが見せたものだろう

つまり、他の夢はリンフォースのだ

「一部、私の夢が紛れ込んでたみたいですね」

「鳥のやつは、リンフォースのか？」

「はい。お恥ずかしい物を見せてしまいました」

「いやいや。ええんよ。そつかあ……。あれがリインフォースの夢が。あの続きはどうなるん？落ちたカラスは助かるん？死ぬんか？」

リインフォースは戸惑った

あの夢は本来自分が考えた物語の1つなのだ

闇の書の意志を通じて、主に様々な事を学ばせるための物語

喜び、怒り、哀しみ、楽しさの感情の4つから始まり、知識、欲、希望、正義、悪、そして生と死

それらを教えるために作った物だ

全てのテーマ別に生き物が当てられている

最初の4つの感情はもちろん人間だ

しかし知識はフクロウ、欲はキツネといったように

その中でカラスがでる物語がある

それは、死

生きる望みを無くした人間がたどり着く終着点

二度と、変えれない、帰れない物

「なあ、リインフォースどないしたん？急に黙って。早く教えてな」

「あれは、最後に猫が出るんです」

「猫？」

「はい。猫が家に連れて帰るんです」

「そしてどないなるん？食べるんか？」

「いいえ。食べるために連れて帰ったのではなく、生かせるために連れて帰ったんです」

「ほお。それでそれで？」

「はやては寝ていたはずなのにすでに上半身は起こして聞く体制に入っていた」

「すると、お見舞いにキツネ、タヌキ、フクロウなども来て」

「この今まで作っていた話に出た生き物を全て出そう
無茶苦茶になるかもしれない
でも、せめて新しく作る物語はこうでなくては」

「そうして、全快したカラスはみんなに見送られて大空へ再び舞い戻りました」

倒れている人を応援し、励ましてくれる

幸あれ、と送り出す

主が私に名付けてくれた名前の意味

『祝福』の物語であってほしかった

艦長室に入るとリンディさんの第一声は「私に撃たせなくてありがとう」だった

クロノに少しは配慮してと言ったらパイプ椅子が出てきた

クロノめ…

立たせたままにする気だったな

この場には自分とリンディさん、グレアムさんと使い魔のアリア、クロノ、はやてとリインフォースの7人だ

はやてと俺はバリアジャケットを解除して出されたパイプ椅子に腰掛ける

「はい。まあ、お疲れ様」

リンディさん印の抹茶が出てきたため落ち着いて買ってきたスポーツドリンクを飲んだ

「リンディさんはどこまで知ってたんですか？」

ブレストウイングはリンディさんは知っていると言っていた

「意志を持つデバイスの例は少ないのよ？それなら融合騎付きだと真っ先に考えたわ」

「なんて言ってくれなかったんですか？」

ちょっと声を荒げてしまったかもしれない
はやてがビクツと肩を震わす

「だって、あなた誰にも言わないから秘密にしてるものだと思って。まあ必要ならみんなに話すけど？」

リンディさんが通信機のスイッチを持って聞く

「いや、秘密にしといてください。話すのは自分でタイミングを見計らって言います」

「わかったわ。なら今回の事件に関わった人には箝口令をしいとくわ」

「…かんこうれい？」

なんだろそれ

みんなで観光に言っただち上げでもするのかな？

「他人には言わせないって意味よ」

「なんか変な事考えてなかったか？かけるくん」

はやてが顔を覗き込む

気のせいだ気のせい

「まあ、ありがとうございます」

「いえいえ。さて、してあげる事はしたは。あなたの事を教えてちようだい」

「その”あなた”は”俺”ですか？”ブレストウイング”ですか？」

「まあそうなるわね。プレストウイングの方よ」

リンディさんが抹茶を飲む

：いや、なんで美味しそうな顔をするんですか

「彼女は融合騎です。あ、それとリインフォース」

「なんだ」

「夜天の魔導書貸して。すぐ返すから」

「ああ。いいが」

そう言っ手渡される分厚い本

うん。まだ落丁はあるな

「じゃじゃーん」

懐から8枚の紙を出す

さっきプレストウイングに頼んで出してもらったそれをページにつけて閉じる

もう一度開くと、痕も残らず接着されていた

「これで守護騎士プログラムが返ってきたはず」

「ほんまか！さすがかけるくん！ありがとうな」

はやてが嬉しそうに本を抱きかかえる

リインフォースは手に持つてなくても夜天の魔導書にアクセスできるらしく、その有無を確認していた

「ああ。間違いなく烈火の将達のプログラムだ。ありがとう。だが主はやて。今は負担が大きすぎます。召喚は後日に」

はやてはシュトロベクロイツをすでに持つていて準備万端だった所をリインフォースに押さえられた

「うう…、わかったからリインフォース離してな」

「よし。守護騎士守護のために、休むか。はやて」

「うん！そうしょか！」

後ろの人達が肩を掴む

「大丈夫。君達のバイタルは大丈夫だったから。だから早くあの事について話そうか」

クロノが先導を切つて話す
ちっ、ごまかせなかったか

「とりあえずブレストウイングはノーコメントだそう。強いて言うなら早くブラスタービットに魔力をチャージしてほしいとか」

「話が終わつたらな」

グラムさん。それなら魔力供給は始まりませんよ。たぶん

マスター。防衛プログラムの掌握完了しました。ついでに破棄しました

ブレストウイングが重要な事をさらりと言った

「まだ戦いは終わってなかったのね……」

「ええ！今！」

リンディさんとアリアも驚く

マスター。ブラスタービットの魔力量が0%のままです。頼んどいたはずです

「いや、グレラムさんが話したら開始すると」

私とマスターはいつもユニゾンしてます。寝ている時もお風呂の中でも

「なんで戦闘中とか言えないのかな……」

アリアのツッコミももつともです

「まあ、そう言う事です」

「ユニゾンは融合騎にも本人にもかなりの負担がかかるはず。それをなんで四六時中可以なのだ？」

グレラムさんが聞く

その理由はお互いのリンカーコアが干渉しあうからです。しかし私達に1つのリンカーコアしかないんです

はやてとリインフォースがユニゾンしたらお互いのリンカーコアを1つとして扱えるから魔力量も増えるし、計算の処理能力も上がるしかし、ズレはある

いくらリンカーコアを複製したって違う身体
多少の誤差はあるが長時間馴染むわけもない

「なるほどな、それは盲点だったな……」

クロノも頷く

「次ははやてさんとリインフォースさん。あなた達です」

リンディさんが2人の顔を見る

「検査の結果ではリンカーコアとのリンクが闇の書と切れているのを確認しました。今はその本はただのデバイス、リインフォースさんは普通の融合騎とみていいですか？」

「防衛プログラムのプログラムは再生されたりしないのか？」

クロノが聞く

「その可能性は無きにしもあらずだ。私にもよくわからない」

今の夜天の魔導書のプログラムはリインフォースが作ったものに私の改変した守護騎士プログラムを追加した物。それはないかと

「だそうだ。大丈夫なんじゃないの？あとブレストウイング。変更した部分は後で説明しろよ」

ちよつと気になるワードがあつた

守護騎士は召喚された瞬間に、主との魔力リンクを絶ち、自律稼働するようにしました。これで彼らがはやてにかける負担は限りなく0です

「わかつたわ。これなら、後ははやてさんのこれからだけね」

「え、私の？」

はやてが聞き返す

「はい。これから管理局に入るか、魔法とは関係の無い日々を過ごすか。どちらかです」

「え、えーと。あ、かけるくんはどうするん？」

はやてが聞き返す

まあいろいろやばい人間扱いされるだろうな
これから

でもやっぱり止められないな

「管理局に入るよ。これから先も」

「そつ答えてくれて嬉しいわ」

リンディさんは嬉しそうに頬に手を添える

「はやても来る？」

軽く手を差し伸べる

するとはやてはおずおずとその手を握る

「う、うん。これからもよろしくな」

こつちを向いて俯きながら言う

「できればそれを私に言っただけ欲しかったわ……」

リンディさんは何か諦めたのか、何も手を加えない抹茶を飲んで苦いといって舌をだしておどけていた

「まあ、君達もお疲れだろ。デバイスをメンテナンスに預けて寝なさい。夜も遅いからな」

「わかりました。ありがとうございました」

パイプ椅子から立ってお辞儀をする

「ありがとうを言いたいののは僕の方だ」

そう言って頭をがしゃがしゃと不器用に力強く撫でて送ってくれた

「ふう、ここ辺りかな？」

海鳴市から電車で3つ

駅から歩いて10分で目当ての寺は見つかった

事件から3日後、クリスマスも過ぎ去り、後は年を越すだけになってしまった

昨日は高町家一家にリンデイさんとフェイトが魔導師になる事と、管理局勤めになる事の説明をした

高町家は好きにやれと認めてくれた

俺だけは剣道の朝練を中卒までは続ける事を条件に

2日前のクリスマスにははやたとフェイトとなのはでアリサとすずか主催のパーティーに行った
でもゲームをする訳でもなく実は魔導師でしたのカミングアウトだけになってしまった

アリサとすずかは正直に話してくれた事が嬉しかったらしく2つ返事で認めてくれた

あ、はやての守護騎士召喚は今朝した
シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ

みんな帰ってきた。ヴィータも泣いて喜んだ

そしていきなりフェイトはシグナムと勝負の約束をした所はいつも通りと納得した

あとアルフを最近見かけないと思ったら探し物に出ていたらしい
フェイトに対して最高のプレゼントだと張り切ってトランクを渡していた

中には昔のフェイトの教育係のリニスの日記が入っていた

アルフの予想は正しかったらしくフェイトは泣いて喜んだ

みんな過去を振り切り未来へと生きていく覚悟を決めた

変わっていかなくやダメだから

そのために初めてここに来た

遠足気分でテンションを上げたいがやはり寺という神聖な場所ではその厳格さに思わず口を噤んでしまう

目当ては、この寺の裏の墓地

目印はケヤキの木の下

一瞬高町で探しそうになったがここでは別の、昔の名前で見なければならぬことをすぐに思い出す

目印は的確だったのか、すぐ見つかった

花は無く、まだ新しい墓石が違和感を出す

そこに家で桃子さんが作ってくれた花を手向ける

そしてライターで2本の線香に火を点けて、横にして置く

そしてその前に片膝立てて座る

合掌してみるも向こうから声は聞こえないからこっちから声をかける

「お久しぶり。母さん。父さん」

そこからいろいろ言った

名前が高町翔になったこと

デバイスが動いたこと

魔法のこと

出会った全ての人のこと

やりたいこと

「じゃあ、行ってくる」

全部言ったら何かすっきりした

やっぱり来て良かった

季節はずれの墓参りは突然いなくなった両親の事を思い出してちょっと悲しかったが涙は出なかった

6年後

私立聖祥大付属中学の屋上に今年で3年生を卒業するメンバーが集まっている

「という訳でアリサちゃん。これからお仕事行ってくるから午後のノートお願い」

「あなたの大好きで仕方なくて夜も眠れない国語をしっかりと取っ
てあげるわ」

アリサは皮肉を込めて言う

「フエイトちゃんも今日は行くの？」

「うん。久しぶりに全員揃うからね。ちょっと楽しみ」

「という事はユーノ君もいるの？はやてちゃん」

「そうや。今日は書庫から出てくるらしいで」

「かけるくんは？昨日からいないけど？」
「すずかがなのはに聞く」

「もう行ってるよ。早く終わらしてみんなと話せる時間を作りたい
って」

「ふーん。あいつも大変なのねえ」

管理外世界の1つで1人の魔導師が刀を手に夕焼けに染まる街を歩く
右手に握られていた1mを超える日本刀と左手にある60cmの脇
差しは明らかに15才の子供には不釣り合いに見えた
それを地面に刺して結果報告の通信の用意をする

「質量兵器の回収任務か…、次の街で最後か？」

はい。88mm高射砲”アハトアハト”を数機です

「ぶっそうな物を…、また地球の物じゃ無いか」

地球の技術力はかなり高水準ですから他の世界も真似るのが多い
んです

「なるほど…。それを破壊、または確保だな」

はい

後ろから物音がした

敵が残っていたかと思って刺していた剣を引き抜いて振り向く

しかしそこには1人の男の子が立っていた

武器は持っていないので敵意は無いと思って両手に持った刀をしまう

念のためブラスタースピットは出したままにしておく

「あ、管理局のお兄さん！ありがとうございます！」

一輪の花がその手には握られていた

「うん。こちらこそありがとう。これ、もらっていくよ」

それを受け取り胸ポケットにしまう

「またいくの？」

「ああ、でも次で最後なんだ。たぶん仲間も来るからすぐ終わるぞ」

「ふーん。頑張ってたね！」

「ああ、お前もこれから頑張れよ。それから夢を持てよ。」

そう言ってその子の頭をぱんと叩いて空を舞う

自分の道を迷わずに、まっすぐに進みきるために

第35話 スタンバイレディ（後書き）

どうだったでしょうか？

みなさんの納得のいくエンディングになったでしょうか？

夢のお話

あのフラグ回収はもっと早めにしたかったな…

読み直してみたら、フェイトとなのはの出番がまっつったくありませんでした。ごめんなさい

一応2人とも管理局勤め

アニメと一緒にです

次回からはstrickers編

闇の書事件から10年後、特別捜査官になった高町翔

いつたい、どうなるでしょうか？

そして俺の休みの日はどこまで無くなるのでしょうか

そしてリイン？出てこないかも…

…ついでにもう一回strickers見直してくる必要があるから
次回はちょっと遅れるかもしれません

第36話 s t r i k e (r s) (前書き)

みなさん元気にしてましたか？
白湯です

新キャラがいきなり出てきます

大丈夫かな？

詳しい事はおいおい

スタート場所は地球でもミッドチルダでもないどこかです

拙い文章ですが、どうぞ最後までお楽しみください

出会いと別れのたくさんある人生だから、その1つ1つを大切に
していきたい

後悔は、したくないから

魔法少女リリカルなのは〜羽根を持つ者〜

s t r i k e r s 編、始まります

第36話 s t r i k e (r s)

「師匠！遅いですよー！」

茶色い髪を短く肩まで切りそろえた少女がこっちを向いて手を降る

「ユウナ、早すぎだろ…。少しはゆっくり歩けよ」

「行ってくて言ったのは師匠ですよ！」

「まあ…、そうだけども」

懐から住まいにしていた教会に届いた紙を広げる

『機動六課新設のお知らせ』

よく連絡は管理局から来ていた

だから今回も軽く見て捨てようと思っていた

だが恐ろしい物が見えたので行くことを決めた

『隊長”八神はやて”、部隊長”高町なのは” フェイト・T・ハラウン”』

あの3人だ

昔一緒にいた3人

そのメンバーが新しく部隊を作ったのだ

その紙の下を見る

ここは手書き

たぶんはやての字だろう

『P・S・お久しぶり。今部隊長になったんよ。そこで六課の戦技
教導官として来てくれへんか？連絡待つてるからな』

「あ、師匠またその紙見てる。そんなにいいこと書いてあるんです
か？」

「ユウナも六課に入るからな。同い年の子もいるんだから仲良くし
るよ？」

ユウナは「あ、ごまかした」と言っていたが気にしない

「ティアナ・ランスターは私と同じ射撃型だから話が合いそうだから大丈夫ですよ」

「スバル・ナカジマは？」

「あの子は何かすごいですよ。将来の夢が災害救助隊らしいですよ。
偽善者にもほどがあります」

なのはがボランティアで災害救助した時に保護した子供って言うの
は聞いていた

なりたい理由は憧れなんだろうな

「偽善でも善だ。やりたいならそれでいいじゃないか」

「むう……。あ、着きましたよ！」

教会の隣町にある転送ポート
とりあえずミッドチルダに帰るにはこれが必須なのだ

「早く予約するぞ。この辺にはあんまりないから人気は高いぞ」

はーいと言って走るユウナ

しかし受付に貼られた紙を見て首を傾げた

それを剥がして持ってくる

「どうした？メンテ中か？」

「ううん。これ」

紙を見せてくる

『ストライキ、始めました』

そんな冷やし中華みたいに言われても

ストライキ

民衆が何か訴えを通す時にちゃんと聞いてくれるように重要拠点を
聞くまで解放しないというやつだ

今回は減税を求めているらしい

ここの政府の対応が早いらしいので3日もすれば終わるだろう

別の場所に5日かけて行くよりかはここで待とう

ユウナのデバイスも作りたいたいな

「マスター。ストライキのせいかこのホテルが半額で安いですよ。ここにしませんか？」

「ああ。ポートも近いしここでいいか」

時間はもう夕方を回っていた

ご飯を外で買ってこよう

米は無いだろうがパンはあるだろう

その後にちよつとユウナと話をして作り始めるとしよう

外に出ると違和感に気づいた

一部に人が密集してるせいか、人通りがあまりいない

これなら外食でもいいか

「ユウナ。ちよつと飲み物買ってきてくれないか。その後あそこの噴水に集合だ。あ、アルコールはダメだぞ？」

噴水を指差して言う

あれなら目印になるし問題ないだろう

「わかりました！野菜ジュースとフルーツジュースでいいですね」

ユウナはそのまま走り去っていく

「まあ魚介類が有名らしいから魚の塩焼きみたいなのとパンを買っていくか」

あの建物を右に曲がった所にサンドイッチがあるそうですよ

「お、それいいな」

ブレストウイングの案をもらって買いに行くことにした

噴水の所で待っていると両手にジュースを2つ持ったユウナが来た
それから少し早い夕ご飯を食べる

食べ終わりごろ、ユウナに話をした

「ユウナ。お前も六課に來い。一応お前も管理局の仲間入りはしている。だから問題は無いはずだ」

最後のひとかけらを口に放り込んで言った。

…美味しかった

「うん。師匠が言うなら私は行きます。でも何をしたらいいんでしようか？」

「たくさん訓練を受けて、強くなってくれ。たぶんみんなそれも目標に入ってるだろうし、何より強いやつが周りにいるのはいい刺激になるだろう」

それを聞いてユウナは何かを疑問に思ったのか少し黙り込む
それから手にしたジューズに口をつける

その手にサンドイッチはまだ半分ほど残っている

「ストライキが終わるまでの間に考えてくれないか？」

「行きます」

俺が言い終わる前の所ではっきり告げられた

「私に何か目標を持たしてくれる。私が役に立つ事ができる。私に居場所をくれる。ならば私は行きます。機動…何課でしたっけ？」

「六課な。よし、なら作ろう。お前専用のデバイスを」

それを聞いたユウナは飛んで喜んだ

それから大急ぎで手に持ったサンドイッチを口に含み、話を聞く体制になった

「タイプは何かいい？銃でいいの？」

「え？じゃあ…杖で！」

「なんでだ？昔も銃使ってたからそれでいいと思ったんだが」

何より杖で砲撃タイプとか知り合いが飛んできてお話しじゃないか

「魔法使いつて感じがするじゃないですか！」

「うん。銃でいいな」

まだまだ長生きしたいんで

「と言っても種類はいろいろあるがどうする？スナイパータイプとかツインハンドガンとか…」

ちよつと本当に魔法少女的立ち位置を狙っていたらしく、ため息をついていた

「まあそうなりますよね…。えつと種類？全部！」

ため息を1つついた後、ろくに考えもせずそう言った

「やっぱりまだまだデバイス渡すの早かったかな…」

「ショットガンタイプで」

デバイスを貰えないという恐怖に駆り立てられたのか、すぐさま決めた

まあ昔はスナイパーライフルとショットガン使ってたからそれでいいのか

「わかった。明日から作り始めよう。材料はなくていいや。テストタイプだけ作って六課で正式にインテリジェントデバイスとして組んでもらおうな」

椅子から立ち上がり言うとホテルに向かった

ユウナも慌てて立って、スカートについた埃を少し払いついてきた

「私のデバイス…。ふふっ、名前とか決めなきゃ」

たぶん向こうにいるシャーリーが名付けるかも知れないがまあ気にしないでおこう

テストタイプなのでそんな凝った機能は入れない
引き金を引いたら魔力弾が出る

それだけで十分なので、ブラスタービットを改造して作る事にした
始めからかなり貯蔵魔力量はあまり残ってなかったはずだから6つ
の内1つの魔力を他の5つに分配する

魔力が空になった1つを改造して銃型デバイスにする

これなら触っていじってもプラマイ0
吸収は発生しない

でもユウナの身体との比率に比べたら銃身がちょっとでかいかな？
そもそもこれかなり軽いから重さは大丈夫だろうが

「ユウナー！シャワーから出たらちょっと外装を持ってきてくれ」

さっきからシャワーを浴びているユウナに声をかける

するとはーいと元気な声が聞こえる

確かにここ三日風呂に入ってなかった
年頃の女の子にはきつかったかな？

でも彼女はつい最近まで風呂を知らなかった
だから初めて知った時は感激していた

出たときに身体に染み付いた石鹸の匂いを嗅いで興奮しっぱなしだった

髪も最初は黒と白が混じった感じの色かと思っていた

しかし油などの汚れがついていただけであって、中から茶髪が出た時は驚いた

というかユウナすらびっくりしていた

それ以来、髪は念入りに洗うようになった

「師匠。出ましたよ」

ちよっとのぼせ気味のユウナがふらふらと歩いてきた

動きやすいという事でジャージを渡して着せている

やっぱりオレンジ色のジャージが似合うな

とりあえずこの状態で持たせても何もいい事は無いのでひとまず

ツドに座らせて喋れるようになるまで待ってもらおう

コップ一杯の水を机の上に置いて

風呂に入る事にした

「ふう、いい湯だった…。って、ああ。寝ちゃったか」

風呂から出たが、ユウナはそのままベッドに横になって静かに寝息をたてていた

まあ疲れたんだろうな

歩きっぱなしだったしな

軽く毛布をかけてランプの灯りを消して、自分も寝ることにした

まあ久しぶりの休日だ

のんびりすることにこした事は無いだろう

「なのはさんって魔力リミッターがかかってるんですか?!」

新しく出来た隊舎の中にあるデバイスルームにて青髪の少女が驚く

このデバイスルームには今は6人

新人4人とデバイスメンテナンス系のシャーリーとなのはだ

「うん。そうだよ今は2.5ランクダウンだよ。だからあと少ししたら1人でみんなの面倒は見切れなくなるよ」

なのはと呼ばれた19才の”エースオブエース”。高町なのはは顎に人差し指をそえて答える

「はやてちゃんは4ランクダウン。かなり無茶しちゃってるんだけどね。創設のためには仕方ないって」

「八神はやて部隊長も訓練には参加されるんですか？」

青髪の少女の隣にいたオレンジ色の髪をした少女が聞く

「ううん。部隊長にはそんな暇は無いらしいよ。一年しかない期間だしね」

「じゃあ、追加で入るのはフェイトさんとかシグナムさんですか？」

赤髪の少年が聞く

この中で1人だけ男なのは誰もツツコミを入れないらしい

「うん。あと私達の友達。昔から仲が良かったんだけどなかなか来てくれなくて…」

なのはが胸の前で人差し指をくるくる回す

「連絡がつかない場所にいるらしいから伝令の人に行ってもらったら傷だらけで帰ってきてその人の手には新しく管理局に入る人のリスト握ってたし、事件解決の報告書は送ってくるけど私達に対して

の連絡は一切無いし、フェイトちゃんが直接言った時なんか潜伏場所変えてたから会えなかった、手紙を新しい潜伏場所の教会に送ったら返事こないし、まず今の所生きてるのか死んでるのかもわからない。たぶん生きてるだろうけど何か連絡の1つくらいあってもいいんじゃないかな？ね、キャロ？」

「え、あ、はい。私もそう思います！」

キャロと呼ばれた少女は元気よく答える

しかし愚痴っていたなのはを見て驚きの方が多くて話は聞いていなかった

しかし事態は一変する

モニターが警報一色に埋め尽くされたのだ

こうして、機動六課初の任務は突然始まった

この街に来て3日

デバイスは昼頃出来た

試し撃ちしても問題は無かったし何より大きいおかげで盾の替わりになることも判明しているいろいろあった

この街に来て軽く初めて食べたサンドイッチで胃を満たし、転送ポイントに向かった

ユウナはこれから起こる事にドキドキが止まらないらしい
ワクワク感が溢れ出ていた

「師匠師匠。あれ見て」

ユウナが指を指す

あの方向には受付があったはずだが無くなっていた

爆破されたというのか、炭化した場所が目立つ

そこに新しく紙が張られているのを見つげ取ってみてみる

『ストライキ、大好評につき期間延長!』

そんな洋服の特売情報みたいに書かなくても

「ユウナ、デバイスの御披露目を向こうは期待しているらしいぞ。
プレストウイング、セットアップ」

…了解、マスター。

なぜ呆れるプレストウイング
でも一応バリアジャケットが展開される

「私はどうしたらいいの?」

ユウナに改造ブラスタービットを渡して言う

「市民を傷つけたらまずいからな。空に向かって威嚇射撃。少し解
散してもらおう。それからまたストライキしてもらおうじゃないか」

「はい。おらー、せきにんしゃでてこいやー」

ユウナは棒読みで言っ、迷うことなく炭化した受付に撃つ
何かに引火したのか、爆発して火の手があがる

それを見た何人が叫んで逃げ帰った

それから管理局員だという事を恐る恐る出てきた首謀者に説明して
1時間解散してもらった

「よし、これで帰れる。ブレストウイング。もう解除していいぞ」
バリアジャケットが光の粒子になって消える

ユウナの手にあった改造ブラスタースタービットも消えた

「師匠！私一発しか撃ってません！」

「あんなん連射されてたまるか。はいはい行くぞー」

ユウナが俺の目の前に立つと同時に転送が開始された
到着まで18時間

少し寝ておこっ

そう思って目を閉じた

「ここがミッドチルダ…、大都会ですね！私こんな所初めて来ました！」

転送ポートから出て一回本局に寄ることにした

帰還した事と六課編入のためだ

しかしまずい事に1歩踏み入れた瞬間気づいた
ユウナはいい

「師匠、どうしたんですか？そんな場所につずくまって」

「靴」

「え？」

「靴脱いで入る…」

この靴は軍用の靴で平気で鉄が使われてたりスパイクがついていた
りなのだ

かなりの重さはあるが、間違いなく必殺の一撃を秘めている靴だ

そんな靴で大理石が敷き詰められた本局の床を踏んだらどうなるだ
ろうか

「うわ、ひどい傷。どうするんですか？」

「見なかった事にする」

地上の守護神

そんな異名をもつ管理局地上本部

その中に裸足で入る1人の局員と1人の少女が入るシュールな絵がそこにはあった

バスに乗って、すぐだそうそのまま流れで乗っていった

バスの中には普通に人がいた

ああ、平和だ

なかなか許可が下りませんでしたね。やっぱり裸足が原因でしょうか

ブレストウイングが言う

「ああ、そうだな。今度から普通の革靴のデータも入れとこう」

「師匠に革靴は似合いませんね。スニーカーの方がいいんじゃないんですか？」

「ああいう場所には革靴の方がいいんだよ。世間的な目もあるしな」

そんな会話をしていると目的の場所に着いた
新しい隊舎、さすが新設
綺麗だな

そのままバスを降りる

そして受付に裸足で向かう

「すみません。八神部隊長にお会いしたいんですが」

受付の人はなんだか笑いをこらえているようだ

そうだろうな。焦げ茶色の外套に裸足出なおかつごつい靴を手で持
っていたら変だよな

「えっと、今任務に行ってますね。任務から帰ってくるのは午後か
らになるけどよろしいですか？」

「あ、えっと…。場所を教えてください。直接向かいます」

「わかりました。えっと…、ホテル・アグスタですね。電車を乗り
継いで2時間です。今出発に出た所ですから間に合うと思いますよ」

………どうよ？

てか帰ってきたのにまだ会えないの？

第36話 s t r i k e (r s) (後書き)

s t r i k e

一部の意味”ストライキ、暴動”

サブタイトルの意味はだいたい読んでたらわかったと思います

アニメ見直しにこんなに時間がかかるとは思わなかった

今回こそは初期シナリオ通りに進めてみせる……無理だな(笑)

新しい魔法少女、ユウナ

この子の話はいろいろ絡めるつもりです

今回はまあかけるが六課に行くだけの話でした
本編は次回から入ります

お楽しみに！

第37話 ホテル・アグスタ（前書き）

暑いから海に行きたい

白湯です

…安直すぎる考えかな？

ティアナ視点からスタートです

では、どろどろ！

第37話 ホテル・アゲスタ

最初の出勤の時もそれなりに上手くは行った気がしたけど、ただそれだけだった

毎日の訓練もあんまり強くなっている実感が無い

でもメンバーの中には優秀すぎる相棒がいて、あたしの周りには天才と歴戦の勇者ばかり

六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ
隊長格全員がオーバース
副隊長でもニアスランク

やっぱり、この部隊で凡人はあたしだけ

今も疑問に思ってる

自分がなんでここにいるのか
あの人はなんで自分を部下に選んだのか

向こうの世界でサンドイッチが4つ買えるお金を払い電車に乗る

荷物はほとんど六課の玄関の片隅に置いてきたから手軽でいい
勝手に捨てられなければいいんだが…

軍用ブーツも履き替えてユウナ推奨の革靴に履き替えて服装も整えた
一応向こうは上流階級者のオークションが開かれているらしいから
門前払いを食らわないための措置でもある

「ねえねえ。師匠。似合いますか？」

ユウナは袖をちっちゃく持ち上げて聞く

ユウナはどこで手に入れたのかわからない花柄の浴衣を着ていた
胸のサイズはなのはよりは小さいがはっきりと強調され、太ももの
ラインをしなやかに描く浴衣

元からおしとやかな大和撫子を思わせるユウナにはやはり似合う

「ああ。似合ってるぞ」

そう言うとユウナは喜んだ

「これ、改造してバリアジャケットになりませんかね？」

「やめとけ。戦い辛いぞ？」

そう言っとかわいいのにと言いながらしぶしぶ引きさがつた

あと1時間。そうしたら、またみんなに会える
それが楽しみで嬉しかった

着いた時には電車の中に人はあまりいなかった

時間的に会場ではすでにオークションは始まっているからだろう

しかし、これはまずい
アグスタに向かう未確認物体多数

「ガジェット…ですね」

六課は警備任務なのだ
ガジェットが来ることを予想していたのだろう

「ユウナは会場に入れ、あとこれ頼む」

電車の中で今回のオークションに気になった物があったのでユウナ
に頼んで落札してもらったため丸印をつけたパンフレットを渡す

「師匠…。私デバイス持ってないですよ？」

ユウナは自分が会場の護衛をさせられると思ったのだろう

「大丈夫。その印がついたやつを落札しろ。そしたらインタビューで六課にメッセージを」

「はい。ガジェットが来たから避難誘導よろしくって言えば良いんですね？」

「違う」

「え？」

戸惑うユウナを押し切って言う

「帰ってきたから大丈夫、だ」

Fire at will

ブレストウイングがバリアジャケットを展開する
完了と同時に空へ飛んだ

ユウナはそれを見届けてタクシーで会場へ行った

ガジェットの反応はシャマルが誰よりも早く捉えていた

「クラールヴィントのセンサーに反応！シャーリー！」

通信で待機していたシャーリーがキーボードを叩く

「はい！…来た来た、来ましたよ！ガジェットドローン陸戦1型機影30、35。陸戦3型2、3、4！」

「前線、各員へ。状況は広域殲滅戦です」

シャマルが管制を取ろうとした

「ガジェットが無くなり増援が来なくなると状況終了です。よろしくお願いします！」

それからセットアップしてアグスタの屋上で待機する

「シャマルさん！高速で接近する機影1つ。恐らく魔導師です」

「そんな！こっちのセンサーには何も！って、え？」

シャマルはクラールヴィントの出した画面に表示された文字に驚く

「推定オーバーS！現戦力では隊長陣を呼び戻さないと無理ですよ！」

シャーリーは慌てて通信を送る

しかしシャマルはその許可を出さない

それより、シャマルは見てはいけない物を見たという感じにびっくりにしている

「早くしないと！」

「違う…、帰ってきた」

「…はい？」

シャマルが言った意味がよくわからないが、その魔導師が通った後にはガジェットが一つ残らず潰されていたのでシャーリーは深くは考え無かった

「味方、なのかな？」

その疑問に答える者はいなかった

「オークシヨンの途中中断は無しって？」

なのはは会場の2階席でフェイトに念話を送る

「その状況は伝えたんだけど、お客の非難やオークシヨンの中止は困るから3時間程度ならみんなを拘束できるからその間で解決してくれって」

「そう…」

なのはは呆れていた

こんな金持ちばかりの護衛についたはいいが無茶な注文しかつけてこない

向こうは金さえ払えばどうにでもなると思っているらしい

でも、何が起こるかわからない

「はい、233番の方！150万で落札です！」

密輸やロストログア級の物もあるからそれを押さえるためにいるのもあるが、これじゃ混乱に乗じて犯人が逃げる事もできる

「できれば名前と、なぜこれが欲しかったかを教えていただけませんか？」

今日の解説者は偶然、というかたまたまユーノくんがやっている

司会者は知らない人だが、よくテレビでは見かけている

「えっと…、ユウナです！これは師匠がどうしても欲しいっていうから頑張ってみました！」

子供…、ティアナと同じくらいの子も参加してるのか

…和服？

どこで手に入れたんだろうか

「師匠の話は気になりますが、この刀のファンなのでしょうか？ありがとうございました！」

司会者がその子を帰そうとする
時間を稼ぐ気はそうそう無いらしい

しかし彼女はまだマイクを持って言おうとしている

「えっと、師匠から伝言です！」ようやく帰ってきた、ただいま。あとは任せる”です！」

そう言っつて舞台から降りた

まだまだ狙いの物があるらしく席に戻ったが、すぐさま立ち上がったこっちへ向かってきた

走るたびに男性陣の視線を独占する

主に風になびく髪の毛、揺れる胸、チラリと見える太ももが原因だろうが

それに気づいたのか顔を真っ赤にして立ち止まり、深呼吸してゆっくりと歩き出す

そして近くまでくるとにっこりと笑って耳元で囁く

「これからよろしくお願いします。なのはさん」

そう言っつて席に戻った

誰だろうか、あの子

とりあえず監視はいれておこうと思っつたらあまりにも胡散臭くてだれも落札しなかった（由緒正しい？）ドレスに入れて啞然とした

今日の目玉商品の有名画家が描いた絵の時は疲れたのか寝ていた

…本当に誰なんだろうか

「証明するんだ」

ティアナがそう言うと足元にミッド式魔法陣が描かれる

そしてクロスミラージュのカートリッジが二丁合わせて4発ロードされる

「特別な才能やすごい魔力が無くたって、一流の隊長達のいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって」

そうして宙に無数の魔力球が浮かぶ

「私は、ランスターの弾丸はちゃんと敵を打ち抜けるんだって」

「ティアナ！4発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスミラージュも！」

通信でシャーリーが止めにかかる
しかしここまで来たら止められない

「撃てます」

YES

クロスミラージユも落ち着いた声で答える

「クロスファイアア、シユート！」

発生した魔力球がランダムに軌道を描いて飛んでいく

その弾がAMFを抜けて敵を撃破していく

しかし、ガジェットが回避して1つ流れ弾ができる

まずい。当たってしまう

射線には、スバルがいる

スバルのあの体制からバリアを張っても遅い

直撃コースだ！

スバルは諦めたのか、受け身の体制に入る

そして着弾した

空から降ってきた訳のわからない物体に

その数、6

それは地上にいたガジェットを確実に潰していく

「なに、これ？」

六課のメンバーにこんな物を使う人はいない
敵の増援？

「ティア！後ろ！」

スバルに言われて慌てて振り向く
エリオの話にあった大型ガジェット
そいつが腕を振り上げて潰しにかかっている

「くっ！」

慌ててバリアを張る

でもたぶん貫通して大ダメージを喰らうだろう
その後は…どうやって攻撃したらいいの？

勝てるの？

「任せろ！」

声が聞こえた

空から

男の声

明るくて落ち着いた声

その人がガジェットと自分との間に着地した

「これで、ラストだ！」

そう言っつて右手に握られた刀を下段から素早くガジェットへ振り抜く
するとガジェットは見事キレイに真っ二つに切れて、爆発もせず沈
黙した

コロリと転がり動かなくなったガジェットを確認して刀を閉ま
ってガッツポーズをしている

「あ、あなたは？」

恐ろしい

なんなんだこの人は

そして、なんだあの技は？

「ん、あ？聞いてなかった？新しく部隊に入った高町翔だ」

「聞いてないと言うか、部隊？」

聞いてない

というかその手に握ってる通信機は2年前の物じゃないですか？と聞
くのは野暮だろうか？

「はやてに頼まれて機動六課のメンバーに追加されたんだよ」

年齢は自分達より上、なのは隊長と同じくらいだと思う

「よろしく」

そうやって手を差し出して握手を求められた

なんだろう、この手を握ったら元の暮らしに引き返せない気がした

ガジェットの撃退が完了したのを聞いて一安心した

ティアナが何らかの無茶をしたらしいがあまり気にはならなかった

みんな、怪我が無くて良かった

はやても事後処理の指示をだした後こっちに着ていた

「アコース査察官もいて、ここの警戒はばっちしや。問題は何も起きへんかったな、なのはちゃん」

はやてが嬉しそうにこっちを見てくる
しかしそれどころではないのだ
こっちは

「どないしたん？なのはちゃん」

「あの子、私がないのはだと気づいたんです。六課が来ているのはバ
れているはずはないのに」

和服を着た少女を指差す

その子は今、どんどん値段が上がる商品を誰が落札するか楽しみに
立って見ている

「確かにおかしい。あの子、私の方を向いてウインクしてきたし」

フェイトも来た

やはりあの子には終わつた後事情聴取の必要がありそうだ

「レスビアンやないんか？」

はやてが言う

「レスビアン？」

フェイトは意味を知らないらしい
知っていたらしいのははやての頭を一発叩いていた

オークションが終了するとシャマルから全体に通信が来た

「えっと、前線メンバーは屋上へ集合です。たぶんかなり重要な話だから隊長陣も集まってください」

「どうするなのはちゃん？」

はやての言っているのはあの少女だろう

しかし寝ているから今の内に集合して、話だけ聞いてすぐ戻ろうと思つた

屋上に着くとバリアジャケットをみんな着ていて1人の男にデバイスを向けて円形に囲んでいた

まさしく動けば撃つ状態だった

「シャマル、どないしたん？」

ドレスを着たはやては若干その光景に引いていた

「あ、はやてちゃん。あの…、これは本当ですか？」

シャマルはみんなに退かすように行つてようやく姿が露わになる

「え…、なんで今来ちゃつたの」

フェイトは化粧ばつちりの顔で、びっくりしたのか腰を抜かして座り込む

「あ、あ！かけるくん！」

なのはは駆け出した

2年前に管理外世界へ転属した同い年の家族

高町翔が帰ってきた

そのまま抱きつこうとしたがみんなの視線がある事に気づいて思い止まり、顔を真っ赤にして俯く

「えっと…、ただいま」

不器用そうな男は頭をかきながら答える

「おかえりなさい。かけるくん」

ちよつと上目づかいになりながらなのはは言った

「あんたは、今までどこ行つとんたんや！」

はやては首根っこをつかんでガタガタ揺さぶる

いろいろ言っているようだが小言が多すぎて早すぎて聞こえない

フォアード陣はなにこれといった様子でお互い目を合わせて首を傾げていた

そもそもなのは達がばつちり化粧していて服装もドレスになっているのを見てサボっていた疑惑まで立て始める始末である

「私の師匠から手を離せ！」

後ろから聞こえた声で現実に引き戻される

振り向くとその手には黒光する銃が握られていた

「ユウナ！止める！仲間だ！六課だ！」

かけるは止めるように言っているが聞こえていないらしい

「ゆづな？」

はやてはなんだか怖い面もちでかけるの方を向く

「誰や、この子は？」

「えっと、その、六課の新人？」

「師匠から手を離せ！そこの茶髪狸！」

しかしこの暴言の後すぐ下にいたフェイトに引きずりおろされて、
なんだかあやむやになってしまった

そして事情を説明して改めて自己紹介

「はやくて部隊長。暴言言つてごめんなさい」

ユウナはみんなの前で謝つた後に言った

「ユウナレスカ・ウインスレットです。よろしくお願いします」

フォアード陣は新しい仲間が増えたと喜んだが、隊長副隊長は苦悩
で頭を抱えていた

第37話 ホテル・アグスタ（後書き）

…2話かけてようやく合流！
なにやら不穏な空気で終わりました

次回からほのぼの編いけたらいいなあ…

そしてやっぱり

ラインフォース？は組み込めそうにありません

あの子が産まれた理由が作れないんです（泣）

次回を、お楽しみに！

第38話 魔導師試験（前書き）

いろはす美味しくない？

白湯です

…こんなこと言って大丈夫なのかな？

では、どいぞー！

第38話 魔導師試験

アグスタからすぐに六課に運ばれた

その間にユウナは手に持っていた水鉄砲をフエイトに取られていた六課に着くと臨時集会をはやてが開いた

いつものメンバーの他にも、食堂のおばちゃん、掃除屋までいた
夕方の働き時なのに、ごめんなさい

そのメンバーの前で自己紹介をする

「新しく六課のメンバーに加わりました。高町翔です」

自己紹介って言っても名前だけなんだが

「師匠は駄目ですね。見ててください」

隣にいたユウナが一步前が出る

「ユウナレスカ・ウインスレットです。ユウナって読んでくださいね。第101管理外世界出身です。そこにいるティアナ・ランスタ―と同じ年です。あと、甘いものが大好きです。よろしくお願いします」

しーん、と静まり返る

「えっと……、という事です。コードネームは高町翔がスターズ0。ユウナレスカ・ウィンズレットは魔導師試験の後、配属を決定します」

辺りがざわつく

いろいろ噂が飛び交う中、はやてが手を叩く

それを聞いてみんな口を閉じる

「ほな、みなさん。友達少ないこいつと仲良くしてあげてくださいな」

はやては笑いながら俺の肩を叩いてそう締めくくると解散となった

506

かけるはシャーリーの後について歩きながら自販機で買ったジュースを飲む

あの集会の後、フォード陣はその場解散となった

ティアナは練習をすると1人残ったが他のみんなは風呂に入って寝る準備をしていた

「師匠。食べ歩きは良くないですよ？」

ユウナも少し用事があり連れて行く

「大丈夫。食べ物じゃなくて飲み物だから」

「師匠。飲み歩きはいけないですよ？」

「言い直すとは……」

「師匠が屁理屈言うからです」

そんな他愛もない会話をしながらデバイスルームに入った

「新しいデバイスを作れと？」

シャーリーは椅子に座って聞く

「ああ。ユウナ専用のデバイスを作ってほしい」

「えっと……、かなり時間かかるけど大丈夫だよ。杖型とか銃型とか、どれにする？」

「一応形は決めてある。ギミックも。ブラスタースティックの応用版だ」
ブラストウイングに改造したブラスタースティックを出してもらおう

それをシャーリーに見せる

「ふうん……。まあそれこそ試験終わってから作り始めかな？明日す

「試験するの？」

「ああ。なのはが朝練をあいつのテストに回したらしい。フォアードもいろんな戦い方を見た方が勉強になるってな」

「わかった。なら私も参加してそれを見るよ」

「あと、他の5つのブラスタービットの魔力補給と調整よろしく。あ、バッテリー総入れ替えしてくれたら嬉しい」

無茶な注文とは思うがこれくらいはしておきたい

「わかった。まあ期間は問わないよね？」

「ああ。完成品の質だけ求める」

「わかった。なら頑張ってみる。あと早く部隊長室に行った方がいいよ。みんな待ってるから」

「はいはい、わかったよ」

「師匠！私も行きます！」

ユウナが手を上げる

「ユウナは今練習中のティアナにテストの事を聞いとけ。明日の戦略に役立つぞ」

「わかりました！」

ユウナはそれを聞いて走っていった

「あと、あの子って誰？」

シャーリーが首を傾げて聞く

「戦災孤児だ。本人にもあまり深く聞くなよ」

「ふーん…。わかった。じゃ、いってらっしゃい。デバイスは任せ
て」

「ありがとう、行ってくる」

そう言ってその場を後にした

「部隊長室って…ここか？」

ロビーで案内板を確認したから大丈夫のはず

「はやく、入るぞ」

ノックをして部屋に入る

すると上から黒板消しが降ってきた

普段なら回避できるが何か世界の意志なのか、一向に足が動こうと

しない

そして着弾

頭から足の先まで真っ白になる俺

粉まみれな俺を見てなのは達は大笑いしていた
するとはやてが手を差し出してくる

「まあ、今までの分はそれでチャラや。話したい時に話してくれた
らええ。」

はやては部隊長の椅子から立ち上がってこっちに歩み寄る

「それよりは、六課にようこそ！かけるくん！」

そして満面の笑みで歓迎された

「まあ、スターズ0。つまりはなのはちゃんと同じスターズ部隊の
隊長って事でええか？」

みんなで横にあるソファーに座り、話し始める

「ああ。構わないぞ。なのはさへよければ」

「私はいいよ。どちらかと言えばユウナちゃんはこっちで見る予定
だったし」

なのはもいろいろ考えてくれていたみたいである

「でもあのユウナって子。なんなの？」

フェイトはいろいろ心配してくれていたらしく帰ってきた時はかなり嬉しかったらしい

「それは私も聞きたい。どこの子だ？」

リインフォースがお茶を5つ運んでくる

自分のもちやつかり持つてくるのがこの世界でうまくやっていくツなのだろうか

「ああ。リインフォース、ただいま。まああの子はいろいろあってな」

「そうか。まあ主はやてみたいに言つが話したくなったら言ってくれ」

「まあ1つだ。彼女はとある紛争で拾った戦災孤児だ。身寄りはいが自立して生きるまでは様子を見る約束だからな」

「約束？だれの？」

なのはが聞く

「まあ、それはな。とりあえずは言わない事で」

「あ、なのはちゃん。明日のテスト、どうなってるの？」

はやてはお茶を飲んでからなのはに聞く

もうユウナの話はいいのだろう

「うん。一応はティアナ達と同じテストを受けてもらうよ。Bランク昇格試験と同じ内容」

今ユウナがティアナ達の所に聞き込みに行ったのは功をそうしたよ
うだ

「そのデータを送りたいんだけど彼女のデバイスどこにあるかな？」

「ああ。彼女デバイス持ってないんだ」

そう言うとりインフォースは固まっていた

「まさか、初心者連れてきたのか？」

「ああ。結果が出せなければ六課を抜けさせて魔法学校に編入させる」
「る」

みんなはかけるが管理外世界でどうにかなってしまっただと結論
づけた

「あ、俺はどこに寝たらいいんだ？」

「一応部屋は用意したいで。荷物も運んどいたし」

「ありがとうはやて。というかアグスタではなのは達何してたの？」

「内部の警備だけど…、たまにはおしゃれしたいよね？」

フェイトが疑問符がついたセリフで聞いてくる

「いや、聞かれても…。まあレリックはこっちが回収したいし新しい刀は手に入れたからいいけど」

「……レリック？」

はやてはびっくりしている

「ああ。はやてが集めてるロストロギア”レリック”。あのドレス、レリックだぞ。まあ幻術かかっているからわからんけど」

箱からそのドレスを取り出す

それを持ってドレスにかかった幻術を吸収して無効化する

すると胸部にあしらわれた宝石達が見るみる形が変わり赤いクリスタルになる

「まあまさかとは思ったけど気づいてなかったりは…、ってあれ？みんなどうしたんだ」

リインフォース以外みんな驚いた顔をしている

幻術があるならリーダーにもサーチャーにも引つかからない

リインフォースはなんだいつも通りかとお茶を飲んでいた

だが実際はレリックはあつてびっくりしたのでらう

「まあ、回収できたしよかったとしよか…」

それをはやてに渡してお開きとなった

その後はやてが部屋に案内してくれた

ワンルームあるがユウナも居場所が決まるまでここにいる事になるらしい

試験当日早朝

俺となのはは早めに集まって試験の用意をしていた

「昨日はなんかドタバタしちゃったけど、お疲れ様」

「みんな元気で何よりだ。あ、六課の案内を後でしてくれないか？」

まあボランティア的な意味合いで俺はいたのだが

「うん！いいよ！朝ご飯の後に案内するね」

「ありがと、なのは」

ここに来て感謝しかしてない気がする

しばらくして2人が来た

「おはようございます!」

青髪の子とオレンジの髪の子が敬礼をする

「それと高町捜査官。昨日はすいませんでした!」

オレンジの方が頭を下げる

なのははその光景にちよつと驚いていた

「おはよう。気にしてないから大丈夫だ。あとかけるって呼んでくれ。喋り方ももっと砕けていいから。えつと……」

「ティアナです。ティアナ・ランスター。わかりました。かけるさん」

「スバルナカジマです!よろしくお願いします!」

自己紹介が終わった所で2人に試験について聞いてみる
なんでも試験中にティアナが足を挫いてしまいやり直したとか

「2人から見て、ユウナはどう見える?」

少し気になって聞いてみる

「明るく活発な子だと思いますよ」

「私的にも気楽に話ができよかったです」

しばらくしてフェイト側の2人も来た

「おはようございます！かける隊長！」

「…………あれ？名字で呼ばないんだね」

ちよつとびっくりした

子供は礼儀作法とかどうとかきっちりやると思ったのだけど

「昨日エリオくんと話したんです。高町隊長だったらなのは隊長と被るから下の名前で呼ぼうって……、だめですか？」

ピンク色の髪の子が上目づかいで聞く

「なるほど。まあいいよ。男の子の方がエリオで女の子の方が…………」

「キャラです。あと質問いいですか？」

「なんだ？」

「えつと……、なのは隊長といつ結婚したんですか？」

この質問にエリオとキャラ以外全員ずっこけた

「ま、まだ結婚してないよ！ね、ねえ？ティアナ？」

「私に言われても……」

なのははなんだか混乱しているようだ

…まあ名字同じで年齢一緒なら普通は兄妹とは考えないわな

「兄妹なんだ。なのはが妹で俺が兄だ」

後ろで私が姉だよ！って言ってるが聞こえるのは気のせい

「なあんだ。そうだったんですね。」

キャロは納得したのか手を叩いていた

それからユウナがアップを終えて来るまで試験会場設営の仕上げをしていた

ゴールにマットを設置したときスバルとティアナは大笑いしていたがどうしたんだらうか？

「遅れました！いつでも行けます！」

ユウナはスタート5分前に来た

用意をしていたらしく鞆になにやらいろいろ詰めてある

「あ、危険物の確認するね？鞆見せて？」

「はい。一応つけていく予定ですけど」

鞆から出てきたのは一足のブーツ

膝までの高さがあり、外装は仕掛けが施されているらしい

「あ、ユウナもストライクアーツやるの?」

スバルが仲間を見つけたらしく食いつく

「まあ、少しですけど。でもメイト武装はこれです」

そう言っって手を差し出してくる

あ、ブラスタービットを出せって事か

「ブレストウイング。頼んだ」

わかりました。ブラスタービット一機排出します

ユウナの手元にふわりとブラスタービットが展開される

「あゝ!ちよっと待ってくださいゝ!」

後ろのドアが開いてシャーリーが慌てて入ってくる

「どうしたのシャーリー?」

フェイトがびっくりした顔で聞く

「えっと…、その子の。ユウナちゃんのデバイスのテストタイプ作
ってきました!」

そう言つて手にしたアタツシユケースを開ける
その中から一つの大型銃とカートリッジを出す

ユウナの手にあるブラスタービットより一回りでかい
端から端まで80cmはある
高さも50cmくらいで盾としての役割もちゃんとしているらしい
刀は取り外されて変わりにカートリッジシステムがついて銃身が隠
れている

持ち手はグリップ式
引き金では無く、人差し指で押せる位置にあるスイッチを押すと弾
がでるらしい

弾倉の中に弾を込めていくシャーリー

「まあ説明は省くね。たぶんこの子が教えてくれるから。問題があ
つたら試験中に教えてくれたらいいから」

「あ…、はい！わかりました！」

「…大丈夫か？シャーリー？まさかあれからずっとこれ作ってたん
じゃ？」

心配なので聞いてみる

「仕事があるのは嬉しいしね。まだまだ調整とかあるからまだまだ
手は離せないけどね」

ユウナはそのデバイスを持っていろいろ確かめているらしい

「まあ、インテリジェントデバイスになるのはまだまだ先だろうけどね。だから頑張って操作して合格してね、ユウナちゃん」

「はい！」

ユウナは顔を上げてちゃんとシャーリーにお辞儀した

「じゃあ、5分後に始めるよ。ユウナちゃんはスタートについて」

「はい。頑張ります！師匠！」

ユウナがこっちを向いてガッツポーズを取る

「まあ、怪我しない程度に頑張れよ」

俺はちっちゃく手を降ってユウナを見送った

それからのユウナの戦いは目を見張るものがあった

ショットガンで精密射撃はできないと悟ると、走って目標までたどり着いては蹴飛ばして突破していく

敵の攻撃は全てショットガンでやたらめったらに相殺していく

足の装甲強化はこのためだったのか？

妨害装置の破壊は自由だが壊した方が得点的には高い

だが目標の破壊を優先的に行う

途中敵の密集点にショットガンを2、3発一気に打ち込んで破壊した時は爆発でなのはのサーチャーが一個壊れたのは焦ったが

タイムで得点を稼ぐ気なのか？

だがなのはがそんな攻略を許す訳もなく、必ず妨害装置を倒さないといけない区画を作っていた

「私達はアンカーガンを匣に使って2人のクロスファイアで倒しましたけど…」

「まあ、腕の見せどころだね。時間もたくさんあるし作戦を考えていくべきだよね」

フェイトもティアナと同意見らしい

「あ、行くみたいですよ！」

キャラ口が指差す

敵の密集点に…走る？

まさかなんも考えていないんじゃない

敵のセンサーが反応したのか、防御シールドを張り銃弾の嵐が発生する

しかしユウナはそれを見て笑っていた

…なんかあるのか、策が

「あの、今気づいたんですけど」

エリオがユウナの足を指差す

「なんか、浮いてませんか？」

撃ち抜かれたユウナは風船のように弾け飛ぶ
いや、本当にバルーンだったのだろう

そこから白煙が出る

「目隠し？でも熱源センサーがあるからって、あれ？」

当たりに大量の熱源

これじゃどれがユウナか特定できない

やたらめったらに撃ち始める防衛マシン

それが1つ落ちた

2つ、3つ続けて落ちていく

「まさか…、スナイプショット?!どこから、というかショットが

ンで?!」

射撃型のティアナはすぐに気づいたらしい
だがどこにいるかはみつけないらしい

「モード2、スナイパーライフル。確かかけるさん頼んできましたよ
ね?」

シャーリーが後ろで言った

そんなこんなで結局反対側のビルから撃っていたユウナ
破壊目標を破壊達成し、あと1つとなった

「試験者の半分は落とされる最終関門。どうやって倒すんだるか」

「もう奇襲は使えないですし、正攻法で倒すしかないですね」

ティアナが冷静に分析する

ユウナは敵がいる廃ビルの階段を登っていた

そのフロアに立ち、対峙すると自動で敵が迎撃に入る

と言っても高威力追尾弾
当たったら気絶ですむ

だが当たったら起きる前にタイムアップで試験失敗となる

「あれ?ユウナさん下の階にありましたよ?」

「あ、本当だ。諦めたのかな？」

下に降りたら弾は来なくなっていた
そしてユウナは天井に銃口を向ける

それと同時に足から固定器具が出され、床に身体が固定される

動かない事を確認してカートリッジをロードする

「まさか…、壁抜き？」

壁ごと敵を消し飛ばす気なのか

だが火力がたりないだろうな

あのバリアはそうそう破れるもんじゃない

「モード3、バスターモード。まさか全部使ってくれなんて！」

シャーリーは何かテンションが跳ね上がっていた

しばらくすると一条の赤い柱が空に登った

「撃墜…、できてない！まだある！」

収束が足りなかったのかまだ防衛マシンは健在
しかしユウナが取った行動は簡単だった

出来た穴から飛び出てマシンに近づいてからの0距離ショットガン

2、3発でバリアは碎けて消えた

そしてバリアが無くなったからといって手加減することなく連射し続けるユウナ

大型防衛マシンと対峙して6分後
ユウナはそれを見事鉄屑に変えた

そうしてユウナは落ち着いてゴールラインを切ってマットに飛び込んだ

これにて早朝1時間に渡る試験は終了した

第38話 魔導師試験（後書き）

ユウナのデバイス（仮）はヴァイスのライフルを大きくした感じ
色は灰色メイン

どんな子に仕上がるのでしょうか？

アニメの1話でやっていたあの試験

ティアナが2才くらい若く見えるのは俺の目がおかしいのか

なんだか人数が増えたせいでみんなのコントロールが難しい…
でももちよっとは上達したらいいなと思って書いてみる

ではこれにて

次回をお楽しみに！

第39話 訓練開始と出会いの物語(前書き)

カツ丼が好きです
白湯です

ソースカツ丼も捨てがたいですが一般的なつゆだくで

サブタイトルの意味？

最後まで読めばわかります

では、どうぞー！

第39話 訓練開始と出会いの物語

ユウナは走った

移動手段はこれしかないから

今日の所持品は4つ

チャフグレネード

着火材

白煙灯

バルーン

武器は靴とさつきシャーリーさんからもらった銃

実は名前は決めている

だけど、まだ名前はつけない

この子がインテリジェントデバイスになった時まで

敵に最初に攻撃した時に気づいた

どうやら全方位攻撃はできるし、バリアは張れるが移動はできないらしい

そして、ダミーターゲットは脆い

小石でもぶつけたらすぐ壊れるだろう

さすがに1つ2つは大目に見てくれるが壊さないほうがいいだろう

参った

センサーの感度が高すぎるし、狙い撃ちに最適な場所に敵が大量にいる

普通にクリアはさせてくれないのか

なら、目標ターゲットの方にダミーを送って混乱させよう

狙撃場所にはチャフグレネードで事足りるだろう

最終関門の敵

あれも何回かやったがやはり動かないらしい

なら、下から穴を作ってそこから奇襲

ショットガンでバリアを削りきってトドメをさす

大丈夫。自分ならできる

「とりあえず試験の結果は今晚だすからちょっと待っててね」

あれから六課メンバーは朝食を取ることにした

フェイトも言っていたが合格は手堅いだろう

「ユウナって強いんだね。どこであんな技術学んだの？」

スバルが口いっぱいスパゲティを頬張りながら聞く

「昔から筋トレとかしてたんで努力の結果ですよ」

スバルやエリオとは対象的に、ユウナはスープ一杯で済ましている

「それにしても大した才能の賜物よね」

ティアナは何か気に食わないのか、諦めたような顔をしていた

「これから訓練に参加されるんですか？」

エリオがキャロからもらったニンジンを食べながらユウナに聞く

「一応先にシャーリーさんの所へ行ってデバイス作りです。それが終わったら一緒に訓練しましょうね」

「はい！」

「かけるくんはどうする？」

なのはが手に持ったフォークを置いて聞く

「ああ、まあ六課見て回るかな。それからみんなの戦闘記録見て明

日からのプランを立てることにするよ」

「私達はフォアード陣の様子見てるから、暇になったら来てね」

スープが熱かったのか、ふーふー息を吹いて冷ますフェイト

「みんな、おはよう」

そんな団欒の場にはやてがトレーにご飯を載せて持ってきた

するとフェイトとなのは以外立ち上がって敬礼

「おはようございます！はやて部隊長！」

「ああ。みんなそういっつのはええって。もっと仲良くいっつちゃ」

そう言っつてみんなを座らせる

「はやては朝練出ないんだな」

「そつや。部隊長さんはなんだか仕事が多くていろいろ大変なのよ。本当に1日が100時間ぐらいほしいわー」

それからはやてが食べ終わるの待ち、みんなでごちそうさまをした

朝食の後、フォアード陣が部屋で着替えてる間になのはが案内をしてくれる

スバルとティアナ、エリオとキャラロは同じ部屋らしい

「ここが私達の部屋」

「私達？フェイトとなのは？」

「うん。そうだよ。本当はかけるくんも入れたかったんだけどベッドが入るスペースがなくてね」

もし仮にそうなら俺は闇討ちを受けていただろう
いや、一応夜道には数日気をつけておこう

「はやてはやっぱり守護騎士とリインフォースと一緒に？」

「うん。向こうの部屋。あとリインフォースさんはみんなからリインさんって呼ばれてたりするよ」

「なるほどね」

そうこうしている内に外に出た

林有り、海（ため池？）有りでなかなか楽しめそうだ

市街地へは道路一本

玄関から左をみると地上本部の建物がよく見える

「はやてもなかなか大変だったろうな。こんないい場所を取るなん

て」

「なんだかね。聖王教会からのバックアップがあるらしいんだよ」

「聖王教会だと？」

聖王教会はここにくる前にお世話になっていたりしていた

でも正しく信仰を広めるところもあれば、神様を勝手に作り出し嘘を広める所もある

宗教的な所に関わるとあまりいい事にはならないので近づかないようにはしていたんだが

「クロノくんも立会人だしね」

「クロノは艦長になってからめつたに会わなくなったからな…」

あいつもいろいろ出世した

「なのは。ユウナをどう思う？」

立ち止まって聞いてみる

「合格」

なのはは手を後ろに回して言った

「早いな。というかあっさり決めたな」

「状況の把握力と奇抜なアイデア。少ない所持品であそこまで行けるとは私は正直予想できなかったよ」

「あいつはそういう環境に生まれてしまったからな…」

「内乱…かな？」

なのははユウナが戦災孤児と聞いた家族もないし、遺産もない
あるのは戦争の恐怖のみ

「まあ、そんな所だ」

そう言っただけでまた歩きだした

「あ。あれはシグナムか？」

向こうで局員服を着たシグナムを見つけた

「かけるか。帰るなら連絡の1つくらい入れろ。主はやてが心配していたぞ」

「いや。次元通信が使える場所が無くてな。まあ、いい訳でしかないが」

シグナムはため息を1つついていつもの鋭い目つきに戻る

「なのは。フォアード陣がアップして待っているぞ。早く行ってやれ」

「あれ。もうこんな時間！ありがとう、シグナムさん！行ってきます！」

なのは慌てて走っていった

そんなスリットが深いスカートで走ったらいろいろ恥ずかしいものはないんだろうか？

「さて、かけるも戦技教官だろう。はやく行ってこい」

「えっと…、今日くらいはゆっくりと過ごしたかったんだか？」

「大丈夫だ。六課に来たからには毎日が仕事漬けだぞ」

そう言っつて肩を叩いていった

…まあ時差ボケもあるし午後から参加するか

昼ご飯を食べた時に午後から参加すると言つとみんな喜んだ

「…なぜ喜ぶ」

「だって…、あの、その…模擬戦とかできるかもじゃないですか！」

スバルが何か言い淀んでいる

なんだろうか

ちよつと訓練が緩和されると考えてたのかな？

「ならスバルは昼ご飯終わったら俺と1対1の模擬戦な」

「げっ?! やっぱり冗談で!」

手を前に出して拒絶のポーズを取る

「なのははティアナの方に付きつきりで頼む。エリオとキャラロはフ
エイトと回避練習やるんだろ?」

「うん。個人スキルはきつちりやっとかないかね」

なのははティアナを見ながら笑いかける

「エリオ達はもう完成に近いけどがんばらなきゃね」

「はい! 頑張ります!」

「でも、模擬戦も気になるので少しだけ休憩時間に見に行きます!」

エリオがガッツポーズを取る

「良かったな。スバル。ギャラリーが増えたぞ」

「...一応聞きますけど隊長って魔力ランクいくらなんですか?」

スバルが恐る恐る聞く

「ん? E だが?」

聞いた瞬間事情を知らないみんなが固まった

「あー。そうだったね。かけるはそうだったね」

フェイトは笑い話にしている

「ああ。あ、でもスバル大丈夫だぞ」

「え、えつと…なんですか？気合いですか？」

スバルも何だか不安になって根性論を言い出す始末

「5年前に陸戦S+。3年前に空戦Sとつたばかりだから」

それを聞いたスバルは真っ白な灰になっていた

「え…、でも、あれ？」

ティアナは魔力Eじゃ飛べそうにも無いのになぜ空戦Sなのか引っかけていた

「かける隊長とやりたくないー！」

スバルは立ち上がり頭を抱えてそう叫んだ

しかし食堂でああ叫んでいたスバル
いざフィールドに立つと気持ちを切り替えていた

本当に勝つために

「ルールはなのはと一緒にしようか。バリアジャケットに被弾、またはデバイス破壊で勝ちだ」

ブレストウイングがバリアジャケットのセットアップをする

普段なら甲冑を多くして守りを固めるが、動きにくくなるので今回は本当にジャケットのみ

「わかりました！」

スバルがデバイス”リボルバーナックル”を上段に構えて、いつでも走り出せる体制になる

「じゃあ、始め！」

今ブラスタービットはメンテナンス中なのであるのは刀のみ
右手に刃渡り1mある薄刃刀を出す
これなら当たっても軽い切り傷程度で済む

刀を出したのが合図になったのか、まっすぐ直線的に突っ込んでくる

「先手必勝！行くよ、マツハキャリバー！」

All right・Buddy

だがまつすくだ

少し身体を逸らせば難なく回避できる

しかし驚いた

急加速からの急停止を行ってみせた

内臓に負担がかかるから多用はできない

今使つて事は本当に勝負をすぐ終わらせるつもりか

「はあああ!」

「なんの!」

打ち出してきた拳を下からはじき上げる

こつという攻撃は横からの攻撃に弱いからズラすだけで回避はできる

そこから後ろ跳びで距離を開ける

その間にカートリッジが1発ロードされる

「リボルバー、シユート!」

マツハキヤリバーに

「そんな攻撃、当たらない!」

自分のレアスキルともいえる能力

魔力吸収

これがあるから魔力弾は一切当たらない
魔力弾の周りにあった魔力粒が乗った風も消す

「ええ?!じゃあこれで!」

着地したスバルの足元に現れるベルカ式魔法陣

W i n g r o a d

そこから現れる1本の道
それが自分の周りにも一気に作られる

「なるほど。これで空戦もできるわけか」

「うおりゃああ!」

でも動きが直線的
力押しに来たか

「狙いをちゃんと決めて攻撃しろ」

リボルバーナツクルを刀の柄で弾いてそらす

今のは当たっていても右肩上部
正直大したダメージにはならないだろう

「くっ、はい!」

ウイングロードに乗っていったん距離をとるスバル

カートリッジをロードして何かのチャージをしている

「中距離砲撃？近接メインじゃないのか？」

刀を防御のために横にする

「デイバイイン、バスター！」

え、それなのは魔法

しかし刀に触れたら一瞬で消える

「魔法が通らないなら！」

放たれた砲撃によってできた砂埃の影に隠れて自分の真後ろにいたスバル

ウイングロードで短縮ルートを作っていたな

下段に構えて振り上げる用意をして後ろを向く

するとさっきまで使ってなかった左手が刀を掴む

しまった。さっき振り下ろしたばかりで力が入らない

「届け！」

リボルバーナックルがついた右手で殴ってくる

完璧だ

刀も封じて反撃の余地すら与えない

「だが、あと1歩だ」

左手に新しく50cmの小刀を展開する

「俺は二刀流だ」

右手の刀から手を離してスバルの右肘を下から上へ掌底で押し上げる

そのせいであらぬ方向へ殴ってしまうスバル

身体の重心が前に転んだスバルをそのまま地面に倒す

うつ伏せになったスバルの腰に乗り刀を首に突きつける

「…ま、参りました」

スバルは最初こそジタバタして脱出を試みていたが無理だと悟ると諦めて降参した

「さて、模擬戦は終了だ。どうだったか聞きたいか？」

「あ、はい。お願いします」

「スバルは本能的に攻撃するように見える。やっぱり狙って攻撃すべきだ。最初のストップアンドゴーなんて負担がかかりすぎだろう」

刀を2本戻して言った

ついでにそばにあったウイングロードに触る

魔力で出来たら吸収はできる

ウイングロードも消えてあたりに殺風景な景色が広がる

「あ、えっとそのごめんなさい?」

「疑問符が付くようなら反省してないと考えるが?」

「あ、はい!わかりました!あと…その、そろそろ降りてくれないと」

「あ、」

スバルに乗ったまま話をしていたのに気づいた慌てて立ち上がり距離を取る

スバルもゆっくりと立ち上がる

「私も、あの、訓練中ですけど、恥ずかしいといつかなのは隊長が怖いとかあの私もあのえっと嫌ではないんですけどあの」

「…なのは?」

なんでなのはが?

ま、まさか見てる訳ないよな?

「デییイバイイン、バスター!」

向こうの林で訓練していたはずなのはの音が聞こえて俺とスバルはその光の奔流に飲み込まれた

「痛いです」

医務室にてスバルが横になっている
デイバインバスターはなのはのメイン魔法なだけあって威力も速さも群を抜いている

俺は吸収で無傷だがそばにいたスバルがボタンキューになってしまった

「相変わらずあれはヤバいみたいだな」

完全に他人ごとのかけるである
なのははちょっとやりすぎちゃったと舌を出しておどけていた

レイジングハートがまあいいんじゃないでしょうかと言っていた
撃った張本人（人？）というのに

「まあ訓練用魔力弾のおかげで無傷だわね」

シャマルが白衣を着て答える

「なのはちゃんのは優秀だからね。もう歩けるわよ」

「はい！ありがとうございます！」

スバルはそれを聞くと立ち上がり訓練着に着替える
その間医務室から出る

「お待ちせしました！さあ、やりましょう！」

しばらくしてスバルが出てくる

それから訓練場に戻るまでちよつと会話をする

「スバルはティアナと前の部隊からコンビを組んでたんだよね？」

「はい！部隊に入ってお互いに珍しい自作デバイスだったから、そこから仲良く」

スバルは恥ずかしそうに頭をかきながら答える

「そんなスバルから見て最近のティアナはどうだ？朝練の朝練みたいなものを続けているらしいが」

「私もやってますけどティアナとコンビだし、ううん。ティアナとコンビだからこそ一緒にできるといつか、一生懸命だから私も協力してあげたくて」

「なるほど、それがスバルの夢か…」

「何か言いましたか？」

スバルに聞こえないように言ったから聞こえないとは思って

「いいや。なんでもない」

後はお互いに考えた結果、なのはに1回謝るために雑木林に戻った

「シャーリーさん。テストショット終わりました。あと追加パーツ持ってきましたよ」

ユウナがデバイスルームに大量の荷物を持って入る

「ありがとね。うん。パーツはこれで最後みたいだね。データも集まったし後は組み合わせるだけだね」

「本当ですか？やったあ！」

ユウナはガッツポーズをする

ラストに盾をつけて持ち手の所にAIの棒を差し込む

すると中にするすると吸い込まれる

「これで、AI装着完了。拒否反応は…無いね」

AIがついたということは、インテリジェントデバイスとして機能するようになった事だ

「デバイス識別番号ATX00357。起動」

∴ Please wait. Program start up.
Come into operation.

シャーリーはそのデバイスの声を聞くと安心した

「…動いた！喋った！」

ユウナは思わずまだまだ銃モードのデバイスに抱きつく

……？ You are my master？

「うん！そつだよ！」

「じゃあ初期設定始めるよ」

シャーリーはユウナをデバイスから引き剥がしてキーボードを叩く

あとはユウナが言って登録するだけ

「マスター認証”ユウナレスカ・ウインスレット”」

「術式”ミッドチルダ式”」

「デバイス名称”フォーマルハウト”」

……Complete・Thank you・Master

「もう、ぶつつけていくよ！フォーマルハウト！バリアジャケットと武装全部、セットアップ！」

「え？」

シャーリーはなんだか流れに乗れていない
何言ってるのこの子の状態である

A r e y o u r e a d y ? S e t u p !

「え？フォーマルハウトまで?! ちょっと待って! こんな所でセツトアップしたら!」

雑木林でなのは達と談笑していたらアラートが響く

「第一種警戒警報?! 何があつたのレイジングハート」

わかりません。ただガジェットではないようです

「ブレストウイング、隊舎の中にある魔力反応わかるか?」

魔導師反応。隊舎内にセツトアップの反応が有りと断定しました

「ロングアーチへ! 詳細な場所を教えてください!」

ロングアーチへ通信を送る

「はい…、西館フロア…、3階! デバイスルームです!」

あそこには今ユウナとシャーリーがいるはずだ

「今から向かう。六課隊舎の閉鎖を頼む。俺は裏口から行く!」

ティアナはすでに全体通信でフォアード陣に召集をかけていた

「かけるくん!私も行くよ。みんなは出動待機。今からくるフェイト隊長とシグナム副隊長の指示で動いて」

セットアップを終えて2人で走る

向かうはデバイスルーム

サーチャーに反応無しで急に現れた不明戦力
それが無力なメンバーの所に向かつてる

「頼む!無事でいてくれ!」

六課は新設だったらしいが今は気にしていられない
デバイスルームのドアを切り裂き蹴破る

中には椅子から転げ落ちたシャーリー
怪我はないようだ

「シャーリー!大丈夫か!」

「う、うめんなさい!」

シャーリーが立って頭を下げる

「デバイスルームには…争った後がない？」

なのはが当たりを見回す
しかしある人を見つける

それを見てなのはが固まったからそれを自分も見てみる

「……師匠？」

「…ユウナ？」

そこには茶髪で薄い青色の目をした少女がいた
間違いなくユウナだ

しかしいつもと違うのはバリアジャケットを着ていること

赤メインのそのバリアジャケットは目を引き、足についた強化装甲
は小さくコンパクトになっていた

手に持つ銃は1mは軽く越えていて盾が装備されていた

思わず見とれていたがなのはが先に意識を取り戻した

「隊舎内のバリアジャケットのセットアップは禁止だよ！」

なのはがそう叫んで慌てて解除するユウナ

その左手首には青色のブレスレット

その表面の宝石のひとつがきらりと光ったきがした

その後六課の規則を改めて読まされたユウナ
隊長陣から拳骨を喰らって反省文を書かされていた

これにて『ユウナが勝手に、セツトアップした事件』通称『YS事
件』は解決した

第39話 訓練開始と出会いの物語（後書き）

デバイス名”フォーマルハウト”

名前に羽みたいな要素も足そうかと考えましたがこのままで

銃の概要は前回のテストタイプにレイジングハートのプラスターピットの棘をつけて、かける初期の盾をつけた感じ

…デカイよ！

バリアジャケットは黒のインナーに赤のライン。はやてが着てる上着を白から赤にするものをその上から着る。白ライン入りの黒ホットパンツ履いて、足の強化装甲をつける

…なにこのスバル似
でもはやてがホットパンツ履いたと考えたら想像しやすいかも

六課内の私闘禁止つてのを婉曲してみた今回の話
楽しんでいただきましたか？

次回は…あれです
お楽しみに！

第40話 ティアナの戦い（前書き）

夏が、来ました

白湯です

あと2ヶ月くらいで涼しい日々が帰ってくるはず…！

では、さよなら…！

第40話 ティアナの戦い

「本日よりスターズ5としてユウナレスカ・ウインスレットを配属します。異議はありますか？」

あの事件の次の日の朝、なのははみんなの前で言った

「私は無いよ。まあはやて次第だろうしね」

フェイトは頷く

「私もあらへんよ。まあ六課のルールに従うことが前提やけどな」

そういつてユウナの頭に軽くチョップするはやて

部隊長が許可を出したなら配属は確定だろう

「ほら、ユウナ。改めてみなさんに挨拶しろ」

そう言つて肩を軽く叩く

「はい！ユウナレスカ・ウインスレット。本日付けで機動六課に配属になりました。以後、よろしく願います」

ユウナは素早く立ちあがり敬礼をした
挨拶マニュアルでも読んだのか？

急な変わりようにみんなはついていけない様子

「えっと…、話し方はいつも通りでいいよ」

フェイトは若干呆れつつそう言った

「いえ。拳骨はもういやです。特にシグナムさんが手加減無しでした。リンさんは熱湯で抑えてくれたのに！」

「シグナムの拳骨は熱湯を越えたか…」

ヴィータはあきれてるらしい

「いや、リンフォースのお湯もどうかと…」

ちらつとリンフォースを見る

するとリンフォースはすぐに目をそらす

「……………紅茶をこぼしただけだ」

まあリンフォースにドジッ子キャラは似合わないと思うから疲労かな？

シグナムは立ち上がってユウナに近寄る

「私は悪い奴には容赦はしないが、普通にしたら大丈夫だ」

「…本当ですか？」

ユウナは泣きそうな顔でシグナムを見る

「ああ。話し方もどしていいぞ」

シグナムは腕を組ながら頷く

ユウナはそれを聞いて嬉しそうに頷いた

「あと、デバイスね。経費は全部かけるくん持ちだから。壊れたド
ア含め」

なのはが書類のついたバインダーをかけるに手渡す

「…聞いてないぞ」

「だってユウナちゃんの保護責任者ってかけるくんだよね。なら払
ってもらおうよ」

「ろ、六課の経費とかで」

「降りないよ？ドアもかけるくんが勝手に壊しただけだし」

なのははどつやら経費を俺持ちにしたらしい
やばいぞ

インテリジェントデバイスはかなりの経費がかかる

「あ。だからパーツ高いもの使っていいって言ったんですね」

シャーリーもようやく理解したらしい

「…わかったよ」

諦めてそれを払う事にした
修理費などは六課持ちだと信じて

それから相変わらず練習の日々が続いた
個人スキルの練習もしだいに進んでいき、5日くらいたった時に試
験替わりの模擬戦が行われた

ライトニングが先にフェイトとやったが、惜しくも敗退となった
撃墜されたとはいうがちよっと改善すればいいようになるだろう
ユウナはヴィータとやることになっていたが先にスターズが見たい
との事でスバルとティアナVSなのはとなった

「個人スキルの特訓成果と朝練の朝練の成果。見せてもらおうよ」
バリアジャケットを3人が装着する
なのはリミッターがついているからAAランク程度
二人なら安定して勝てるだろう

「やるわよ。スバル」

「うん！」

他のみんなはフィールドである廃ビル群の屋上で待機

「始まるぞ」

ヴィータのその発言が合図となり開始した

スバルはウイングロードを展開して、足場を大量につくりあげる

なのはの元には無数の魔力弾
恐らく牽制目的だろうが

なのはが回避行動に移っている間にティアナはクロスファイアのチ
ヤージ

スバルは一気に近接戦闘に持ち込もうとなのはの元へ走り出していた

「クロスファイア、シュート！」

「…？なんだかキレがねえな」

「コントロールはいいみたいだけど」

「それにしただって」

ヴィータとフェイトは落ち着いて分析する

するとなのは回避場所にウイングロードが現れる

「回避先を読んだのか。でもそれじゃあまっすぐに反撃されるだけじゃ」

「あれはティアナのフェイクシルエットだろ」

「フェイトじゃない?!本物!」

なのは魔力弾で迎撃する

しかしそんなので止まるスバルではなかった

多少の被弾はあったが全て押し切り突っ込む

「なんだか、危なっかしいですね…」

ユウナが呟く

「作戦がなっていない、という事か?」

シグナムが聞き返す

「いや。なんとというか…。ティアナさん。精密射撃してないし幻影も使わない。なんだか、真っ向勝負?訓練の内容とちよっと違うと
いうか」

「こら！スバル！ダメだよ、そんな軌道！」

突撃を軽くないなされウイングロードから落ちるスバル
しかしギリギリ着地成功

「すみません！でも、防ぎますから！」

「ティアナは？」

なのははスバルは後回しにしてティアナを探し始めた

さっきの間、攻撃チャンスは腐るほどあった
だが来ない

何をしているのだろうか？

「…っ！」

顔にレーザーポインタの標準があたる
砲撃魔法？！

しかしなのはがそれに気づいた時はスバルは距離を詰めていた

そこからの追撃を辛うじて防ぐ

ティアナから砲撃が来る？

いや、たぶんあれは

「あつちのティアさんは幻影?!」

キャラが驚きの目で見ると

砲撃のチャージをしていたティアナは幻影であった

「じゃあ、本物は?」

エリオが周辺を見回す

それは簡単に見つかった

ウイングロードの上を走っていたのだ

「…なにこれ?」

ユウナの疑問には誰も答ええなかった

ティアナはそこからクロスミラーージュの先端に刀をつけて上空から切りかかった

しかし、なのはは来ているのはわかっているが上を向いていない

「レイジングハート。モードリリース」

了解

なのはがそうレイジングハートに命令した直後に大規模な爆発があった

そこには二人の攻撃を素手で止めているなのはの姿があった

「おかしいな。二人とも、どうしちゃったのかな？」

「あっ」

マツハキヤリバーを左手で

「えっ」

上からのクロスミラージユの刃を右手で握った箇所からは血が流れていた

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

なのはは少し顔を上げる

「練習の時だけ言うこと聞いてるフリで本番でこんな無茶するんなら、練習の意味無いじゃない」

スバルは何をしたらいいのかわからなくなりただ震えるだけ

「ちやんとさ、練習通りやろうよ」

なのははティアナを見上げる

「ねえ？私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる？」

なのはがそう言くとティアナは刀を解除して飛び上がり、なのはとの距離を開ける

「私はもう誰も傷つけないから！無くしたくないから！」

そういつて双銃クロスミラージユを向けてチャージに入る

その目には涙が浮かんでいた

自分の思いを届けようと

「ティア…」

スバルはそんな相棒をただ見るだけ

「だから、強くなりたいんです！」

「少し、頭冷やそうか」

なのはは傷ついて血が流れ出す右手で指差す

「クロスファイア」

なのはの足元に魔法陣が描かれる

放つのは、ティアナの魔法

「シュート」

直撃だった

ティアナはそれを反撃する間もなく喰らった

彼女の目は虚ろで、光は籠もっていなかった

「じつとして、よく見てなさい」

発射の時に残った魔力スフィアを集めてまた1つの弾を作り出す

「なのはさん！」

スバルはなのはを止めようとしたがバインドがかかっているため叫んで制止をすることしかできなかった

しかし願い叶わず、放たれた

「ティアアー！」

静かに落下するティアアに走って向かう
それを無視してなのはは続ける

「模擬戦はここまで。今日は2人とも撃墜されて終了」

何も関心を向けず、ただただ語るなのは

スバルは憧れの存在である彼女を睨んでいた

なぜ、わかってくれないのかと

その意を込めて

それからはユウナの模擬戦も後回しになりお開きとなってしまった

「…ん、あ。あれ？」

目が覚めた

身体を起こすが何も問題は無い

「起きたか？」

そこにはかける隊長がいた

壁にもたれる感じで腕を組んでいた

「…はい。」

「まあ、なのはの…なんだっけ？訓練用魔法弾は優秀らしいからな。お前の相棒のスバルが直撃でも無傷だったぞ」

「え、あ。本当だ…」

身体中を見ってみる

日焼けしていない白い肌には傷1つなく、痛みもなかった

「まあ、夜まで寝たんだから疲れとかなんとかいろいろ抜けてるだろ」

「…夜？って21時過ぎ?!」

模擬戦をしたのは11時ごろだから…まさか、10時間も寝ていたのか

「まあ朝練の朝練のせいだろうな。どうだ？なんであんな無茶したか、教えてくれるか？」

「…強くなりたいてって願ったらダメなんですか？」

わかってる

心配してくれてるんだ

でも、腹の底から憎い

あなたには最初からこんな感情が無いんだろう、と思ってしまうから
するとかける隊長は手を上げて降参みたいポーズを取る

「まあ、わかった。話しにくいわな。とりあえずスカート履こうか」

そう言っただけの上にあるスカートをベッドの上に座ってる自分の所へ持ってきた

スカート？

慌てて身体を見ると自分の服はシャツ一枚だけだった

下着は着ているが太ももなどは粗方露わになっていた

「あの、なんだ。こっちもちょっとは恥ずかしいんだ。早く着替え
てくれ。外で待ってるから終わったら呼んでくれ」

そうそっぽを向きながら言っただけ、部屋から出て行った

気づいてたのなら早く言ってくれてもよかったのに…

着替え終わりいつもの訓練着から一般局員の服装になる

「着替え終わった？」

ドアを少しだけ開けてユウナが顔を覗かせた

「あれ？かける隊長は？」

「後は私に任せるって言ってどっか行きました」

そう言っで私の手を握る

引っ張って無理やり立ち上がらせるまでわずか3秒の早業だった

「ちょっとお出かけしよ？医務室の匂いはつらいでしょ」

それから私の手を引っ張って走っていくユウナ

正直私は乗り気では無かったが何かしないと身体が、精神が壊れてしまいうさだつた

「あれ？師匠、覗きですか？」

ユウナがこつちを見ながらニヤニヤしながら言う

「違う。というかユウナもティアがここにいるってわかってたんだ
ろ」

するとバレたかみたいなの顔をしてドアに寄りかかっている自分の隣
に寄りかかる

「どうしちゃったんでしょう。本当に」

「まあ、だいたい理由はわかってるんだけどな。たぶんアグスタの
時のミスショットだろうな」

「それがあれを招いたと？でも誰も把握してないですよ？」

「ああ。誰も把握してないこそだ。ティアナは誰から責められ訳も
なく、自分の心の中で傷を受け続けて来たんだろっ」

「本当に、それだけなんですか？」

「ああ。たぶんな」

するとユウナは寄りかかるのを止めて自分の前に立ちはだかる

「それは師匠の予測でしかないんです。思い込み、机上の空論、勘
違い。その類いだと思います」

「だからどうしろと？」

珍しい

ユウナがここまで敵意をむき出しにするなんて

「今晚だけでいいです。私に話を聞きに行かせてください」

「…はあ。これ以上の悪化は無いだろうしな。六課のすぐ外にある茶色看板のカフェに行つてこい。まだ開いてるはずだ」

「…え、いいんですか？」

急に縮こまるユウナ

「ああ。同年代の方が話しやすいだろうし。お金はツケとけ。あ、でも条件がある」

「やったあ！で、その条件はなんですか？」

「ティアナからクロスミラージュと通信機を回収しろ。まあメンテナンスつて理由を付けたらいいだろう」

それは、一定時間ティアナに六課の前線メンバーから外れると言っているのと同意義だった

かけるはユウナとティアナが隊舎を出て行ったのを確認するとデバイスルームへ向かった

「入るよ。シャーリー」

「ん。何のよう?」

そこには水槽みたいなケースの中にカード状のクロスミラージュが入っているのが見えてひとまず安心した

「昨日完成したって聞いたんだが、どうだ?」

「うん。出来てるよ」

すると卓上に6つの塊が浮かび上がる

「バッテリーも変えたし、刃も軽くて鋭いタイプに。グレイプニルモードとフラガラックは残しといたよ」

「パーフェクトだ、シャーリー」

「感謝の極み」

「試運転は…いらぬか。よし。プレストウイング。収納しちゃって」

わかりました

プラスタービットを取り込み終わるとあたり一面の画面がアラート画面に切り替わる

そして隊舎内のアナウンスで指示があり、全員ヘリポートへ集合した

「これから出るのは私とフェイト隊長とかける隊長のみ。守護騎士達とフォアード陣は出動待機ね」

なのははヘリポートでみんなの前に立ち、作戦を説明する

「あと…、ティアナとユウナは？」

なのはが辺りを見回す

「それがティア、部屋にもいなくて。医務室にもいないんです」

スバルが不安そうに言う

まあ昼にあんな事があれば普通は自殺ものだからである

「ならティアナが来たら伝えて」

なのはが言おうとする前に口を挟む

「ティアナとユウナはちょっと野暮用だ。帰ってくるのは明日の朝だと思っただ方がいい」

「それは…なんでだ？」

ヴィータが首を傾げる

「まあ…あれだ。行くぞ、なのは！時間が無い！」

その直後シグナムに殴られた

「今どこにいるんだ？」

「えっと…、まあ、帰ったら2人に聞いて！大丈夫。心配はしなくていい。ちゃんと帰ってくるから。ヴァイス！道先案内は頼んだ！」

ヘリの操縦席から任せとけ！と威勢のいい声が聞こえた

勢いよく乗り込んだ

後からフェイトとなのはも歩いて乗り込みヘリは大空へ飛んだ

行き先は、海上。

目的はガジェットドローン航空型11機の破壊である

第40話 ティアナの戦い（後書き）

あれ？

予定シナリオとズレた

ユウナはスターズ5にしました

ライトニングに入れようかと思ったんですが訓練内容的にはこっちなかな？と思って

あとティアナ達と同年代つてのが最大の理由

アニメのあのシーンが今回のメインでした
なのはと仲直りのために何をするのか

しかもティアナ六課にいないからなのはの過去話聞けない事故

さて、どうするの！俺！

どうするの！ユウナ！

続きはWebで！

次回を、お楽しみに！

第41話 大切な物（前書き）

あなたの大切な物はなんですか？
白湯です

台風が来たかと思ったたらなでしこJapanが勝ってました

おめでとございませう

台風の過ぎ去った後の青空、夕焼け空、夜空
そのどれもが綺麗です

そんな嬉しい事は置いといて
ゆっくりとお楽しみください

では、ごうございませう！

第41話 大切な物

「かけるくん…、さっきのは」

なのはがかけるに声をかける
当の本人はそっぽを向いている

「いや。何も知らない。今は作戦に集中するんだ」

「私にティアナを出動待機から外れるように言わせないためにそう
したの？」

かけるは口を閉じる

「外れるって言ったなら、あの…、ティアナとの仲が悪くなるかもっ
て思ってくれたんだよね？」

フェイトは驚いた表情でかけるを見る

「たぶん、そのためにティアナは…」

「六課の外のカフェだ」

かけるがしぶしぶ口を開く

「え？」

いきなり何か変な事を口走るからフェイトは固まる

「そこにユウナとティアナはいる。でもカフェに近寄るなよ。あのままにしてくれ」

そっぽを向いて窓から外を見たままだった

「でも、夜の街は危ないんだよ？」

フェイトが真面目な顔で聞く

「大丈夫。ユウナを誘惑した暁には自分の子供が作れなくなるから」

「それって…逆に危ない気がするの」

なのはもちよつと笑い方が引きつっていた
まあ、あれはやり過ぎな気もするがな

「ティアナはクロスミラージュ持ってないけど、ユウナがフォーマルハウト持ってるし」

するとへりの速度が落ちている事に気づいた

「ん、どうした？ヴァイス？」

コクピットに行く

「これ以上は近寄れ無いです！ここから発進してください！」

リーダーにはちゃんとガジェットは反応している

数は11

まあ飛んですぐの所にあるから大丈夫かな？

「まあ、ちゃっちゃと終わらそう。あとはやて。盗み聞きは良くないぞ」

ヴァイスの肩についていた盗聴器を親指と人差し指で潰して破壊するすると空中ディスプレイにはやての顔が浮かぶ

「…小型盗聴器高いのに。いや、あのな。かけるくんが怪しいなーとか思ったりはしてないんで」

なんかはやてが黒くなった気がする

「まあ最初から聞いてたんでしょ。ならユウナ達には近寄らないでくださいよ。特に男性局員とか」

「わかってるって。まあみんな、頑張つて来てな」

Set up

はやてがそう言つと3人の服がセットアップされる

「リインフォースがバックアップに回るから何の問題もあらへんで！全力でやったり！」

「はい！スターズ1行きます！」

「ライトニング1、行きます！」

「スターズ0！行きます！」

そう言つて、風が冷たい空へ落下した
なんだかちよつと昔を思い出した

手を引かれて隊舎から出た先の目的地はカフェ”ユークリッド”だった

六課の隊舎の目の前にあり、六課の人達がみんな好んで行っている

「2名様でしょうか？」

店員が近寄る

ユウナはそれに黙つたまま頷く

「わかりました。現在禁煙席が開いていますのでそこに案内します」

「えっと…、じゃあ喫煙席が開いていますか？」

ユウナはそれを聞いて考えてそう指示した

「…？はい。では灰皿を後程お持ちしますね」

そのまま店員は喫煙席に誘導した

席に着くとすぐに灰皿が1つ運ばれた

お互い黙ったままで注文はコーヒーのみだった

「あの…、ユウナさんってタバコ吸うの？」

恐る恐る聞いてみる

「ううん。今は吸わないよ。あとユウナでいいよ」

「え。じゃあなんで喫煙席に座ったんですか？」

「喫煙者って臭いとかで毛嫌いされてるでしょ？だから店の奥に喫煙席を設置するんだよ。なおかつ入り口から遠いし」

言われて見て辺りを見回す

夜なのもあってか人はあまりいないし、厨房や入り口やスタッフルームからも離れている

「ここならある程度ならどんな会話してても大丈夫だよ」

「なるほどね…。んで、私に何が聞きたいの？」

「えっとね」

しかしユウナが話そうとした時にフォーマルハウトに通信が来た
ピピピと乾いた電子音が響く

それを無視してユウナは話をしようとする

「ユウナ。通信来てるわよ？」

私は今デバイスを持ってないからわからないがたぶん全体通信だろう

「あ、えっと……、師匠からでした。お金は気にするなどの事です」

ユウナはフォーマルハウトを見てそう言った

「そっか。ならいいわ。あと師匠って何？」

出会った時から思っていた

なぜユウナはかけるの事を師匠と言うのか

「師匠は…、高町さんは私の目標なんです」

ユウナはコーヒーカップを両手で覆い、水面に写る彼女自身の顔を見ていた

「ただ、破滅へと続いていく日常を止めて救ってくれたんです」

「あなたはそう、だったわね」

ユウナは戦災孤児だ

管理外世界でかける隊長が保護責任者で引き取っているんだ

「ティアナさんはいいですよ。私には無い物が全部ある」

「そんな事は、無いわよ」

コーヒーを一口飲む

砂糖も何も入ってないから苦いし熱い

「ティアナさんは頼れるお姉ちゃんって感じですよ。」

はにかみながらユウナは言う

「逆よ。私には兄さんがいて私は妹。でも兄さんは…もう」

死んだ

「あ、ごめんなさい」

「別にいいわよ。気にしてないから」

私の兄さん

執務官志望の兄さん

私が子供の時に任務の途中で犯人を取り逃がし、死んだ兄さん

その時の兄さんの上官の言葉が私をこうさせた

犯人を追い詰めながら取り逃がすなんて首都航空部隊としてあるまじき失敗であり彼の死は無意味だった、と

嫌だった

私は両親がいないからいつも兄さんばかりみていた
その兄さんが全否定される様が

だから決めた

執務官になって証明するんだって

「ティアナさんの目標は、その兄さんなんですわね」

「うん。でも、無理かもね」

「なんでですか？」

ユウナは首を傾げる

「六課って優秀なメンバーが多いじゃない。だからこの中でいくら頑張っても私じゃ追い越せない壁があるの」

「…才能ですか？」

「うん…。スバルとかエリオやキャロもだし、隊長陣みんなすごい才能がある。私が何十日とかけて考えて練習して習得した事をみんな一瞬でマスターするし、あなただってそうよ」

「私ですか？」

「うん。ユウナは決められた材料からの確な物を選んで成功を掴む力があるって、かける隊長が言ってた」

「…それは物資が無い戦争で培った物だよ。決してこんな場所で使っていないものじゃないよ」

コーヒーに角砂糖を1ついれてかき混ぜる

「ここはすごいんだよ。お金をたくさん払っても手に入らなかった水や塩が当たり前のようにあるし、肉なんて店に行けばある。いいよね。まるで私がいた世界が嘘みたい」

戦争だから物資が無くなるんだろう
一般人より兵士が優先される社会

でも、それは

「でも、でもそれはおかしいと思うよ」

胸が潰れそうになって息がつまるのをなんとかこらえて言う

「なんで？」

ユウナが何もなかったように聞き返す

「そんなのは才能の無駄だよ。せつかくあるんなら、使わなきゃ」

私にはそんな物は無いんだ

頼むから、才能がいらなとかいわないでくれ

凡人の私に

「じゃあ、あなたもちゃんとしてよ」

「えっ？」

「そんな死にそんな目で言われても私は揺り動かされないよ？いつものティアナ・ランスターでいてよ」

何をユウナは言ってるんだ

私は平気だ

「そんなにひどい目かな…私？」

「うん。もっとセンターガードなら周りを見回して周囲の確認してくださいよ」

周りを見る

あれから客は来ていない

前にある2つのコップ

私の目の前に座っているユウナ

「あなたにはあなただけしかできない事がある。それを見逃さない
てください」

「…私には見えないよ。凡人だしね」

「それでいいんです。どこかの王子様が言ったように、大切な物は
目に見えないんですから」

ユウナは真剣な顔から笑顔になる

「いつも訓練ばかり当たり前にこなして、見るべきものが見えなく
なってるんです」

「…ユウナには見えてるの？」

ちょっと皮肉をかけて言ってみる
しかしユウナは迷わず言う

「大切な物は人それぞれなんです。私の大切な物はティアナの大切な物じゃないかもしれません」

「だから、なんなのよ」

「師匠は、それが『夢』だと言いました」

ユウナは続けて言う

「私の友達もいいました『明日』『水』『平和』『過去』」

ユウナがその言葉を続けていく度にだんだん心の視野が広がる

チームを組んでいるスバル

訓練でいつも自分を見てくれるのはさん

「お父さんは『ユウナ』だと言いました」

死んだ兄さんも言うだろうか

大切な物は『ティアナ』だとか？

「ティアナの大切な物は、見えてきた？」

私の、大切な物は…

「私は、…私はなんなのかな」

目から一筋の涙が流れる

何でだろう。心の中を探すたびに涙が出て目の前がぼやけていく

死んだ兄さん
目標となった執務官

訓練校で仲間になったスバル
デバイス”クロスミラージユ”

今の日常

機動六課での日々

ユウナと一緒にいるこの時間

「見えなくてもいいんです。初めは見えないんですから。今からゆ
つくり考えよ」

「…うん」

コーヒーから出ていた湯気はすでになくなっていた

「8機目、9機目。撃破！」

3機のブラシタービットで作ったバインドでガジェットを捕獲して、
1機のブラシタービットの砲撃で撃ち落とす

2機のブラスタービットで作った盾で攻撃を防いで刀を使い本体を切り裂く

「10機目、撃破！ラストはなのは、お願い！」

フェイトが持ち前の速さでガジェットに先回りしてハーケンで切り裂く

「了解！中距離火砲攻撃、行きまーす！」

カートリッジを1発抜いてからのアクセルシューターを8つ放つ

なのは自身が指示を出してコントロールするもので相手が動いていても追尾して当たる

そして2、3発はかわされたが4発目以降全て命中した

「ガジェット反応消滅、増援…ありません」

ルキノからの全体通信で終わりが告げられる

「まあ、3分くらいか」

ブラスタービットを仕舞いながらなのはに聞く

「うん。かかりすぎかもしれないけどリミッターがかかってるからいいんじゃないかな？」

「久しぶりに3人だったしね」

フェイトもこっちに来る

「まあみんなお疲れ様。今日は撤退でええよ」

はやてから3人へ通信が来る
なのはとフェイトはハイタッチをする

「まあ、久しぶりだからいつか」

それに加わって自分もハイタッチした
昔見た光景に似ていたような気がした

ガジェットはいらないしレリックもいら
ない
ただただこんな日々が続けば良いなと切に願った

そのままヴァイスが操縦するへりに乗り込んだ

「お疲れ様でした！」

「うん。ヴァイスもお疲れ様。これからなんも無いからま
すぐ六課へ帰ろう」

ヴァイスにそう指示すると了解す！と声が聞こえてへりは六課に
向かった

「なのははこれからティアナとお話か？」

バリアジャケットを解除していつもの制服姿なのはに聞く

「…うん。私がやりたかった事をちゃんと伝えなきゃって、思ってた」

「ま、なんだかんだでなのはが言うのが一番説得力あるからな。応援はする」

「無茶したらどうなるかって事も教えないとね」

フェイトはなのはを見ながら言う

「うん。だから全部話す。あの事故の話もするの」

なのはが飛べなくなるかもしれないと言われたあの事故
雪の降る夜に起きた事故

「まあ、何にせよ。明日だけだな」

「みんなだけ楽しそうに会話してズルいと思うな。私は」

はやての顔が空中ディスプレイに浮かぶ

「事後処理とかは大丈夫なの？はやて」

フェイトが心配そうに聞く

「大丈夫や。グリフィスクンが全部引き受けてくれたんよ」

「ご愁傷様です。グリフィスクン」

「ほんで何の話してたん？恋？私の魅力？ティアナの話？」

「正解があるが他の選択肢は無いだろう」

そう言うとはやてが口を尖らせる

「なんやねん。恋とかしてもいいやん。19やで。彼氏いない歴実年齢と一緒になんで。まだ、き、き、キスもしてないんで！」

恥ずかしいなら言わなければいいのに

「大丈夫だよ。はやて。私もだから」

フェイトは画面にガッツポーズを取る

「わ、私はあるよ？一回だけだけど」

そんなこっちを見てアピールしなくても

「…これって俺も言うの？」

へリの中がだんだんカオスになっていく
俺も今んとこいないんだけどな…

「当たり前やろ！」

「俺もないよ。まあ来年でハタチ（20歳）だからそろそろ欲しいんだけどな」

「わ、私はかけるみたいなのタイプだよ？あと、料理とかできる旦那さんっていいなって」

フェイトがもじもじしながら言う

「大丈夫。姉としてフェイトちゃんにかけるくんは渡さないの。私は子供の教育がちゃんとできる人がいいな」

なのはがフェイトの肩に手を置いて言う

「大丈夫。なのはは妹だからな」

「何が大丈夫なんか教えてくれてもええと思うな。私は決断力がある人だな。優柔不断はいややで？」

はやてがちらつとこつちを見る

「俺は……、なんだろ。特にないかな？強いて言うなら、嘘をつかない人かな」

言った瞬間フェイトが俺の肩を押さえ逃げれなくする

「わ、私は……、いい奥さんになる自信があるよ？」

「いやいやいやいやいや。手順飛ばしすぎだから」

「フェイトちゃん！抜け駆けは駄目なの！」

なのはがフェイトを引き剥がす

「私は嘘つかないよ！あとなんではやては騎士甲冑？！」

「フエイトちゃん。動かんでよ。これ外したら地上本部に直撃するからな」

「待て待て。はやて何しようとしてるんだよ。杖を下ろせつて。あとなのはは納得した表情でレイジングハートをフエイトに向けるな。たぶん直撃でヘリが墜ちるから」

たぶんこれははやてなりの場を和ませる空気作りだったのだろうな。そう考えてなんで本気で答えてしまったのか後悔してしまった

…ま、いつか

ちなみに着陸したあとヴァイスが隊長達の生の恋バナごっつあんでした！と敬礼していたのでとりあえず海に落としといった

あいつ、カナヅチだったのか

後で知った資料にて

ヘリのパイロットは緊急用のパラシュートやら身体についているのが水を吸ったらしい

…ごめん、ヴァイス

その後なのははその日の夜帰ってきたティアナと話をして仲直りを果たしたらしい

過去話をシャーリーがしたのは誤算だったらしいが

ユウナはなんだかやりきった顔だった
しかも気持ち悪いくらいの笑顔でいた

「師匠！私、頑張りましたよ！」

「ああ。仲直りは成功したらしいしお疲れ様」

「はい。あとお金払ったとききました」

するとユウナの手から一枚の紙が手渡される

…領収書？

「コーヒー2つと…それだけ？」

驚いた

大量に食い込んでると思ったのに

「違いますよ。よく見てください」

ひっくり返して裏を見る。

そこにはボールペンで書かれたティアナの文字があった

『ありがとう。ユウナ』

それを見てユウナの笑顔の意味がわかった気がした

機動六課にきてまだまだ日は経っていないが、ここはユウナにとっていい場所になりそうだ

そう確信してユウナの手にその紙を返した

第41話 大切な物（後書き）

ティアナ「ねえ、『大切な物は目に見えない』ってどこの王子様の話だったの？」

ユウナ「ん？星の王子様だよ？」

テ「へ？」

ユ「サン!! テグジュペリが書いた『星の王子さま』だよ!」

なのです。

ほっこりする話なのでコーヒー片手にゆっくりと読んでみてください

597

シリアスパートがあるから少しくらい楽しめる話を思っへりの中の様子を書いてみました

シリアスパートならシリアスで統一しきった方が良かったかな？

でもへりの中書いててちょっと楽しかったのは秘密

久しぶりに戦闘シーンが（5行くらい）あつたけどなんかstri

k e r s 編になって戦闘パートが減ってさみしい…

次回は…、出張任務編かな？

時期はずれ込んでいるけど大丈夫かな？

次回をお楽しみに！

第42話 地球へ（前書き）

夏休みボーナスがかなり来ました
白湯です

日頃の行いの成果か…！

しかし最近趣味のための出費が少ないから貯金
近い将来、車を買うんだ…！

出張任務前編

では、どうぞー！

第42話 地球へ

「こんな事って、あるんだな」

これがミッションプランを見た第一感想だった

「目標はロストログアの回収。まあ見つけて封印でええやるな」

はやては持っていた書類を机に置く

「じゃあ作戦決行は明日だね。フォアード陣に連絡を入れとくね」

なのはは早速通信でフォアード陣を呼び寄せる

「ガジェットが出たりする非常時の時は陸士部隊に任せれるように
ゲンヤさんに話をつけてくるね」

フェイトは懐からクルマの鍵を取り出すとそれを右手で握りしめる

「なら、行くで！」

そう次は遠征任務

第97管理外世界へ行く

「私たちの故郷！海鳴市へ！」

「おー！」

女子隊長達はみんな力いっぱい拳を天に突き上げていた

「間違い、じゃないんだよな」

その中で理解が遅れる隊長1人
そんな隊長を無視して続く

地球へ一時戻る事になる任務へ

朝

地球へ行くために転送ポートに六課メンバーは集まった

メンバーはフォアード5人、隊長4人、守護騎士4人、リインフォ
ースの合計14人

「みんな準備できたかな？」

なのはが今日は私服のフォアード陣を見て言う

「はい！」

「なのはさん達の生まれ故郷か…、どんな所なのかな？」

スバルはワクワクが止まらないらしい

昨日も楽しみであんまり眠れなかったとか

「…ん？キャラ口どうしたの？」

エリオがキャラ口を見る

キャラ口は画面を見て固まっている

「魔法が、無い街なんですね」

「え」

ティアナも固まっていた

なのはがユーノから魔法を覚えてもらった街

自分がブレストウイングをもらった街

ジュエルシードが海鳴市に落ちたのをきっかけで、出会ったフェイト
闇の書がたまたまはやてを主とした街

「まあ、偶然でこんな事になったのか？」

ちらつとなのはを見る

「運命って言った方が乙女の心は揺り動かされますよ？師匠」

ユウナはまともな服が管理局の制服しかなかったからティアナから
服を借りている

「高能力者をホイホイ排出した街を運命でまとめるのもどうかして
るだろ…」

シグナムも若干呆れている

「ま、いいじゃねえか。結果オーライで」

ヴィータがそれを言ったのを最後に転送が開始された
あと結果オーライって使いどころ間違ってる気がしたが深くは追求
しないことにした

「…懐かしいなここは。やはりこの街の空気は素晴らしい」

リインフォースが背伸びをしながら言う
お昼頃に着いた場所は山の上だった

昔、なのはとここでよく練習していたのを思い出す

「ああ。いつまでたってもここは変わらないな」

ザフィーラが人型ではなく狼（自称）の方になって喋べる

「じゃあ、ここで一回おさらいするぞ」

はやてを中心に円陣を組む

「今回はロストロギアの回収が目的や。とりあえずどこにおるか
はわからんけど、この街の中にはいるらしい。自立行動タイプだから

サーチャーを所々つけて網を張る。引っかかったら急行して封印。わかった？」

はやてが矢継ぎ早に言う

「まあ、詳しい事はミッションプランを見ろって事？」

確かロストログアの詳細とか書いてあったはず

「そやで。まあまずは荷物置きに行こか」

そう言つてサムソナイト（ガラガラ？）を引くはやてにみんな着いて行った

「行き先はどこだ？はやて」

「民間協力者のコテージや。まあ海鳴市で民間協力者って言うたらだいたいわかるやろ？」

ああ。ならあの2人にまた会えるのか
中学卒業して以来かな？
会つのが楽しみだ

「なのはー！こっちこっちー！」

「フェイトちゃん、はやてちゃん。お久しぶり」

やっぱりだ

アリサとすずかだった

「2人ともごめんな。大学とかあったらろくに」

シヨルダーバッグを地面に下ろして挨拶をする

「いやいや。みんなに会えるなら大学くらい休むわよ。ね、すずか？」

「一応今日は先生がなくて休校だったから欠席はつかないから大丈夫だよ」

「なら良かった」

まあ欠席とかは、なのはとかが許しそうに無いしな

「あと後ろのちびっ子達は？あ、リインフォースさんまで居るんだ」

アリサが俺の後ろを指差して言う

「まあ、自己紹介とかは荷物置いてからでいいか？」

わかった、と頷いてみんなを部屋に案内するアリサ

…コテージ？

これホテルでいいんじゃない？

一通り自己紹介を広場でする

キャラはコテージそばの湖を見て驚いていた

まあ、珍しいのかな？

「さて。もうおやつ時間も過ぎたし、任務開始といきますか」

なのはは立ち上がってみんなに指示を出す

「フォアード陣とシグナムさん達と私でサーチャーの設置に回るよ」とするとポケットから3cmくらいの小さな灰色の箱を取り出す

「ロストログアに反応してアラートをみんなのデバイスに送るようになってるから、市街地を中心に設置していくよ」

「はい！」

「じゃあ、出発！」

なのははみんなの先導を切って歩いていった

「…残った私達は何をしたらいいんだろ？」

フェイトはみんなが思っていた事を言ってしまった

「まあ、晩御飯の用意しよか！腕の見せどころやで！」

腕まくりを始めるはやて

バーベキューだから焼くだけなのでは？

「下ごしらえも必要って事よ」

アリスは颯爽とエプロンを装着して台所へ行く

「じゃあ、かけるくんは網とかのセッティングよろしくね」

「了解」

吐く息が白くなるほど寒くない

湖が凍るほど冷え切っていない

でも雲一つないこの空の中で1人だけというのは、なんだか心の中が澄み切って冷たくなるような不思議な感覚があった

「スバルは野菜を食べろ。俺が肉食ってやるから」

「嫌です！私の胃袋はまだまだ大量のタンパク質を求めてるんです！」

そう言っただけでまた網の上からほどよく焼けた肉を箸でつまんでいく

「エリオもなんか言っただけでやれよ。っってお前も肉しか食ってないのかわよ！」

「食べてますよ！キャロの人参とか！」

好き嫌いは良くないぞ。キャロ

「逆にティアナは野菜しか食べないんだね」

ユウナがティアナの皿に一切れの肉を載せる

「いや。まあ食べるわよ。でも…まあ、うん」

なんだか歯切れが悪いティアナ

「なのははちゃんと食べるんだな」

「うぐつ、まあ食べちゃったエネルギーは後で身体を動かして消費したらいいし！」

「なのはちゃんはまだまだだね」

はやてが腕を組んで言う

「バランスよく食べたならこれ一食だけで急激に太ることは無いんや

で！」

ドーンと音が出そうなほどドヤ顔のはやて

「…みんな、体重気にしてたのか」

なんだか急にみんなが乙女らしく見えたがスバルを見てなんだか残念な気分になった

「さあ、みんなで丹精込めて作ったホイル焼き。しっかり食べてね」

網の上で焼かれていい匂いが漂っていたそれを開ける

「なるほど。魚か」

中には鮭や野菜が入っていた

骨抜きは済んでいるらしくみんなそのままかじりつく

「熱っ！ティア、水〜」

スバルが涙目でティアナに泣きつく

ティアナはいはいと軽くあしらってミネラルウォーターのペットボトルを渡していた

「でも、これが旨いんだよな」

ホイル焼きなので魚の旨味がしつかり閉じ込められて、噛めば噛むほど味が出る

「さすがはやてちゃん。料理上手だね〜」

なのはにも大絶賛のようだ

「ありがとうな、なのはちゃん。まだまだあるからどんどん食べてな」

そして鶏の串焼きなどを食べてみんなでもたまた盛り上がった

食べ終わり、網の焦げをたわしでこそぎ落としたりて片付けをしていた

そしてコテージには風呂は無いらしく、近所のスーパー銭湯に行くことに

しかしザフィーラは湖で水浴びするらしいが

「コテージの見張りも必要だろう」
なるほど

それから歩いて銭湯へ

…あれ？アリサもすずかも来るんだな

お金を払いいざ出陣

しかし男湯と女湯の分かれ目で事件は起きた

「僕は男湯に入ります！」

エリオがこう宣言したのだ

「え、なんで？エリオ君もこっちに来ようよ？」

キヤロが訳が分からないよという感じに首を傾げる

「そっだよ。エリオ、みんなで入ると楽しいよ？」

フエイトも押す

…あれ？

エリオが向こうに行ったら俺男湯でひとりぼっちじゃない？

「いや！でもアリサさんとか居ますし！」

「ん？私は気にしないわよ。ね、すずか？」

「うん。だから来ても大丈夫だよ」

2人からのOKがあっさり出てしまった

「だからあたしも前からエリオの髪洗ってあげるって言ってたじゃない」

スバルもなんだかすごい乗り気である

まあエリオならちゃんと空気を読むだろうな

「で、でも僕は男湯に行きます！」

そう言って走って行ってしまった

しかしはやてがじつとこっちを見る

「…いや。俺は女湯に入る度胸は無いからな。というか年齢制限あ

るし」

そう言つて看板を指差す

「大丈夫だ。主の裸体を見た瞬間に私が亡き者にしてやるから安心しろ」

そう言つて夜天の魔導書を手元に召喚するリインフォース

「大丈夫だつて。少しは信用しろよ」

そう言つて男湯に入る俺

なんだかキャロが熱心に看板見ていたが何か気になつた事があつたのだろうか？

「服脱いたらこの籠の中に入れるんですか？」

ユウナが羽織つていたカーディガンを脱いでなのはに聞く

「そうだよ。ちゃんとみんなのと区別がつくようにしといてね。あ、デバイスは置いていっても大丈夫だよ。たぶん誰も盗まないから」

「はい」

ユウナが上の服を脱いだ時に異常が起きた

「えっ…？お風呂は最初かける隊長と入ってたんですか？」

キャラコがユウナを驚いた表情で見上げる
みんながキャラコの発言を聞いて飛んでくる

「うん、そうだよ。一緒に行動するようになってから師匠が始めの内は一緒に入ってくれて」

ユウナの肩をはやてが抑える

「そ、そそれはいつや！」

「えっと…、まだあれから1年経ってないですよ？」

「かけるくん…、私達とは一緒に入ってくれないのに」

なのはがフェイトをちらりと見る

「フェイト隊長！落ち着いてください！バリアジャケットを解除してください！」

フェイトはハーケンを持って隣のかけるをいつでも襲撃できるようにしていた

それをティアナとスバルが押さえる

「ちょっと詳しく話を聞かせてなの！」

もうフェイトちゃんは無視しよう

そう決心したのはがユウナに詰め寄る

「いや、あの、その。恥ずかしい事なんですけど…」

「いや。そりゃ恥ずかしいでしょうね」

フェイトを落ち着かせてティアナも参加する

「ま、まだ、無かったんです。あの時まで…」

「もったいぶらなくて良いよ。誰もないよ？そんな経験」

フェイトが聞く

それにユウナがため息を1つついて答える

「お風呂、知らなかったんです」

「へ？」

スバルが声を出す

「だから、師匠が手取り足取りしっかりと教えてくれたんです」

「…まあ、かけるくんも男の子だしね。たまには女の子の身体みたくなるのかもね」

なのはがそう言う

なのはは本人にとってはジョークのつもりだった

知らない理由は文化などはあるだろうが最たるものは、戦中飲み水ともなり得る風呂の水がもったいないからだろう

だからはやてもフェイトもしまつたみたいな顔をしているのだろう
だがユウナはそんな気配りを無視して答える

「だって師匠ですよ？私みたいな子供の身体みて興奮するわけ無い
じゃないですか！」

「…それはそれでちょっと聞いてみるとあかんかもな」

はやてがそう言ったのを境にみんな風呂に入った

服を脱いでタオルを巻く

なんだか一瞬殺意を感じたが気のせいだろう
地球なんだし

ドアを開けるとまずまずの広さの湯船があった

それを横目に身体を洗いにエリオの所へ行く

「うわぁ…。かなり筋肉ついてるんですね」

エリオが俺の腕やら腹を見て言う

「まあ、昔から扱かれてたならこうなる。あ、でも足にはなかなか
付かなかったな。まずは腕からだった」

剣道やってたからだろう
移動は魔法戦の時は飛行しか使わないから足の筋力が衰えた時は泣きたくなった

「へえ…、僕もそんなになりますかね？」
エリオが腕周りの筋肉を揉みながら言う

「まあ、身体が出来たら自然となるさ。あと筋トレしすぎるなよ？
筋トレは筋肉を溶かしてるんだから」

溶かした筋肉が強化されて筋力が着くのだ
やりすぎたら筋肉が無くなるに決まってる
それは一種の病気扱いにもなっている

「はい、わかりました。ってあれ、リストバンド外さないんですね？」

俺の右手についた黒いリストバンドを見てエリオが言う

「ちょっと俺の場合は特殊だな」

リストバンドを外そうとするといくら引っ張っても取れない

まあ実態はユニゾンしてるからブレストウイングがデバイスを手放したくないからだろうが

メンテナンスとか強化の時しか外れてくれない

「僕のストラーダとは違うんですね。あ、誰か来たみたいですよ」

曇りガラスの向こうに見えるのは身長140cmくらいの人のシル
エツト

髪は…ピンク？

「エリオくん。遊びに来たよ！」

キヤロがタオルで身体を隠しながら入ってきた

「キヤ、キヤロ?!ここは男湯だよ?!」

「あの案内板には年齢さえ大丈夫なら男湯と女湯の行き来は自由っ
て書いてあったんだもん」

そう言っつてエリオの隣に座り身体を洗い始めるキヤロ

「まあ、後は仲良くやれよ。エリオ」

とりあえず付き合ったらいいのと思っつて露天風呂に行くことにした

「いいじゃないかお風呂で女の子ときゃっきゃうふふ出来て。大人
になっつてそれやっつたら融合騎に殺されかけるんだぞ?」

「それ、はやて部隊長の場合じゃ」

「まあ役得だと思っつけ」

そう言っつて外に出た

空を見ながらの風呂で落ち着きたかっつたのに中から聞こえるティ
アの叫び声やエリオ達の声でなかなか難しかった

…叫び声？何してたんだろうか

それからしばらくして風呂から出て100円で買ったコーヒー牛乳を飲んでみんなを待っていた

みんな出てきた時には瓶は空になっていた。
俺はジャージだったが浴衣の人も少しいる

「…ユウナが羨ましかったのか？」

黒メインに黄色の水玉の浴衣を着ているフェイトに聞いてみる

「い、いや。別に、ね？」

何がね？だ

白に青の水玉の浴衣を着ているはやてを見る

「せっかくだから着たいやん！」

ちなみにユウナは浴衣だった

…あ、寝間着がジャージしかないからか

「ティ…アナはなんでこんな暗いの？」

なんだか影が入ってる

黒光りするGでも見たのだろうか

「ティアはいろんな闘いを乗り越えたんです。聞かないであげてく

ださい。はやて部隊長のせいですから」

スバルがフォローに入る

だとすると…、あ。はやて…、揉んだな

「ティアナ。強く生きるよ」

そう言っつてティアナの肩を叩いてスーパー銭湯を後にした

スーパー銭湯から帰ってくると、フォード陣はひとつの部屋で集まり談笑していた

まあ、夜更かししなければ何をしてもいいが

守護騎士達は久しぶりに5人で話をして寝ると言っつて部屋に籠もってしまった

俺もすずか、アリサ、なのは、はやて、フェイト6人で久しぶりに話をしたいとこの事で集まる事に

それからたくさん話をした

今の話、いろんな世界を旅した時の話、大学の話… e t c e t c

そして12時を回った所でお開きに

アリサ達は普通に明日から大学なのだから備えてもらわなければ

第42話 地球へ（後書き）

…地球に行くんだから地球でしかできない事をもって思ってたのに

そして出番があまりないアリサとすずか
いや、増やそうとは努力はしたんですが…
すいません。力不足で

あ、気づいてるかもですが
自分サウンドステージ聞いてません
だいたいこんな感じ、で書いてます

では次回もお楽しみに！

第43話 星が瞬く夜に（前書き）

素麺が合計40束自宅に送られてきました
白湯です

どろちって食べると…！

今回は前編と後編の間にある話
いわゆる、中編的な立ち位置

まず最初に謝るときです

ごめんなさい

では、どろちー！

第43話 星が瞬く夜に

じゃんけんで負けたフェイトがコーヒーを買いに行ってる間に外に出てお風呂で火照った身体を冷やす

風は無いが、星はある

湖のそばにあるベンチのど真ん中に腰掛ける

「ここにいたんだ」

浴衣姿のなのはが来た

髪はいつものサイドポニーではなくて結んでない自然体だった

シャンプーの匂いが鼻にふわりと来た

「ちょっと身体冷ましてて」

「せっかくお風呂入って温まったのにそれは無いと思つた」

しばらく無言

それからこらえてた笑いが出た

「星が綺麗だね」

そうやって俺の左に座る

「冬だから空気が澄み切ってるんじゃないのか？」

「うん。でも、それだけじゃない気がする」

しばらく空を見上げる

それから前を見ると湖にも星と月が写っているのに気づいた

「今まであまりこんな話した事はないんだけどね」

なのはが空を見上げたまま言う

「私、かけるくんに会えて良かった」

星からいきなり自分の話題になり驚く

「えっと…、なんで？」

「私が無力だった日常が変わったのは魔法のおかげ。その中で何回となく壁にぶつかっても助けてくれたのはかけるくんだった」

「入局2年目の冬。私が撃墜されてから看病してくれたのはかけるくんだもんね。歩けない私をいつも手伝ってくれて、自分が大怪我負っても隠して病室に来てくれたり」

「あれは…、なのはに比べたら軽いものさ」

「ううん。見ているだけとは言ってたけどそれだけで私は嬉しかった」

こっちを見る

「かけるくんは私をどう思ってる？」

「どっつて…」

なんだ

なんだか中学の時にこんなシチュエーションが恋愛小説にあった気がする

「私はかけるを最初は興味本位で見てたよ」

フェイトの声が後ろから聞こえた

ゆっくり振り返る

「…フェイト？」

うん、と頷くフェイト

その後ろには舌を出しておどけるはやて

フェイトがコーヒーやジュースの缶を入れた袋を木陰に置いてそのまま右に座った

「何があっても私の前に立ちはだかり続けるし、何が何でも私を庭園から連れ出そうとしたもんね」

出会った時の話が

「フェイトちゃん…。どこから聞いてたの？」

なのはよ

聞くべき所はそこか？

「なのはの事故の話から。私も看病に行っただってツッコミをいれようとしたんだよ？」

「私は気づいたらそこにかけるくんがいたって感じなんかな？」

はやてが後ろからゆっくり抱きしめてくる

胸が背中に当たる位置にありその柔らかさを感じる

はやては膝立ちしてるのか？

というかはやても聞いてたか…

「リインフォースもみんな助けてくれて、私も助けてくれた」

腕に力が加わる

「私の夢も、もらってくれた」

はやてはさらに身体を密着させる

「はやてちゃん！あの、そろそろ離れよ？」

「今日だけ無礼講でええやんか。少しだけこうさせてくれへんか？」

「はあ…。今日だけで。部長長つても疲れるんだろ」

「じゃあ私も、これくらいはいいよね？」

フェイトが右肩に頭を載せる
そして右腕に自身の腕を絡みつかせる

「…いいぞ。もう今日は部隊長お墨付きの無礼講らしからな」

「じゃあ、私も…」

なのはもフェイトと同じようにする

結局4人固まってしまった

俺は身動きを取ることができず空を見ていた

「そういえばユウナちゃんから聞いたんだけど、一緒にお風呂入ったんだよね？」

なのはが意地悪するみたいな笑顔で聞いてくる

…ユウナ、あれを言ったのかよ

「不可抗力だ。あいつはいろいろな常識から外れてるからな。まずはそこから直していかないとな」

「ふーん。ユウナちゃんとは入って私達とは入らないんだ」

なのははそう言うとフェイトとはやては期待に満ちた目で見る

「…え、入って欲しいのか？」

フェイトに聞いてみる

するとフェイトは目をそらす

「…かけるがどうしてもって言うなら入るよ？」

なんだか腕から直接来るフェイトの体温が熱いたぶん今顔真っ赤なんだろうな

ちよつとからかつてみたくなつた

「久しぶりにみんなで背中流しつことかしてみるのはどうや？」

はやての声が後ろから聞こえる

「じゃあフェイトが入りたいって言ったら入るかな。4人で」

「ふえ?! は、は、恥ずかしいよ」

急になのははもじもじする

「いいじゃないか。昔はよく入ってたろ？」

「う、そうだけど、ただとだけど」

なのはが頬を腕に押し付ける

あ、なのは顔真っ赤

ここは冗談だよって早めに言つとかないとまずい事になりそうだ

「い、いいよー」

フェイトの裏返った声が聞こえる
あ、やばい

「でも！私の身体ジロジロ見て興奮しないでよ！」

「いや、待つんや。フェイトちゃん。興奮してもらわなかったら逆に困る事になるで」

はやてが言う

「うぐっ、な、なら！多少なら、興奮してもいいよ？」

それを言っただけでフェイトは身体を更に密着させる
腕にフェイトの顔だけでなく胸の感触まで来る

「はやては恥ずかしがったりしないんだな？」

ちょっと思ったので聞いてみる

「そ、それはな。言われたら自覚してまうから言わんかったけど、
わ、私も恥ずかしいもんはあるんやで？そ、そういうかけるくんは
どうなんや！」

はやてが後ろから頬をつついてくる

「いや、そりゃ恥ずかしいけど、冗談だとは思ってたり夢じゃない
のかな？とも思ったり。あ、あとみんな。その…、む、胸が当たっ
てる」

「あ、当ててるやで？その、かけるくんが不能だったら困るなって

…みんなで話し合って」

はやてが言う

「わ、私も、お風呂入ったらこれくらいあるかなー、って思っ
て。その…、訓練変わりに」

フェイトがそう言う

「わ、私ははやてちゃん案で」

なのはが言い淀む

それから頑張っつて不能疑惑を解消しようといういろいろ話しをしたら
本の線が空に伸びる

流星星に気づいたのは自分だけらしい
お願い事を三回唱えたら叶うらしい

自分の願い事は昔に決めたまま変わらない
みんなの夢が叶いますように、だ

話が終わって静かな時間が続く

この夜を自分は楽しめたのだろうか

わかってる

いつか選ばなきゃいけない日がくる事くらい

俺はみんなが好きだ

でもそれは恋とか愛とかの好きじゃなくて、友達としてだ

それはみんなもそうなんだろうと思う

なのは兄として好きなんだろう

フェイトは友達として好きなんだろう

はやては恩人として好きなんだろう

それらは愛や恋では無い”好き”

でも憶測でしかない

真実は彼女達の胸の中にしかない

自分はどれを選んだら彼女達の夢を叶える事ができるのだろうか

しばらくそんな事を考えているとはやての腕から不意に力が抜けるのを感じた

「どうした？はやて」

「いや。みんな寝てしもうたなって」

振り返るとコテージの明かりも無くなっていて、隣にいるフェイトとなのはも静かに寝息をたてていた

はやては浴衣についた土を払い自分の前に立つ

「ほな、そろそろ帰るか」

理性的にも危なかったので内心助かったと思いつつ立ち上がる

コテージまでの距離はかなりあったが寝ている2人をおんぶに抱っこで連れて帰る

上にいるフェイトがずれ落ちそうになるのをはやては危ない危ないと言っつて押さえる

なのは俗に言うお姫様抱っこにした

普段したら絶対起こられるのに、とはやてと笑いながらコテージに戻った

2人をベッドに横にして部屋から出て行く

するとはやてもついて来た

何かまだ言い足りない事でもあったのか？

部屋の電気は切ったままにしておいた

もう目は夜の暗さに慣れてしまったから毒だろうと

はやては少し大きめのベッドに座った

自分は椅子に座ろうとしたら無言のままはやての隣に空いてる左側

のスペースを叩き始めた

ああ。そこに座れと

はやてがこつちを見たまま目をそらそうとしない

「…どうした？はやて」

座るとはやては口をゆっくり開いた

「あの…、な？なのはちゃんばっかり自分の思い伝えてズルいんやないかなーと思ったただけなんやで？」

「いいよ。無礼講なんだろ？」

半ば諦めつつそう言う

しかしはやては意を決して聞いてみる

「実際の所、かけるくんは不能なん？」

「違っつて…」

頭を抱えるかける

「なら良かった」

その姿を見てくすりと笑うはやて
そう言っで一息つく

「私はずっとひとりぼっちだったからな、病気で死んでまうことく

「らいは恐くないと思ってたんよ」

「まだはやてが闇の書を知らず、魔法も知らなかった時か」

「せやけど、今は違う。守りたい日々があつて、幸せにしなければならん人達がいる。みんなのために私は生きる。笑顔でいよう」そう言つてこつちを見る

しかし笑顔では無くて、今にも泣きそうな顔だった

「私はみんなのために、みんなの幸せのために生きとつたんに……。結局みんな巻き込んでしまった。六課の設立だつてみんな喜んで参加してくれたけど。フェイトちゃんはスカリエツティの搜索、なのはちゃんは教導。かけるくんは管理外世界でのお仕事。それを全部止めさせてしまつたんよ」

泣き声に変わる

「私は、他人様に迷惑かけんと何もできんのかな」

そんな事をいうはやてを思い切つて抱き締める

「なんだかこうしないとはやてが崩れて無くなつてしまひそうだったから」

「違うよ。みんな望んでここに來てる。俺もだし、なのはも。スバル、ティアナ、エリオやキャロもみんな六課が好きなんだ。だから居るんだ」

はやての涙を指で拭う

「ユウナはここで自分を探してる。彼女には何も無い。0なんだ。」

ユウナにとって六課はもう掛け替えの無い物になったんだ」

「…ほんまか？」

掠れるような声を絞り出してはやては喋る

「ああ。だから笑ってくれ。部隊長がそんなんじゃ、六課みんなが悲しくなる。笑顔になるためならなんだってしてやるさ」

「…うん。ありがとう、…ありがとう」

はやてはそう呟いて腰に腕を回して抱きついてきた
落ちて着くまでこのままでいてあげようと思った

はやてが泣き疲れたのか、寝てしまったのを確認して自分も寝た

星が瞬く夜はあと数時間で覚めてしまう

そしていつもと同じように日は登る

それまでの間はふだんなかなか取ることのない休息の時間となった

第43話 星が瞬く夜に（後書き）

…脈絡無さすぎですよ

次の段落からは一気にナンバーズとかの話になるからほのぼのとい
うか、イチャイチャはここにしか挟めなかったんです

かけるくんはハーレムルートには行かせない…！（作者の意地）
誰を選ぶかはまたおいおい

はやての内心に溜め込んでいた気持ちを今の内に消化しとかないと
後々に影響する気がしたんで、ちょっとはやてパートが長くなった

そしてフェイトパートが短くなった
フェイトファンの皆さんごめんなさい

なのはも微妙な感じですね

今回は一夜明けた後編…！
さて、ロストロギアどこ行った！
では、お楽しみに！

第44話 翠屋へ（前書き）

アナログ放送終了しました
白湯です

親からの電話

「テレビが見れなくなっただけど…」

そういうのは電気屋に電話してください
というか素麺25束送る暇があるなら地デジかshとしてよ

出張任務編最終章

最初はリインフォース視点から

では、どうぞ！

第44話 翠屋へ

夜、守護騎士達と話を終えて寢床についた

本来睡眠や食事は必要無いのだが、ブレストウイングが書き込んだプログラムには人間らしさが加わるようになっていたらしい

感情のプログラムは主はやてが作ったらしいが

それらのプログラムは融合騎であり管制人格である私には影響されなかったらしい

「みんな、いい寝顔だな」

ぐっすり寝るみんな

前の主の時には考えられない光景だった

しかし不意に視界が濁る

「…涙？」

私が泣いてる？

いや、主が泣いてる

痛みからではない

「悲しみ？」

何があつたかわからない
とりあえず夜天の魔導書を召喚して部屋を出ようとする

すると涙が一気に増える
しかしなぜか安堵する

「…なんだ」

この安心感は

なんだか落ち着く

「…心配のしすぎか」

そう思って日々の日課となつてしまつたレポート書きに移つた
最後にこの事を少し書いた

「まずい…」

昨日はあのまま寝た
それがまずかつた

「なぜ、なぜはやてを部屋に送らなかつたんだ…！」

はやてが俺の隣で寝ている

リンフォースの昨日銭湯で言われたセリフを思い出す

『主はやてに何かしたらラグナロク・ブレイカーですよ？あ、魔法効かないでしたね？ならブラッディ・ダガーで刺しますね』

なんか少し違う気がするがやっぱり倫理的にもヤバいだろ

部隊長と一緒に夜を明かしたなんていったらなんてゴシツプが飛んでくるかわからない

今の内に…、はやてをなのは達の部屋に送るしかないか

時間は5:30

普段早起きしといて良かったぜ

こつこつ時に役に立つ

音を殺しつつドアを開ける

そしてはやてをお姫様抱っこで抱えて起きないように周りに気づかれないように足音が立たないように歩く

どうやらみんな起きてなくてぐっすり寝てる様子

セーフだ！

部屋に侵入してはやてをなのはとフェイトの横に川の字になるように並べる

これで大丈夫だ

そしてベッドから離れて廊下に出たときに事件は起きた

「…何をしている？」

リンフォースだった

そして無言でこっちについてくる

足音のコツコツと言う音が嫌に耳に響く

その間にいい訳を考える

「いやいや、決してやましいことなどしてなくて俺はただ」

言っている途中に夜天の書の背で殴られた

ドゴンと鈍い音が廊下に響く

あ、本にそんな使い方あったね…

そして廊下にて本日2回目の睡眠に入った

朝ご飯のクロワッサンを食べ終わりセンサーに反応が無いことを確認してなのはが言う

「今日はちょっとみんなを連れて行きたい場所があるの」

「昨日の銭湯みたいに楽しい場所ですか？」

キャラはまだ食べ終わってないらしくパンを千切りつつ聞く

「うん。たぶんみんな楽しめるよ。ね？はやて？」

フェイトがはやてに聞く

はやては何か考え事をしていたらしく少し間があってから答える

「そやな。あそこなら問題はなんも無いしな。行けるで」

「まさか、あれか？」

恐る恐る聞く

「あれ？」

スバルが聞き返す

「うん！私達の両親がやってる喫茶店、翠屋だよ！」

地球に来るって決めたときに貸切予約してたなるほど。このためか

「ここがなのはさん家の喫茶店か」

スバルが翠屋を見上げて言う

コテージからバスなど使ってわずか15分だった

ドアを開けるとカランカランとベルがなり歓迎された

「おかえりなさい。かけるくん」

「ただいま、母さん」

「あ、なのはさんそっくり…」

ティアナは桃子さんを見てそう言った

昨日の髪をほどいたなのはを思い出してなんだか頬が熱くなる

「なのは、おいで」

「うん。なにかな？」

桃子さんがなのはを呼んでなのはの耳に手を当てる

「かけるくんと生涯を共にするのは、止めないからね」

「ふえ?!」

「あの、ひそひそ話は声のボリューム下げてもらわんと、その、
ただ漏れなんで」

はやてが顔真っ赤にしている

フェイトはまだ早いと言ってまさしく雷の速さでキャロとエリオの耳を塞いでいた

スバルとユウナは店のメニューに見入って聞いてなかった様子
その中に慌てて顔真っ赤にして首を突っ込むティアナ
あ、聞いてたな…

「ま、立ち話も何だし。みんな座って座って」

そう言ってみんなを座らせる

「みんな座って座って、水持ってくるからそれからメニュー聞くとよ」

そう言っただけなのはがエプロンをつける

…あれ？スルーしそうになっただぞ

「なのはも？」

「うん。こんなに人数いるから手伝いにね？」

なのは用にあるなでしこが描かれたエプロンを付ける

「なら、私もやるよ」

フェイトが立ち上がる

「ううん。高町家総出の歓迎会にさせて」

「…なぜエリオはこっちを見たまま固まる」

「だって、高町家の一員にかける隊長が入る気が」

「…一理あるな。皿洗いくらいしてくる」

立ち上がるうとしたら肩が叩かれた

…あれ？この手の感触は

「久しぶりだな。かける」

「お父さん！」

なのはが厨房から飛び出てくる

「お父さん?!」

みんな士郎さんが若すぎて驚いている

「ご無沙汰してます」

なんだろう嫌な予感しかしない

「かけるは後で重労働が待っているからな」

「…えっと、任務中なんで」

「15分後に道場でな」

そう言って外に行くと思ったたら立ち止まってキャロの方を見る

「…？かけるの娘か？」

「いや…、違ってます…」

「あ、あの。キャラ・ル・ルシエです。よろしくお願いします」

諦めた表情の俺をスルーしてキャラロが答える

「…名字に八神とかテストロツサとかは
更にキャラロに加えて質問する

「つきませんよ？」

なら良かった、と言って出て行った
なんだったんだろうか…

「なのはさんのお母さん！私、これと、これと、これと、あと…、
このケーキ食べてみたいです！」

スバルがメニューの端から端まで指差して言う

「大丈夫よ。全部持って行くからみんなで食べ分けてね」

やったー、と両手を上げて喜ぶスバル

すると静かになのは手作りのキャラメルミルクが出される

「ちょっとしか作れなかったけど、これ飲んで頑張ってきてね」

「ありがと、なのは」

甘い物はあまり得意では無いがこれは昔から飲んでいるから大丈夫

それを一口飲む

甘さのせいかな、喉が焼ける感じがある

「道場って何しに行くんですか？」

エリオが聞いてくる

「まあ、剣道かな？エリオも来るか？」

「はい！参考にさせてもらいます！」

たぶん参考にならないだろうな、とちっちゃく言って席を立った

「まだまだ現役ですね。 土郎さん」

呼吸を肩で整えつつ聞く

今の所、勝負は1対1

次に勝った方が試合の勝者となる

3本目だけ六課のメンバーが見に来ていた

六課のメンバーは壁際にて応援（退避？）らしい

「始め！」

士郎さんの声で試合が始まる
今回は防具有り面無しである

つまりは、胴と籠手、または相手を戦闘不能にする

これが勝利条件

後半のルールは中学の時に新しく追加された

「はああああ！」

まずは、様子見。

というわけにもいかないので、攻撃をする

直接振り下ろすだけの面撃ち

避けるはずだが、さてどちらに避ける？

さっきは右に避けた

だから右へ追撃できるように準備する

「最初から攻撃。昔から変わってないな」

それを避けず受け止める

そこから罅迫り合いに持ち込み、弾き飛ばす

「眉少しくらい動かしてくださいよ、っと！」

体制を崩したまま竹刀を横へ尻払う

狙いは足

「姑息な事をするなよ」

士郎さんはそれを後退でも空中へ逃げるでもなく、自分をさらに引き離す事で回避する

「距離感はまだだいたいつかめたようだな。少しは強くなったんじゃないのか？」

中段に構える士郎さん

そして短く告げて、竹刀をさらに左手に持って二刀流へ切り替える

「ならば、これはもう大丈夫かな？」

まずい

そう思つて刀を正面に構える

「小太刀二刀御神流、奥義之六！」

士郎さんが、消えた

そう思つてたら竹刀を床に叩きつけられる

体制を立て直そうとしたら背後からの一撃

振り返ろうとしたがそれより早く、胴への一撃、右脹ら脛への一撃

トドメと言わんばかりの籠手への一撃

その全てを理解したのは籠手から受けたダメージで自分が竹刀を落

とした音が聞こえた時だった

「無理だったか。仕方がないさ。あれを止めれるのはまだまだ恭也と美由希しかないからな」

そう言って折れた竹刀を床に置いて自分の前に立つ

…竹刀が折れてる？

「最後にまさか思わぬ反撃を受けたが、そこを評価すべきだろう。さ、終わりだ」

「は、はい！ありがとうございます！」

なんだかよくわからないまま礼をする

「こちらこそだ。最後のあれは無意識か？」

「たぶん…、そうです」

プレストウイングが勝手にやった、とは考えにくい
逆ユニゾンするとみんなが気づくはずだし

「そうか、なら。御神流をすでに身につけているはずだ。無意識からちゃんと意識して使えるようにして自分の物にしていけよ」

防具を外そうとして肩の紐に手をかけた時
しかしそれは突然見つけた

「センサーに反応が！」

キャロがケリユケイオンを見て言う

急いで防具を外す

最後の士郎さんの言葉は気になるがなんだったんだらうか？

「よし、観光は終わりや！行くで、機動六課！」

「はい！」

しかし、今はそれを考えている暇はなさそうだった

「灯台もと暗しってやつか」

場所は湖上

コテージ近くだった

すでにみんな集まってセットアップも済ましている

「湖上に結界を隊長陣が張る。その中ならいくら暴れても大丈夫やで。でも破壊はしないようにな」

「敵は本体がどれかわからないようにデコイをばらまいてるらしい。質量も何もかも同じだから見分け方は無いよ。でも本体封印で全部消えるからみんな頑張って！」

「はい！」

「師匠。これが終わったらなのは隊長のキャラメルミルクを私も飲みたいです！」

「そういうのは本人に聞け」

「えっと…、ケーキとかにも使っちゃってキャラメルが無くなっちゃって」

なのはがごめんねと手を合わせる

ユウナはそれを聞いてフォーマルハウトを落とした

「まあ、頑張ってこい」

そう言ってユウナの肩を叩いた

ティアナは焦っていた

このスライムもどき。デコイと本体の見分けは本当につかないみたいだ

しかも無限に増えて、身体が弾力質だからか魔法弾も斬撃すらあたらない事件

「まずいわね…、時間が経てば経つほど本物がわからなくなってきた」

ティアナは立ち止まり考える

キャラが片っ端から封印という手もあるが恐らく魔力が足りない

「スバルは…ダメね」

相棒は打撃がメイン

ダメージを与えられないんじゃない意味がない

「かといって私の魔法弾も当たらない…」

向こうは避ける事もせずあまつさえ攻撃すらしてこない

だから当て放題かと思いきや、全て弾力により弾かれる

「キャラのブースト強化も今回はかしは使わせる訳にはいかない…」

チラツとユウナを見る

ショットガンで撃った弾でスライムもどきを吹き飛ばし、スナイプショットで上手いこと弾きスバルの頭に当てる、バスターモードを使ってみたらスライムもどきは4、5匹消し飛んだ

…遊んでるのが真面目なのか

バスター並みの火力ならデコイは消せるのか

本体なら全部消えてるはずだし…

バスター並みの火力をこのスライムにぶつける方法、か

あるじゃないか。ひとつ

「ユウナ。ありったけの小麦粉をコテージから取ってきて」

「…あれやるんですか？」

ユウナはわかつたらしい

「そうよ。まあロストロギアの名を冠するものならこれくらいじゃ消えないでしょ。スバル！ウイングロードで囲いを作って、その中に一つ残らずスライムもどきをぶち込んで！」

「うん。わかった。ティアが言うなら！任しといて」

「あ、私達も手伝います」

キャロとエリオも手伝ってくれるらしい
ありがたい話だ。これがチームワークなのか？

しばらくするとユウナが小麦粉と潰した炭を袋4つに詰めて持ってきた

「固体なら炭でも大丈夫ですよね？」

「ありがとう。スバル達が用意出来次第やるわよ」

作業は4分ほどで終わったサーチャーでも余りは無いか確認した

「準備できました！隊長、フォアード陣！フィールド型バリア張っ

て！」

ユウナが全体に指示する

それと同時に袋の中身をスバルに頼んでスライムもどきにかけてもらおう

ユウナが魔力弾をスライムに打ち込む

これして空気に満遍なく混ぜていく

「昼のナパームは格別だそうよ。喰らいなさい」

そう言つてティアナは着火用の松明をその中へ投げ込んだ

すると一瞬で真っ赤になる周囲

目の前は炎以外何も見えなくなる

粉塵爆発

製粉工場や炭坑で起こる現象

媒体が空気中にあることにより、爆発的炎上を起こす化学反応である

周囲の酸素を限界まで奪い尽くして燃える炎

20秒くらいで火は消え、そこにはウイングロードすら残っていないなかつた

「…全部破壊完了？いや、一個だけ残ってます！」

キャラがサーチャーの画面を開いて確認する

「それが本体よ！キャラ！封印に向かって！」

そうして無事確保完了した

余談になるが、かける隊長はバリアを展開できなかつたらしく、1人全力で空へ退避していたらしい

「お前らな…、俺を殺す気かよ」

ナパーム弾は燃焼によるダメージ以外に、酸素を全て奪って酸欠にする効果がある

今は確保も終了したから翠屋にお礼を言って帰る事に

「あの、みんなフィールド型バリア張れるから大丈夫かなー、って」

あの爆発から逃れる方法はフィールド型バリアで全身を覆うか、範囲外へ退避するしかない

「しかもお前あれでロストログア壊れてたらどうするんだよ」

「まあ、その時は…、かける隊長がなんとかしてくれるはずですよ」

それを聞いてはあとため息をつく

なんだかいつもバックアップでいたリンディさんの気持ちがわかった気がした

昼になって、少しお腹が空いた頃に翠屋についた

「任務終わったか？」

士郎さんがコーヒ一片手に聞いてくる

「はい。これから六課隊舎があるミッドチルダに戻ります」

「頑張つて来いよ。これからも」

「なのはもね」

桃子さんがお土産とシュークリームをなのはに手渡す

「うん。行ってきます！」

「六課の稼働期間が終わったら、また来ます」

「ああ。楽しみにしてるからな」

そう言つて士郎さん達は手を降つて見送つてくれた

また明日から訓練の日々

デスクワークも空いた時間にこなさなきゃいけない

ハードワークだけでも、それらがすごい楽しみになってきた

第44話 翠屋へ（後書き）

書いた後に気づいた

守護騎士どこ行っただ？

守護騎士みんな市街地へ警備に行ってたらしいです（台本を見返しながら）

キャラメルミルク

飲んでみたいなー…

たぶん冬に飲むのがいいんだろうなー…

次回から日常に戻ります

よし、頑張る

お楽しみに〜

第45話 見極めテスト（前書き）

最近またラノベ8冊まとめ買いしました
白湯です

寝る前に本読まないと寝れない人なんです
我ながら不慣れた体だと思う

では、どうぞー！

第45話 見極めテスト

「暇ああー……」

真っ白な空間の中にちゃぶ台を置いてそこに正座してみかんを食べる女1人

「みかんの皮むきも綺麗にできるようになったし…、次はリンゴでもやってみようかな？」

そう言うと机の上のみかんは消えて代わりにナイフとリンゴが現れる

「ん？お客さん？」

出したのはリンゴだけのはず
ナイフは出していない

「それが無いと切れる物も切れないだろ」

後ろにはマスターのかけるがいた

「今日は何のようですか？」

「無意識について」

端的に述べるマスター

まあ、これだから話やすいというのもあるのだが

ちやぶ台を片付けて立ち上がる

「無意識と意識の無い状態、が違うのはわかってますか？」

「ああ、それはわかる」

こくりと頷く

「ならもうだいたいわかってるんじゃないですか？本能とか勘とかが無意識の部類に入るんですよ」

「なら、無意識の間に使った技を意識がある間に使うことも可能か？」

なんだ。御神流の話か

「いいですか？奇跡とか大逆転とかは全て可能であるから起きるんです」

辺りを白の空間からサッカーのスタジアムのご真ん中に切り替える

「例えばサッカーとかバスケットボールでロングシュートが決まったら大抵は奇跡といえます。でもそれは違います。決めれる実力があつたから決まっただんです」

「なら、無意識の技は可能なのか？」

「できたんだから、可能じゃないんですか？」

そう言つて彼を深層意識から追い出す
自分は早くリンゴの画期的な剥き方を見つけるんだ
ナイフを手にとって気づいた

「…あれ？このナイフ、どうやってだしたんだろ？」

この世界に干渉してきている？

あくまでも今は主導権は私が握っている

彼には許可した事しかできないはず

となると、あの技は御神流じゃない？

あれは

「私の……技？」

久しぶりに面白いものが見つかった
リンゴを地面に投げ捨てる

替わりに検索エンジンを立ち上げる

「楽しい事になってきた〜！」

ブレストウイングはテンションが上がった子供みたいにぴよんぴよ
ん飛び上がってキーボードを叩いていた

その様子は本当に無邪気な子供のようだった

六課に帰ってきて1週間

何事も無かったようにまた日常は始まった

「ユウナは私と模擬戦だ」

「はい！」

シグナムはアームドデバイス”レヴァンティン”を収めてユウナに指示する

「スバルはなのは、キャロとエリオは俺でいいんだよな？」

なのはに確認を取る

「うん。ティアナはフェイト隊長とだよ」

聞いた瞬間ティアナは落ち込んでいた
速さ主体のフェイトに攻撃をロングレンジから当てるのは至難の技だからだ

「お昼ご飯たべ終わったら開始するよ。それまではみんなデスクワーク頑張っ
てね。じゃあ、今日の朝練はここまで」

「ありがとうございました！」

フォアード陣は息も絶え絶えに返事をした
朝練お疲れさま

それから朝ご飯を食べて
デスクワークに入る

簡単な事務仕事だ
ファイルを分けたり、写真の整理
レポートやその他もろもろ

新しいプログラム作ったりいろいろしているがまあ一番大変と思う
のはレポートだと思う

「師匠。パソコンの画面が真っ青になって動かなくなりました！」

……前言撤回

ユウナの世話だ

「なんでそうなったんだよ……」

「画面を…、その、ドゥーン？」

「いや、意味わかんないから」

なんで本体を蹴るんだよ……

「ふう、終わったー」

ティアナが後ろで背伸びする

「ティアナ。終わったんならユウナを手伝ってあげてくれ」

「はい。あ、スバルもまだ残ってるわね。あたしが半分処理しとくわ」

そう言っつて画面にまた向き直る

「ティアありがとう。よし、頑張るぞ！」

スバルは確かにパソコン苦手みたいだしな…

まあ仕方ないか。

ほっと思ったらアイスかティアナの事しか考えてないし

「ティアナは優しいんだな」

ユウナを別のパソコンに座らせてレクチャーしながらティアナに聞く

「ユウナとスバルだからやるんです。かける隊長のはやりませんよ」

「ティアナは髪解いた方がかわいいんですよ？ねー？」

ユウナが俺が教えるのを無視してスバルの方を向く

「私は髪解いたティアも好きだけど今の髪型もかわいいとおもうな
ー。ね、……なのはさん？」

気になって見てみるとなのはがスバルの後ろでいい笑顔で立っていた

「みんな、私語はやめて仕事しようね」

「はい…」

そこから昼までみんな真剣にやった

ユウナはなんだかんだで15分くらいで覚えて1人でやった

「もし、あのロストログア壊したらどうしたんですか？」

なのはがトイレで退席した時にティアナがひっそりと聞いてくる

「ああ。たぶん作った」

「へ？」

ティアナが何それみたいに声を上げる

「小学校の時にやらなかったか？理科の時間に洗濯糊とホウ砂混ぜて」

「えっ…、リアルに作ったスライム渡すつもりだったんですか？」

「もちろん。まあそんな無茶を解決するのがこの力な訳だが」

そう言って手のひらを広げる

「魔法無効化ですか？」

「ああ。間違つてさわっちゃいました。みたいな感じにする予定だった」

デコイの方は触るとただの液体になったから本体もそうなるだろうな

「それはさすがに依頼人を馬鹿にしていると思いますよ？」

スバルがあははと笑いながら言う

そこは大人の世界

金の最中を渡したら大丈夫だろう

「師匠。最中私も食べたいです」

「ユウナにはまだ早い」

そう言つて壁にある時計を見る

「よし。フォアードのみんなで遊ぶか。昼ご飯食べ終わったら俺の部屋までみんな呼んで来てくれ」

「はい。わかりました」

ティアナは元気よくそう返事した

昼ご飯を食べて模擬戦の場所へ移る前にフォアード陣でスライム作りをした

みんな楽しんでくれて何よりだ

ぶっちゃけ、材料が余ったからというのがあがるが

そうして14時00分

俺は前にスターズがやった廃ビルの場所へ

ユウナは林の中へといった感じに移動を完了していた

「六課の中で数少ない俺にダメージを与えられる魔導師なんだから有利のはずだぞ」

腕を組み、ライティングの2人の前に立つ

「わかっています。でも手は抜きません」

エリオも何かと本気らしい

キヤロはフリードを召還して万全の体勢をとっていた

「よし。じゃあ、始め！」

刀を手の中に展開する

なかなか強いとの事で甲冑も腕だけでなく足と肩にも展開する

「フリード、ブラストレイ！」

召還された龍の口から炎が吐かれて辺り一面が火の海になる

ちよっ、おま

師匠がいる所に火柱が立ち上った

「よし、なら私たちも始めるとしようか」

シグナムさんがセットアップを終えてレヴァンティンを構える

「はい。お願い、フォーマルハウト」

OK・barrier jacket Setup

手元に銃が召還され、脚にブーツ状の装甲が装着される

「試合のルールは変わってない。とりあえずお前は全力をだせばいい」

「はい。なら、行きます!」

身体をまずはバックステップで引き離す

「モード2、スナイプモード!」

OK・Snipe mode

「当たれ!」

狙いは最初からバリアジャケット

弾があたりさえすれば勝ちなのだから精密かつ威力が高いこれで終わりのはず

「遅い!」

シグナムさんが撃った弾を弾き飛ばす
やっぱり一筋縄じゃないか

そして一気に距離を詰めてくる

「ここから私の攻撃圏内だ。心してかれ!」

そう言って刀を振り上げる

でもこの距離は

「この子の射程圏内です。カートリッジ、ロード!」

Mode change Shotgun . And load
cartridge .

レヴァンティンの太刀筋は見えない
なら直接身体を狙う

引き金を押す

1回ではなく、10回を超える連打

しかしレヴァンティンを鞭のようにして壁を作り、全てを防ぎきる

「自分の魔法の使用を控えて、その分デバイスの強化に回してるんですか…」

「よく見抜いたな。だが、これではどうする?」

刃が自分の周囲をぐるぐる回る

鞭と思っていたがこれは連結刃のたぐいだろう

逃げ場が、無い

いや、ある！

銃口をシグナムさんがいると思われる場所に向ける

あとは連射

「さつきは連結刃をまとめて防いでたけど、これくらいなら破れる
！」

予想通り一気に揺らいで人2人分くらいの間隙ができる
その間を抜ける

そこからショットガンの射程に近づくために思いきって飛び込んだ

「勢いはいいな。だが私の武器が刀だけと思うなよ？」

そう言つて鞘を構えるシグナム

「そんな物で止まりません、止まれません！」

そう言つて身を翻してシグナムの頭上から散弾の雨を降らす

シグナムは身じろぎせず盾を張つて全弾防ぐ

「トリガーハッピーの名は伊達じゃないですよ！」

カートリッジを一発抜いてから続けて打ち続ける
空中にいるから反動は気にしなくていい

近くに遮蔽物は無い

「くっ、うおおお！」

シグナムはこの状況がまずいと思ったのか、後退に入る
もちろん、シグナムにも反撃の用意はしてある

射程圏外に出て刀を振り上げてカートリッジを2発ロードする
すると刀身が炎に包まれる

そうして空中にて方向転換が効かないユウナに突撃しようとする
と異変が起きた

「紫電、つなに！」

髪を引つ張られた感触

いや、髪に設置型のバインドがかかっている！？

「腕や足につけてもすぐ弾かれるみたいなんで、ポニーテールの部
分につけさせてもらいました」

Mode change・Baster

地面に着地と同時にフォーマルハウトがバスターモードに切り替わ
り、足の固定具が地面に突き刺さる

「行きます。六花よ咲き誇れ。グレイプニル、バスターアー！」

「くそっ！紫電、一閃！」

シグナムの攻撃は、ユウナが放った砲撃を相殺することなく打ち消された

「はあ…、はあ…。私の勝利です」

砲撃で息も絶え絶えで歩くのもやっとなユウナはシグナムに向けてガッツポーズを送る

T a r g e t N e u t r a l i z e

「ありがとう、フォーマルハウト」

「ユウナの勝ちだな」

シグナムは瓦礫の中から立ち上がりユウナの勝ちを知らせる

「はい。ありがとうございました」

ユウナはバリアジャケットのままに、フォーマルハウトだけ片付けて言う

「また手合わせを頼む」

「喜んで」

そう言って2人は握手をした

「……合格だ」

ブラスタービットで作った盾でエリオの攻撃を防いでそう言った

まさかブラスタービットをださなきゃいけない状況に追い込まれるなんて

「本当ですか?!」

キャロはフリードにのったまま聞く

キャロが完全にバックアップに回った今回の作戦は本当に良いものだった

「ああ。よく頑張った」

そう言って2人の頭に手を置いて乱暴にかき混ぜる

「なんか、心がこもってないですよ?」

エリオが文句を言うがそんなに悪意は感じられない

「いいんだ。これくらいの方がしてもらった気になるだろ?」

そう言うと笑顔で微笑んでくれた

「今日が何気に、第二段階クリア見極めテストだったんだけど……どうでした？」

夕日に染まる六課を背景になのが言う

「合格」

フェイトはあっさりそういった

フォアード陣は早っと言って驚いていた

「まあこんだけみっちりやってダメなら問題だって事だ」

ヴィータがアイゼンを肩に担いだまま言う

「まあ、なかなかいい線行ってるし合格だろ」

俺もそれで大丈夫だと思う

やったー、と飛び跳ねるみんな

本当に嬉しそうだ

「デバイスのリミッターも1つ外すからシャーリーさんに一回デバイス渡してね。明日の朝にはできてるはずだから」

フェイトは腕を組ながら言う

「明後日からセカンドモード主体でやっていくからな」

「え？明後日？」

キャラロがいち早く反応する

「ああ。訓練再開は明後日からだ」

ヴィータが頷く

「明日は私達は隊舎で待機する予定だから」

「みんなにとって、明日が六課始まってから初めての休暇だよ」

なのはとフェイトがちょっとずつ情報を付け加えていく

「街に出て遊んできたらいい。ユウナもな」

そう言ってユウナの肩を叩く

「はい！」

ユウナは嬉しそうに元気よく返事をした

「私、シグナムさんに勝ったんですよ！もっと誉めてください！」

しかし調子に乗り始めたからデコピンをする

あうっ、と呻いて2歩後退するユウナ

「シグナム副隊長はリミッターがついてるんだ。本気を出されたら
たまったもんじゃないんだぞ」

そう言われて少し顔に影が入るユウナ

「ま、でもよく頑張った」

そう言って頭を撫でる

エリオやキャロみたいにやったみたいに力強くじゃなくて少し優しいに

それからそのままお開きとなった

明日は六課初めての休暇

何事もなければいいのだが

そう思って隊舎に戻った

第45話 見極めテスト（後書き）

ユウナまさかの勝利

というより、トリックキー過ぎた気もする

久しぶりのブレストウイングの出番有り

次回はいつだ…！

スライム作り

材料は本当にどこでも手にはいるので、ぜひぜひ試してみたいかがですか？

680

そろそろあのプラグとか回収しないとかな…

では次回予告。…お出かけ編！

お楽しみに！

第46話 機動六課の休日（IN）（前書き）

7月最後です
白湯です

明日から8月
一年が過ぎるのは本当に早い
もう半分以上が過ぎ去ってしまった

最初はなんとユウナの過去
では、どうぞー！

第46話 機動六課の休日（IN）

遠い日の、記憶

まだ私が10才でようやく自由に本を読んだりできるようになった時の記憶

「お父さん、大切な物って何？」

一冊の本を抱えながら私は、椅子に座っている最近白髪が目立つ父に聞いた

「そうだな……。何が何でも守らなきゃならない、って物だな」

お父さんが天井を仰ぎながら言う

「私の大切な物は1つじゃなくていっぱいあるからね」

そんな中、姉さんが寝ぼけ眼をこすりつつ現れる

「その中でも一番大切な物があるだろ。それは何なのか教えてやれ。ユウナが考える参考になるかもしれん」

「うーん。待ってて……。やっぱり『武器』かな。戦う力。この戦争とかもそうだけど、日々を生き残るための武器」

ちょっと暗い顔になる姉さんをからかうように父さんが聞く

「なんかあるだろ。もつと乙女らしく『愛』とか『出会い』とか『彼氏』とか」

「な、ばか！そんなんじゃないってば！」

姉さんがお父さんの方を真っ赤な顔で睨む
説得力皆無だなあ…

「私の今まで生きて中で決めた答えなんだからな！そ、そういうお父さんは？」

「ふ、たぶん感動するぞ。しかもこれはユウナの参考には絶対ならない」

「それで、何なの？お父さんの大切な物は」

それを言つとお父さんは椅子から立ち上がりそつと自分を抱きしめる

「忘れるなよ。私の生きるために大切な物は『ユウナ』だ」

耳元ではつきりと告げられた

姉さんがベタすぎると頭を抱えていたが今は視界に入っているだけで何も考えられない

身体中から力が抜けていく

そして握っていた本がゴトリと落ちる

その音が原因か、起きてしまった

「……朝？」

大きすぎるベッドの上で目が覚める

なんだか懐かしい夢を見ていた気がする

頬には一筋の涙の跡

Good morning・Master

フォーマルハウトのアルトボイスが聞こえる

「おはよ、フォーマルハウト」

ベッドから降りて頬についた涙を袖で拭う

それから机の上にあるフォーマルハウトを左手首につける

それから服を着替えないまま、ひとまず水を飲みキッチンへ向かう

そこでリビングのソファで寝てる師匠”高町翔”が目に入る

昨夜は遅かったのかまだ寝てる

「起こさないようにしなきゃ、ね」

I think so

今日は私達フォワード陣はお休み
師匠達の方までしっかりと楽しんできます

そう思つて着替えを始めた

「
」

朝、着替えを済ませてスキップしたい気持ちを抑えながら廊下を歩く

「ユウナ、起きてる?」

ユウナの部屋でもありかける隊長の部屋でもあるドアをノックする

さつき鼻歌を歌っていた気がするが気のせいだろう

「はい。今出ますね」

ドアが開く

そこには、笑顔のユウナがいた

「どうしたんですか、ティアナさん? そんな驚いた顔して?」

彼女は今、ベージュ色で膝まで伸びた外套で身をくるみフードを被

っていた

足にはフォーマルハウトをセットアップしたのか、灰色の装甲が見え隠れしている

「…どこへ行くの？」

思わずそう聞いてしまった

「街ですよ？」

「いや、その…。もっとカジュアルな服装にしない？」

「フェイト隊長が『街は危ないから気をつけて』って」

そう言った後、袖から何かが転がり落ちる

「あ、発煙筒が……」

そう言って転がるそれを拾い上げる

「本当にどこに行く気なのよ……」

頭が痛くなってきたがなんとかこらえてユウナを自分の部屋まで連れて行った

せつかく一緒に街に行くんだ

ユウナにもいい思い出を作ってもらったために頑張らなきゃ

「じゃあ、みんな元気に行ってきたね」

六課の隊舎まで一応見送りに行く

フォワード陣はいつもの訓練着ではなく私服だ

そりゃあ街に出て行くんだしな

エリオとキャロは電車。ユウナ達はバスだそうだ

「スバル、バスもう出るわよ！早く行くわよ！」

「はい。じゃあなのはさん、行ってきますー！」

そうやってスバルとユウナは走っていった

「いつてらっしやい。ライトニングのみんなも遅れないようにね。」

「はい。行ってきます」

ワントンポ遅れてライトニング出発

「怪我するなよ。怪我したらフェイトが怖いからな」

いや、本当に

「あはは。気をつけます」

本人達もわかってくれたのか笑っていた

「じゃあ、2人とも。何か危ない事があつたら連絡してね」

「過保護すぎないか？」

フェイトに聞いてみる

「だって…、危ないんだよ？」

「たぶんそれいろいろ思い込みすぎだから…」

そう言うと、2人は手を降って行った

そして玄関に残されたなのはとフェイトと俺の3人は余った事務仕事をこなす前の腹ごしらえのために食堂へ向かった

「朝ご飯をこのメンツで食べるのは実は久しぶりだな」

フォアード陣が居なくて、今は隊長4人に守護騎士4人とリインフオースの全員合わせて9人

「確かにな。かと言って、お前は2年間いなかったんだ。お前抜きで8人なら結構こんな事はあつたさ」

シグナムがパンを千切って口の中に放り込む

「うん。まあいいけどさ、なんでザフィーラは犬モードなのさ」

「…一応私の立ち位置は主はやての特別戦力だ。使い魔扱いの方が立ち回りがしやすいのだ。あと狼だ」

「そのためにドッグフードの味を覚えたと？」

「大丈夫だ。これくらいならまだまたしだ。骨なんか出された暁には…」

ドンマイ、ザフィーラ

「今日は何するの？」

なのはが新しくパンを取るついでに聞いてくる

「うーん。部屋の掃除してからみんなの武装の調整かな？書類仕事はそれからするよ」

「隊長になったんだからもっとプライベートの時間を削って仕事に従事した方がいいんじゃない？」

フェイトがポタージュスープを飲みつつ聞く

「ぶっちゃけ、あまり事務仕事したくない。そりゃ与えられたらするさ。でもそれ以上はしたくない」

「でも、ほら？今日はフォアード陣のもやらなきゃ、ね？」

フェイトよ、それは優しすぎる

「甘やかすと良くないぞ？」

「大丈夫だよ。エリオとキャロなんだし」

なんでそんな絶対の信頼関係を抱いてるんだろうか

「というかそういうのはは何するんだ？」

「私も事務仕事かな？はやてちゃん達は外回りだよな？」

「私は聖王協会の方へ」

シグナムが軽く答える

「私はナカジマ三等陸佐の所へ。合同捜査本部についての打ち合わせやな」

「ならこっちの仕事は私がしておきます」

ラインフォースがはやてに意見を聞く

それに満面の笑みではやてが頷く

ちよつとその関係が羨ましいと思ってしまった

「まあ、久しぶりに書類仕事するか」

ちよつと本気だして『うお、なんかあいつできるんじゃない？』みた

いな所を見せてやるんだ

「無理だと思うな」

なのは人の心の中を見透かすなって

部屋の掃除をあらかた済まして昼ご飯を食べ終わるとはやてが帰ってきた連絡が入った

「ただいま。みんな」

陸士108部隊隊舎にて打ち合わせをしていたらしい
そのまま部隊長室に集められる

以前入った時は黒板消しがあったから注意してドアを見る

「何を警戒してるんや？早く入ってきたらええやん？」

はやてがそう言うからまあ何も無いんだろ

安心して足を踏み入れる

しかしその先には、皮

バナナの皮

「なん…だと！」

ここで引つかかるのはギャグ漫画だけだ！
落ち着いて重心を後ろに持って行く

これなら転けずに回避できる！

「何をしている？早く入れ」

後ろから押される

このタイミングでリインフォースを使ってくるか！

「痛っ！」

そして必死に回避しようとしたものの願い叶わず、尻餅をついた

はやては必死に笑いをこらえていた

なんなんだ。この部隊長室はトラップ多すぎだろ

しかしそんな俺を無視して会議が始まる

「フェイト隊長が捜査主任や。頑張ってくれな」

「わかった。任せといて」

「あと、スペシャルゲストや。入ってきてええよー！」

「あ、あの。失礼します！」

ドアがスライドした先に、髪の毛長いスバルに顔立ちが似た人が立っていた

「ギンガ・ナカジマ陸曹です！108部隊から捜査協力で派遣されました！」

足を揃えて敬礼する

「…ナカジマ？」

ふと気になったから聞いてみた

「はい。この機動六課でお世話になってるスバル・ナカジマの姉です」

「ゲンヤさんは？」

「私の父です。」

ナカジマ家にだいぶお世話になってるな…

「…ウイングロードとか使えたり？」

「はい。私、強いですよ？高町隊長」

「なら安心だ。あと高町隊長はやめてくれ。なのはとわからなくなる。かける隊長か呼び捨てで頼む」

あと話し方もと頼んでみる

「いえ。階級は私の方が下なので尊敬の意をこめて高町隊長と呼ばさせていただきます」

「固いな…。ちょっとそのバナナ踏んで転けてくれた方がよかつたかもな」

「それは洒落にならんからな止めてな」

はやてが後ろから止めに入る

「とりあえず主からのプレゼントを渡したいからちょっと来てくれないか？」

リインフォースが手招きする

その間には、バナナ

「リインフォース…、諦める」

「いや。大丈夫かと」

「リインフォースさん、駄目だからね？意地悪しちゃ」

なのはがバナナをゴミ箱に捨てる

「プレゼントって…、デバイス？」

ギンガはそれを手に取る

「そうや。マツハキャリバーと対を成す装備。」ブリッツキャリバー
「や」

「あ、ありがとうございます…」

ギンガが頭を下げる

しかし、和やかムードは長続きしなかった

「ライトニング4から機動六課メンバーへの全体通信です！」

管制室のルキノが隊舎の放送を使ってみんなに伝える

『こちら、ライトニング4。緊急事態により、状況を報告します！
路地裏にて、レリックと思わしきケースを発見。それと…ケースを
持ってたらしい一人の女の子を発見。指示をお願いします！』

レリックという言葉に反応する俺たち

しかしギンガは違った

「女の子って…、まさか人造魔導師素体？」

「なんだそれ？」

人造、魔導師？

「人の遺伝子や身体を直接いじくって後天的に強い魔導師を作る、
って話だっけ？」

「はい。フェイト隊長は詳しいですね」

「おい。それってまさか…」

聞いた話がある

人の遺伝子を使ってその人のコピーを作り出す

プロジェクトF

「うん。あの技術が、また使われてる」

フェイトが暗くなる

「全員待機体制！安全確実に確保するよ。レリックも、その女の子もや！」

はやてのその声で休暇は終わりを告げて、替わりに新たな始まりを告げた

第46話 機動六課の休日（IN）（後書き）

ギンガ参戦！

…遅い？

いや、忘れてたわけじゃ無いんですよ？
タイミングを逃したというか

とりあえず、ギンガファンのみなさん
遅すぎごめんなさい

今回休暇編は1個にまとめようと思ったんですがいろいろ書いてたら二つに分けた方が読みやすい事に気づいた

まあ、大きく見て隊舎内と外
今回は内の話

次回はお出かけメンバーの話
では、お楽しみに！

第47話 機動六課の休日（OUT）（前書き）

8月です！

白湯です

甲子園

今年は母校が出るからちょっと楽しみ

スタートはかける視点
では、どうぞー！

第47話 機動六課の休日（OUT）

「お父さんとお母さんはなんの仕事をしてるの？」

学校で出された課題の消化のために普段は興味を持つことは無かった事を聞いてみた

「うーん。難しいかもしれないけど、永久にエネルギーを得る研究かな」

「そうねえ。私達人はいつも消費してばかり。だからそれを食い止める研究よ」

2人ははにかみながら答える

「よくわからないけど、大変なんだね」

「簡単に言うと人間は生きてる物を食べて生活してるんだ」

お父さんが紙に汚い字で絵を描く

「水や塩だけじゃ生きられない。かと言って石は食べられない」

「うん。石なんか食べたらお腹壊しちゃうもんね」

それを聞いたお母さんはその発想は無かったと笑っていた

「ああ。だから人は他の生き物を食べる事を選んだ。草、肉、体液。探せばもつと出てくる」

「それらは自然に増え続けているから、いくら取っても影響はないと人間は考えたのね。でもそれは間違いだった」

お母さんが暗い顔になる

「取りすぎに気づいた人間は自らの手で育てる事に気がついた。植物や動物が成長しやすい環境を作り、家畜化して爆発的に食物の量を増やしたの。だから人間は地球を覆い尽くすまで生存範囲を伸ばす事に成功した」

絵の地球の上に描かれていく点、点、点

これらは人を表しているのかな？

「しかし、限界が来た。今度は人間が減るか番なんだ」

「それを回避するのが私達の研究。わかった？」

「うーん。ようは人を殺させないための研究？」

「捉え方によつてはそうなるね。その発想、さすが私の息子だ」

そう言つて自分を抱え上げるお母さん

「未来のあなた達のための研究よ。納得して頂戴。それと、私達の息子よ。あなた？」

そこから久しぶりに聞いたような笑い声が聞こえた

そしてその声がだんだんと、聞こえなくなる

それがいつもの日常の中にあつた、数少ない思い出だつた

「ユウナは街に出た事は無いんだっけ？」

スバルがバスから降りて街の地面を踏む

「うん。初めてこの街を見たときはたくさん高い建物があつてびっくりしたよ」

ユウナもバスから降りる

「今日はユウナの私服を買つんだから、忙しいわよ？」

「わかつてるって。じゃあ行こうか、ティア」

「あんだ。そっちはアイスの屋台がある方じゃ」

「…アイス？」

ティアナがスバルを止めようとしたがユウナが首を傾げる

「まさか、ユウナ。アイスしらない？」

「氷…ですよね？それを持ち歩いて冷房代わりにするんですか？」

「えっとアイスっていうのは食べ物よ」

「…？氷に噛みつく感じの？歯が鍛えられそうですね」

「いや、あの…。舐めて食べるのよ？」

「違うよ、ティア！1つ丸ごと口の中に頬張るんだよ」

「それできるのあんただけだから…」

とりあえず一行はユウナに一般知識を教えるためにもアイスを食べる事にした

「冷たい…。でも、さっぱりして美味しい！」

ユウナにはミントアイスを薦めた

多少の好き嫌いはあるだろうが味もしっかりわかるしいいだろう

それからウィンドウショッピングを始める

下着店はスルーして、私服コーナーへ
店に入って中を確認する

「ひとまずは夏物と秋物でいいわね」

「はい。冬物はまたの機会にしときます」

「ねえ、どんな服がいいの？」

スバルが聞く

「うーん…。動きやすくして、」

「なるほど。ならヒラヒラしたものが着いてるのはアウトね」

「忘れないように自分の中で反芻する」

「しかしそんな自分の考えをスルーして言う」

「いつでも戦闘に出れる感じで」

「それが理由?!」「」

「思わずスバルとハモってしまったじゃん！」

「ダメ…ですか？」

ユウナが首を傾げる

「いや、なんのためのバリアジャケットなのか…」

頭を抱えて言う

「あ、そうだ」

そんな中でスバルが閃く

「いろんな服をユウナに試着してもらおうよ！それでユウナが気に入ったやつにしよう！」

かくしてユウナを試着室に入れてから戦いは始まった

「これなんか似合うんじゃないかしら？」

ユウナのバリアジャケットはいつもホットパンツだし、この前地球に行ったときも自分はジーパンを貸した
今もその時と同じジーパンを着ている

だからスカートには慣れてないんじゃないだろうか？

手に取った服を試着室の中にいるユウナに手渡しして待つ

待つこと数分

試着室のカーテンが開く

それをスバルと2人で見た

「…あの。これ、かなり恥ずかしいんですけど」

ユウナに渡したのは白一色のワンピース

肌が白いからか、光を反射して少し眩しい

スラリと伸びた足と腕

筋肉がついてるからか、脂肪はなく引き締まってみえる

「似合うと思うよ、私は。というかユウナかわいい！」

そう言つてスバルはユウナに抱きつく

「え、あの。その、公共の場で、こつというのは。」

ユウナは嫌がつているようだが引き剥がそうとはしない

「いいじゃーん。スキンシップだよ」

「こら、スバル」

そんなスバルの頭をグーで殴る

「痛っ！」

「さすがに周り迷惑よ。少し自重しなさい」

「No more 自重！」

「せい！」

「あべし！」

スバルが意味のわからない事を行ったのでとりあえず今度は脇腹へ手加減なしのパンチをした

スバルは何か呻いて飛んでいったが日々の訓練の成果が、ケロツとした顔で帰ってきた

「とりあえずユウナはどう思う？その服」

「こんな服着たこと無かったからちょっと新鮮です…。思い切って買ってみます」

ユウナは照れながらそう言う

「そ、喜んでもらったんなら何よりよ」

良かった

喜んでるみたい

「じゃあ、次行ってみよー！」

スバルが気を取り直して右拳を振り上げていた

「次は思い切ってみちゃった、ティア絶対驚くよ？」

服を選んで戻ってみたらスバルが腕を組んでこっちを待ち構えていた

「なんなの？ここでユウナがジャージとか着ててもあたしは驚かないわよ？」

というかそれならいつものユウナだし

「では、どつぞー！」

ユウナの試着室のカーテンを今度はスバルが開ける

「なん…だと！」

そこには、

「あの、スバルさん！私これ着て街中歩くのは嫌です！」
ビキニ姿のユウナだった

「そりゃ、水着だし？」

スバルが当たり前のようについて
そしてユウナはまず着たときに違和感を感じようね

とりあえずなのはさん直伝のアイアンクローでスバルを黙らせる

「今日はユウナの私服選びなんだけど、なんであなたはそっち方向にしかいかないかな？！」

「だって今度休暇とかできたら、一緒に海とか行きたいし…ね？」
ちよつとは反省してはいるのか声が弱々しい
でも聞こえてしまった

「…ま、その話は後回しにしましょ」
ちよつと思考が固まってしまった
無理やり動かす

「ユウナ、次はこれ着てみて。絶対似合うから」
ユウナに籠に入った服を渡してカーテンを閉める

ユウナが着替えてる間に相棒を立たせる

「そういうなんかズルいから。無しにしましょうよ」

たぶん次の休暇は無い

機動六課は1年だけの試験的に稼働している

限られた日数を削るのはどれだけ大変な事か

少しでも何かガジェットとかの事件に決着をつけたい所だろう

しかしその中で5人が抜けている

優秀ではないが、人手が抜けるのは痛いはずだ

隊長達にこれ以上無茶させるわけにいかないのはわかってる

「でもさ。六課終わってからみんなとの繋がりは消えない。だからその時でもいいじゃん」

スバルが言う

そうだ。その通りだ

「そうね。今はこの休暇を楽しみましょうよ」

「あ、そういえばティア。ユウナになんの服渡したの？」

「ん？見たらわかるわよ」

タイミングよくカーテンが開く

「わあ……。お姫様みたい」

黒を基調とした、レース、フリル、リボン、に飾られた華美な服
ちよっと長めのロングスカート

いわゆるゴスロリだ

「わ、私は着せ替え人形じゃないですよ?!」

「大丈夫。やっぱり私の見立てに間違いわ無かったわね」

「あと、あの。これ重いんですけど」

ユウナはやたら服についたレースやリボンをいじりながら言う

「まあ、ちよっとやりすぎたかもね。リボン無しのか入ってたと思うからそれ捕ってきてあげる」

そしてユウナは元の服に着替えて1時間に渡る私服選びの戦いを終えた

「じゃあ、この3つ。お願いします。」

「はい。代金の方は」

「カードで」

レジに支払いに行くユウナを入り口から見守る
そして大きな袋を抱えたユウナが出てきた

「お待たせしました!」

「ねー、ねー。結局何買ったの？」

間髪いれずにスバルが聞く

「んー。秘密です。というより気になるならレジに来たら良かったのに」

ユウナはそう言って笑う

「次はご飯にしようか。いつも街に出たときは決めてる場所があるの。そこにユウナを案内してあげる」

そう言って先導を気って歩いた
私には見えていた

ワンピースとちょっと飾り気のあるスカート
あと1つは

「ユウナ。くれぐれもそれ着て街のど真ん中歩かないようにね」

「わ、わかってますよ！」

ユウナは顔を真っ赤に反発してくる
せっかくだから海に行きたいな

そうひっそり思っていた

「ご飯を食べ終えて今度はアクセサリを見ようと店を回る

ユウナは何か気に入ったものを見つけたのか、手にとってまじまじと見ていた

気になったのかスバルが覗き込む

「…、リストバンド？」

白色のリストバンド

「いや、スバルさん！その、なんでもないです！」

そう言って慌てた様子でリストバンドを元の場所に置いてスバルを引っ張って髪飾りのコーナーへ行く

「リストバンドねえ…」

心当たり一つ

かける隊長

確かいつも黒のリストバンドをつけている

最近では珍しいクリスタルタイプじゃないデバイス

「まさかユウナがね…」

ちらつとユウナを見る
するとすぐにユウナと目が合う

「スバルー。ちょっと来て。入り口で火星人に宿題のノートを破られないように死守してるすごい魔導師がいるわよ」

そんな者はいない

しかしスバルの目をちょっとでも、5分でいいから引き離す！

「本当?! ティア待ってて、今行く!」

信じた!

さすがスバル!

「こつちよ! 来て!」

スバルの手を引いて、外に出る

当然そんな10000年に1度の奇跡並の事件は起きてない

「あちゃー、どっか行ったみたい」

店から飛び出てわざと大げさに当たりを見回す

「いや、されど火星人。そんなに足は速くないはず。まだ目視できるはず!」

スバルはやけに変な期待を込めて上を見上げたりしている

「…いなくなつたわね」

そうスバルの肩に手を置いて言う

スバルは道端に座り込む

「あの、終わりました」

後ろからユウナの声が聞こえたから振り向く
ユウナは顔を真っ赤にしてうつつむいていた

しかしその顔が一瞬にしていつものユウナに戻る
理由はすぐわかった

彼女のデバイス”フォーマルハウト”が通信が届いていることを示している

左手のブレスレットを見てユウナは呟く

「全体通信？」

急いでクロスミラージユを見て確認する
発信者は、キャロ

それを落ち着いた様子で聞く
そして続けてなのは隊長から連絡が来た

「ごめん。休暇はちょっと一時中断。キャロ達がいる方向に向かって。そこに隊長陣も行くから待機しといて」

「了解。」

「わかりました」

さらに追加でかける隊長から補足が入る

「ユウナの荷物は後で来るへりに積んでいけ。だからそのまま集合して現場で子供とケースの防衛に加わってくれ。最短ルートはそこ
の近くから出るバスに乗れ。7分で着く。出発時刻は2分後。健闘
を祈る」

端的に説明して切っていった
向こうも忙しいのだろう

「了解しました。師匠」

ユウナがうなづく

「じゃあ、行くわよ！」

休暇は一時中断と言ったが終わったに近い
今は任務だ

身体の中のスイッチを切り替える

そうして、更なる出会いが始まる

第47話 機動六課の休日（OUT）（後書き）

ユウナ：、あんたいったい何してんのさ

とりあえず休暇終了

次回からナンバーズ編かな

最初の文章

かけるの両親の研究の話

今入れました

前回のユウナの話と対になる感じに

ユウナの過去編も番外編扱いで書くころかと思いましたが自分にはそれを書く時間すら無さそうです

ちょっとシナリオ修正で更新が遅れています

ご了承ください

次回をお楽しみに！

第48話 地下水道での戦い（前書き）

ルーズリーフは最強だと思う
白湯です

だいたい終わりまで話は決めました
楽しんで頂けるかはわかりませんが、極力頑張ってみます

では、ごきげん！

第48話 地下水道での戦い

「…レリックの反応に釣られてガジェットが来てる？」

とあるビルの屋上に立つ少女が呟く

その横で空中に映像が浮かぶ

そこから指令を伝える声が聞こえる

「へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下の方に。騎士ゼストとアギト様は？」

画面に映る白髪の女が聞く

「別行動」

そう端的に伝える

「お一人ですか？」

そう心配そうに聞く

「1人じゃない」

そう言って少女は黒い物体を召喚して、それに頬擦りをする

「私にはガリユールがいる」

「失礼しました。協力が必要ならお申し付けください。最優先で実行します。それと耳に入れてほしい案件が1つ」

「…何？」

「例のドクターが言っていた魔導殺し（まどうごころし）が動いてるみたいです。極力関わらないようにと」

そう落ち着いた声で伝える

「わかった」

それに感情を一切含めず端的に返す

いう事だけ言って画面は消える

「行こうか。ガリユー」

ガリユーと呼ばれた黒い物体は小さく光って召喚師に応える

「探し物を、探しに」

そう言つて少女は転送魔法を使って消えた

残るのは、未だ雲が残る青空だった

「なんで今日なんだよ……」

へりにてそのまま現場へ急行

へりの中にはなのは、フェイト、シャマル、ギンガ。あと俺と運転手のヴァイス

シグナムとヴィータは聖王教会へ行ってるため戻ってきてても間に合わない

「ガジェット破壊のために戦力をここまで送るか。まあ、機動六課らしいが」

「うん。ちよつと多いかもしれないけどガジェットはもう動いてる。市街地にかせないためにも空で食い止めないとね」

そうやって握り拳をつくるのは

「早く終わらせてあの子の事について調べないとね……」

フェイトが不安げに呟く

「人造魔導師ってのは確定情報なのか？」

ギンガに聞いてみる

「はい。おそらくは。私は別チームの捜査班から聞いたんですけど、この近くで5、6才用の生態ポッドを発見してます。まだ培養液が乾いてない事から、出て間もないかと」

「そんな少女がレリックもって引きずってた、ねえ…」

なんか出来すぎてる感じがする

まるで彼女が異分子だと強調しているような

「とりあえずガジェットや」

はやてからの通信が聞こえて顔を上げる

「レリックに釣られてたくさん出てきたようや。それを全機破壊。増援がなくなりしだい各方面のバックアップ。何か質問は？」

「ありません」

ギンガがきつぱりそう告げる

「ちゃんと保護するよ。レリックも、その女の子もや」

そう言うのが先か、ヘリは加速して現場へ急行した

「ユウナ、そんなに買ったのか…。ヴァイスー！詰め込んでくれ！」

あいよー！と威勢のいい声が後ろから聞こえた

今は一応隊長と医療専門のシャマルが降りて様子を確認している

「師匠。絶対に六課に帰ったら渡してくださいよ！」

ユウナは念入りに言う

「わかったわかった。今は任務の方を頼むよ」

「お願いしますね！」

そして現場についてキャロがとある事を言った

「レリックがもう一個ある?!」

なのはが驚きのあまり固まっている

「はい。たぶん地下水道の中です。センサーに反応もありませんし」

キャロはなのは達に状況を説明していく
それに1つずつ頷き返していくフェイト

しかし気になることはもう一つある

「子供の様子はどのなの？」

今治療しているシャマルに聞く

「バイタル、安定してるわね。危険な反応も無いし心配無いわ」

「…人造魔導師の可能性は？」

フォアード陣には聞かれぬよう小さな声で聞く

「それは検査してみないとわからないけど…、やっぱり。ちょっと魔力値が高い気がするからその線はあるかも」

「わかった」

そこではやてからの全体通信が届く

「みんな、ガジェットドローン接近中や。レリック2つもあるから反応がでかいんか知らんけどまず1つ封印。それから配置についてくれるか」

「了解。」

フォアード陣が一斉に頷く

「今回の配置はちよつとすごいで?」

はやての言った配置をまとめるところだ

地下突入隊

フォアード陣とギンガ

地下殲滅隊

俺

航空殲滅隊

なのはとフェイト

へり

シヤマルとヴァイス

「……ってギン姉?!」

「そうよ。私も行くわ」

そう言ってへりから颯爽と飛び降りみんなの前に姿を現す

「デ、デバイスは?」

「あるわよ?」

そうやってついさっきリインフォースからもらったデバイス”ブリ
ツツキヤリバー”をスバルに見せる

「ギンガさん。お久しぶりぶりです」

「久しぶりティアナ。元気にしてた?」

「はい。ギンガさんも元気そうで何よりです」

そう言って二人ハイタッチする

「感動の再開(?)みたいだが今は任務だ。みんな、気を緩めるな
よ。」

そうみんなに忠告する

「じゃあ、みんな頑張って来てね！」

なのはがみんなにそう言って任務が開始された

そう言ってみんなその場でセットアップして持ち場についた

マンホールを開けて急いで中へと突入する

「一応フォアード達はレリックの捜索に当たってくれ。ガジェットは増援とかも任せて先に行け」

下水道についた時にそう指示する

「とりあえず途中まではついていく。といつか必然的にそうなる。回収、頑張ってくれよ」

「わかりました。じゃあ、先に行きます！」

ユウナがそう言って走っていく

「ユウナさん！そっちは左じゃなくて右です！」

「あれー?!」

キャロに注意されて慌てて方向転換するユウナ

…大丈夫かな？

「何かあったら連絡しろよ。走って向かうからな」

「頼りにしてます。かける隊長」

スバルがローラーブーツを走らせながらはにかむ

「そんなかける隊長に嬉しいお知らせがロングアーチからあるそうですよ？」

ティアナがそう言うのとルキノの声が通信機から漏れる

「ガジェットドローン陸戦型18機。3グループに分かれて突入して来ます！」

「…まじ？」

キャロの方を見る

「えっと…、ケリュケリオンのセンサーにもそう反応してます」

「とりあえずこいつらに任しとくか」

そう言うってお馴染みのブラスタースタービットを展開する

「ブレストウイング。アンサラー・フランクスシフト」

了解しました。発動中は非殺傷設定が解除されますがよろしいでしょうか？

「熱源探知も忘れるなよ」

了解。魔力刃装着。発射準備完了しました

「じゃあ、発射！」

そして十字路に立ち、みんなが行く道以外の3つに2機ずつ飛ばす

「かける隊長…、今なにか不穏な言葉が聞こえた気が」

ティアナが走りつつ聞く

「非殺傷設定解除？それは無いに決まってるじゃないか？」

「え、でも今ブレストウイングが言った気が」

エリオも慌てて聞き返す

「…たぶんあれだ。みんな疲れてるんだろう。気にするなって」

「あ、ロングアーチから通信」

ギンガが走りながらそう伝える

「えっと…、18機沈黙。あ、更に増援、数は…36機です！」

「やっぱりそう簡単には行かないか。みんな！ここは任せて先に行け！」

「師匠！」

「大丈夫だ、ユウナ。ちゃんと生きて帰るさ」

「いや、それはなんてフラグなのかなって…」

そう言って立ち止まる俺を後目に先に行った

しかしガジェット達は待つてくれずにどんどん来る

…さすがに多すぎないか？

そう思ったが気にしない事にした

「かける隊長もなのは隊長達もすごいわね…」
隣でティアナがそう言う

「リミッター付きでこれですもんね…」

私も異常だと思いつつそう言う

六課にはもともと過剰と言える戦力がある

それこそ、本気になれば地上本部くらい簡単に落とせる程に

「それにしてもすごすぎ。防衛ライン維持程度じゃないわよ。こんなのガジェット作った人が逆にかわいそうになってくるわよ」

ギンガがそう言う

「確かに。まだ誰がガジェットを作ってレリックをなぜ集めるのか
わかって無いですしね」

そう言っつてギンガに言い返す
しかしギンガは黙る
むしろ顔色が悪いくらいだ

「…ギン姉、大丈夫？」

スバルが不安になったのかギンガの顔を覗き込む

「え、いや！大丈夫よ。ちょっと考え事してただけ」

「久しぶりの出撃だから緊張してるんですか？」

キャラロがそう聞く

「いや、私は108部隊で結構修羅場くぐってきたから大丈夫だけ
ど…、うん。やっぱりそうなのかな」

しかしギンガの顔はまた考え事モードに入っていた

「レリックっつてなんなんでしょうかね？」

エリオが興味本位で私に聞く

しかし私だけかもしれないが致命的な事を知らない

「レリックって、何？」

「はい。よくわからないんですよ。赤い結晶みたいで綺麗なんですけどね」

「へえー。ルビーみたいな物か」

なるほど。宝石か

「…ユウナ。あんたまさか」

ティアナが驚愕の表情でこっちを見る

「…レリックってどれくらいの大きさか知ってる？」

そして恐る恐る聞く

もちろん返答は決まってる

「知らないですよ？」

一瞬にしてあたりの空気が凍りつく

スバルが角を曲がりきれずに壁にぶつかる鈍い音がしてみんな我に帰る

「いったく。って、えええええ！」

「そういえばユウナさん。レリック搜索任務って初めてでしたね」

キャラロがひらめいたといった感じに言う

「うん。私が参加した任務はスライム探しくらいだもん」

「スライム？」

ギンガが不思議そうに聞く

「うん。スライム。爆発したら解決したんですよ」

海鳴市に行っていないギンガには蚊帳の外の話だった

しかし、さつきから走り続けているからかすぐに目標地点についた

「あ、つきました。たぶんケースに入ったままなんでそれを見つけたら大丈夫です」

そうして搜索が始まった

「広いなあ…。レリックくん。恐くないから出ておいでー」

「いや、あの。ユウナ。レリックは犬じゃないんだから。そんな愛称付けて呼んだって出てこないから」

なにか残念な物を見る目をしてティアナが私の肩を叩く

「レリックくん…。ふふっ、あは、あははははっ！」

スバルはツボに入ったのか、腹を抱えて笑い転げている

「あなた達…、ちゃんと探しなさいよ」

ギンガは腰に手を置いて呆れた目でこっちを見ている

「私は真面目です！…レリックが犬の場合なら」

「レリックは無機物で魔力結晶だってさっきキャロが言ったじゃない」

ティアナは無視して探しに戻る

「私は好きですよ。犬。師匠は嫌いらしいですけど」

「いや。聞いてないから」

もうティアナ以外誰もツツコミを入れてくれなくなった

そんなとき奥から声があがる

「有りましたー！」

キャロの声だ

聞こえて集まるうとして異変に気づいた

「…水音？」

バシャバシャと水が跳ねる音

そして浮かぶ黒い魔力スフィア

「危ない！キャロ！」

近くにいたエリオが真っ先に援護に入る
だが間に合わないだろう

「フォーマルハウト！」

All right・Snipe mode・Standby

私のデバイスは私の声に答えるように銃身を引き伸ばす。
スナイパーライフルの形に近くなったその銃を抱え上げて狙いを合
わせる

魔力スフィアの周辺に向けて2、3発打ち込む
赤い閃光が暗い地下水道を照らしながら進み、何かよくわからない
ものにぶつかって弾ける

「貫通してない?! ガジェットじゃないの?!」

ギンガはあれはガジェットじゃないとした
確かにあれは機械の手応えじゃなかった
しかも人でもない

魔導師がスナイプショットを受けて無傷なんて考えられない

それはスフィアをキャロの足元に打ち込み爆発を生む

「きゃあー！」

キヤロは爆風に巻き込まれ吹き飛ば
その拍子にレリックを手放してしまった

しかしそれだけじゃ済まなかった

何かしらの激しい光と音が行動を阻害する
スタングレネード？！

「ルール。レリック拾ったか！拾ったなら離脱すつぞ！」

その中で声が聞こえた
高い、女の声

Cartridge load .

フォーマルハウトがカートリッジをロードする
そくだ、あれを撃ち落としたい

「クロスファイア、」

声が聞こえた方へ銃口を向ける
スナイプからバスターに切り替える時間がもつたいない
ティアナ借りるよ

「シュート！」

空気をえぐる音と同時に視界が戻る
しかし弾は当たった感触はない

「危ねえな。そんなもん撃つなんて。ま、当たらなきゃ意味が無いんだがな」

瓦礫と立ち上る砂埃の中から声が聞こえる
みんなも視界が戻ったのか辺りを見回す

それはいた

そこにはレリックを抱いた紫色の少女がいた
その肩には赤い小さい人形みたいなのが浮いていた

さらにその後ろには殺気をだだ漏れにしてる人ではない何かがいる

「とりあえず、レリックは渡さない」

それがその少女が言った、初めて聞く言葉だった

第48話 地下水道での戦い（後書き）

ルーテシア現る。

ついでにガリユールとアギトも

クロスファイア。

あれは確か誰でも撃てたはず
なのにも撃ってたし

ユウナがたくましく生きてます
初レリック検索任務ですが

では、次回をお楽しみに！

第49話 増援と配置移動（前書き）

クーラーに当たりすぎて風邪ひいた
白湯です

ちきしょう。

なんでこんな身体弱くなったんだよ

今日は地元の高校が甲子園でるとか
ちょっと珍しくテレビの前で正座とかして見るつもり

最初はあるラボ内です
では、どござー！

第49話 増援と配置移動

「ほう、いかんせんこれは素晴らしい」

ブラスタービットが飛び交い、ガジェットを潰していく映像を見て
そう呟く男1人

「なかなかやるじゃないか、管理局も」

たった6機

それにこっちのガジェットはもう100機近くは落とされた

しかも動きに衰えは見られない

「その操作主にもかなりの負荷が有るはずなんだが…、一切ないよ
うだね」

今度はかけるの映像を見る

そこにはガジェットを刀で切り裂き破壊していく姿が映る

「こんな様子じゃ、足止めは難しいかな？」

「ドクター。増援を送りますか？」

空中に浮かんだディスプレイに顔が映る

その首の金具には”？”の文字

「ああ。ウーノ、頼んだよ。もちろん生産ラインも稼働しといてくれ。減るのは今後に差し支えるからね」

「わかりました」

「ドクター。私達も出撃したい」

そう言っつて”？”の金具がついた赤髪の女が言う

「ノーヴェか。君の出番はまだ先だよ」

「私も、私達の上に立つ存在を見てみたい」

しかしノーヴェと言われた少女は引く気が無いらしい

「駄目よ。まだあなたの固有武装はまだ完成してないもの」

ウーノがドクターの助太刀に入る

「そうだ。君が出なくても必ず手に入る。だから待っていてくれ」

「…わかった」

ドクターがそう言っつとノーヴェは大人しく引き下がる

「そろそろ限界のようだね。デイエチ、クアットロ作戦を決行してくれ」

「わかりました。ドクター」

クアットロの顔が画面に浮かぶ

この作戦は自分の手駒を明かしたに近い
だからなんとしても成功させなくては

「頼んだよ。みんな」

そう言つて通信を切る

残るのは未だに画面の中でガジェットを鉄くずへと変えているかけ
る、なのは、フェイト、そして人造魔導師を乗せたヘリコプター
それと笑いをこらえているドクター1人だった

「まずいね。キリがない」

サーチャーが大量のガジェット存在を示す
目視でも確認できる

「幻影と実機の構成編隊?!」

フェイトちゃんは確認できたらしい
やっぱりそうだ

サーチャーに映ってる半分は幻影だ

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、何か裏があるね」

このタイミングで幻影という切り札に近い技を使ってきた
そうなると思えられる事は限られてくる

「ここまで派手な引きつけをするって事は地下か、へりの方に主力
が向かってる」

フェイトちゃんはそう予想した

そして続けて言う

「なのは。私がここを抑えるから。みんなの方に行ってあげて」

「フェイトちゃん?!」

「コンビニでも、普通に空戦していたら時間がかかりすぎる。限定解
除したら広域殲滅でまとめて落とせる」

「それは、そうだけど。」

「なんだか、嫌な予感がするんだ」

しかしその会話は一つの通信によって断ち切られる

「割り込み失礼！ロングアーチからライトニングへ。その案は、
限定解除も、部隊長権限で却下します。」

そこには、騎士甲冑姿ですでに待機しているはやての姿があった

「はやてちゃん！なんで、騎士甲冑？！」

セツトアップしている友達を見て驚く

本来、部隊長が所属するロングアーチは動かすが基本である

そのための実働隊のスターズとライトニングである

「嫌な予感も私も同じでな、クロノ君から私の限定解除許可をもらう事にした。空の掃除は私がやるよ。なのはちゃんとフェイトちゃんはヘリの護衛、リインフォースは地下の方に向かってくれるか？」

そう落ち着いた声で言う

後は動くのは早かった

「いくよ、なのは！」

フェイトちゃんが加速をかけて飛んでいく

もし本当にはやてちゃんが来るのなら邪魔になるだけだ

「わかった。というよりリインフォースさん、いつから参加してたんですか？」

地上に向かいながら通信でリインフォースさんに聞いてみる

「さすがに、数が多くなっていったからな。転送魔法で飛んできた」

そう端的に告げる

彼女もまたはやてちゃんと同じように騎士甲冑を装備している

「まさか1人で南西方向を？」

フェイトちゃんが恐る恐る聞く
自分達は北西に居たからわからなかった

「こんな時でもない私の殲滅魔法は役にたたないからな。ありがたく使わせてもらったよ」

ユニゾンしたかったが、とぼやいていた
まあ最近はファイティングサポートシステムでユニゾンの機会は減っているらしいし

「切り札をなかなか見せないようにするためなのかな」

なのはがそう言う

「そうだろうな。何かこの事件には大掛かりな裏があるだろうし」

そうリインフォースは告げて飛ぶ

「ま、全部潰していけばいいがな。ロングアーチへ、スターズ2はこれよりフォアード陣への援護へ向かう」

「ヴィータちゃん！」

「ナカジマ三查が許可をくれた。ちょっと前からそっちへ向かってる」

「よし。なら任したで。みんな。リミット、リリース！」

はやてが自身のリミットを解除する

ひとつわかることはある

早くここから離れないと、最悪墜ちる
そう思うと自然と加速できた

「とりあえずそれは危ない物だから私達に渡してもらえるかしら？」

ティアナが落ち着いてそう言う

「…やだ。これは、私の」

しかし少女はケースを抱いたまま動こうとしない

「交渉決裂、ですね」

そう言ってユウナがフォーマルハウトをバスターモードに切り替える

「ああ。そのようだな！」

そう言って赤い小人が火球を作り出して言う

「焼ける！管理局員！」

そう言って扇を描くようにそれが放たれる

放たれた爆風により、吹き飛ばされる

「くっ！」

爆風によって舞い上がった煙を目隠しにして一回敵に見つからないようにあつまり状況を把握する

キャラは気絶しているのか、今はエリオが抱っこしている

ユウナが、いない？

「こんな火力じゃ、魚すら焼けませんよ？」

銃を盾にしたのかその場から動いていない

「ユウナ！深追いは止めて！撤退よ！」

ティアナのその声に動じる事無く突き進む

「ガリユー。お願い」

そう言うと黒い物がその少女の声に頷いて盾代わりになる

「クロスファイア、シュート！」

赤い砲撃が放たれる

しかしそれを身じろぎせずつ動かずに防ぎきるガリユー

「砲撃には自信あったんだけど、これはちょっとショックだな……」

そうやって足の装甲の中に手を入れて一本の筒を取り出す

そしてそれを少女達に投げてフォーマルハウトを構え直す

「さあ、まだまだ行くよ！」

ユウナはそれを撃ち落とす
するとすぐに白い光で辺りが包まれる

「閃光弾?!」

ユウナは身じろぎせず少女に突撃する

しかし黒い物には閃光弾は効かなかったのか、ユウナを殴って止める

ユウナは弾かれて壁に当たるはずだったが、それは起きなかった

ユウナの姿が揺らぎ、敵の右ストレートは当たらずに空を切る

代わりに少女の腕からケースが雷の速さで奪われる

「レリックが…」

少女は名残惜しそうにそう言う

「ルール、大丈夫か?!この野郎！」

そして火球をランダムに上から赤い小人がばらまく

「こりゃ、やばい！今度こそみんな撤退よ！」

しかし、敵はその程度で許してくれなかった

黒い、人ではない何かが無言で飛来してくる
その腕に爪を生やして

「はああ！」

気づいたギンガがフォアード陣を守るも兼ねてか迎撃に入る

しかし拮抗状態は続かず、爆発がおきて2人ともバックステップで
距離をとる

それを見計らってか、また火球が飛んできた
水しぶきがかかり身体にひんやりとした感触が来る

柱の影でスバルがティアナに聞く

「ティア、どうする？」

「任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引きつける。ユウ
ナ、かける隊長と通信は繋がった？」

「駄目みたいです。今かける隊長が離れたら…、数十機のガジエツ
トがここに流れ込んで来ます。そうなれば確保どころじゃ無くなり
ます」

「わかった。じゃあ、無駄な戦闘はなるべく避けて、撤退しましょ。
レリックは手に入ったんだし」

そう言ってケースを持つてるエリオを見る

「撤退するように見せてユウナが陽動。そこからスバルとギンガさんが撤退用通路の確保。ユウナのバックアップは私が幻影で。ケースはエリオがソニックムーヴで確保」

「ギャンブル性は高いけど、レリックの奪還には成功したわね」

ギンガさんが物陰に隠れつつそう言う

「こんな事したって言ったらなのはさんに怒られるわね」

ティアナがちよつと笑いながら壁にもたれかかる

「いや、ナイス判断だ。みんな」

「ああ。おかげで躊躇せず捕まえられる」

通信で聞こえたのはスターズの副隊長と八神隊長の融合騎の声だった

「うおりゃああああ！」

後はもうその場から聞こえる

なんとまあこの人達は地下水道の天井を抜いて来た

「捕らえよ、凍てつく足枷」

そう言うと、少女と小人の周りに水が集まる

ここは地下水道、水の集まる速さは通常より速い

「凍てつく足枷」

そう静かに言うと一瞬にしてその場が凍りつく

「ギガント、ハンマー！」

ヴィータも負けじとハンマーで黒い物を殴る力押しに出る
数秒はこらえたが、吹き飛び壁に穴を開ける

それを確認したヴィータはハンマーを元の大きさに戻してフォアードの方を向く

「おう、待たせたな」

「さすがはなのは達が鍛えてるだけはある。致命的な傷を負った者は…0か。さすがだな」

「あ、あははっ」

なぜかみんな引きつった笑い

「副隊長達、やっぱりつよい…。でも同員が公共施設壊しちゃっていいのかな？」

「まあ、この辺は廃棄都市区画だったし…いんじゃない？」

スバルの問いにティアナが答える

「ここなんかまだいい方だ。かけるが居るところは地下水道じゃなくて地下広場になってるからな」

ヴィータが画像を見せる

そこには壁という壁は無くなり、床は壊れたガジェットの残骸の重さで穴が開いていた

「…あの、かける隊長何したんですか？」

「本人曰わく、ガジェットをたくさん叩いただけらしいがな」

そうやってヴィータは自分が飛ばした獲物を確認しに壁に近寄る

「…居ない？」

「そつちも居ないのか。まあ、逃げるだろうな。普通は」

そうやってリインフォースは氷を解凍する

するとそこには穴だけあって他には何も無い

辺りを探そうとした時に地響きが起き、自分達の行る場所が倒壊を始める

「…地震か？」

リインフォースが天井を見上げる

「さっき、大型召喚の気配がありました。だからこれはその影響かと」

キャラが目を覚ました

「キャラ、大丈夫？」

エリオが心配そうに声をかける

「…うん。大丈夫だよ」

そう言ってキャロは立ち上がりエリオの手を握る

「イチヤイチャする暇があれば逃げような。スバル！頼む！」

「はい！ウイング、ロード！」

螺旋状にウイングロードがさつきヴィータが開けた穴に向けて伸びる

「スバルとギンガが先に行け！私とリインは最後に飛んでいく！」

そうして地下搜索から地下脱出任務に早変わりしてしまった

「…レリック、返して」

穴から出てスバルが見たのはそう言って手を伸ばしている少女だった

「えっと…、なんているのかな？」

状況があまりよく把握できてないスバルはとりあえず聞いてみる

「それは、言えない」

「言ってくれなきゃわからないよ」

「じゃあ、番号だけ教えて。何番か」

「…番号?」

レリックに番号がついているのは知っていた
だがなぜ必要なかは言ってくれないらしい

「ティアはどうする?」

とりあえず相棒に聞いてみる

「さっき地下で確認した。間違いなければあれは6番よ」

「そう、なら要らない」

そう言っって背を向ける少女

「ま、逃がしてあげたいけどね。こんな所で大型召喚したり、管理
局へ攻撃したら逃げれなくわよね」

そう言っってティアナは銃を構える

「管理局はそういう物だしな」

そう言っってリインフォースはバインドをかける

腕、足、肩、腹その他5箇所
ちよつと多いと思うくらいである

「子供を苛めてるみたいであまりいい気にはならないが、とりあえず来てもらう」

ヴィータが懐から手錠みたいなものをだしてバインドの上からはめていく

こうして召喚能力持ちの少女とレリックの確保に成功した

しかし異変が起きた

さっきまで静かにしていたのに急に喋りだしたのだ

「逮捕はいいけど」

「大事なへりは放っておいていいの？」

これを聞いてその場のメンバーが一気に悟る
しまった

敵の狙いはレリックじゃなくてへりだったんだ

その後も続けて少女は言う

「あなたはまた、守れないかもね」

それが何の意味を持つのか

わかる人には一瞬でわかったがそれより先に、砲撃は放たれた

第49話 増援と配置移動（後書き）

はい

戦闘パートが多くてちょっと嬉しかったり

万能兵器スタングレネード

たぶん今回がでるのがラストだったので2回くらいだしちゃった

次回でこのパート最後かな？

たぶんそうなる

では、お楽しみに！

第50話 イノームスカノン（前書き）

お盆は実家に帰らせていただきます
白湯です

前述の甲子園

なんと延長戦からのサヨナラ勝ち！

…いや、だからどうしたっていうね

でば、どうぞー！

第50話 イノームスカノン

「ディエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

ビルの屋上に2人の女が立つ

首に”？”と書かれた方がディエチに甘い声で聞く

「ああ遮蔽物もないし、空気も澄んでる。よく見える」

首に”？”と書かれたディエチはそう答える

「でもいいのか、クアットロ。撃っちゃって。ケースは残せるだろうけどマテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

「うふふ。ドクターとウーノ姉さま曰わくあのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら砲撃くらいなら死んだりしないから大丈夫。だそうよ」

「ふーん」

そう言つて布でくるまれた棒状の物を拾い上げる
そして布が剥ぎ取り自分の固有武装を外気にさらす

狙撃砲”イノームスカノン”

「クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ」

それをディエチが用意しているときにクアットロにウーノから通信が入る

「ああ。そう言えば例の騎士に捕まってましたね」

そんな事は最初から知っていた
それよりも今はへりが気になる

「今はセインが見守ってるけど、いつでも動かされるわ」

セインを使って助けろという事らしい

一次中断は…、しなくていい

同時平行でやればいいのか

「フォローします?」

クアットロが確認のために聞く

確かにここで召喚師を失うのは痛い

「お願い」

ウーノはそう言って通信を切った

「セインちゃん。こっちから指示を出すわ言つとおり動いてね」

「うーん。りょうかい」

そうセインの間延びした声を聞いた所でディエチの用意が完了した

「インヒューレントスキル、ヘヴィバレル。発動」

デイエチはそう言って無反動砲のチャージを開始する

それと同時にクアットロはルーテシアに言葉を伝える

「逮捕は、いいけど」

「大事なへりは放っておいていいの？」

それを伝えただけで向こうで息を飲む声が聞こえるのが手に取るようにわかる

「あと12秒。11、10」

デイエチがカウントダウンを始める

するとクアットロは思いついたようにルーテシアに追加で頼む

「あなたはまた、守れないかもね」

赤い騎士、ヴィータに向けてその言葉を捧げる

「発射！」

そうして、デイエチの砲撃は無慈悲にも放たれた

「間に合わない！」

「エクシードモードでもダメ！追いつけない！」

フェイトとなのはは飛びつつ確認する
その表情には焦りがある

「熱源反応増大！物理破壊型、推定Sランク！」

「砲撃?!このタイミングで！」

ロングアーチのオペレーター陣も驚愕の表情で画面を見つめる

空気を揺るがす着弾時の音が確信させた
砲撃は着弾したのだ

「うふふのふ〜。どうこの完璧な計画は」
クアットロが自慢するわけでもなく軽く言う

「黙って。今命中確認中」

しかしへりの頭が見えて確信する

「あれ、まだ飛んでる」

目を凝らす

へりの前に人が見えた気がした

通信傍受もつけて煙が晴れるのを待つ

「スターズ0から、ロングアーチへ」

あれ、この声はドクターが言ってた要注意人物の中にいた気が

「独断で任務を放棄。加えて、へりの防御成功しました」

まじかよ

こっちもフルパワーじゃないとは言え

「やはりね…。うふふつ。この作戦は成功よ」

クアットロは静かに笑っている

マテリアルの回収（撃墜？）に失敗したから怒られるのは確実なのに

煙が晴れた場所には焼けただけだれた盾を構えて砲撃を防いだ人間が見えた

脳内データベースで確認する

顔照合。間違いなく魔導殺しだ

通信がさらに聞こえる

「あとは任せた。なのは」

そう言っ指先をこっちに向けていた

そつだ、場所がさっきの砲撃でバレたんだ

早く逃げないと

そつ思ってイノームスカノンを屋上に放置してその場から逃げるためにジャンプした

「…やっぱりへりに主力が行ったか」

地下水道でもう数えるのも面倒くさくなつたガジェットを破壊していく

そんな時にロングアーチから連絡があつたのだ

「現勢力にて防衛に回れる実力を持つてるのは何人？」

今は右手の甲冑に隠れているブレストウイングに聞いてみる

0です。へりの中のシャルさんでも防ぎきれないかと

「へり落とすだけなのに異常に強力な火力使うな…」

防御不能にしたいんでしょう。手加減を知らないですね

「今から言って間に合うか？」

到達予想時刻は8秒後。十分です

ブラスタースピットが帰ってきて、6つ合体して盾になる
そのサイズは全身を覆う相変わらずな大きさ

その間にもすでに移動を始める
ガジェットはこの際無視しよう
他にする事があるから

ギリギリだった
盾に入るのと砲撃が放たれるのは同時だった

「魔法吸収があるからすぐさま反撃にでるぞ。準備しとけ」

了解

しかし予想は大きく外れた
ズドンとくる重さに体勢を崩しそうになる

「質量兵器?!」

ブラスターを思いつきりふかして体制を持ち直す

チャージ必要な実弾なんて聞いたこと無い

「くっ、うらあぁ！」

飛んで来た砲撃を押し返す勢いで力を込める
へりを、落とすわけにはいかないんだ

ここにはヴァイスがいて、シャマルと保護している少女がいて、レ
リックもある

それとユウナの買い物袋

今日1日の思い出が詰まったそれを墜とさせる訳にはいかないんだ

願い届いたのか砲撃は止んで、へりは無事空を跳び続けている

「はぁ、はぁ、止めたぞ」

お疲れ様です

「思わぬダメージを受けたけど。プラスタービット、動かせる？」

∴表面が融解して他のプラスタービットと結合しています。展開
不可です

プラスタービットはなかなか精密な機械である

ちよつとした誤差で結合および展開ができなくなる

今の自分は盾だ

ここを動くわけにはいかない

「ロングアーチに連絡入れて敵の位置を報告してこの場で待機。頼んだ」

了解。ただし説明はあなたの口からどうぞ

そう言っつて通信機の電源が入る

「はいはい。スターズ0からロングアーチへ。

。」

レリックも回収して召喚師も確保

なかなかいい結果じゃない？

そう思っつて盾を背中に背負っつて待機した後はみんなが上手くしてくれると信じて

「へり防御に成功したっつて！今ロングアーチから通信が！」
ギンガが嬉しそつにヴィータに伝える

「本当か！ギンガ！」ヴィータは嬉しそつだ
自分の力ではないが、また守ることはできたからだろうか
顔を上げてフォアード陣を見回していると異変に気づいた

「…ってあれ？誰だおめー」

ハンマーをエリオの後ろにいる水色の髪の女に突きつける

みんなも何かしらの達成感で気づかなかったのかエリオの後ろにいる人間の顔を見て驚く

すると無言でさよならと手を振りエリオからケースを奪い取って後ろに2歩、3歩と下がる

「あ、こら！待ちやがれ！」

しかし彼女は想像を絶する逃げ方をした
地面に潜ったのだ

それこそ地面が水のようになっただみみたいに

ティアナも驚いてはいたが頭を切り替え、威嚇射撃で数発地面に撃つが効果はいたって見られない

「あ、あつちに手が出てます！」

キャラ口が指差した先には確かに人の右手が出ているのが見える

その手の先にはレリックケースがある

誘っているのかわからないが、とりあえずキャラ口とエリオを残して他のメンバーは確認に走って行く

「うぶぶっ」

そんな小さな笑い声が聞こえたのは召喚師の近くだった
そこにはさっきの女が正面から召喚師に抱きついていている姿が

そしてそのまま地面に潜る

ヴィータがヘッドスライディングで飛び込むも、時すでに遅し

逃げられた後だった

「ケースも、召喚師も逃がした。あ、リイン！さっきのちびっ子は
！」

ヴィータがリインフォースをあわてて見る
リインフォースは悔しそうに首をふる

その手には誰も捕まっていない拘束具が握られていた

「身体のサイズを自由に換えられるらしい。捕まった時にちよつと大
きくして捕まっていたんだ」

リインフォースがみんなに説明する

「なるほど。だから元の身体の大きさ、あるいは元より小さくなっ
て逃げ出したんですね」

ユウナが補足で説明に入り納得する

ただそれよりわかることがヴィータとリインフォースにはあった

「逃げられた…！」

ヴィータは自分への怒りがあってか近くの壁を力の限りで殴っていた

「逃がさない」

フェイトはそう言って逃げた方へ向かう

「市街地における危険魔法使用、および殺人未遂で逮捕します！」

そのフェイトの意志にそつてか、バルディッシュが魔力スフィアを発生させる

「IS発動。シルバーカーテン！」

空を飛んでいる敵がそう言つと隣でジャンプして逃げていた敵と同時姿が消える

こいつ、幻術使い…！

たぶん航空機を大量に出していたのはこいつだろう

「ならここで抑えなきゃね」

Yes

「ファイア！」

そう言つて魔力スフィアからありつただけの魔力弾を出す

しかし見えない敵には当たらない
やはりここは例の友達の出番か

そう思つて踵を返す

「はやて！」

「うん。位置確認、詠唱完了！発動まであと1秒」

はやての得意分野は広域空間攻撃だ

見えない敵に対しては点の攻撃よりも面での攻撃が有効

「遠き地にて、闇に沈め」

はやての十八番^{オハコ}

バリア発生阻害のオマケがついた純粹魔力攻撃

「デアボリック・エミッション！」

はやての遠隔発生のスキルにより市街地のご真ん中で発生させる

闇が広がる

するとそこから飛び出る白い物を見つけた

さっきのマントをつけた方がもう1人を抱えて飛び出したんだ

「なのはちゃん！」

はやてがデアボリック・エミッションを解除する

「わかってるよ。エクセリオン、」

なのはがカートリッジを1発使って遠距離砲撃のチャージを開始する

「バスター！」

それは光の速さでまっすぐにそれを撃墜した
墜ちていく2つの影

「命中した！」

フェイトが回収に向かう

あの2人がいる高さ約80m

さすがに落ちたら怪我すると思っただらしい

「あら？」

飛んでいて目を疑った

消えた

2人がその場から消えた

「違う。救援が入ったんだ」

横から2人を抱えて逃げ去ったんだ
速いすぎて一瞬わからなかった

「逃げられた…」

だがヘリの救援には成功したのでひと安心したフェイトだった

「ロングアーチから全体へ。報告を待っています。随時報告をお願いします」

ティアナの持つている通信機にそう連絡が入った

それを聞いてユウナはフォーマルハウトを傍らに置いて腰を下ろす

「安心して腰が抜けたに近い様子だ」

「ああ。こっちは最悪だ」

ヴィータが報告を開始する

「レリックを持って行かれた。さらに召喚師一味にも逃げられた」

「だがだいたいのスキル把握はできた。傍らにいた小人は炎熱変換スキル持ちだ。黒いのは召喚獣だろう」

ラインフォースも加わって報告を開始する

後ろでギンガ早く言いなさいといったように肘でスバルをつつく

「あの、ヴィータ隊長。いいたい事が」

言った瞬間ヴィータにハンマーを突きつけられて後ずさりする

「今、報告中だ。静かにしろ。ああ、フォアード陣はベストだった。最後に手を抜いた私たちに原因がある」

「ヴィータ隊長！」

今度はティアナが声を出す

「なんなんだよさつきから！うるせえぞ！」

ヴィータが半分怒りながら振り向く
それに臆せずティアナが話続ける

「あの、ケースには一工夫してあって」

キャラが追加で話す

「ケースからレリックを取り出して直接嚴重封印。代わりに別の物を入れてフェイクシルエットをかけてレリックと誤認させる」

「それで本体は敵との直接戦闘が少ないキャラが持つてもらった事に
キャラが帽子を外すとその中には幻術がかかったレリックがあった

「……つまり最初から渡す気だったのか」

リインフォースが頭を抱えて言う

「じゃあ、中には何があるんだ」

「地下水道の瓦礫を」

「うわぁ……」

みんなが一瞬で残念な気分になった
そうしてこの事件は幕を閉じた

謎の敵

謎の少女

とりあえず、やるべき事は今の現状の確認して事後処理だった

第50話 イノームスカノン（後書き）

といった感じにして終了です
無事守りきった！

かけるにまさかの弱点発覚か…！

どうやって克服するのか！

次回からは日常に戻ります
ただしヴィヴィオ付きです

お楽しみに〜

第50・5話 閑話休題2（前書き）

素麺が無くなりました

白湯です

長いようで短い夏ももう半分過ぎた

…海行こうかな

今回は12万ヒット記念のオーディオコメンタリーとなっております

ありがとうございます！

今回はまた設定資料の公開です

ユウナとあのデバイス2つ

では、どうぞー！

第50・5話 閑話休題2

ティアナ「おじゃまします」

スバル「入るよー。ユウナ」

ユウナ「どうぞどうぞ。そこのソファーに座ってて」

テ「わかったわ。ってあれ？誰か寝てるんだけど（毛布にくるまっている物を指さしながら）」

ユ「あ。起こしちゃダメだよ？徹夜明けで疲れてるんだから」

?「ぐー、ぐー」

ス「かける隊長の声じゃないね」

テ「んで、まあ前座はこの辺にして。始めるわよ!」

作者「ここは毛布を全部剥がして誰やねんとツッコミを入れるべきだろうが！（毛布を外して立ち上がる）」

テ「えつと…、誰やねん？」

作「今度ティアナの出番が減ります」

テ「なんでやねん!」

ユ「おお。やればできる子だった」

作「では、10万ヒット越え。ありがとうございます!」

ユ「まあ、今絶賛12万とかいっちゃってるけどね」

作「いやあ。話を途切れさせたくなくて」

テ「ま、その気持ちはわかるけどさ」

ユ「ちなみに今日何するんですか?私達がただ喋るだけでもいいのならこのままにしますけど」

作「今回もまた設定資料の公開にしたいです」

ユ「私?」

作「YES。あとそれとデバイスもやっちゆう事に」

ス「...やっちゆう?」

作「やっちゆう事にします。スバル、人の揚げ足取ってると出番減らすよ?」

ス「ごめんなさい!」

作「少し、頭冷やそうか」

テ「...あれ?怖くない」

ユ「あれはなのはさんが言っから恐いんだよ」

なのは「呼んだ？」

ユ「ごめんなさい。お引き取りください」

な「オーキードーキー。じゃあ、みんな頑張ってね」

ス「ここでは口は災いの元だね。気をつけなきゃ」

作「まあこんな感じでどうぞ！（紙を見せる）」

ユウナレスカ・ウインスレット

出身世界

第101管理外世界

使用デバイス

フォーマルハウト

年齢

ティアナと一緒

身長

ギンガより5cmくらい上

160cmギリギリ届くくらい

体重

？

顔

目は薄い青

明るい茶色の髪 赤＋茶くらい？

それと猫っ毛

目は和やか

魔力光

赤

魔力

ミッド式

イメージ的には大和撫子

健気な子

裏設定

怒ると怖い

甘い物と楽しい物が大好き

テ「怒った場面はあんまり見ないけどだからこそ恐いって事かしら」

ユ「私、師匠曰わく怒るとキャラが変わるらしいんですよ」

ス「胸は書いてないよ？いつそのことスリーサイズ公開しましょうよ。2話のアグスタでみんなの目線を集めたそのサイズを！」

ユ「えっ！その、作者さん！スリーサイズは止めましょうよ！恥ずかしいです！」

作「……胸の大きさは、スバルと同じくらいです」

ス「あ。私と一緒に？」

ユ「はい。というか一緒に銭湯行ったときに確認してませんでしたっけ？『よし、ユウナと同じサイズ。これでスターズ分隊での大きさの最下位争いは免れた！』とかなんとか」

ス「わー！わー！ストップ、ユウナ！」

ユ「それとか私が脱ぎ捨てたブラを確認して『まだ大丈夫。まだ大丈夫』ってぶつぶつ呟いてたり」

ス「な、なんで知ってるの?!というかユウナ待ってー！それ以上言わないでー！」

テ「スバル、あんた……」

ス「違うんだよ！ぐっ、しよ、証拠はあるの！」

作「そんな低級な犯罪者みたいな……」

ユ「ここに一本のビデオテープがあります」

ス「すいませんでしたー！」

テ「ユウナ、やる時はとことんやるのね……」

（少女謝罪中）

作「では、気を取り直して行ってみましょう！まずはスバルから！」

ス「甘い物好きってのは食べ物？それとも恋愛とかそっちの甘さ？」

ユ「食べ物ですね。反対に苦い物は嫌いです」

テ「何か他に嫌いな物は？」

ユ「猫…、かな？」

ス「え、なんで？」

ユ「私、猫アレルギーなんです。こつ、ちょっとさわるだけで目が赤くなつて鼻水が止まらないんです」

作「それは気の毒に」

ユ「あなたがそんな設定作るのがわるいんですよー！（作者に石を投げる）」

テ「ちょっと、ユウナ止めなよ。出番減らされるよ」

ユ「大丈夫。私がいないと今後話が進みませんから！」

ス「つまりは…、ちょっとしたキーパーソンだったり」

作「次にデバイス方面です」

テ「あんたって本当に華麗に話を逸らすわよね」

作「このスルースキルが無いと現代社会の闇とは戦えないんだ。少しは妥協してくれ」

ユ「でも上司に怒られて聞く耳持たないのはさすがにまずいよ？」

作「だって、上司会議中に寝てるだもん。本当に信じられない」

ス「まあいいじゃん。早くデバイスの話してよ」

テ「そうね。私達も暇じゃ無いんだし」

作「じゃあ、はい！まずはブレストウイングから！」

ブレストウイング

所有者

高町翔、ブレストウイング（ユニゾン時）

待機時

黒のリストバンド

かけるの右手首に付いてる

メイン武装

二刀流主体で近接戦闘を行う

・左手

打刀（愛用は1mの薄刃刀）

・右手

脇差し（60cmの日本刀）

サブ武装

盾

・170cmくらい大きさ

・展開してブラスタービットに切り替わる

ブラスタービット×6

・形や大きさはそれぞれ違う

・機能は全て一緒

・射撃用砲門と近接用剣が付いてる

バリエーションとして

グレイプニル（砲撃）とフラガラッハ（魔力刃）がある

単体での砲撃も可

しかしバッテリー駆動のため連続稼働に制限時間あり

甲冑

・バリアジャケットの上からつける追加装甲みたいなもの（炸裂可）

・ブレストウイング本体は右手首に引っ付いていてバリアジャケツトが本体となってる

ユ「楽しい感じだね」

テ「というか大半が質量兵器なのよね」

作「だって魔法使えないんですもん」

ス「私なんでこんな人と1人で戦ったんだろ」

作「でも弱点はちゃんとあったり。彼は人間って事もありますし」

ユ「ユニゾンは使った時に出た槍はなんだったの？」

作「あれはブレストウイングが勝手にやっただけで本来のプログラムにあんなものは無いんです」

ス「ふーん。あ、ユニゾンっていつ出るの？」

作「秘密です。まあおいおいですよ」

テ「刀って愛用ってあるけど他にもあるの？」

作「彼は魔法が使えない。だから持つてる武器が壊れたらまた別の武器を出して戦うしかないんです」

ス「じゃあ他にもあるの？」

作「ストックはたくさんあるみたいです。プレストウイングには隠れた機能が盛りだくさん」

テ「本編に差し支えるからこれ以上は開示しない？」

作「そういうこと」

ユ「そういえばフォーマルハウトの設定資料は開示するの？」

作「するよー。じゃあいつてみよか！抱きしめて！銀河の果てまで」

テ「そいや」

作「げべら?!」

フォーマルハウト

所有者

ユウナレスカ・ウインスレット

待機時

青のプレスレット

いつもはユウナの左腕に付いてる

大型機銃で、左手で支えて右手でトリガーを押す

カートリッジシステム付き

リミット2リリースでモード毎にサイズが変わる

本体は盾付き

モード切り替え(3つ)

・ショットガン

サイズが一番小さい(約70cm)

主に近接用

小回りが利いて使いやすいか本人談

・スナイパーライフル

サイズが一番大きい(約1m20cm)

スナイプショット専用

それ以外にはただの性能が高い1発限りの弾として使う

弾にはかなりの貫通力があり、スタンモードならヘッドショットで気絶させる事ができる

・バスターモード

サイズは90cmくらい

なのはのレイジングハートのデータをそのまま継承

発射の処理のショットカットを用意しているから発射までのタイムラグが無い

ただし発射のたびにカートリッジを1発使う

足の装甲

主に射撃補助や道具入れ

壁に貼り付いたりする事も可

しかし空を飛ぶ機能は無い

道具入れの中にはいろいろ入ってる

テ「作者って軍事マニア？」

作「違いますよ。一般人Aですよ」

ス「とりあえず全部の機能は出したの？」

作「はい。ユウナにはこれで最後まで頑張ってもらいます」

ユ「私にユニゾンデバイスが……！」

作「無いです」

ス「というよりなんでこんな大きいの？」

作「スターズだから。」

テ「いや、それ説明になってないから」

作「基礎フレームはかけるのプラスタービットが基盤なんです。それにカートリッジやいろいろつけていたらこんなになった、っ

て話しです」

ス「そういえばフォーマルハウトって名前に意味はあるの？」

作「ありますよ。ユウナの過去の話で。あ、ユウナあれ聞いてみて主にこの文章を読んでる読者宛てに」

ユ「はい。わかりました。ユウナ、つまり私ですが。その過去編の話を番外編として投稿しようと思っているらしいんですが、読みたいですか？」

ス「ん？書けばいいんじゃないの？」

作「いや、あの。深い事情が」

テ「何かあるの？」

作「書く時間がなかなか取れそうに無いんです。だから更新が本当に月一とかになる可能性が高いんです」

ユ「だからそれでも大丈夫いいですか？っていうこと？」

作「はい。今書いてる本編も今は頑張つて更新続けてますが来月越えると更新が滞る可能性があるんです」

テ「ちなみに理由は？」

作「仕事がちよつと……。最悪リストラ喰らうんで新人に抜かされないうようにしないと、って感じです。あ、でもやるとしたら頑張つてみます。詳しい事はあとがきにて」

ス「そ、そうだよ！今は楽しまなきゃ！」

作「では設定資料の公開もしたし、ここでティアナに問題です」

テ「何？」

作「デレってなんでしようか」

テ「（お茶で咽せる）っ？！あああんだ、なんて質問してんのよ？！」

作「これには深い訳が。ユウナ、よろしく」

ユ「はい。こんな感想が来たんです」

『この小説にはあまり「デレ」がない！』

ス「ああー……。確かに無いね」

テ「それで？デレ要素を追加したいと」

作「はい。どうでしょうか？」

ユ「具体的にデレって何したらいいの？」

テ「だから…あれよ。なのは隊長がかける隊長に甘える、みたいな

？」

ユ「何か具体的にないですか？」

ス「うーん。あれだ。一緒に遊ぶとか」

ユ「模擬戦で？」

ス・テ「いつも通りだった！」

作「何かしらのストロベリー空間を作り上げたらいいはず」

ス「キスとか？」

テ「それは行き過ぎな気がするわね……。ここは無難に照れたりして
る様子を作り出したらいんじゃない？」

ユ「手料理とかあーんとか？」

作「それだ！その案もらい！」

テ「なるほど。それならキスまでは行かないけど派手なスキンシッ
プ、ハグとか。エロゲの主人公みたいに風呂に入るうとしたらそこ
に着替え中の誰かがいて成り行きで一緒に入るのもありね」

作「エロゲって言葉をどこで知ったんだティアナは。とりあえずそ
の案も候補に入れとく」

ス「じゃあ、みんなで遊園地！とかは？」

作「休暇が出来たらね」

テ「他には…、かける隊長が何かしらのかつこいい言葉を書いてそれで照れて恋になったり」

ス「ここ恋?! かける隊長だけかと付き合ってるの?!」

ユ「一応まだ1人身です。優良物件のはずなのにね。管理局内から目立った噂は無いね」

作「かけるラバース三人衆の力だろ。さて、そろそろ潮時です。終わりの挨拶で締めくくっていきましょか!」

ユ「はい! これからも魔法少女リリカルなのはは羽根を持つ物をよろしくお願いします! お相手はスターズ5のユウナと」

ス「スターズ3。スバルと」

テ「スターズ4。ティアナ・ランスターでした!」

ユ・ス・テ「「次なる物語へ、テイク・オフ!」」

作「あ、俺もいるんだが」

なのは「私もちょっとはいたの」

第50・5話 閑話休題2（後書き）

もう一度、ありがとございました！

ひとまずアンケートについて

一言の欄に

？過去編見たいか見たくないか

これは本文にあった通りです。

更新速度が気にならないのなら見たいと書いてください。

逆に、遅くなってなおかつ本編も遅れるかもなら……。と思ったら見たくないと書いてください

？私はこんなデレがみたい！の案

そのまんまです。

なかなかいい案が思いつかない私のために「〜はどう？」とちよつと参考になるものを1つだけでもいいから書いてくれるだけで十分です

以上2つを書いて、お送りください

？？どちらか一方だけでも大歓迎です

期限は特に問いませんが、なるべく8月中がいいです

では、次回からちゃんと本編に入ります
お楽しみに！

第51話 虹彩異色の少女（前書き）

盆休みでしっかり英気を養ってきました
白湯です

今回からちょっとしたほのぼのな日々スタート

そしてサブタイトル通り、例のあの子が六課に来ます

では、どござー！

第51話 虹彩異色の少女

「ヴァイス陸曹！」

ユウナがヘリから降りたヴァイスに向かって走っていく
目的は昼に預けた荷物だ

「お。ユウナちゃん。ちゃんと任務終わったみたいだな」

そう言っつてヴァイスはズシリと重い袋をユウナに渡す

それをひったくるように奪って抱きかかえて顔をうずめる

「…良かった。ちゃんとある」

「そりゃそうだとも。このヴァイス、レディーには優しいんだぜ」

「あーこ、この前は師匠が酷いことしました。ごめんなさい！」

ユウナがかかるがヴァイスを海に落としたことを思い出してお辞儀
する

「いやいや。いって。それよりもユウナちゃん。ちょっといいかな？」

ユウナは顔をあげてヴァイスと向き合う

「…かける隊長とどういう関係？ちょっと六課の男性陣の間ではちよつとした話題でさ」

何を言っているのかわからないのかユウナは首を傾げる

「私の師匠は師匠ですよ？」

ヴァイスは予想通りの解答がこなかったからか頭をかいたりして困惑している

「あれだ。その…、かける隊長が好きとか？」

変化球はダメだと悟りストレートに聞く

「かつこいいですよね！かける隊長！なのは隊長達がかける隊長を好きなのもわかる気がしますよね」

「なるほど。まだ恋ではない、か。って、は？」

ヴァイスはは納得したがそのあとのユウナの言葉に固まる

フェイト隊長はへりの中で薄々感じていたがなのは隊長も？いや、なのは隊長”達”？

まだいるのか？！

空気が固まり、ユウナがヴァイスの顔を覗き込む

ユウナは目の前で手を降って、声をかける

「あの、大丈夫ですか？」

「…ああ、大丈夫だ。とりあえずもう休んどけ。お疲れさん」

「はい！では、ありがとうございます！」

ユウナはそれだけ言って走り去っていく

それを見送ったあとヴァイスは電話を取り出ししゃべりだす

「俺だ。オペレーションK・T・Kを発動させる！なに？地上本部の承認？！今はそんなのに構っている場合ではない！早くするんだ！」

ヴァイスの1人電話は草むらでユウナを待っていた1人の少女にか聞こえていなかった

「もう、なんでこんな無茶したやうの！」

フェイトが六課隊舎に戻った時にすごい剣幕で聞いてくる

とりあえず壊れたブラスタースタービットをシャーリーに預けてブリーフ
イングルームへ移動中

今日中に報告書をまとめておきたい

「いや、ね？結果オーライ？」

「そんなんじゃないのはみたいがティアナにやったみたいに落とされるよ？」

「…まあ、フォアード陣には悪い手本になってしまったな」

実際そうだ

怪我をせず、任務を完遂する

それがフォアード陣の目指すべき目標

そのためには必ず勝つための方法と力を用意しとかなければならない
知恵と戦術と基礎固め

レイジングハートとブレストウイングが一番最初に教えてくれたアドバイス

「それを忘れるなんてなあ…」

誰よりもそれを重んじてたつもりだったのに

「もう、また一人で考え込む」

めっ、と立ち止まり人差し指で胸を指される

「そんなのだからみんな不安になるんだよ。今度からはちゃんと考

えて動いてよ？」

「…善処する」

不安にさせてしまっていたのか
なんだか悪い事をした気分になってしまった

「でも怪我も無いみたいだし、今日の所は許してあげる」

「なんだか優しいな」

「そう？私はいつもこうだよ？」

そう言っただけでまた歩きだす

「フェイトはこれから何するんだ？」

「私は現場にあつたあの銃の調査。かけるは？」

「ガジエットの残骸処理と報告書。絶対夜までかかるって」

時計を見る

時間的にはもう19時を回ってる

「でも、その前にその前にご飯食べるか」

「うん。そうしょうか。腹が減っては戦は出来ないもんね」

ブリーフィングルームに行く足を一回止めて食堂へ行く事にした

願わくばその戦が夜戦になりませんように

次の日は朝練を中止して身体を休める事にした

今の食堂には自分1人しかいない
みんなはもう仕事に移ったとか

少し遅めの朝ご飯を食べつつ、昨日残った残骸のデータを見る

「…あれ？なんだこれ？」

画像の中に懐かしい物が見えた
なんだか、青い宝石

「ジュエルシード、か？」

その部分を拡大してさらに気づいた
金のプレートにこれ見よがしに文字が書いてある

「…読めん。ようやくこつちの言語になれてきたが走り書きは無理だ。プレストウイング。翻訳頼む」

了解しました。名前ですね。ジェイル・スカリエツティ

「ふーん。って、あれ？スカリエツティ?!」

間違いないです。例のあのスカリエッツィ

フェイトが今必死に探してる次元犯罪者

プロジエクトFの生みの親

ジェイル・スカリエッツィ

「今すぐはやてに連絡。緊急会議だ」

会議を開くほど大きな権限はあなたにはありません

ですよー

「なら報告だけ。まだまだ手がかりがあるかもしれない」

「本当にジェイル・スカリエッツィだと思っ？」

画像が手から消えてさっきまでいた食堂が真っ白に塗り替えられていく

いや、浸食されていく感じだ

心の中に入ってるのか

「たまには事前に予告とかしろよ」

「嫌。だってつまんないもん」

現実から引き離されるこの感覚はあんまり得意じゃない時間が圧縮されているからか？

「というかその髪型はどうした？」

今ブレストウイングは白銀の髪をサイドテールにして白のリボンで結んでいる

「なのはちゃんみたいにしてみたんだけど、嫌だった？」

「嫌ではないが…、何かなのはそっくりで嫌だな」

そう言ってブレストウイングはそれ置いといてと言って向き直る

「それで、どうなんですか？」

顔をのぞき込むように下から見られる

「スカリエツティ本人にはなんだか小さい気がするな。あいつはプロジェクトF。つまりは人の命を弄ぶ研究をしていた。そんな奴がガジェットを作っているとは思えない」

「プロジェクトFは完全じゃない」

そうポツリとブレストウイングがつぶやく

「ああ。記憶やレアスキルは引き継いでも魔力資質や性格が違うようになる。だから完璧なクローンでは無くなる。それこそフェイトとアリシアのように」

そう言って一回口を塞ぐ

周りに何も無いのも手伝ってか、少し音が消える

「そうですね。でも今回呼んだのはそんなのが用事じゃないよ」

その沈黙をブレストウイングが破る

「なんだ？」

「これです」

そう言っただけで目の前に動画が流れる
ああ。これはへりを防衛に入った時か

砲撃が放たれ、それを吸収せずまともに盾が受け止めている画像だ

「魔力吸収が働きませんでした」

悔しそうでもなく、むしろ笑顔で言う

「やっぱりか…。ならばあれは魔力以外のエネルギー砲、でいいのか？」

何をどう火薬と弾を使ったらああなるかは知らないが魔力以外を使った砲撃なら少しは理解できる

「スプーン曲げみたいな物ですよ」

そう言っただけでブレストウイングはスプーンを腕力で曲げる

「いわゆる超能力ってやつですね」

「そんな無茶苦茶な…」

「でも実際に見たでしょ。やってのけたのを身体で体感しましたよね？対策はあるんですか？一発防ぐ度に盾が使えなくなるのは痛いですよ。普通のデバイスみたいに自動修復も効かないし」

「対策…ねえ。回避じゃダメだよな」

「ダメですね。今回は防ぐ為の方法を考え中なんです」

「魔力で強化か、あるいは…」

そう言っただけで未だ鍵の閉まった黒い棺桶を見る

実際の所中身はまだ知らない

わかっているのはあれはこの世界にしかなくて、開けるためにはブラスタービットという鍵がある事

そして何かの縁か、あれを作ったのは自分の父だということ

「却下です」

ブレストウイングが察したのかそう言う

「魔力強化くらいは採用してもいいんじゃないのか？」

「バッテリーの中身を楽しいくらい簡単に使っちゃうでしょうね」

やれやれと肩をすくめる

「防ぐためにそこまでするのか…、ならこれならどうだ？」

一枚の図面を頭の中から引き出す
それは一瞬で紙になり実体をもつ

プレストウイングは一瞬目を見張るもすぐさま図面にくいつく

「…いつからこれを？」

信じられないと言った顔で見る

「ブラスタービット出した時から。使い時かな？と思ってな」

プレストウイングはその図面を食べる

端から小さく千切って食べて5分程でA4サイズの紙は無くなる

「美味しかった…」

「え、ちょっと待て！何食べてんだよ！あれをもう一回出させて言われても無理だぞ！」

「解析してたんです」

言われて納得したか落ち着くために深呼吸して向き直る

「、、！」

何か声が聞こえたが気にしない

「理論上は可能です。とりあえずデバイスルームへ持って言ってみてください」

「 ! 、 ! 」

「 ……プレストウイング、空耳から知らんが何か聞こえるんだが」

「 あなたの弟子がおよびですよ。それじゃ、また後日」

そう言っかけてけるを押す

その先には崖

闇しか見えない穴にかけるは突き落とされた

気づいたら現実に戻っていた

ついでに身体がガタガタ揺さぶられてる

「 大丈夫か！ かけるくん！ 」

「 あ、ああ。はやてか。大丈夫だ」

プレストウイングめ…

弟子って言うからユウナかと思ったらはやてじゃないか

声が聞こえたから揺さぶられるのが止まる

「 いや、食堂で居眠りしてる局員がいるから起こしていいところかと思ったら。でもほんま大丈夫なん？」

「大丈夫だ。というよりちょっとみんなを集めてほしい。ガジェットの残骸からおもしろい事がわかった」

「ほう。部隊長を顎で使うとは。かけるくんも偉くなったもんやな」
そう言つて1発デコピンされる

「すまんはやて。わかつた事はとりあえずまずは隊長陣だけでいいから伝えたい。一応みんなオフシフトだから隊舎にはいるだろ？」

「はいはい。じゃあお昼に部隊長室でええか？なのはちゃんはおらんけど、フェイトちゃんは来るだろっし」

「恩に着る」

しかしあの部隊長室か…

トラップ多くてちよつと苦手なんだよな

「ま、しょうもない事ならちよつとした宴会芸してもらつて？」

「任せとけつて」

しかしはやてが食堂にいる俺に気づいてから声をかけ続けて正味5分くらい

いつもの時間圧縮なら現実の5分は心の中の1時間くらいはあるはずなんだが

なんでだ？

そんな事を考えつつ部隊長室に向かった

「犯人はジェイル・スカリエッティの可能性大、か」

なのはは聖王教会がやってる附属病院に言っているため欠席

いつものなのはの席にはリインフォースが座っている

「ああ。ジェイル・スカリエッティならあのガジェットなどの技術の高さが納得がいく」

「あの屋上に投げ捨てられた銃にも中に書かれてあったし、たぶんその線はあると私は思う」

フェイトが端末で画像を出し指で指し示す

「救出した女の子がレリックを持っていたのも謎や。それよりも…」

「なんでジェイル・スカリエッティはレリックを集める必要があるか…か」

フェイトが神妙な顔で考える

「あと気になった事はある。これは改めて考えて思った」

「何かな？かけるくん」

「なんではやてが六課を作ったかだ。いつかティアナが言っていたが、ここの戦力は異常だ。その気になれば戦争と同レベルの事件を起こせる。しかも俺にまで召集がかかった。となると、何か大掛かりなことをする気か？」

「やっぱり…。そろそろ設立した理由を話す時期なんかな」

はやてがお茶を少し喉に入れる
水分補給ではなく一息入れるために

「明日、みんなに聞いて欲しい話がある。そのために聖王教会に行く。これで今は納得してくれへんか？」

「理由がわかるならそれでいい」

ゆっくりと立ち上がってそう言う

「うん。ありがとうな」

「今の内に明日できない訓練をやっとかなきゃね」

フェイトも立ち上がる

「ふふつ。フェイトちゃんはなかなかスパルタな隊長さんになりつつあるな」

はやてがはにかみながらフェイトをからかう

「なのはには負けるよ。じゃ、召集かけてくるね」

フェイトは手を振って部隊長室を出て行った

「なのははいつ帰ってくる?」

ふと気になったので聞いてみる

「えっと…、そろそろ帰ってくるかな?お昼は向こうで食べてくるって言うてたし」

そこで子供の鳴き声がかすかに聞こえた

「……なあ、リインフォース。俺は耳が変になったのか?」

あろう事が、その音が近づいて来てる気がする

「大丈夫だ。お前は昔から変だ」

「はやて……。なんか知ってる?」

「い、いや?誰も赤ちゃんとか連れてくるとか言っただけじゃなかったし…」

そんな話をしていたら部隊長室のドアが開く

そこには困った顔のなのはと

「いつちやだあー!」

足にしがみつく6歳くらいの子供がいた

「なのは?! 相手は誰だ!」

「落ち着きかけるくん。あれは昨日保護した女の子や」

改めてみるとそうだった

昨日はわからなかったが右目と左目の色が違う

何て言うんだっけ? 虹彩異色だったか?

「あの、はやて部隊長。耳に入れておきたい事がありまして…」

なのはがその子を抱っこする

すると子供は泣き止み、嬉しそうになのはの胸に顔をうずめる

「この子”ヴィヴィオ”を六課で預かりたいんですが…よろしいでしょうか?」

敬語ではやてに言う

お願いするときはこうしなきゃダメだよな

「ええよ」

「軽っ!」

はやての返答はあっさりしてて、わかりやすかった

元から事件の参考人扱いで預かる予定だったらしいが

「とりあえずフェイトちゃんがこれから訓練するらしいからこの子

を預けたいんだけど、いいかな？」

「まあ、その辺のルールは考えとかんとな。とりあえずはよ行つてき」

俺はなのはに近寄り、ヴィヴィオを受け取る

そして同じように抱きかかえる

腕にずっしりくる重さがそこに居ることを改めて実感させる

ヴィヴィオはいきなり知らない人に抱かれたからか困惑した表情でこちらの目を覗き込んでくる

「…ママ？」

「落ち着け。いろいろ誤解を生むからママは避けような。俺は男だからせめてパパだな」

「パパ…、うん」

そう言つて、納得したのかヴィヴィオは目を閉じる

その姿をよく見てみる

ロングのちよつと癖がある髪

細い腕

ブカブカなスリッパは小さな足を連想させる

「…待て、これは寝たパターンか?!」

意識を取り戻して顔をあげる
これから書類とかいろいろあるんだが！

するとリインフォースが部屋の誰もいない隅の方に向けて呟く

「お父さんがかけるなら、お母さんは誰になるのだろうか」

「私や」

「はやてちゃん。ここは部隊長らしく私に譲ろうよ。ね？かけるく
じゃなかった。か、かける…パパ」

照れるなら言わなきゃいいのに

なんだか部屋がカオスになってきたな

お、この子よくよくみたら整った顔立ちしてるじゃないか

「なんかヴィヴィオ見てたら眠くなってきた。ちよつと昼寝して
く
る」

「逃げたな」

リインフォースちよつと黙ってて

後ろの二人がマジで恐いから

そう念じつつ自室に帰っていった

とりあえず起きてまだこの空気だったら真面目に考えよう

思考があまり働かない頭でそう決めて部隊長を出て行った

第51話 虹彩異色の少女（後書き）

とりあえず事後の話でした
どうだったでしょうか？

ヴァイスは作者の中ではいろいろと楽しいキャラです
元エースの面影は何処に

そして黒いリインフォース

今回はなのはの出番が全然ありませんでした
次回こそは…！

果たして誰がママになるのか
では、お楽しみに！

第52話 聖王教会（前書き）

夏休みが終わった頃合いです、頭の切り替えは出来てますか？
白湯です

自分は切り替え出来てなかったり

昔は甲子園が終わると夏は終わったと思っていたのに、今では家の
中の素麺がなくなったら夏が終わったと感じてしまった

では、どうぞー！

第52話 聖王教会

ここはどこだろう

いつもならガラスの筒の中

今は違う、外だ

日の光がある

そういえば外に出たんだっけ？

今は白いシーツのベッドの上だった

「ママア……」

1人じゃ心細いから、ベッドに置いてあった人形を抱きしめて歩く

着の身着のまま、一心不乱に歩く

腕についた鎖が無かったことに気づいたが今はそれどころじゃない

「ママア……」

ママは、どこ？

人の気配が無い事に気づいた
辺りが静かすぎる

「ママ、どこにいるの？」

すると目の前に人がいる事に気づいた

こげ茶色の服を着た、女の人

「こんな所にいたの。探したんだよ」

その人が声をかけてくる

ママ…、じゃない

「初めまして。高町なのはって言います」

その人が自分の前に来て目線を合わせるように腰を下ろす

「お名前、言える？」

名前？

名前は…確か、あれだ

「…ヴィヴィオ」

自分でも驚くほど小さな声だった

それよりもこの人は誰なんだろうか

ママじゃないのに、なんでこんなに心が安らぐのか

「ヴィヴィオ。いいね。かわいい名前だ」

敵意なんて、無い

「ヴィヴィオ、どこか行きたかった？」

そう聞いてくる

行きたい場所は、どこだろう？

「…ママ、いないの」

素直にそう言った

この人はなぜか信用できてしまったから

この人ならママを見つけれれる気がする

「ああ、それは大変だね。じゃあ一緒に探そうか」

一瞬驚いた顔をしたがすぐに力になってくれた

わかった

この人は、初めからずっと私を見てくれてくれるんだ

必要としてるのは、私なんだ

そして私は、あなたを必要としているんだ

一緒にいるために、抱きつく

離れたくない一心で

「んで、隊長陣で話しあった結果、俺を保護責任者にすると」

夕食前にヴィヴィオを抱きかかえて食堂に向かいながら言う

ヴィヴィオはすっかりなついてなかなか離れてくれない

抱っこか手を繋ぐか必ずどちらかを強いられる

「うん。これで晴れてかけるくん、パパ就任だよ」

なのはがちつちやく拍手をする

それを素直に喜ぶべきなのだろうか

まだ19歳なんだか子供持ちって…

不思議な気分になりつつなのはを見る

「…そういえばママは誰になったんだ？」

「それははやてちゃんが正当な方法で決めるって」

「正当な方法？」

「お楽しみらしいよ。じゃあ、行こっか」

2人で食堂に入ると何か変な物が見えた

正座で待機しているはやてとフェイトがいた

その様子を机に座り静かに待つフォアード陣とロングアーチの局員達

「…ヴィヴィオは何が食べたい？」

「うーん。カレーと、オムライス」

「そこ親子2人無視すんなや」

はやてがツツコミを入れる

というよりどうしたら正解だったんだよ

「これからヴィヴィオのお母さんを決めるためにある企画をするんだよ」

「ちょっと。フェイトちゃん、どこに連れて行くの?!」

フェイトは立ち上がりなのはを引っ張って自分の横に座らせる
もちろん正座で

「そこからヴィヴィオをかけるくんが離して真っ先に向かった人がお母さんってことや」距離は10m

左から順番になのは、フェイト、はやてになっている

「さあ、かけるくん！ヴィヴィオを解き放つんや！」

…なんか、もう、どうにでもなれ

自分的に結果はもう見えてはいるんだが

企画を把握したのか、なのはは目を瞑っている
なるほど。誰の所に来るのか楽しみにしたいのか

「ヴィヴィオ。ご飯の前にちょっとお母さん（仮）を連れてきてくれるか？」

「かつこかり？」

俺の腕の中でヴィヴィオがかわいらしく首を傾げる

「あー、ちょっと難しかったか。ヴィヴィオにとって一番お母さんにふさわしい人を教えて」

そう言っつてヴィヴィオを床に立たせる
すると一目散に走り出した

まっすぐに行っつて、その人の腕を引いた

「やっぱりね……」

ティアナがそうぼやいたのが合図だった

目を瞑っていた3人は目を開く

その内1人は手を握られた時から開けていたみただが

「…私なの？」

「うん。早く、来て？」

ヴィヴィオがぐいぐい腕を引っ張る

「やっぱなのはちゃんか」

はやてがわかったように言って立ち上がる

「ま、最初から私達にきてもなのはを後見人に入れる予定だったしね」

フェイトが立ち上がり足についた埃を払う

「あー。同じ高町だから申請が出しやすいのか…」

それよりあれだ

保護責任者になるんだったらお母さんになりたいからとか、
そんな自分の事を考えるんじゃないでヴィヴィオの事を考えてならないと

「パパ？」

気がついたらヴィヴィオがなのはを連れて目の前に立っていた

「よし、じゃあご飯にするか。ヴィヴィオはオムライスで良かったか？」

「うん！」

食堂に元気いっぱいその声が広がる
しかし、

「なのはママ、か…」

「か、かけるくん！いい、今は普通になのはでいいよ？」

なのはの顔がやけに赤い理由はだいたいわかるが

なのはと手を繋いでるヴィヴィオを見る

「高町ヴィヴィオか。ごめんな、出会っていきなりヴィヴィオのお父さんになってしまって」

「ねえ、パパ」

ヴィヴィオは自分の告白を無視して言う

「パパの名前は、なに？」

「言っただけで無かったか？高町翔だ。2、3年くらいの付き合いになるが、よろしくな」

そう言ってヴィヴィオの頭を撫でた

ヴィヴィオは気持ち良さそうに目を細めている

「なんか、本当に親子みたい…」

なのはがこの光景を見て微笑む

「親子だろ。今は」

そう言つてヴィヴィオの右手を握る
そうして3人手を繋いでご飯を取りに行った

「じゃあ、行つてくる。エリオ、六課の男性率が下がるから強く生きろよ」

「どつという意味ですか」

だつて男：女＝1：5くらいあるんだもん

朝起きてすぐに玄関に向かった
いつもは車で行くらしいが、今日は隊長のみと言つことでヘリコプターを出してくれるらしい

「ユウナとエリオとキャロでヴィヴィオの面倒を見てね。ティアナとスバルはライトニングの仕事も頑張つて」

フェイトが、並んでいるフォアード達に指令をだしていく

「何かあったらリインフォース経由で私に連絡ちょうだいな。大丈夫か？」

「はい。主はやてもお気をつけて」

守護騎士4人は出動待機

リインフォースもいるから臨時査察とかあっても大丈夫だろう

「じゃあ、ヴィヴィオ行つて来るからな」

ヴィヴィオの手を離しユウナに渡す

「任せてください、師匠」

「パパ、いつてらっしやい」

ヴィヴィオが大きく手を振る

「いつてきます」

なかなか長い見送りだったが無事出発した

「聖王教会か……。實際来てみるとなかなか広いな」

聖王教会の管理してる土地にヘリコプターを入れるのは厳禁らしく、
郊外に下ろして歩いていく

3分くらいで門が見えた

さらに門の真ん中で、腕を前に回してこっちの3人をじっと見てい
る女性がいた

「シスター・シャツハ。お疲れ様です」

なのはがそれに気づいたらしく挨拶に行く
誰だろか

シスターって言ってたから教会関係者か？

「ん？かけるくんは初めてやったか。騎士カリムの秘書、シャツハ。又エラ。私達は敬称をつけてシスター・シャツハって呼んどるんよ」

「へえ。初めましてシスター・シャツハ。機動六課スターズ0、高町翔捜査官です」

「初めまして高町隊長。いろいろと噂は聞いています」

なのはがどうしようといった顔で見ってくる

「えっと…、シスター・シャツハ。俺の事はなのはと区別をつけるために下の名前で呼んでくれませんか？」

「そ、それは新手的求婚ですか？」

「違ってます」

どうやらこのシスターさん

思考のベクトルがあらぬ所へ飛びやすいらしい

そしてそのまま教会の最上階へ

ドアをノックして入ると2人が待ちかまえていた

金髪で…騎士甲冑？！

あれが聖王教会騎士団のカリム・グラシアか

というかあれは正装か

そうだよね。うん

あとクロノいるし

仕事はどうした

「初めまして騎士カリム。機動六課スターズ0高町翔捜査官です」

「はい。よろしく願いしますね。高町捜査官」

やはりなかなか実力の持ち主なのか

席を立ててから礼をするまでの動作に無駄がない

「お久しぶり、お兄ちゃん」

「止めてくれフェイト。お互い、いい年なんだから」

クロノは諦めたようにため息をつき椅子にもたれかかる
うーん。なんというか

「…犯罪だな」

「かける！それはどういう意味だ？！」

男の照れなんて見たくない

「まあ、フェイト。さすがにそれを言ったらクロノが首吊るから控えような」

「兄妹に年齢は関係無いよ…。あ、もしかして」

フェイトが閃いたように顔をあげる

「…嫉妬？」

違うって、たぶん

そしてその発言のせいで後ろの2人から漏れてる魔力が尋常じゃないから

死ぬからね

主に俺が

「かけるくんは、後でちょっとお話な」

はやての目が怖い

「ま、まあまずは席についてお茶でも飲みましょうか」

カリムがそう言ってようやくこの状況は収まった

「では説明を始める前にちょっと私の能力の説明をしますね」

カリムは椅子から立ち上がり、長方形の古い羊皮紙みたいな紙を身体の周りを円を描くように浮かばせる

「私は『預言者の著書』プロフェーティン・シュリフテン」と言うレアスキルを持っています。最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行う物です」

「未来予知、みたいなものですか？」

なのはも初耳らしい

「いえ。違います。世界中に散在する情報を統括・検討し、予想される事実を導き出すデータ管理・調査するものです」

「補助魔法の部類に入るのか。戦闘とかに使ったら最強だろうな」

「いや、そうではない。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できないため、ページの作成は年に一度しかできない。それがこのスキルの弱点でもある」

俺の発言をクロノが否定する

「しかも預言の中身は古代ベルカ語で、解釈によって意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度」

「つまり、預言書に書いてある事に六課が関係あると」

はやてに向かって聞き直す

「カリムのスキルは大規模災害や大きな事件についての的中率は高く、管理局からの信頼度は高いんや。ま、地上本部の人間はお嫌いらしいけどな」

そう言われて思いたった人が1人
レジラス・ゲイツ

「つまり、地上で起きる事故を預言しているが地上本部を使えないから自由に動ける部隊が欲しかったのか」

「そうや。わかってくれて何よりや。」

「え、じゃあ預言書にはなんて書いてあるの？」

「それじゃあ読み上げます。翻訳は大半はリインフォース曹長がしてくれたのでだいたいあっているかと」

あ、リインフォースはあの文字が読めるのか

そう思ってたやさき、カリムは言葉を紡ぐ

『旧き結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

羽が舞う中で使者達が踊り、なかつ法の塔はむなしく焼け落ちる

ひとつのかげらが落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も碎け落ちる』

「死せる王…って誰よ？」

カリムに聞くがきよとんとしている
変な事言っただけ？

「それってまさか！」

あ、なのはわかった？
なら教えてくれよ

「管理局システムの崩壊と地上本部への攻撃…！」

フェイトはカリムに言つとカリムは待つてました！といったような
笑顔になった

が、内容が内容なだけにすぐに覇気のある顔に戻る

「はい。私はそう予測しています」

「でも六課の稼働期間は1年間。その間に事件が起こるかどうかは
…」

「あるんやな。それが。テロリストが攻める絶好のチャンスが」

はやてがモニターを新しく出す

そこにはレジアス中将の顔と、ひとつの大規模な行事について書いてあった

「公開陳列会？」

「そつや。こんな管理局の重役が集まる行事はなかなか開かれない。ましてや、多次元世界のお偉いさん達も集まってる会議や」

「今回のテーマは質量兵器に近い大型兵器”アインヘリアル”についてだから教会も行かざるをえない」

つまり、公開陳列会に行ってる人間が全滅したら管理局システムの崩壊が起こる、と？

するとカリムが思い出したように言う

「あとリインフォース曹長が言っていました、高町捜査官も古代ベルカ語が読めるとか」

まさか、プレストウイングの事か？

「読めませんよ。読めたら言語学習になってますって」

私は読めます

急にプレストウイングが喋りだしたからか、他の5人が驚いた顔でいる

解釈ミスは無いみたいです。間違い無く地上本部は落ちます

プレストウイングの声が室内に広がる

「プレストウイングさん。それは変えられないの？」

なのはが声をかける

はい、攻撃を止める気はなければ。あと六課にマスターを召集したのはAMFの関係ですか？騎士カリム

プレストウイングが矢継ぎ早に喋るからみんな理解するのに大忙しだ

「えと、はい。そうです」

聞いてないぞ

「というかAMFってなんだ？」

それを聞いてなのはがずっこける

「アンチ・マギリング・フィールドの略だよ、かけるくん。ガジエツトにも積んであって、魔力無効化フィールドを張れるんだよ」

「世界の科学力ってすごいんだな」

なんだ？管理局の科学力は世界1、みたいな？

「作ったのはスカリエツティなんだけどね」

と、追加でフェイト

そしてプレストウイングはまたカリムに聞き始める

マスター、及び私の能力を知ってるのではないのでしょうか？少将とまでになると登録してあるレアスキルの開示ができるのですからプレストウイングが言うのと驚いた顔でカリムが指差す

「魔力吸収……。その力の源、プレストウイング。それでいいのですか？」

はい。

「ガジェットはAMFを使う。もし地上本部を落とすならAMFの機能は必須だろう。だからAMF使用中に自由に動ける戦闘員が欲しかったんだ」

クロノが仕方ないように言う

なら、ガジェットがジュエルシードで動いてたのも知っていましたか？いや、知っていましたね？

そう言っただけ画像を展開する

おかしいと思ったんです。マスターがガジェットを切ると爆発せず沈黙する。ブラスタービットで切断、あるいは砲撃すると爆発する

フェイトは気づいたらしい

「かけるが切って爆発しなかったのは、動力源であるジュエルシ

ドを吸収して動けなくしたから？」

本人的には上手に切れたとか思ってたみたいですが、実際は違います。あとクロノお兄ちゃん

そういうとクロノが不意打ちだったから顔が一気に紅く染まるだから男の照れはいらな（ry

A M Fの対抗策はあります

「本当ですか?! なら、すぐに教えてください!」

カリムが一気に食いつくでも俺はわかる

だってそうしてガジェットを倒してるのだから

それは、質量兵器の使用です。だけど使ったらダメ。それをしてから犯人の思いのままだから

「質量兵器が御法度なこの時代で、管理局が質量兵器を使ったら…市民の批判が殺到する」

なのは心配そうにこつちを見ている
日本刀は質量兵器に入る

許されている理由は、実際は違うがこれがデバイスの待機状態扱いだから

そして対A M Fの切り札だからか

「間違いなく暴動が起こる。そうすると逆の意味で管理局システムは崩壊する」

はやてが深刻そうに考え直す

カリムはこっちを見据えたまま動かない

思考が止まっているのか？

「あなたのデバイスは、なんなんですか？」

普通は意志を持って話してたらそうなるか

「リンディさん曰わく、マスターに一途なかわいいデバイスだとさ」

そして私の盟友です

レイジングハートがぼそりと呟く

I think so .

フェイトのポケットからもくぐもった声が聞こえた

今、試されている

ブレストウイングは言葉を紡ぐ

崩壊は免れない。だからそれを最小限に食い止めるべきです。そして崩壊からの復興をいかに上手くするか

「あらかじめ用意しとかなければいけないな……」

クロノとカリムは仕事が増えたと頭を抱えた

必要な時に私は出る。だけど、余り期待しないでね

最後の声は心の中でも聞こえた

ブレストウイングが正面から抱きついてきたような感触もあったが
気のせいと信じておこう

「…と、いう事らしいよ？どうする？」

「公開陳列会の日には教会騎士団を全て動かしましょう」

「そこなくっちゃ」

こうして教会での話し合いは得る物が多く、充実した話し合いにな
った

ただし、預言の内容については未だによくわかっていない

自分に出来ることは戦うこと

自分がすべきことはみんなの夢をかなえること

それをよく頭の中で反芻してから教会を後にした

第52話 聖王教会（後書き）

預言書やAMFについてあれやこれや書きました

この辺大量に終盤戦の複線があるから飛ばすに飛ばせない

ヴィヴィオの保護責任者はかける、後見人はなのは
という形を取りました

文章の中にあつた通り、親子扱いなら大丈夫と思ってこんな感じに
なりました

もっと上手く描写書きたいな…

では、次回はちょっとした日常回！
お楽しみに！

第53話 居場所探し（前書き）

8月は終わってもう9月
白湯です

9月10日は例の限定版の発売日です
そしてなの破産へまた一歩近づいて行く…

リリイはねんどろいど初の裸体とか
そして髪の毛下ろしたらどうなるのかずっと気になっているアイン
ハルト

楽しみです

さて、宣伝みたいになってしまった？
大丈夫かなあ…

出だしはとあるレポートから

では、どろどろー！

第53話 居場所探し

Xレポート・09 .

心臓が鼓動を開始したので、ポットから排出した
リンカーコアは存在している

しかしレアスキルの継承はしていない模様
廃棄して2つ目に取り換える

X2レポート・07

少し早いかもしれないが排出した

語学力は平均並だが、知恵は少し高い事がわかった

しかしレアスキルは継承せず

以後拠点を変えて実験を続ける

X4レポート・01

管理局に見つかる

慌てて管理外世界に引越したからか、追っては来なくなった

研究所を破棄したため、実験をやり直すのに時間がかかる模様

X3レポートの検体もレアスキルの継承は無かった模様

レアスキルでは無いのかと思案中

今後は101にて第五次実験を開始する

X7レポート・15

また失敗

完成を急ぐ

X8レポート・12

失敗した

X21レポート・17

何度か実験してる内に違うレアスキルを持った検体を2人作ることに成功

そして母体の遺伝子が破損している事に気づく

取り急ぎ新しい物采取する必要有り

ドクターに確認を取り、今後の対応を待つ

「わあ、ヴィヴィオ。絵上手なんだね」

キャラが画用紙に描かれたなのはの絵を見て誉める

「なのはママ。大好きだもん！」

ヴィヴィオはそう言って絵の隅にピンクのクレパスでハートマークを一つ描く

「ただいま」

そのときユウナがオレンジジュースが入った3つのグラスとクッキ―を持って入ってきた

「あ、おかえりなさいユウナさん。かける隊長はなんて言っていました？」

エリオがクツキーの入った皿をユウナから受け取り聞く

「師匠はまだまだかかるみたい。だから帰るのは18時超えると思う」

「そうですね。でも…」

「うん。さっきティアナ達見てきたけど仕事やばかった。もうスバルが頭から煙出してた」

「スバルさんは機械ですか?!」

エリオにはまだ冗談は通じないらしい

ここだからかってもいいのだが、時間を取るとさすがにまずい

「ヴィヴィオを寝かしちゃいましょう。昼寝ならぐっすり夜まで寝るだろうし」

そうですね、とエリオ

「ん？キャロお姉ちゃん。この腕についてるのはなあに？」

「え。私のデバイス”ケリユケイオン”だよ」

なんか今ヴィヴィオの発言におかしい所があった気がする

「…お姉ちゃん？」

ユウナが不安そうにエリオを見る

私が様子を見に行ってた間にいったい何が…

「あ、あの呼び捨てじゃ寂しいなって事で、フォアード陣はお兄ちゃんお姉ちゃん。副隊長と他の局員はさん付けで呼ぶように教えたんです」

…グッジョブ？
いや、待て

なら隊長陣はどうしたんだ？

「ユウナお姉ちゃんの腕についてる青いのもケリユケイオン？」

そんな考えを遮るようにヴィヴィオがユウナに聞く

「いや、違うよ。これはフォーマルハウト。私の武器だよ」

Hello Ms・vivio・Nice to meet
you

「わ、喋った。こんにちは、フォーマルハウトさん。ん？なら右手のリストバンドは何？」

ヴィヴィオはとことこと歩いてユウナの右腕の白のリストバンドを指し示す

「あ、あー…。うん。これはファッション！オシャレだよ」

「オシャレ？」

「可愛く見せるための装備品…かな？」

それを聞くとヴィヴィオが一気に食いつく

「ヴィヴィオも、ヴィヴィオもオシャレしたい！」

「と、言われてもね…」

こっちは今興奮状態に入ったヴィヴィオを眠らせる臨時ミッションに入ったのだ

どうしたら…、ってあれ？

意外と簡単？

「オシャレは明日にして、お昼寝しようか。お姉ちゃんも一緒に寝てあげるから」

手を引いてベッドまで連れて行く

さっきまで散々身体を動かしたのだ

実はかなり疲れているはず

「お昼寝？」

「寝る子は育つ。そうして大きくなるんです」

うん、とヴィヴィオは言っ—緒に布団に潜り込んだ

手を握って横にする

こっ—るとこっ—ちも見えて安心するだろう

予想は当たったのか、10分くらいすると寝息が聞こえる

そろそろ頃合いかな？

そう思っ—てキャロちゃんに手を握る役を変わる

「私はちよつと抜けるね。キャロちゃんはそのまま手を握ってあげて。エリオはその2人を眺めているだけでいいから」

そう言つて部屋を出て行つた

後ろからエリオのえっ？という困つたような声が聞こえたが気のせい気のせい

早くスバル達の所に行かなきゃ

「ただいまー。つてやっぱり迎えはリインフォースと守護騎士だけか」

ユウナにはあらかじめ連絡入れといたから寝かしてくれたかな？

「ご無事で、主はやて」

シグナムが真つ先にはやての所へ急ぐ

「みんなもお留守番ご苦労様や。それで何か変化はあつたか？」

「いや。やはりただの子供みただ」

ザフィーラが犬モードのまま言う
今くらい人間みたいになっていいのに

「グイータちゃん。フォアード達は？」

「別に問題は無い。だが…スバルは医務室だ。今代わりにユウナがやってくれてる」

「…あれ？書類仕事だけじゃなかったけ？」

フェイトが首を傾げる

揉め事でもあったのかと、考えてるらしいが

「いや、たぶん書類仕事だけだったからじゃないか？」

「あー」

なのはよ。そのあーはどういう意味だ

「一応スバルは主席なんだけどね」

な、なんだってー！

「それじゃかけるくん。よろしくな」

「任しとけて」

とりあえず今のところのまとめをこれからやるらしいが一回ヴィヴィオの様子見に行くことにした

「ちょっと過保護な気もするけど、仕方ないね」

まだ誰のクローンかわかっていない
急に暴走とかも困るし

「終わったらすぐそっちに行くさ。それじゃ」

「あ、あのな！」

走って行こうとしたらはやてに呼び止められた

「なんだ？はやて」

「あのな。これから六課はどういう方向に行くかはわからんし、かなり迷惑をかけるかもしれん」

そんな事が

「地球に行った時に言ったろ？俺は望んでここにいる。それは変わらない事実だ」

「…もし、私が間違った決断をしてもか？」

「それでもいいさ。はやてが望むようにしてくれ。敵を討つ剣となれと言われたら全力で殲滅する。味方を守る盾と言われたらこの命を使ってでも守りきって見せよう」

そういつてはやてに近寄る

「はやての夢は必ず叶えてみせる。みんなを守るといふ夢に狂いが無いなら、な」

「そつだよ。はやてちゃんは何も間違つてない」

なのはもはやてに一歩歩み寄る

「うん。だからはやては部隊長として、私たちに指示してちょうだい」

フエイトも近寄る

「みんな、ありがとうな」

ニコツとはやてが笑う

「ほら、また泣く」

そういつてハンカチではやての涙を拭き取る

「だって、だってな」

「せっかくの美人が台無しだぞ。ほら、ハンカチはあげるから拭き取れ」

ハンカチを渡すとはやては隠すわけでもなくこっちを見ながらずつと涙を拭き取っていた

ときどき漏れる嗚咽がっらそうに聞こえる

「かけるくん。はやてちゃんに優しいね」

なのはが後ろ手にニヤニヤしながら来る

完全にイタズラする猫の顔になってるんですけど

「はやてはまだまだ不安定なんだ。いいじゃないかこれくらい」

「私、同い年なんやけど」

はやてが無理矢理笑う

ほら、そうするから涙が落ちる

というよりあれだ

捨て置けないみたいなの

「私には、あんまり優しくしてくれないのに」

フェイトがうーと唸る

「フェイトは完全に自立しただろ。そうじゃなきゃ執務官とか無理だろうし」

フェイトの頭を撫でる

今は何か言っよりこっちの方が効果がある気がした

「フェイトは頑張ってる。だから、無理しすぎないようにな」

「あ、ありがとう」

急にしたからか身を強ばらせる
だが次第にされるがままになる

「なのはも。もっともっと俺達を頼ってくれていいからな」

思いを抱え込むことは少なくなったが、それでもまだまだある

フェイトにしたみたいに撫でる

「また、こうしてくれるんだね」

「いいじゃないか。たまにはこんな日があったって」

「じゃあ、お風呂に入ろうか。一緒に」

「なぜそうなる」

「地球に行った時に約束したでしょ。だから」

それを聞いてはやてが思いついたように悪魔的発言をする

「じゃあ、みんな晩御飯食べ終わったらなのはちゃんの部屋に集合
な」

「…拒否権は」

「さ、そう決まったらヴィヴィオを早く見てあげて」

「拒否権無しかよ！」

言われるがままにヴィヴィオの所へ向かった

後ろで仕事に燃える3人は考えない事にした

…ま、でもなんかしんみりムードも無くなったし良かった良かった

「エリオ、キャロ。帰ってきたぞ」

そう言っただけヴィヴィオがいるのはこの部屋に入る

中ではヴィヴィオとキャロが手を繋いで寝てて、それをちらちら見ながらオレンジジュースを飲んでるエリオがいた

なぜそんな恥ずかしがってるんだか

「エリオ。ちょっとお話ししようか」

エリオが今座ってるソファアの横に腰を下ろしクツキーを一枚かじる

お、これ購買で売ってるおいしいやつじゃん

「お疲れ様でした。かける隊長」

「エリオ。見れるときに見とかなないと後々後悔するぞ」

「開口一番それですか」

エリオが諦めたようにため息をつく

そしてしばらくの沈黙

寝てる2人を起こさないためだが、それ以上にお互いに共有できる話題が無いのが原因だろう

そしてまたエリオがため息をつく

「…悩み事か？」

「悩み事っていうか、ヴィヴィオの事です」

なにかわかった事があったのだろうか

「…プロジェクトF、って知ってますか？」

急に核心を疲れた気がして驚いた

「知ってるも何も、あれで生まれて今も強く生きてる人間を知ってる」

「フェイトさんの事ですか？」

「あれ？知ってたのか」

「フェイトの事だから隠してる…訳ないか
かなり前からフェイトの下にいたらしいし」

「作られた命、本人と同じ記憶。いったいなんでこんな僕をフェイトさんは拾ってくれたんでしょうか？」

ん、待て

「エリオ。そう言えばこの前食堂で両親はいないと言ったな」

「はい。僕はプロジェクトFで作られた人間です」

知らなかった

たぶん知ってるのはフェイトだけなのかもしれないが

まあ、いろいろ思い返すものはあつたんだろうか
さつきから顔を伏せたまま喋らなくなってしまった

そんな中、まだ聞いてなかったと思いついて聞いてみた

「エリオ。お前の夢を教えてください」

急に言われたからか、こつちをはっとして振り向いた

「なんでもいい…、訳ではないが。1つだけ。1つだけ決めるんだ」

そう静かに伝える

「夢…ですか、笑わないでくださいよ？」

「大丈夫だ、俺の夢の方が笑われる。フェイトと結婚するって言っても応援するぞ？」

「そ、そんな訳無いじゃないですか！」

ちよつと笑顔が戻った

内心ほつとする

とつかその否定の仕方はなんだか否定しきれて無い気がする

「僕は、自分の居場所を知りたい」

「うん。…なんだって？」

子供だからもつと軽いものだと思ってた
とつかなんて俺の周りにはこんなに重い悩み事をしてるやつが多いんだろつか

「居場所です。自分がいても許される場所」

「六課じゃダメなのか？」

「六課は良いところです。でも、1年たったら無くなっちゃいます」

「うーん。居場所は自分で『ここだ！』って決めるものかな？」

「どついう事ですか？」

「俺の話は知ってるか？」

「はい。なのは隊長のお兄さんなんですよね」

フエイトとはやてには一応管理局に入る時に言ってるだけで、まだ他の誰にも言っていないから知らないか

「まあ、そうなんだが。エリオもいろいろ教えてくれたから教えてあげようか」

「なんですか？」

「俺の本当の親はもうこの世にはいない」

エリオが息を呑む

「俺がまだ魔法に出会う前に、殺された。お母さんは道端に包丁で刺されて、お父さんは目の前で撃たれた。ただの平凡な日常が荒たらしい日常に変わった最初のきっかけだ。犯人は酔っ払いのヤクザらしい」

警察の調べではそうになっていた

…なんかキャラの身体が動いた気がする
気のせいかな？

「ひとりぼっちになった俺を拾ってくれたのが高町史郎。なのはのお父さんだ。そこからなのはの家に住むことになって5年以上過ごした」

「なんだか、壮絶な過去ですね」

エリオの目に哀れみがある

俺よりエリオの方がつらいのに

「でも後悔してないからいいんだ。そして何が言いたいかって、居場所は1つじゃないんだよ」

エリオはそれを言われて首を捻る

「最初に居た家も俺の居場所だし、高町家も俺の居場所だし、この六課もそうだし、通っていた学校、その帰り道にあったコンビニ、そして戦い。その他諸々、その全てが俺の居場所だ」

「なんだか、どこにでも居ますね」

「そんなものだ。子供は何にでもなれる。だから、今はそんな事で悩むな」

そう言っただけで頭の上に手をのせる

「なんだか、卑怯です」

「何でだよ」

「あの、わ、私もその中に入っていていいですか」

キャラが跳ね起きてこっちを期待をこめた目で見ています

「いいよ。ヴィヴィオの手を離すのも忍びないな。エリオ、後はベツドのそばで話そうか」

「はい！」

頭の上から手をのけて、床に胡座をかく三人は半径1mもない円の中に収まった

「そういえばキャロ。いつから起きてた？」

ぎくつと肩を震わせる

「えっと…、かける隊長が帰ってきてから？」

最初からかよ

「キャロにも同じ事聞いてみたらどうですか？」

エリオがすっかり笑顔になって聞いてくる

「そうだな。キャロの夢は？」

「その事なんですけど、さっき叶っちゃいました。」

えへへ、と笑う

子供らしい無邪気な笑顔

「ヴィヴィオと遊びたかったとか？」

「いいえ。乙女の秘密です」

そう言ってまた笑う

「ま、今度はまた違う夢が出てくるだろうさ。見つけたら教えてくれよ」

そう言ってキャラロの頭を撫でる

エリオよ、なぜ羨ましそうな目で見る

「なんとというか、ほっとするんですね。かける隊長に撫でられると」

…リラックス効果？

あまり考えないようにしておこう

「…うにゅ」

ヴィヴィオが起きた

あ、キャラロが手を離れたからか

「あ、かけるパパ。おかえり」

寝ぼけてるのかぼうつとしている

「ただいま。ヴィヴィオ、元気にしてたか？」

…呼び方変わったのは気にしない事にしよう

「うん。ヴィヴィオ、かけるパパ好き」

いつの間にこんなに懐かれてしまったんだろうか

「ま、そろそろ出るか。エリオ、キャロ。後はよろしく」

そして部屋を後にしようとした

「あ、かける隊長」

「なんだ？」

今日はなんか呼び止められるの多いな

「かける隊長の夢ってなんですか？」

エリオが思い切って聞いてくる

「びっくりするなよ？」

早く早くとキャロが急かす

「みんなの夢が、俺の夢だ」

そう言つて哑然とするヴィヴィオとライトニング達をフォローせず
廊下に出た

第53話 居場所探し（後書き）

キャラの夢は原作と一緒にです
乙女の秘密敗れたり

今回はエリオとキャラのお悩み解決に回そうと思ったのに…
またはやてを泣かせてしまった

自分の中では涙脆い設定
頑張れ部隊長

最初のレポートに関してはまたおいおい増やしていきます
内容は…秘密です

次回は、…お風呂回？
お楽しみに！

第54話 湯船のある風景（前書き）

狂喜乱舞してます

白湯です

9月10日

例の本の発売日

某本屋が閉まる直前にforceとvivid買いに行きました

店員「入荷は9月12日の月曜日となっております」

白湯「（・・）エッ・・？」

思ってます

発売日前に入荷してるのが常識ではなからうかと

本屋業界よく知らないけれど

内容はすごかった

では、どうぞー！

第54話 湯船のある風景

「ふう」

食堂にて夜ご飯を食べ終わる
食べ終わってしまった

「師匠。どうしたんですか怖い顔して」

「かけるパパ。笑顔。笑顔。」

横の2人が励ましてくれるがなかなか笑顔になれない

「ああ。そうだな。ちょっとご飯足りなかったから追加で頼んでくる。ヴィヴィオは何かデザートいるか？」

口角をつりあげて頑張って笑顔を作る

自分でも違和感しか無いがまあ自分にしては上出来だろう

「そうは言っても、麻婆丼にカツ丼にうどんにハニートースト食べてまた食べますか」

机の上に並ぶ食器の山

スバルやエリオがいたら普通なのだが、小食な面子しかない中では異常だ

「ヴィヴィオも、お腹いっぱいだよ。だからデザート我慢する」

ヴィヴィオ。それは我慢とは言わないでも、さすがにもう食べれないな

「あ。まさか師匠。食べ過ぎで気分悪いとか？」

…一理あるな

だがユウナ

理由は別にあるんだ

「何かいやな事があったの？」

ヴィヴィオが心配そうに顔を覗き込む

たぶんヴァイスが聞いたら鼻血出して六課隊舎を逆立ちで歩き回るほど嬉しい話だろう

「とりあえず、ごちそうさましょう。ヴィヴィオとユウナはこれからデバイスルームに直通な」

「…仕事の話になると急に笑顔戻りましたね」

「…休暇欲しいな」

「かけるパパ。話が噛み合っていないよ？」

そんな2人を引き連れて食堂をあとにした

「という訳でシャーリー。プレストウイングが頼む物を作ってくれるか？」

「どついう訳がわからないですけど、仕事が増えるのは良いことですな」

シャーリーはそう言って微笑む

ヴィヴィオはさっきから白色光を淡く放っているブラスタービットに見入っている

ユウナは一人でフォーマルハウトのメンテナンスに入った

「でも、この作業は明後日以降でもいいですか？」

シャーリーがカレンダーを見てそう言う

「何かあるのか？」

仕事好きのシャーリーが後回しにするなんて珍しい

「あの、明日本局から査察が来るって知り合いの技師が言ってまして。その査察が済んだら本局から追加でデバイス技師がくるはずなので」

「おい。聞いてないぞ」

この変なタイミングで来るという事は臨時査察だ
対策も何も用意していない

「オーリスさんが来る可能性が高いです。あの本局でもいちゃもん
をかなりつける事で有名なんです」

マズい

ここにはヴィヴィオがいてなおかつ俺が居る

いちゃもんをつける箇所があるならこの辺から潰れ込んでくるだろう

「この事は誰かに言ったか？」

「いえ。てつきりみんな知ってる物だと」

「なら誰にも言うな。下手に対策していると逆にマズい。俺とヴィヴ
イオは出かける事にしよう」

「それが最善かもしれませんね」

2人で声を潜めて話し続ける

「なら、はやてに休暇もらえるように話し合ってくる。あとは任せ
た」

「わかりました」

シャーリーはそういつとブレストウイングが出した設計図に目を通
し始めた

「ヴィヴィオ、おいで」

遠くからは「いと間延びした声が聞こえる

「ユウナもほどほどに寝ろよ」

「わかってます。でも今の内にこれだけ済ましときます」

こつちを見ず、コンソールを叩きながら言う

「無茶するなよ。今身体壊したら俺だけでなくここにいるみんなが心配するんだからな」

するとコンソールを叩く音が止まる

その場を静寂が支配する

空調の音がなんだか痛々しい

「…私の中の大切な物は日々積み重なっていく。私が何をしようと、しなくても」

その中から掠れるようなユウナの声が聞こえる

「いいじゃないか。たくさんあるのはいいことなんだから」

「だけど、何か違うんです。昔と今で大切な物が。こんなに簡単に揺らいでもいいんですか？」

最近ユウナと話して無かったな

ちよつと溜め込みすぎてしまったか

昔からこういうことに関して考えるのが下手だから間違えた方向に行きやすいつて聞いてたのにな

「いいさ。変わらなきゃ人は生きていけない。今はドタバタしてるけど、また落ち着いた時にまたゆっくり探し直したらいい」

しばらく沈黙

ヴィヴィオは俺のズボンの裾を掴んで立っている

疲れたのかな？

「…その時は、一緒に。いや、何でもありません。師匠、お気遣いありがとうございます」

またピピツという軽い電子音と共にコンソールが叩かれ始める

「お疲れ、ユウナ」

それだけ言っただけでユウナの顔を見ずに部屋を出た

ユウナが自分を必要とするなら手伝おう
そう思っただけで自室に戻った

「かけるくんが最後やね」

ヴィヴィオを連れてなのはの部屋に入るとはやてがソファアに座って待機していた

「…あ、あの企画はマジだったのか」

「なのはママ〜。ただいま〜」

ヴィヴィオは俺の下を離れてなのはの下へまっすぐに行く

「あはは。おかえり、ヴィヴィオ」

ベッドに座っていたなのはが優しくヴィヴィオを抱き上げて膝の上にのせる

「はやて。明日ちょっとヴィヴィオ連れて市街地を周りたいたんだが
いいか？」

「なんでや。今いろいろ忙しい時期なのに」

はやてが足を組み直し頼杖をつく

査察の事は言えないから、何か別の事を言わないと

「ヴィヴィオの服を買いに行きたいなって」

そう言うとはやては唸って考えて、少しして結論を出した

「回線を常にオンにしておくこと。問題があればロンググアーチに連絡すること。ヴィヴィオからの願いは可能な限り答えてあげるこ

と。この3つを守れるなら遠足を許可してあげるで」

「3つ目の本意を教えろ」

「おやつは300円までな」

「華麗にスルー?!」

さすがはやて

絶対なんか変な企画を考えてるな

「良かったねヴィヴィオ。明日かけるパパとお出かけだつて」

フェイトがバンザイとヴィヴィオの手を握って両手を挙げる

「フェイトママも来るの?」

その瞬間場にいた4人が固まる

ヴィヴィオは変な事言つたかなと首を傾げる

「え、えつとね。フェイトママはお留守番してるから、2人で楽しんで来てね」

フェイトは1オクターブ上がってる声を抑えつつ言う

「かけるくん。ヴィヴィオに何を教えたんや?」

はやての目が死んでる

たぶん寒気がするのは幻じゃ無い気がする

「いや、えつと…。なんで？」

本当にわからない
なんでだ

「かけるパパ。はやてママいじめちゃダメだよ？」

ヴィヴィオが豹変したはやてを恐れずに言う
というか俺はやてをいじめてないんだが

「…つまり、隊長陣3人はママな訳か」

そう教えたのは絶対ユウナだ
ユウナには朝ご飯抜きに刑に決定した

「あの一、ヴィヴィオ。ちょっとええか？」

「なあに？はやてママ？」

「はづつ」

言われる度に顔を赤らめるはやて

…ま、喜んでるみたいだしユウナの刑は無かった事にしよう

「初めてここに入ったかもしれないな…」

少しして、場所を変えてはやての部屋へ来て湯船を借りに来た

「漁っても何も出てこんで？」

「漁ったら絶対明日を迎えられないのはわかってる」

女子の部屋を漁るほど馬鹿では無い

なのはとフェイトはヴィヴィオと一緒にソファアーの上で遊んでいる

「シャマルがどうしても湯船がいるって言ってな、地球から運んで来たんだよ」

道案内されてバスルームに向かう

そこでやばいことに気づいた

「…1人用？」

湯船にはどう見ても1人しか浸かれない

「大丈夫や。魔法で空間を曲げて広くする」

そんな無茶苦茶な

「俺が触ったら1人用に逆戻りだが？」

「……………え？」

はやてを湯船に立たせる

自分は身体を洗う場所に立ってドアを閉める

「こりゃ入れるのは2人までだな」

「…かけるくんとヴィヴィオとあと1人か」

一回風呂から出て現状を2人に話す

「ローテーションにしたら？」

「じゃあ、くじ引きで決めようか。公平に今日、明日、明後日入る順番を」

お前ら頭の回転早すぎ

そして拒否権を返せ

そして厳密なくじ引きの結果…

「ヴィヴィオはお風呂に入った経験は？」

備え付けの椅子に座って風呂場で用意する
ちなみに『教育上問題』があるため、今は水着を着て、なおかつ上からタオルを巻いてある

「無い！」

自信満々に言われた

湯船なんてなかなかお目にかからないしね

「まずは湯船に入る前に身体洗うぞ。はい、椅子に座って
するところっちを向く格好で座ったのですぐさま逆にする

水で一回すすぐ

ちよっとくせ毛があるかな

「ヴィヴィオの髪長いな」

「うーん。そうみたい」

一回考えるポーズを取って、こっちを向いてそう言う

「ヴィヴィオ、明日散髪に行こうか。服探しはそれからな」

あらかた埃は落ちたみたいなのでシャンプーを使って泡立てる

「やつ?!」

その時ヴィヴィオから可愛らしい悲鳴が聞こえる

あ、目にシャンプーが入ったな

「一回流すから目を瞑っとけよ。今痛いのはちよっと我慢しろよ」

シャワーを使って一気に泡を流す

頭頂部はギリギリ出来たが、他はまだぜんぜんできていない

「うー。シャンプー嫌い」

「今度は目を瞑っつけ。そしたら痛くないから」

そして2回目の洗い

というか長い髪ってどうやって洗ったらいいんだろうか

こう、長い部分を頭頂部に持って行って、一気に泡を染み込ませつつ洗う？

髪を痛めないように、優しく、優しく

「こんなもんでいっか。まだ目開けるなよ」

そう言っただけで頭からシャワーで水をかける
するとすぐにドアが開く

「あー。もう始めちゃってるの？私にもやらしてね」

タオル一枚巻いただけの姿なのはが入ってきた
シャワーで軽く汗を流してきたらしくそのまま湯船に入る

というかそうしないと入りきらないし

「なのはママー！」

ヴィヴィオがなのはにつられて入りそうになるのを押さえる

「ヴィヴィオはまだ身体洗ってないからストップな。ほらこのタオルを泡立てて肌の垢を落とすんだ」

ヴィヴィオに見えるように泡立てて自分の身体を使って洗い方を指示していく

所々のポイントはなのはが入れてくれるから心強い

「できたー！」

ちゃんと身体も洗ったので、最後に一回濯いで湯船に浸からせる

水温は考えて人肌の36

熱すぎず、冷たすぎずを考慮した上の設定だった

「10数えるまで出ちゃダメだよ？」

なのはが一緒に数えてあげるからとヴィヴィオに指示する

「じゃあ、かけるパパも一緒に数えてくれる？」

「いいよ、じゃあいくぞ。せーの」

「くくくいち、にい、さん、しーい……」「」

ゆっくり数を数える

しかしあつという間に半分に到達して残り時間が惜しくなる

「くくくはーち、きゅー」「」

ま、でもまだ一緒に入る機会はあるから大丈夫か

これが最後って訳じゃ無いんだし

「「「じゅー!」「」」

数え終わったあと、不意に訪れる静けさ
さっきまで反響した声まで聞こえていたがもう無い

「ふふっ」

なのはが最初に笑ってしまった

そこから肺の空気が無くなるまで笑い尽くしてしまった

「じゃあ、次はなのはママの番だね」

ヴィヴィオがなのはを指差してそう言う

「え、えっとね。私はさっきシャワー浴びて来たからいいというか」

ヴィヴィオの目を見ないように目を逸らしたが、俺と目があってしまいい気になのはの顔が赤くなる

「…髪だけな。身体は洗わないからな」

そう言っつて自分の前の椅子を指差す

「じゃ、じゃあ。よろしくお願いしまーす」

震える声で湯船から出て椅子に座る
タオルを外した状態で

…ハードル上がってない？

白い背中が自分の目の前にある
その中央に茶色い髪が垂れ下がる

「か、かけるくん。まだかな？」

触ってもいいのだろうか、これに

「あ、ああ。今やるよ」

シャワーに一回入ったとはいえ、もう一度髪を濯ぐ

「ど、どうやってあらったらいい？」

さっきのヴィヴィオと同じ洗い方は通用しない
とりあえずやり方を聞いてみる

「今日は頭皮マッサージくらいだけでいいよ」

話し方が戻ってる

ちよっとは緊張が解けたかな？

「わかった」

下からすくい上げるように指を入れて、指の腹で洗っていく

「なのはママ。気持ちよさそう」

「え?! だってかけるくんだもん。ヴィヴィオも気持ち良かったで
しょっ?」

「痛かった」

「あれはシャンプード。というか大人になったからと言ってシャンプーが目に入って気持ちいいやつはないからな」

「あはは。ちゃんとヴィヴィオは今度から目を瞑つとかなくちやね」

「うん。痛いのは、イヤ」

そうしてなのはの髪を洗い終えて風呂から出る事にした

「ヴィヴィオ。明日朝7時30分に朝ご飯食べずに待って」

なのはの部屋に戻って髪を乾かしていた

「うん。わかった」

夜9時子供は寝る時間になってようやくヴィヴィオの髪を乾かし終えた

「なのは、お見送りはいいから。普通に朝練に行ってくれよ」

ブオーとドライヤーの音がしている中からうんと澄み切った声が聞こえた

これなら大丈夫だろう

「じゃあ、おやすみ」

「かけるパパ…、抱っこ」

「はいはい。じゃあベッドまで連れて行くからな」

ひよいとヴィヴィオを担ぎ上げる

ヴィヴィオの髪からシャンプーの匂いがする

ゆすぎが余ったかな？

静かになったヴィヴィオをベッドの上に横にする

かけ布団をかけるとそこから可愛らしく腕を伸ばして腕の裾を掴む

「…寝るまで、手握ってくれる？」

「…ほら。これでいいか」

ヴィヴィオの目の前で見えるように手を握り待つ

「まだ、子供だもんな」

知らない間にそう呟いてる自分がいた

明日はいっぱい楽しい所に連れて行ってやろう

そう思って携帯端末を片手で開き事務仕事を少しずつ消化していった

第54話 湯船のある風景（後書き）

ちよつと期待に添えない出来になってしまったかも

というより風呂場で3人以上を動かすのはムリがある気がした

風呂に入る順番はかけるが幼少期出会った順番と一緒にです

臨時査察中はかけるはどこか別の所にいる感じです

一応日帰りです

六課の食堂は料理のレパートリーはかなり広いと信じてる

では、次回はお出掛け編

お楽しみに！

第55話 ヴィヴィオとオシヤレ（前書き）

台風が暑さを持って行ったからか、すごい寒いです
白湯です

今回もまた冒頭はレポート
予想出来る人にはこの内容わかつちやっってるかも

では、どうぞー！

第55話 ヴィヴィオとオシャレ

X21レポート・18

ドクターは面白い能力と言ってこれを容認
じっくり育てて戦力にするらしい

そして何より研究資金の増加が一番頼もしい

X21レポート・345

初めて彼女たちを見てもう3年
体格が整ってきて、目のやり場に困る

スタートが6歳なのに凄まじい成長スピードだ

人造魔導師の身体的成長はかなり早いらしい

すでに20歳は近いように見える

なので一時的に成長を止めるホルモンを注射
その後に機械部品での身体強化を行う

X21レポート・422

4年と118日が過ぎた
月日が流れるのは本当に早い

全機械部品装着完了

魔力行使およびレアスキル使用に一切の問題無し

ドクターは魔力に頼らないこのレアスキルをインビョーレントスキルISと呼んでいるらしいので、それに追従するとする

X21レポート・479

朗報

4年半で彼女たちに姉と妹が出来た

彼女たちはすごい嬉しそうだったが、つらそうだった

理由を聞くと私の下を去らなくてはならないとかなんとか

?とドクターに頼み込んでメンテナンスサポートとして同行できないか聞いてみる

「ヴィヴィオー。そろそろ出るぞ」

「ちょっと待って、かけるパパー。今から履くー」

時刻は7時45分

予定よりは遅いが許容範囲内だ

スリッパを履いて靴も何も持たない状態のヴィヴィオーが走ってきて自分の右手に捕まる

「ロングアーチ。こちらスターズ0。これよりオペレーションを開始する」

「ロングアーチ了解。気をつけてな」

通信越しではやての声が聞こえる
朝早くからごめんなさい、

「いつてくる」

「はやてママー！いつてきまーす！」

その通信を境に六課隊舎の玄関を出た

「開店は9：00からか…あと1時間くらいあるな」

下調べ無しで居たため、まずは六課前の喫茶店で朝ご飯を食べつつインターネットを見る

「電車が一番早いか。えつと…、時間はあと1時間あるな」

さすがに六課を出るのが早すぎたか
時間潰しつてのは嫌いなんだが

「思い切って場所を帰るか？…ヴィヴィオ？」

端末から顔を上げてヴィヴィオを見ると二度寝をしていた

ヴィヴィオが起きるまで雑誌でも読むことにするか

音をたてないように席を立ち雑誌を玄関付近から取ってくる

「…へ？」

しかしその1番の見出しに目を奪われた
みんなこの手の話題好きだな

そう思ってページをめくった

『歩くロストロギア、歩く質量兵器と逢い引きか?!』

のページを

「失礼します。ここは機動六課隊舎で間違いないでしょうか？」

朝早くから六課の受付嬢にそう聞く女が1人いた

背筋はピンと伸ばされ、伊達ではあるが眼鏡をかけている

「あ、はい。そうですか」

受付は、ちょうど変わった人だなと思いつつ対応する

「本局にて捜査官をやっている者ですが、臨時ですが査察に参りました」

「へ？」

差し出された名刺にはその発言が嘘ではない事を証明する事が書かれていた

「部隊長を呼んでいただけますか？」

「は、はい！今おつなぎします！」

受付嬢はコンソールを叩き部隊長室へ連絡を取ろうとする

「その必要は無いで」

それは1人の行動によって遮られた

この六課の最高責任者の手によって

「部長は私や。話があるなら聞こうやないか」

「わざわざご登場いただきありがとうございます」

来訪者は礼をする

「誰の指示や。特にやましいことをした覚えはないんやけどな」

「レジアス・ゲイツ中将ですよ」

言われた瞬間はやての眉がぴくりと動く

「では、ご案内していただきましょうか。部長さん？」

女は眼鏡をかけ直しニヒルな笑みを浮かべた

「世間からはあんな目で見られてたのか…」

「かけるパパ。ここどこ？」

ため息をつきつつミッドの中心街に立つ

隣にはワンピースにスリッパという異様な格好のヴィヴィオがいる

「まずは…靴かな？」

スリッパで市内を歩くのはマズいと考えて靴を買いにいった

「いらつしやいませ。どのような靴をお探しですか？」

初めて六課に来たとき最初に立ち寄った店であるため、迷わずすぐにこれた

「スニーカーとスリッパと…サンダルかな？」

「サイズは27cmでよろしいでしょうか」

「あ、この子の靴なんで」

サイズを1発で見抜いたのはさすが靴屋だ
もう変態レベルに到達してる

「…失礼ですが、1足でいいのでは？」

「…確かにそんな気がしてきた」

「ハイヒールがいいな」

「ヴィヴィオ、どこでその言葉を知った」

「はやてママが買ったといっって」

はやてめ

絶対何かしてくるとは思ってたけどさ

「だがサイズがわからん。残念だったなはやて」

通信機に向かって話しかける

「24・5cmや。今査察の人来たから連絡はしばらく録音だけに
なるよ」

ちくしょう、なんて時代だ

「…お客様？どうかされましたか？」

「なんでもないです。じゃあこの子にあうスニーカーと24・5の
黒のハイヒールください」

「……ハイヒールは趣味ですか？」

「プレゼント包装でよろしく願います」

変な性癖があると勘違いされつつもお金を払う

「かけるパパ。このまま付けるの？」

ヴィヴィオは初めての靴に戸惑っていた

「マジックテープをはいで、靴下を履いて」

「靴下？」

げっ

靴下すらしないのか

「靴下売ってますか？」

すると店員は無言でレジの横の棚を指差す

「柄は考えなくていいか。この白2つと黒1つください」

「かしこまりました」

すると無言でもう1つ、白と黒の縞模様の靴下が渡された

「サービスです。似合うと思いますよ」

「あ、ありがとうございます」

こうして、白と青のスニーカーとサービスされた靴下を履いたヴィ
ヴィオをつれて外に出た

「次は…やっぱり服かな」

ブランドにこだわる必要も無いと考えていつもの大型洋服店に足を
運んだ

ここはヴィヴィオのファッションセンスに任せようと、いろいろ服

を当ててヴィヴィオが気に入ったのだけカゴに入れていく

「このスカートかわいいかな？」

鈍い赤がメインのふんわりと広がったスカートをヴィヴィオに見せてみる

「かわいくなる？」

「なるんじゃないのか」

「じゃあそれにする！」

と、こんな感じでだいたい俺のセンスで決まっていた組み合わせとかあるからそれをヴィヴィオに任せようと思う

そしてそのままカゴを持ってヴィヴィオを試着室へ連れて行く

しかしカーテンの向こう側でヴィヴィオが服を脱いだ時にある物の買い忘れに気づいた

「…まさか、行かなければならないのか？」

あそこに行ったら、死ぬ

男として確実に死ぬ

「かけるパパ。どうしたの？」

ヴィヴィオがカーテンの端から顔をひょっこり出して聞く

パンツ1枚になった6歳児がそこにいた

「下着買いに行かないと、いけないんだ」

「ねえ、あれこの前週刊誌に乗ってた」

「あーあれね。あの物騒な名前の」

「嫌よねえ。あ、ほらなんかまだ小さい子供と手を握ってるわよ」

「独身のはずよねえ。誰かしら」

「お金とか渡したんじゃないの？」

「すいません
聞こえてます」

「ヴィヴィオ。俺って有名人らしいぞ」

街を歩いて早くも15分

すでに周囲の視線はこちらを向いていた

「かけるパパ有名人なの？すごいね！」

ヴィヴィオがなんの嫌みがない、ただひたすらにまぶしい笑顔をこちらに向けてくる

でもなんだろうか

パパって呼ばれる度にまわりのざわざわとした音が広がる

「あ、今パパって言ってたわよ」

「通報すべきかしら」

さつきからついてきてるおばちゃん3人組からの信用が0なんだが

無視だ無視

そうして聞こえないフリをしつつ『女性用』下着売場に足を運んだ

「ヴィヴィオ、なぜみんなこの手の話題に食いつくんだらうな」

ゴシップ狙いだらうか？

「わからないけど、もう視線は無いみたいだよ」

「…あれ。本当だ」

さつきまであった痛々しかった視線が無い
意識過剰すぎたか？

「いらっしやいませお客様。当店に御用があるのはあなたですか？」

「何を思ったらそうなる」

「いえ、朝から下着売場に来るなんて…そっちの趣味があるとしたら」

まさか本日何度目になるかわからない変態扱いされるとは

「今日はこの子の下着を買いに来たんですよ」

ヴィヴィオを指差して言う

「はじめまして」

そのヴィヴィオが丁寧にお辞儀する

なんとよくできた子か

「わかりました。とりあえずオーソドックスなのを見繕ってきます」

「助かります」

そうしてヴィヴィオの下着を買い、新しい服を着て店を後にした

縞パンばかりだったのはツツコミを入れるべきだったんだろうか

「なのは隊長。データコピー終わってますよ」

「あ、本当だ。ごめんちょっと考え事してた」

スバルがパソコンの画面を見たまま動かないなのはに気づいて声をかける

「何かあつたんですか？」

「うーん。強いて言うならヴィヴィオの事かな」

キーボードを叩きヴィヴィオの写真と魔力テストの結果が表示される

「人造魔導師つて事でいいんですか？」

「うん。間違い無いかも。エリオの言うことも考えて元になった人間は確実にいる」

「やっぱりそうですか…」

スバルはいつになく真剣な目をしている

「でも、スバルこれだけは忘れちゃダメだよ」

続けて市街地であつたレリックを巡る争奪戦の写真が出てくる

「敵がなんであろうと目をそらしちゃダメ。スバルはスバル。『兵器』じゃないんだから」

スバルは驚いた顔のまま固まっていた

「じゃあ後はティアナに任せようかな」

「へっ？」

なのはがスバルから見て右を指差す

スバルがそれにつられてゆっくりと振り向く

するとそこにはデコピンを構えているティアナの姿があった

「えいつ！」

「にゃあああ！」

抵抗する力も出せないまま吹き飛ばされるスバル

ズドンといい音をだして尻餅をつく

「ちょっとやりすぎじゃないティアナ？」

なのはがスバルを気づかって声をかける

魔力を使って身体強化して放たれたデコピンは普通なら頭蓋が割れる

「そ、そうだよ。ティアナ。凄い痛いんだけど」

「あんたにはコレくらいがちょうどいいのよ」

「あ、ちなみにね。スバル」

なのはが立ち上がるうとしたスバルに笑顔で囁く

「”あの”事教えてくれたの、ティアナだから。パートナーが心配だからって」

スバルはそれを聞いてまたへたり込む

秘密を親友に漏らされたことに腹がたっているのか、肩を震わしている

「ティア、…、本当？」

「そうよ。あんたにいつまでも暗い顔されたら周りまで暗くなるのよ。早くシャキッとしなさい」

ティアナは強い口調で言っている割には頬を染め素知らぬ方向を向いて喋っている

「ティア、…私のことを思ってた？」

「だったらどうするの？」

スバルは立ち上がりティアナに抱きつく

「ティア、大好き！」

「あ、あんたは場所を選びなさいって！」

突然の事でティアナは固まっていたがスバルが頬ずりすると意識が覚醒して、今は引き剥がそうとやっきになっていた

「ありがとうティアナ、大好きだよ」

「夫婦喧嘩は外でしてね？」

「ち、違います！これはスバルが！」

なのはは呆れる事もなく、スバルが元気を戻った事を確認したから

か、笑顔で部屋を出た

「おしゃれ？」

昼ご飯を食べ終わって、公園を散歩中にヴィヴィオが急に言い出した
ちなみに野次馬は飽きたのかももう周りにはいない

「うん！オシャレ！ユウナお姉ちゃんがしてたもん！」

「と、言ってもなあ…」

なんだかんだ言ってヴィヴィオはかなりかわいいはず
たぶん元の人間がたいそうな別嬪さんだったのかオシャレなんて必
要ない気がする

「ヴィヴィオには必要ない気がするんだよな…」

「でも、したいの！」

ヴィヴィオはかなり押ししてくる

今はロングアーチからの通信は切れている

だからこれはヴィヴィオ本人の気持ちなんだろう

「ヴィヴィオはどんな事がしたいんだ？俺はあんまり詳しく無いから」

「えっとねー…、それ！」

ヴィヴィオに意見を求めてみたらあるうことがブレストウイングを指差した

「ユウナお姉ちゃんも付けてた！」

「…ユウナが？」

長袖だから気づかなかった

ユウナもリストバンド付けてたのか

「私もそれが欲しい！」

「…アクセサリーか」

なるほど

化粧とかパーマとか思っていたが装飾品の類か

「なら、いいものがあるぞ」

「かけるパパ、何するの？」

「これだ」

ポケットから青のリボンと黄色のヘアピンを取り出す

「本当は全部済んでから、と思ってたんだけどな」

ヴィヴィオをベンチに座らせる

自分は膝立ちになりヴィヴィオの前髪を左に寄せてヘアピン2つで固定する

「どうだ？」

「なんか変な感じ…」

そりゃあ初めてのヘアピンだしな

続けて右の髪を少し取り、青のリボンで結ぶ

「このリボンはなのはからもらったリボンでな」

「なのはママのリボン?!」

2年前、また会うことを誓ってお互いに交換したもの1つ

やっぱりヴィヴィオは気に入ってくれた

「このヘアピンははやてが渡してくれたんだ」

左側には黒のリボンを結びながらそう言う

ヴィヴィオはヘアピンに少し触れて笑顔になっている

「どうだ？ヴィヴィオ」

ちょっと不恰好になったかもしねないがそこは妥協して欲しいかも

「鏡」

「ああ。そうだな」

携帯端末の液晶部分を鏡代わりしてみせる

「右と左で高さ違う」…」

やっぱりか

「なら、結び直すから待ってけ」

リボンに手をかけようとすると手を瞬時に払われた

…反抗期？

「いい」

「いいって…」

「かけるパパが結んでくれたからいい」

そう言っつていつものように正面から抱きつく

「ありがとう、かけるパパ！」

「おう、大切にしろよ」

離れる様子は一向に無かったのではらくこのままでいた

買い出し中もヴィヴィオは不意に立ち止まりリボンを触ったりヘアピンを触ったりしていた

喜んでのを見るところちも嬉しくなりつついっいヴィヴィオの頭を撫でたりしてしまう

結局そんな状態のまま帰路についた

第55話 ヴィヴィオとオシャレ（後書き）

アニメのなのは1期の最後
なのはとフェイトは再会を誓ってお互いのリボン交換してたじゃないですか

かけると別れる時もそんなやり取りがあっただんですよ

…たぶん

さて、査察来ちゃいました
査察内容は書かない方向で

そんな中イチヤイチャしてるティアナとスバル
…大丈夫か？

時系列ぐちゃぐちゃになっちゃってますが多目に見てください

では次回予告！
六課にあの人が来た？！
かなり久しぶりの出番だったり

お楽しみに！

第56話 来訪者（前書き）

早朝ランニングで風邪引きました
白湯です

走ってシャワー浴びて出社した時点ですでに鼻声
強制送還されました

インフルエンザとか来てる場所は来てるらしいのでみなさんしっ
かり予防してくださいね

では、どうぞー！

第56話 来訪者

「……ッ！」

射撃訓練所に1発の銃声が響く

銃口から白煙がでる訳でもなく、ただ反動だけが返ってくる

引き金を引いているのはユウナだった

そして放たれた弾丸は的に当たらず、茂みの向こうへ隠れてしまう

「…命中確率89%。まだまだ腕は落ちてないね」

ユウナがフォーマルハウトを床に置いて言う

朝から撃っていたせいか、カートリッジが水たまりのようにあたり一面広がっている

「今日はもう終わり。フォーマルハウト、モードリリース」

時刻は夕方

そろそろ師匠が帰ってくるはずと思って胸を踊らせる

OK・Mode ready・

フォーマルハウトがスナイプモードからブレスレットに戻っていく

You have good sense・Excellent

「まだまだだよ。100%にしないと」

防音のための耳当てを外して壁にかける

本来、音は出ないので耳当ては必要無いのだが、撃った感覚がしな
いから無理に頼んでつけてもらった

「それにしてもすごいね。私が思ったようにまっすぐ弾が飛ぶよ。
魔法って不思議だね」

I want to carry out my maintenance

「フォーマルハウトも頑張ってくれたんだよね。ありがとう、すぐに
出してあげるね」

Thank you . My master

「お疲れさん、2人とも」

ユウナが歩いているとヴァイスが後ろから声をかけてきた

そして右手のスポーツドリンクを差し出してくる

「あ、もらってもいいんですか？」

「いいぜ。後輩を労うのが先輩の仕事だからな」

ちょうど喉も乾いていて助かった

「それよりもユウナちゃん。ちゃんとフォーマルハウトの重心は確

認してるか？」

射撃型デバイスにおいて、スナイプショットの時に重心を押さえてブレを抑えるのは昔からよく言われている

それを聞いてるのかと思って一回フォーマルハウトを出して指をさす

「はい、えつと確かこの辺りかと」

それを聞いたヴァイスはユウナからフォーマルハウトを取り上げ構える

「やっぱりか……。フォーマルハウト、できれば他のバスターとショットガンにもなってくれるか？」

ヴァイスは違和感に気づいてフォーマルハウトに指示する

フォーマルハウトは何かあるのかとその姿を次第に変えて、そのたびにヴァイスは構える

「あの…、何か？」

フォーマルハウトに重大な欠陥でもあるのだろうか
恐る恐る聞いてみる

「モードチェンジ毎に重心が変わってる」

ユウナにフォーマルハウトを返して持たせる

「バスターの時はここのグリップをもつと銃口から離せばいい。2・

5cmくらいか。後は……」

目を見張るほどの的確な指示が飛んでくる

初めて触った銃をここまでわかるなんて

「……。これくらいだ。わかったか？」

ヴァイスが言い終わってにこやかに笑いかける

「はい！それにしてもすごく詳しいんですね。びっくりしました」

本当にびっくりした

趣味で銃でもいじってるのだろうか

「そうでもないって。昔頑張ってた時のおまけさ」

「射撃の腕もすごいですか？」

銃を持つてるのを見たことは無いが、ここまで指示できると言っているとは射撃の腕前に確かな自信があるということだ

しかしヴァイスは固まった

ユウナの言葉を聞いた瞬間ヴァイスの笑顔が消える

怒るわけでもなく、ただつらそう

何か聞いてはならないことを聞いてしまったみたいなの

「ほんのちょっとしたミスが、たった1発の弾丸が人生を変える事もある」

表情を悟られないためか背を向けて喋る

「俺はみんなに、そうなってほしくないわねえんだよ」

言うことは全て言ったというふうにはヴァイスが歩いていく

ユウナはその姿をただ見守る事しかできなかった

「ただいまー」

時刻は夕方

六課の玄関で両手に大量の荷物を持って入る

量はたくさんあるが軽いものばかりだから負担は少ないが

受付はこっちを見て目を見開いている

「まあ、買いすぎだな…」

「かけるパパ。あとちょっとでお部屋だよ」

ヴィヴィオが先導して俺の部屋まで誘導する

荷物を床に置いてヴィヴィオと一緒にソファーにもたれかかり一息
ついていた

「楽しかったか、ヴィヴィオ」

「うん、楽しかった！」

「なら良かった。機会があればまた行こうな」

頭をそつとなでる

するとすぐにヴィヴィオがしなだれかかってきた

「でもパパ、ちょっと眠いよ……」

目も虚ろで今にも寝てしまいそうだ

「疲れたのか。じゃあ少し寝るか」

ヴィヴィオの頭を膝の上に乗せて髪をそつと撫でる

今日の仕事が明日倍になって返ってくると思うと正直気が重い

そろそろみんなの訓練につかないとな…

「遅かったわね」

しかしその思考は一瞬にして切り替わる

この声に聞き覚えがある

やはり来たのか

流れる冷や汗を押さえて声を出す

「オーリス三佐。なんのようですか？」

ヴィヴィオをソファアに寝かせて立ち上がる

オーリスはヴィヴィオを一瞥した後、コツコツとハイヒールの音を響かせ近づいてくる

上官ではあるから敬礼をする

「そんな誠意が籠もってない敬礼は久しぶりに見ました。新入隊員以下ですね」

馬鹿にされている気は起きない

今はどうやってこの状況を打破するか考えるのが優先だ

査察に来たんだ

間違いない

ヴィヴィオと俺が帰ってくるのを待ち伏せしていると、狙いはヴィヴィオと俺に決まってる

こっちが黙っているとオーリスはまたヴィヴィオを見てくすりと笑う

「…何がおかしいんですか」

敬礼をやめて聞く

これ以上する意味を感じなかったから

「いえ。どこの馬の骨かわからない子の保護責任者になるなんて、あなたらしく無いなと」

「身寄りが無いからこそ保護責任者が必要なのではないですか？」

「そういつのつてね、余計なお世話なのかもしれないよ」

「どういう事だ」

ちきしょう

なんだか無性に腹が立つ

「あなたが勝手に自己満足のためになっただんじやないですか？あなたの言う『夢』のために」

そう…、なのかもしれない

確かにヴィヴィオがどこか別の誰かに連れて行かれるのはつらい自分がいる

だけでも、でも…

「それでも、それでもヴィヴィオは俺を選んだ。だから俺は保護責任者になっただんだ」

オーリスはさらにノータイムで続けて言う

「では、あなたが拾ってきたウインスレットさんはどうなんですか？」

ユウナにも何かあるのか

彼女にはもうなんの罪も無いのに

「ユウナは自分から自分が生きるための力を欲しがった。俺はその手助けをするだけだ」

そう言うとオーリスは喋らなくなる

そして少し考えた後、ゆつくり口を開いた

「合格。でも75点くらいかしら？」

そして自分の右手を握ってきた

するとすぐに自分の中でとある能力が発動したのがわかる

魔力吸収

オーリスの身体が一瞬モザイクがかかったように身体と風景の境界線を無くす

「…はヒ？」

何回かこの光景を見てきたがら、わかる

これは変身魔法だ

じゃあ、誰なんだ？

「その1。感情的になったらだめよ。上官にはちゃんと敬語使わなきゃ」

高い声が部屋に響く

右手を握っていた手には白い手袋

濃い青を基調としたロングスカートが露わになる

「その2。手の内をさらしちゃダメ。最後までこらえて」

緑の長い髪が後ろに流れる

変身の名残か、メガネが残ったままになっている

「…なんで？」

それしか言うことは無かった
なぜ居るんだ

「その3。久しぶりの再会なんだから、もっと喜びなさい？」

メガネを外してポケットにしまう

そしてえへんと胸をはる

「…リンディ、さん？」

時空管理局本局の総務統括官

今はアースラを降りて、そんな重役についてる恩人

リンディ・ハラオウンだった

「でもなんで変身魔法？」

「ドツキリに決まってるじゃない」

こんな人だが、すごい偉いのだ

もう孫がいるというのに昔と比べて外観変化があんまりないのはびっくりだ

「さて、部隊長が呼んでるらしいからヴィヴィオちゃん連れて行きましょうか」

そうして再会の喜びもどこかへ吹っ飛んで、部隊長室へ行くことになった

いつでも元気だな、この人は

「ヴィヴィオちゃんはかわいいわね」

リンディさんはソファーに座りヴィヴィオを抱っこしている

「…以上が、今日の臨時査察の内容や」

その横で、ため息をつきながらはやてが書類を閉じる

「お疲れ様、はやて」

労いの言葉をかけてリンフォースが入れてきたお茶を渡す

「つまり、査察に来たのはリンディさんであってオーリスさんは来

てない。って事でいいのかな」

「そういうこと」

なのはも知ったのはさっき部隊長室に入った時
フェイトはまだ来てないがたぶん驚くだろう

「主はやては、最初からわかってたみたいですけどね」

リンフォースは一回背伸びをした後にお茶を飲む
はやてはまたため息をついてリンディさんを見る

「あんな、受付でリンディ・ハラウンって書いてある証明書ださ
れたら気づくやろ…」

受付もあたふたしたはずや、と言ってまたお茶を飲む

「突然査察に来られたら困るでしょ？だからその前の模擬練習みた
いな感じにね」

ヴィヴィオのほっぺをぐりぐり押さえつけながら言う

さすがにそんなに強くしたらさすがに起きる気がする

「ま、問題点はちゃんと直しといてね」

そうリンディさんが言うと同時にドアが開く

「はやて、用事って何かな？…って、お母さん?!」

あ、フェイト来た

「うにゃあ…、うるさいい」

あ、ヴィヴィオ起きた

そしてリンディさんを見て一言呟く

「…おb」

一言呟く前にヴィヴィオを回収

とりあえず口を押さえて抱っこする

「かけるくん。ヴィヴィオちゃんから手を離してくれない？」

「そのセットアップ済みのデバイスしまったらすぐ離しますから、どうか落ち着いてください」

と…うかなんて言おうとしたヴィヴィオ
お〇さんか?! おば〇んでいいのか?!

無知とはすごい

階級無視してむちゃくちゃ言えるんだから

「ねえ、なのは。私に何が起きたか教えてくれる?」

「大丈夫。私にもよくわかって無いから」

それからリンディさんを必死に抑えてヴィヴィオをなのはに任せて話を続ける

「あ、私のリボン」

なのはがヴィヴィオの頭を撫でた時に気づいた
というかわかるものなんだな

「このヘアピンは私のものやね」

はやても嬉しそうにヴィヴィオのヘアピンを触る

「えー…、そんな企画するなら私もリボン渡しとけばよかったな」

フェイトがいじけてリンディさんに愚痴を漏らす

リンディさんも久しぶりにフェイトと話せて嬉しいのか笑顔だった

「あとはやて、ハイヒール」

はやての目の前にそれが入った箱を置く

はやては箱からそれを取り出してリンフォースに渡す

「…あの、これは？」

「リンへのプレゼントや。私服も少ないし、いつものローファー
じゃあオシャレしたってつまらんやろ？」

はやては満面の笑みでそれを渡す
ただ1つ言つとすれば

「それ、俺が買ってきたんだけどな」

「はい、はい！主はやてありがとうございます…！」

ねえ、聞いてよ

「邪魔しちゃダメだよ？かけるくん」

自分の中の微妙な感情を抑えて買って来た物をみんなに見せる

そして食べ物を冷蔵庫に入れ、服を畳んだ後にリンディさんが立ち上がる

「じゃあ、私はこれで帰るわ。みんなおもてなしありがとうね」

「あれ、もう帰っちゃうんですか？」

「ええ。明日も早いしね」

名残惜しそうにそう言う
仕事大変なんだろうな

「わかった。玄関まで送るよ、母さん」

「その必要はないわ。1人でもこれだから1人で帰れるわよ」

たぶん、そういう意味じゃないと思う

ヴィヴィオに向けて手を振り、部屋を出て行くこうとする

しかし立ち止まりはやてに聞く

「あなたは、これでよかったの？」

「はい。私の命は他人のために使う。そう決めたから」

「そうよね、ならこれからも。頑張ってる」

何か意味深な会話をして去っていった

そっだ。俺が聞いたはやての夢は『他人を傷つけず生きる』という
ものだった

よく考えたら今のはやての言い方じゃ…

本当に彼女は、報われるのか？

そんな考えが頭をよぎり、いてもたってもいらなくなり部屋を後にした

次の日の早朝訓練の前

シャーリーが言った通り、六課に新しいメンバーが来た

「ギンガ・ナカジマです。よろしくお願いします」

礼をすると耳にかかっていた青の髪の毛がサラサラと流れ落ちる

「2回目、かな」

「はい。あの時はありがとうございました」

丁寧にみんなにお辞儀する

これを見るとあの子が妹とは思えない

「かける隊長。なんかへんなこと考えてませんか？」

「気のせいだ気のせい」

続けてギンガの隣にいた人が自己紹介を開始する

「マリエル・アゼンダです。デバイスとかのメンテナンスが本業です」

「昔から私達のデバイスを見てくれてる本当に頼りになると思うよ」

フェイトが追加で補足する

この人のおかげでブラスタービットの改良および量産ができるようになったのだ

本当にありがたい

「それじゃあみんな、早朝訓練始めるよ！」

「はい！」

なのはのかけ声に声を揃えるみんな

しかし1人だけ、自分の前に無言で歩いてきて敬礼をする人がいた

「…なにしてるの？ギン姉」

「ギンガさん、どうかしましたか？」

ギンガだ

俺は何もせず、ただ行く先を見つめるだけ

「高町翔隊長。貴重な時間を割いてしまう事になりますが、よろしいでしょうか」

みんなギンガの発言に耳を傾ける

「…いいけど、なんだ？」

なんだろうか

合同調査でゲンヤさんから連絡があるのだろうか？

そうして凜とした声で告げる

「早朝訓練後、私と勝負してください。1対1の本気の勝負を」

それは周囲を驚かせたギンガ本人からの、願い事だった

第56話 来訪者（後書き）

オーリスはリンディだったのさ！
な、なんだって〜！（AA略）

じゃあ、オーリス何してたの？
それは次回ちっちゃく書く予定

しかし才能が足りない
リンディさん出したのに話に絡みが少なかった
もっと工夫しなければ

次回予告！
久々の戦闘！
お楽しみに〜

第57話 賭け事と殴り合い（前書き）

今期アニメは期待してる物が結構あったり
白湯です

まずは謝辞を
すつつつごく遅れました！
ごめんなさい

そしてアニメの話
今、期待度が高いの
・ Fate / Zero
・ ギルティクラウン
・ WORKING !
…の3つかな？

他にも面白いのあったら教えてくださいな

最後に、長らくお待たせしました
では
どうぞー！

第57話 賭け事と殴り合い

「オーリスさん。ちょっといいかしら？」

朝、本局を出るときにリンディ統括官が話しかけてきた

「今回の査察…、私に行かせてくれない？」

またか

この査察が決まった1週間前から言い寄ってきている

「嫌です。あなたは少し甘い所があるので、見逃しをしそうですから」

六課をかばっているのだろう

ただ私も気持ちと同じだ

父は必ずしも六課を潰す手がかりを見つけてこいと言っている
そこまで八神はやてが憎いのか

自分のお気に入りの高町翔を奪われた事が嫌だったのか

聖王教会が公開陳列会の時には全戦力をもって警備にあたると言ったときは少し聖王教会に対する見方を変えたらしいが

「ほら、変身魔法で私があなたに化けていけば大丈夫でしょ？」

私が歩く歩調に合わせて喋ってくる

「それに、目的の子は外出中よ」

「え？」

思わず立ち止まってしまった

そんな馬鹿な

今回は秘密裏に行われていた

こんなタイミングで外出なんて有り得ない

「あなたが、その指示を？」

「さあ？私は知り合いのデバイス技師に行くのは明日にしよう
て言っただくらいよ」

思考が固まる

「たぶんミッドの中心街だと思っけど、どっかしら？」

返事は決まってる

私には、すべき事があるのだ

「査察結果を一度こちらに見せてください。それから私がゲイツ中
將に報告します」

それを聞くと彼女はスキップして去っていった

同日18時03分公園のベンチにて

……私は私でわかった事はあった
高町翔は望んであの場所にいる

その報告だけでも十分だろ

そしてやはりヴィヴィオは可愛い

あの子が問題を生むとは思えないが、注意すべきと思う

「本当にいいですか？」

「ああ。戦技指導教官としてここにいる。その仕事をちゃんとしな
いとな」

朝10時

朝ご飯を食べてウォーミングアップをしてからシュミレーターで投
影した市街地の上に立つ

場所の指定はギンガが行った
なんでも市街地戦を意識したいとか

「私は強いですよ？」

barrier Jacket Setup

ギンガの腕にはリボルバーナックル、足にはローラーブーツが装着される

さすがマツハキヤリバーの姉妹機
似てる箇所はたくさんある

「大丈夫だ。全力で来い」

Fire at will

スバルと戦ったときに装甲を下半身につけるのはあまり意味が無いと知ったので胴と籠手のみにする

武器はダガーナイフ2本

長めの武器は使い物にならない

今回は約30cmと短めの物をチョイス

「それじゃあ準備、いいかな？」

審判はなのは

フォアード陣も見学にきている

救護班のシャマルとマリエルさんもなのはがいる少し離れたビルの屋上についた

「私はいつでも構いません」

ギンガは左手のブリッツキヤリバーを上にも構えて待機する

「ああ、始めよう」

距離は10m

離れすぎかもしれないが、魔導師戦ではこれくらいが普通のスタート位置である

「じゃあいくよ。レディー…、」

なのはのかけ声で全体が静かになる

それと同時に緊張によって手に汗がでる

刀を握り直さず、ただ前を見る

汗なんて戦いが始まればあまり気にならなくなる

恐らくスバルと同じ突撃格闘型

序盤から突っ込んでくるはず

そう思って刀を下段に構える

「ゴォー！」

なのはのかけ声と同時に空を飛ぶ

ギンガは基本接近技が多い

だけどそれは地に足が着いているときだ

これならどうする？

そう思って下を見る

ギンガの行動は単純だった

飛んできた自分目指してウイングロードに乗ってきた

「って、それ距離制限無いの?!」

「この魔法、割とオールラウンダーなんで」

さいですか

右手で魔力盾を作って突っ込んできた

それを魔力吸収して上段に構えたブリッツキヤリバーを弾く

右手で応戦するかと思いきやそのまま自分の横を通り過ぎ後ろへ過ぎ去る

なるほど

ヒットアンドアウェイか

これなら体勢を崩されてもすぐに持ち直せる

感心しているところ、ギンガは自分の真上に来るとウイングロードから飛び降りた

「はあああ!」

高さの差、15mからの飛び降り

焦った

これ、ティアナがやった攻撃そっくりじゃないか

「でもバインドで止めとかないと意味がない」

1 mくらい後ろにふわりと移動する
これならたぶんあらぬ所に落ちるだろう

ギンガは驚く訳でもなくさつき自分がいた場所に着地した

「…それ、遠隔操作できるの？」

ウイングロードがまた新しくギンガの足場を作り出していた
改めて周囲を見回すと、周りはすでに道だらけになっている

「これが動きの要なんで、強化するのは当然です」

間は1 m

間髪開けずにすぐさま懐に飛び込んできた

魔力で強化した右手で初撃をあたえに入る。

狙う箇所は頭か

これなら魔力吸収が働いてもでも確実にダメージは入る

刀身に当てて怪我したら大変だろうと思いつ、その右腕に自分の左手
にあるダガーを放り捨てて、籠手を使ってその手を払う

休む間もなく左手のブリッツキヤリバーが飛んでくる
それを右手のダガーで下から容赦なく斬り上げる

しかし、ガキンといい音がして殴り飛ばされた
何が起きたか一瞬わからず5 m程間が開く

「やった！」

ギンガが喜ぶ声が聞こえる

その理由は自分の右手のダガーを見てわかった

「ダガー折るとか…、どんだけ力込めてるのさ」

マスター、ヤバいんじゃないでしょうか？

ブレストウイングが話しかけてくる

確かに、これは手加減して勝てる相手じゃ無い

おそらく考えられない程の鍛錬の賜物だろう

これはヤバい

「よしっ！ならブラスタービット、1から6。アンロック、魔力刃を発生させたのち警戒モード」

6つのブラスタービットが自分の周囲を円を書くように待機する

手に120cm程度のいつもより少し軽い日本刀を新しく出す

人を殺すための武器としてではなく、技を極めるための刀だ

「すごい…、それがブラスタービットか…」

ギンガは自分の刀へのこだわりを無視してその目を輝かせている

「見るのは始めてだったか？」

ちよつとへこみながら聞いてみる

「いえ、2回目ですけど初めては下水道の中だったんで」

「最近はいろんなデバイスにもあるものはあるだろ」

このブラスタービットを元に開発部がいろいろ作っているらしい

砲撃のサポートや演算サポート、その他術者のサポート役として使
つてる人は使っている

「でも、オリジナルはやっぱり違いますね。……うん、決めた」

ギンガが何かしらの覚悟を決めたらしい

「何がだ？」

「この戦い、ちよつとした賭けをしませんか？」

…始めからこのつもりだったのかな？
なんだろ

ブレストウイング絡みだったら却下だな

「私が勝ったら、私の父と会って話をしてください」
びっくりした

なぜいきなりそんな事を言うのか

理由を聞いてもたぶん答えてくれないだろう
ならば別のことを聞くべきだ

「…俺が勝つたら？」

「私に戦い方を教えてください」

ブリッツキャリアバーのカートリッジを1発抜いて構える

「OKだ。ま、理由はどうであれ。負けるつもりは無いからな」

言い終わるが先か、動くが先か

話し終わってから1秒もたたない内に殴り合いを始めた

「ギン姉…、頑張れ！」

スバルが心配そうに見守る

「すごい…、ギンガさん一歩も引いてない」

ティアナも驚きの一言だけだった

今、目を逸らさずこの戦いから学ぶべきの事を学ぼう

その横である出来事を無視して

「フエ、フェイトちゃん?!あれってまさか!」

「うん。結婚の相談だね。今からギンガを……」

「…どうするんですか？」

側にいたエリオが恐る恐る訪ねる

「ポキツとしてくる」

さも、散歩に行くようにその単語を発した
笑顔をなのはに向けつつその手にはバルディッシュがしっかりと構
えられていた

「キャラちゃん、頑張つて！」

「無理で〜す〜！」

キャラは必死にフェイトの腰にしがみつき、ユウナはなのはの左腕
を押さえ込んでいた

「スバル…、見なかった事にしない？」

騒がしいので横を見るとかける隊長の幼なじみと友達が修羅場すぎる

スバルはスバルでギンガの戦いを見続けている

どうしたものかと考えていると、この争いを止める天使がきた

「なのはママ、どうしたの？」

「ヴィヴィオ?!、お昼寝は終わったの?」

「一緒にかけるの戦い見る?」

なのはは一瞬驚いたもの、さっきの嵐はどこに行ったのか、笑顔でヴィヴィオを迎え入れる

フェイトは雷神の二つ名は伊達では無いらしく、目にも留まらぬ速さでヴィヴィオの後ろに回り込み抱き上げていた

「うん、見るー!」

良かった良かった

そう思つて戦場に目を戻したらすごいものが見えた

「あ、光った」

ヴィヴィオがそうつぶやいたがまさしくその通り

戦場に、光輝く星が1つあった

「いくぞー」

勝負を決めに来たのか、刀を上には振りかぶり自分の所へ突撃してくる
何度か殴りあってわかった事がある
かける隊長の身体に触れたからといって魔力吸収が働く訳ではない
そして

「ほら、止まるとまた捕まるぞ？」

このプラスタービットから魔力糸みたいな物が出るらしくそれがバ
インドのように絡みつき自分の行動を阻害する

さっきはこれが足に絡まり抜けるのに5秒程の時間を要した

さすがにヤバいとバックステップで回避
した

「やっぱり後ろか」

「くっ！」

敵はコンピューターではない、人間なのだ

あの人に取って行動パターンを読んで罠を張るのは造作もないのだ

「ブリッツキヤリバー！」

OK！

捕まる前にプラスタービットと自分の間にウイングロードをねじ込む

さっきこれで防御できたから大丈夫

「よいしょ、っと！」

そう考えて別路線のウイングロードに乗ると、頭上に光り輝く球体が見える

「グレイプニール、」

砲撃とかできましたね

ブラスタビットが5つ輪になって魔力収束を開始している

通常より30%威力が落ちますが、よろしいですか？

「構わない！バスター！」

問答無用で放ってきた

でも自分には鍛えあげた足がある

少しでも軌道から離れるためにウイングロードに乗って走る

すると向こうから人が飛んできていた

間違いなくかける隊長だ

そこからわかりやすい上段からの面打ち

だが、相変わらず冗談じゃない

回避ルートを見つげるために一回かける隊長から目を離して周囲の確認をする

上に跳んで逃げるのは論外
そのまま叩き斬られる

なら横に抜ける？

ダメだ

後ろにあるブラスタースターの餌食だ

ウイングロードを解除して下へ落下は？

さすがに防御魔法あっても高さ100mから地上へのダイブはしたくない

かける隊長の戦闘スタイルの都合上、距離を空けたらブラスタースターを使った持久戦に持ち込まれるだろう

なら、やり合うしかないじゃないか

「そこ！」

刀の軌道を予想してブリッツキヤリバーで殴り返す

金属同士がぶつかり火花が散るがそんなものに関わらず、向こうの2撃目が飛んでくる

右上から左下への袈裟切りだ

刀の軌道は終始目で追っていたからすぐに反応できる

それを無言で弾き、身体を刀の無い左側に滑り込み魔力強化をかけた右腕で腰を目掛けて殴り飛ばすため、腕を伸ばす

「まだまだあ！」

タイミングを見計らったからか、プラスチックビットが下から現れて自分の右腕を切り落としにかかる

さっきの無理な移動で身体のバランスは崩れたままで、緊急回避は難しくはなかった

「あっ」

ただ想定外な事がひとつ起きた
高度100mを重力に従い自由落下するはめになったのだ

「ギンガ！じつとしてる！」

かける隊長が刀を放り出して助けに飛んでくる
自分の元まで一直線に右手を伸ばす

「掴まれ！」

「……は、はい！」

一瞬驚いて思考が止まったがその手を左手で握り返す

触れた瞬間、左手についていたブリッツキャリバーを起点として除装されて、いつもの訓練着に戻る

そして自分を抱き寄せる

女子としての羞恥心が働いて、顔が真っ赤になってしまう

「喋るなよ！舌噛むかりやつ?!」

あ、かける隊長舌噛んだな

そしてそんな空の旅は10秒くらいで終わりを告げた

「えっと…、かけるの勝ちなの?」

10分後、当事者2人を囲むようにみんなが集まる

ヴィヴィオはマリエルさんが先に六課隊舎に連れて帰った

「ギンガちゃんは…撃墜、というか落下だしね」

フェイトはよくわからない状況に直面していた

ルール上、バリアジャケット半損以上で撃墜扱いなのだ

だが二人とも無傷に近い

こういう時は残存魔力で決めるのだが始めから0なかけるがいる

「ギン姉、大丈夫?」

「うん、私は平気」

ギンガは普通に立ち上がりガッツポーズをスバルに見せている

『だれか、俺の心配を』

マスター、惨めです

かけるは口の中に詰め物をしたまま筆談で会話に入る
画用紙とペンを持っているその姿は非常にシユールだった

「まあ、本人に聞いてみるのが一番かな。どうだった？」

なのはがギンガ達に聞く

「私の敗北です。」

ギンガがすつきりした声でそう言う

『なかなかいい線いってたけど。規定上なら俺の負けかも』

「師匠の勝ちでしょ」

「かける隊長でしょ。ギンガさん、自分から不利な空中戦にいったんだし」

ユウナとティアは同じ見解らしい

なのははそれを見届けるとかけるから画用紙を取り上げて破り捨てる

「じゃあ、かけるくんの勝ちだね。お疲れ様。医務室組以外はまた訓練再開だよ」

なのはが笑顔でみんなに微笑みかける

「ライトニングは10分後にしようか。その間にトイレとか行って来たらいよいよ」

そう呟いてかけるを見る

かけるは何か納得のいかないような目をして空を見上げている

そんな彼をずっと見る

かけるが気づいたのか、こっちに手を振る

「帰ろっか。」

何かいっばい聞きたい事はあったけど真っ先にこの言葉が出た

かけるは静かにうんと頷き、訓練所を歩いて去っていった

そんな彼の背中では以前憧れていた物ではなく、ひどく小さく見えた

第57話 賭け事と殴り合い（後書き）

結局はギンガの負け

でもかけるは試合結果に文句有り

そんな感じで終了です

勝敗実はすごい悩みました

実際ギンガが勝ってもよかったです（えー

迷った挙げ句後にするはずの賭け事の話を持ってきてそこに落ち着きました

今回戦いメインでかなり読むの大変だったと思います

でもご安心ください

次回は日常に戻ります

では、お楽しみに〜！

第58話 平和のための人殺し（前書き）

自転車には手袋必須になりつつあります
白湯です

活動報告コメント始めました
今はとある小説の話しかしてないけど楽しんで読んでみてください

スタートはギンガの内心から
では、どうぞー！

第58話 平和のための人殺し

「負けちゃった…」

戦うことは決めていた

私の力を120%出して街の地面に叩きつけてやると思った

でも結局躍らされ、負けてしまった

「はぁ………」

もう何度目かわからない溜め息が出る

日々の鍛錬を怠っているつもりは無い
むしろ誰よりもしてきたつもりだ

訓練校にいたときみんなは彼の事を『歩く質量兵器』やら『チート』
とかいろいろ言ってた

突如現れた魔力無効化を持つ魔導師

この時代で忌むべき存在として生まれた彼

対抗意識があったのだろうか

私は話を聞く度に私の力はどこまで通用するのかやってみたかった

「はぁ………、悔しいなぁ………」

結果は私のミスで負けた

地上戦なら地上戦でもおそらく似たような事で負けたのだろう

戦う前の私が勝つたらお父さんに言って隊長を外れて貰おうとかいろいろ妄想していた事がちよつと的外れだった

あの人は強い

間違いなくどんな敵にでも勝てる

なら自分がここに来たからには彼から教わるべき事をしっかり教わろう

何事もマイナスに考えすぎないで今を好機と考えよう

そう思つて午後の訓練に参加した

今日の業務につく前に、まずはと思い自室のソファに座る

そして心の中へ呼びかける

と言つても、頭の中で念じるだけ

「入るぞ」

自分の心に入るのに声をかけるのはどうかと考えていたが、どうやら成功したらしい

見慣れた場所に身体はあった

何も無い真っ白な空間

見渡す限り地平線すら見えない広大さを兼ね備えている場所

ブレストウイングの世界、そして俺の心の中だ

ブレストウイングを探そうと辺りを見回す

すると長く白い髪の女がちゃぶ台に正座してテレビを見ているのを見つけた

かなり熱中してるのか、こっちに気づいていない

「何見てるんだ？」

側に行って肩をつつく

するとブレストウイングの身体がびっくりしたのか飛び上がり、真っ赤な顔でこっちを見る

髪が白いせいか赤さがよく目立って見える

「マ、マスター?! いつの間に!」

「ついさっき」

ちゃぶ台の上にあったマシユマロを1つ口に放り込み胡座をかく

「何見てたんだ？」

テレビを見るとそこにはいかにも悪役って感じの男と勇者が戦っているアニメをしていた

「これ、最終回1つ前なんですよ。良かったら見ていきますか？」

「ああ、そうするよ」

画面では剣で戦いながら技名を言って切りかかりいろいろいるセリフを喋っている

『私の下に来い、そうしたら世界の半分をくれてやるっ』

『断る！貴様が作る世界なんか、僕には必要ない！』

…ベタだなあ

「というか舌嚙むぞ」

「マスターみたいなね」

「ぐっ…反論できん」

このマシユマロ美味いな

何より周りの音を邪魔しないのがいい

『僕の必殺技を喰らえ！エターナルフォースブリザード！』

『効かんわ！我が闇に吞まれて消える、ダークネスエターニティー！』

「厨二心が揺り動かされませぬ、マスター」

こつちを向いて笑顔でプレストウイングが聞いてくる

「生憎、厨二じゃないんでね」

「…グレイプニル」

「悪かったって！」

『何故だ、何故だ！勇者ボニットよ?!』

『平和の為に消えてくれ、魔王コンゲルイルよ』

勇者が大剣を振り下ろし魔王の身体を切り裂いた
魔王は血を吐き爆発する

そしてエピローグに入る

エンディングの歌詞が耳に入る頃にはベタだと思いつつもすっかり

見ている自分がいた

「平和のために人を殺す気分ってどんな感じでしょうね？」

ブレストウイングが画面から目を離さず聞いてくる

「どんな理由があつたにせよ人を殺した。どうなんでしょうね？やっぱ後悔とかするんでしょうかね」

「街中なら犯罪者、戦場では英雄ってだけだろ」

そういつつも心が痛む

刀を使い続けてる自分にとって、いつか間違いでも人を殺す時があるだろう

今までも何度かそんな事があつた

『みんなの夢のため』に刀を振っていたつもりが、いつの間にか『死にたくない』となっていた時が

「悩んでいる間はまだまだ大丈夫そうですね？人を傷つけない武器は無いんですから」

「そりゃそうだ。そりゃユウナのお姉さんが証明してみせたしな」

もつとも、彼女は『武器』が欲しかつただけみたいだがな

「でも、あるって言われたら欲しいでしょ」

「そりゃあ、まあな。……って、あるのか!？」

「そんなわけ…」

そう言った所でアニメはエンディングを終えて次回予告に入っていた

『来週もまた見てくださいね。じゃん、けん、ぽん!』

画面の中で特徴的な髪型のいかにも主婦っていう人がちよきを描いたプラカードを掲げていて目を見張った

「ザザエさん?!」

「うん。ザザエさんだよ?毎週日曜日よる6時からやってる国民的アニメ」

「う、嘘だ…。俺が見ていた時にはまだみんな仲良く野球しにいつも公園に行ってたのに…」

「あれから10年。いろいろありましたからね」

ブレストウイングが驚いた事をさも嬉しそうにこっちをニヤニヤしながら見ている

「で、どうなんだ。あるのか?無いのか?」

急に話を変えたことにイラッと来たのか拗ねるように頬を膨らます

「悪かった」と言って机の上のマシユマロをブレストウイングの口元まで運んでやる

無言でそれに食べつく

そして美味しそうに目を細める

「わかってるじゃない。マスター」

「お前との付き合いは何年だと思ってるんだ」

「なのはちゃんと同じくらい」

「ですよー」

「あるよ」

ブレストウイングがすばやく近づきそう短く囁くと世界がまた暗転する

ある、というのは傷つけない武器の事だろうか

そんな事を考えてる暇もなく、現実世界に帰ってきた

「師匠ー、起きてくださいーい」

Your master was very sleepy.)
あなたのマスターは大変寝坊助さんですね)

「ホントだよ、フォーマルハウト。起きてー」

他愛もない会話が聞こえる

Let's kiss for him (彼にキスしましょう)

「そ、そうだよ。ここは目覚めのキス以外考えられない！」

なぬ…

「…ユウナ、何してる？」

目を覚ました事に驚くユウナ

一緒にソファーに座って居たからか、目が合う

「そ、それよりもいつまで寝ているつもりですか！夕方ですよ」

「もう17時か。そろそろ訓練所に戻るか」

腰を上げて背筋を伸ばす

パキポキと背骨が心地よい音を立てて、頭が覚醒していくのがわかる

ユウナも立ち上がりついてくる

「それと、キスは大好きな人のために取っておくんだぞ」

「わかってますよ」

ユウナは迷わず即答した

ならこんな俺みたいなやつじゃなくてもっといい奴にキスして欲しいものだ

「あ、かける隊長帰ってきた」

ティアナが気づいたらしくこっちに走りよってくる

「邪魔だったか？」

「はい。邪魔です」

ティーダさん：ティアナがグレました
俺にはどうしてこうなったのかわかりません

「…わかった、出直してくるよ」

「いや、あれティアナさんなりのスキンシップですよ」

「ひどいじゃないユウナ。私も何かギャグのひとつくらい言おうと努力したのよ」

「その努力した結果師匠の心に穴が空いたんですけどね」

ティーダさん。どうやってツンデレな妹を育てたんですか…

「ティア、どうやってかける隊長元に戻すの?!なんか完全に心ここにあらずじゃん!」

スバルがこつちを見て慌てる

ティアナは何それといったように口笛を吹いている

「あら、仲良し3人組揃ったじゃない」

「ギンガさん、かける隊長はスルーですか」

「ユウナさん、あれはかける隊長じゃないわよ」

そろそろ意識を戻さないとなんか収集つきそうにないな

「ティアナがツンしか無いのがいけないと思う」

「デレデレの方がやばいでしょ」

「確かに」

ユウナに言うとティアナからベストアンサーが来たので納得した

例の3人組にギンガとヴィータ、なのはが揃い、スターズ全員集合となった

「じゃあお昼の模擬戦の反省からでしょうか、ギンガから何かあるかな?」

なのはが口火を切って喋りだす

「やっぱり奇襲して一撃で倒す、っていうのは無理ですかね」

「あー、普通の魔導師なら一撃でノックアウトだったろうな。魔力ブーストの筋力強化のダメージは通ったけど」

根元から折れて柄だけになったダガーを出して地面に置く

「なるほど、なら懐に潜り込んで乱打したら勝ったんですね」

「さすがに物理ダメージは通るからな。あと魔力じゃない電気とか火とか」

「魔力変換されたら辛いものがあるな、シグナムと戦って泣いて逃げたし」

ヴィータがそう言ってその風景を思い出す

あれは…、怖かったな

「あの時はまだ小学生だったからな俺。目の前で歩く火炎放射器がいたら逃げるだろ」

「そつえばかける隊長たくさん武器持ってますよね」

話を切り替えて、スバルがダガーを拾い上げて言う

「これに、刀にいろいろ持ってますよね」

「全部見るか？一回くらい今の残り本数確認したいし」

「いいんですか！」

目を輝かせてスバルが見てくる

…どうしたんだろうか

そんなに刀が気に入ったんだろうか

「かけるくん、刀と違って普通は博物館とかにあって触ったり出来ないんだよ？」

なのはが補足で説明する

まあ持てるライセンス持つてるの俺だけだしね

「…みんな生で見たこと無いのか？」

「はい、見せてもらえるならそれは嬉しいですが」

ティアナもギンガも見てもたいらしい
ちらりとなのはを見る

「うーん。いいんじゃないかな？」

思考時間1秒もなかった気がする

「ブレストウイング、よろしく」

全部出しますか？

「おう、隅から隅まで全部並べちゃって」

了解。 放出開始

瞬間、辺り一面の地面に剣が突き刺さる
その1本1本が思い出深く、見てるだけで手に入れた時の心情を思
い出す

「アンリミテッド、ブ」

「それ以上は言っちゃダメ！」

右手を前に出し、かつこいい詠唱のポーズに入ったときになのはに
止められた

まあ、やりすぎたわな

「とまあ、こんな感じで」

「かける隊長、触ってみてもいいですか！」

言い終わる前にスバルが目を輝かせながらこっちに向かって手を合
わせる

「まずは見てみる」

スバルのお願いをデコピンで一蹴して、みんな見始める

「地球の刀ばかりですね」

「お、ギンガ地球知ってる？」

「はい。先祖が地球に住んでたとかなんとか」

だからナカジマとか既視感があるのか
中島さんか

「あ、これ私がオークションで落札した刀だ」

ユウナがその刀を見つけてテンションが上がってる

そっだ、なのはから何のリアクションが無いな
何してるんだろうか

そこには正座して1冊の本を開いて懐かしんでるなのはとその本を
覗きこんで笑いそうになってるヴィータがいた

「…ブレストウイング、なんであれが」

全部出せ、と言ったのはあなたです

「あははははははは！」

ヴィータが耐えられなくなったのか笑い始めた

何事かとみんな振り返りその本を見る

「かけるくん、あつたなら持つと早くくから出してくれても良かったのに」

「タイミング逃しただけだ…」

「…フォトアルバム？」

スバルが1ページを見て言う

そこには中学時代みんな揃った時に撮った写真があった

「わあ、師匠若い」

「どつという意味だユウナ」

でも怒りより懐かしいの方が勝っている

管理外世界で何度もこれ見たな…

「みんな、何見てるのかな？」

「あ、フェイト隊長。なんでここに」

「すごい金属音と笑い声が聞こえたからね。何事かと思って」

フェイトはあたり一体を見て納得したらしい

後ろから来たちびっ子2人も驚いてる

「いやそれよりもかける隊長がこれを」

そう言つてティアナがフォトアルバムを指差した

「いつになったら見せてくれるのかと待ってたよ」

腰に手をおいてやれやれといった表情でこっちを見る

「うーん。まあ昔懐かしむレベルならいいんじゃないかな」

ありきたりな文房具屋で買ったフォトアルバム
今の時代に遅れた、写真を印刷して貼り付けるタイプの物

それを中心にみんなが輪になって覗き込む

「これが、なのはの家に初めて行った時の写真で」

「うわ、そこからあるんかい」

「八神隊長?!」

はやてが何故かそこにいた

なんだろうか

この本には人を寄せ付ける魔力があるのだろうか

「もう終業時間やて、みんな晩御飯来るの遅いから迎えに来たんよ」

「ママー」

なるほど

またいつぞやみたいにグリフィスに押し付けた訳じゃなさそうだ

ヴィヴィオも後ろから走って来る

「走ると危ないよ」

というフェイトの声も虚しく、

「……あ。」「」「」

頭から地面にダイブした

みんなやっちゃったの顔でヴィヴィオを見る

「ふえ……」

鼻の頭を赤くしてヴィヴィオがこっちを見る

今にも泣きそうな顔でそれを見た瞬間、保護欲からか走って助けに行こうとした

フェイトも同じ考えだったのか行こうとした

しかしその手をなのはが止める

「大丈夫。上手く転んだ。怪我も少ないしあれならまだ立てる」

スパルタ？

ここに来て教導官モード発動ですか

「ヴィヴィオ、一人で立って歩いてこっちにおいで」

ヴィヴィオを迎える体制に入るなのは

「悪魔め……」

「いや、悪魔でしょ」

「ひ、酷いよ2人ともってきちゃ?!」

ヴィータと俺の考えが一致したのか、気づいたらお互いに拳を握りなのはにげんこつをしていた

「まだ子供何だから。立てるか、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオの元に駆け寄り手を差し出す

「うん」

ヴィヴィオは小さな声で返答して立ち上がる

「痛くなかったか？」

「…痛かった」

泣き出しそうな顔のままこっちを見る

「ならこれでどうだ」

ヴィヴィオの鼻をつつきながら地球でお馴染みの魔法の呪文を唱える

「痛い痛い、飛んでいけ」

後ろのギャラリーがずっとこけた気がするのは気のせいじゃないだろう

肝心のヴィヴィオはキョトンとして目を見開いたまま固まっている

「…ほら、これでもう大丈夫だ。ご飯食べに戻るぞ」

脳内の大半を恥ずかしさで埋め尽くしたままヴィヴィオを抱き上げ
隊舎に戻る

「ありがと、かけるパパ」

抱き上げた時、小さく聞こえたその声のおかげでやって良かったと思えた

第58話 平和のための人殺し（後書き）

ザザエさん

まあとある国民的アニメのパロディです

登場人物の名前はアナゴとカツオの英語のカタカナ読みだったり

アンリミテッドブ

わからなかった人は fate / stay night で検索を

メインはヴィヴィオの転ける話だったのにいろいろ間に入ってびっくり

勘がいい人なら一瞬でわかったかと思いますが、フォトアルバムは…あれです

次回詳しく書きます

収集つかなくなっって何度書き直したか

では、次回をお楽しみに！

第59話 歓迎パーティー 上（前書き）

吐く息が白くなってきました
白湯です

マフラーと手袋を付けて通勤（登校？）するよつたしてください
帰ったらうがいも忘れずに

スタートは今から2年前です
では、どうぞー！

第59話 歓迎パーティー 上

「ね、ねえ。冗談だよね」

病室にてなのはが慌てる

怪我完治して、身体の不自由が無くなるまでの約束だったので仕方ない

俺はもうこの場所から去らなければならない

「レジアス中将からの命令なんだ。断ることはできない」

「いつから決めてたの？」

フェイトが暗い面持ちで聞いてくる

「3週間とちよつとくらい前。レジアス中将はすぐさま連れて行き
そうな勢いだつたからな、なのはが完治するまでは待つてもらつ事
にしてた」

「なんでや、少しくらいその事を教えてくれてもよかつたやないか
！」

「相談したらどうやってでも止めるだろ？」

「当たり前や！誰が好き好んで自分の親友を外に連れて行かれない
いけないのや！」

はやての手が震えている
怒ってるんだろうな

今すぐにもその手で叩いてくれたら俺は何も考えずにいけるんだ

「かけるくん。外で何するの？」

「新しい技術の回収…らしい。地上本部の新しい戦略にする気なんだろう」

実際は違う

新しい管理世界を作って自分の名声を上げたいのだから

ただでさえ海の連中を嫌ってる

それに比例して海もレジアス中將を嫌ってる

ただの支持率稼ぎだ

「かけるくんは、行きたいの？」

「ああ。この気持ちは変わらない」

俺には別にやることがある

第101管理外世界

ここにあるとある施設の破壊だ

「なら、いつてらっしやい」

「え」

びっくりした

なんでそんな事言うんだ

帰ってこれないかもしれないから、最後の別れを言うためにここに来たのに

「いいよ。お母さん達には言っているんですよ」

「あ、ああ」

「なら、行ってきていいよ」

しばらく沈黙が続く

「帰ってくるんだよね？」

フェイトが泣くのを堪えてるのかわからないがなんか諦めてため息をついている始末だ

「もちろん、出発前にみんなに渡しとこうと思って」

後ろの紙袋から一つずつ取り出していく

「みんながいつも身につけるものならいいかな、と思って」

なのはに固く結われた茶色の紐を渡す

「デバイスの付属品にしようと思ったんだ」

はやてには金色の鎖を
セツトアップする事はあんまりないだろうが傷だらけになったその
鎖はもう限界だろう

「フェイトには別のを用意してある」

一冊の黒い本を渡す
その本には罫線はあるものの、文章や絵は一切無い

「俺が外にいる間の身の回りの事を書いて欲しいんだ」

一緒もらってポカンとするフェイト
まあデバイス関連じゃなかったらそうなるわな

「…うん、わかった。ならこれはかけるにあげるね」

フェイトが受け取った本をこっちにそのまま返してくる

「いらなかったか？」

「私は私で別に用意するからかけるが外の写真いっぱい張ってきて。
帰ったら私に頂戴」

にっこりと笑顔で言われる

「じゃあ、私はフェイトちゃんと同じみたいにリボンあげるね」

髪に付いた白いリボンを右側だけ解き、本に挟む

「え、みんなそういうノリなん？なら私はこれで、どや」

へアピンを取り外しページに栞のように取り付ける

はやてがさつきまで怒りそうだったのに今は笑顔だ

「…いいの？返せないかもしれないぞ」

実際事故で死ぬかもしれない

誰かを外で殺して捕まるかもしれない

「…待つてくれるのか？」

「うん。だから何が何でも帰ってきて」

「あ、危ない事はダメだよ」

「手紙出すから返事書いてな」

みんな歓迎してくれてる

おかしいな

なんか視界がぼやけてきた

いい友達を持ちましたね

「全くだ。行ってくる」

唐突に頭の中にブレストウイングの音が響く
やっぱりお前もそう思うか

部屋を出て廊下をコツコツと足音をたてて歩く
めちやくちゃ怒られて出発する予定だったのに
脇に抱えた本を見る

「これじゃ、簡単には死ねないな」

誰に聞こえるでもなく、廊下でそう呟いて病院から出た

「これが4番目に行った外の写真で」

「綺麗……」

写真には一面海の景色が映ってる
所々で陽光を反射してキラキラ光ってる

「綺麗だけど、これ硫酸だから」

「え」

「仕組みはわかんないけど、この海底に都市がある。そこに行くの
には四苦八苦したよ」

「大変だつたんですね」

今はご飯を食べ終わりみんな食堂でフォトアルバムに見入ってる
一般局員も見に来ている始末だ

「んでこころが、」

一面の高野の中にポツンと高い壁で囲まれた都市がある写真だ

「私の出身の第101管理外世界ですね、今は管理世界かな」

俺より先にユウナが答える

「それとここの写真の地域は紛争が多いから精神的に厳しいかもしれない。けど見とく必要はあるだろう」

「紛争、って事はこの壁は敵の攻撃から守るための物ですか？」

キヤロが聞いてくる

鋭い指摘だな

「ああ。ただ敵は人間じゃない」

次の写真に移る

そこには何とも形容しがたい物があつた

人間の形はしているが、身体が金属でできている

足は動きやすいためにキヤタピラーになっている物もあれば、空を飛ぶためにエンジンを積んだ物もある

「わかりやすく言うと、ロボットだ」

レジアス中將もこの技術に目を向けた
魔力に依存しない完璧な迎撃システムに

次の写真に俺が高野に降り立った景色が映る

「あ、かけるくん」

「ねえ、ティア。…その横にある横たわってる物って」

一本の長い棒が俺の側に鎮座していた
それには機関銃やら人工筋肉やら歯車やらいろいろついてある意味
グロテスクだ

戦ってた際に敵の腕を切り落としたやつだ

「…軽く8mはあるわね」

そう

レジアス中將がこの技術を採用しなかったのはただ大きかったからだ

「んで、都市に入った様子」

壁のせいで大きな影がその都市に落ちている写真
壁の上に住むのが一番安全地帯とも言える

次の写真では繁華街なのだが闇市が表立って行動している

カメラを向けると冷たい視線を向けてくる通りすがりの人々が移っている

「まともな商業なんてできないんだ。飯を食うためには金がいるからな」

ヴィヴィオがそのページの路地裏に横たわる人の写真を見てちいさく息をのむ

「ちよつときつかつたか。でも、これが実態だ。誰も死体の処理はしない。ただただ捨てるだけ」

みんなの顔が青ざめてる

… 晩御飯食べた後にこれは酷だな

「んで、これがこの都市で出会ったみんなの仲間の1人」

ただ立っている写真

その手には黒いマシンガン

背中にはライフルが背負ってある

髪は頭の上が鈍くオレンジの色が光り、

毛の先は黒く汚れてる

目は鋭く、常に銃を突きつけられているような威圧感を持っている

「ユウナだ」

これが第101管理世界においての最後の写真だった

「ごめんな、怖い思いさせて」

ヴィヴィオの髪に付いた泡をシャワーで洗い流しながら言う

「あんな所になんで、行ったの？」

顔が泣きそうだ

もう嗚咽を上げている

「あれが仕事なんだ」

頭を撫でつつそつと言う

「夢にも出りゆ……」

ヴィヴィオさん、るれつ回って無いですよ

「なら一緒に寝るか」

「私も夢に出ちゃうかなー、なんて」

そう言ってフェイトが入ってきた

身体をタオルで覆ってるのが助かる

だけど表情が固い
何か言い倦ねてる事があるのだろうか

「…あの本返すべきか？」

「うん。だけどまだいいや、それよりも中入っていい？」

なんだそっちか

「いいぞ。約束だったしな」

俺とヴィヴィオが湯船に入ると入れ替わりに、フェイトが身体を洗うために椅子(?)に座る

「…あっち向いててくれる？」

「あ、当たり前だ」

倫理的にアウトだろ

そう思っていたが小さく「見てもいいのに」と聞こえた

そういう誘惑は19才には毒なのでちょっと止めて欲しいんですが

「うわぁ。フェイトママもおっきい」

「ヴィヴィオ、あっち見ないって約束ならハグしてやるぞ？」

「本当っ?!なら目瞞つとくね」

まだ小さな身体を抱き寄せる

というかヴィヴィオに実況されたら俺の精神が保たん

といつかお腹柔らかいしすべすべだな…

しばらくフェイトが身体を洗う音とシャンプーの匂いが浴室内を埋める

「かけるパパ、私も将来あんなになるかな？」

胸の事だろうか

「ピーマン食べればな」

「うう〜。フェイトママ、どうやったら大きくなる？」

確かに気になる

バランスいい食事であるものだろうか

「えつとね…、マッサージ？」

「ヴィヴィオにもマッサージして」

胸大きくしたいのかな？

まあ六課陣小さい人少ないしな

「かけるパパにしてもらったら？」

「俺に死ねといつか」

「パパ、揉んで」

いや、やっぱり死ぬから
社会的にも、倫理的にも

「ヴィヴィオが成長したらな」

言った瞬間しまったと思ったが、遅かった

「かける、それこそ犯罪なんじゃ」

19才になったヴィヴィオ、その胸を揉む俺

ロリコンにならないための発言だったのにこれじゃあ間違いなく
管理局のお世話になる

「フェイト、聞かなかった事にしてくれ」

「ん。わ、私のは揉んでくれる？」

「もう十分デカいじゃないか」

「そういう意味じゃないんだけど…そうだね」

そんな漫才みたいな事をして風呂から出た

第59話 歓迎パーティー 上（後書き）

気に入らない所多数

もしかしたら近々書き直すかも

そういえば『最初の方の文章を書き直さないのか』と聞かれました

結論だけ言つと書き直すつもりはありません

最初あの文章があったからこそ今までであると思っているので

そりゃあ、誤変換とかはちよくちよく直してます

でも大々的に文章を変えることはしたくありません

今回は…結構間が空くかも

ではお楽しみに！

第60話 歓迎パーティー 下（前書き）

師走になりました

白湯です

そろそろ2011も終了

もうイベントも無いし、のんびり過ごしますか

クリスマス？

何の事やら

続きです

では、どうぞー！

第60話 歓迎パーティー 下

夜自室に帰り考えてみる

俺はいつもソファで寝ている

理由は簡単

ユウナがベッドで寝ているからだ

「どうしたの？かけるパパ」

今日はヴィヴィオと一緒に寝る約束はしたものの、ソファで寝る訳にはいかない

フェイト？

：一緒に寝たらそれこそ真っ先に叩かれる

ソファが狭いから落ちる

たぶんヴィヴィオが

そんな時後ろのドアが開きユウナが現れる

「し、ししょ、あの今日、一緒に寝てもらってもいいですか？」

寝間着に着替え、恥じらうように顔を少し下げながらいう

本人的には昔の事を思い出しているいろいろあるんだろうが今はチャンスだ

「ヴィヴィオも一緒だがいいか？」

ヴィヴィオは首を縦に振っているのは見て取れた
しかしヴィヴィオは俺の後ろに隠れてしまった

「…あれ、嫌われるようなことしましたっけ？」

「どうしたヴィヴィオ？」

ヴィヴィオを持ち上げ抱き上げる
その目には涙が

「ユウナお姉ちゃん…、写真…」

それだけ言うと俺の胸に顔を押し付ける

「あ…、連鎖的にユウナを見ると写真思い出すんだな」

「え、どうしてくれるんですか師匠。ヴィヴィオちゃんに嫌われた
く無いです」

何を言うかこの子は

まるで俺のせいみたいな

「なら3人で寝るか」

「え、その…はあ。わかりました」

ユウナは逆らわず素直に布団に向かう

「なら俺たちも行くか」

肩に置かれたら手がプルプル震えている
そんな嫌だったのか

「結局こうなるか」

布団を被って、壁からユウナ、ヴィヴィオ、俺となる

「これ以外何があるんですか。はっ、まさか姉妹丼をお望みですか」

何を言っているんだユウナは
血が繋がってない、無くても成立する場合はあるのか

実妹と義理妹みたいな

「なんで姉妹って聞いて妹ばかりなんですか。姉は？姉はどこに行
ったんですか？」

ユウナよ、脳内会話への突っ込みは止めてくれ

「ヴィヴィオはまだ怖がったまんまだな…」

ヴィヴィオはこっちを向いたまんまでユウナを見ない

「なら、近づくしか無いですね」

そう言っただけユウナは俺ごとヴィヴィオに抱きつく

ヴィヴィオは一緒にびくりと震えたものの、次第に力を抜いて言うてるのがわかる

「かけるパパ…」

「なんだヴィヴィオ？」

「暑い」

それは言わないお約束だろ

ちよつとだけ布団をずらすと外の風が気持ちよく感じる

「ヴィヴィオちゃんにはお姉ちゃんとかいた？」

ユウナが姿勢を変えずそのまま聞く

ヴィヴィオは無言だ

「私には居たんだよ。素敵な素敵なお姉ちゃん」

「私が今の歳になるまでいたんだけどね、師匠が来てすぐに死んじやった」

「まるで俺が死神みたいに言うな」

くすりとユウナが笑う

そのまま続ける

「ずっと憧れてた、どんな時にも私を助けてくれて、お父さんが家

から居なくなってもずっと養ってくれて」

「私の生まれ故郷は何も戦争ばかりじゃないの。大切なものがいっぱいあった」

ユウナは左手でヴィヴィオの顔を触る

ヴィヴィオは拒否することは無く、ちよつとずつユウナの方を向く

「カメラ壊したから撮れなかったけど、あそこにはいっぱいいっぱいあったんだよ」

「ほんと？」

「うん。だから、恐がらないで。あ、そうだ！私が一人前になったら私の故郷にヴィヴィオを連れて行ってあげる！」

「いいの？！」

「うん。いろんなところに連れて行ってあげる！」

ユウナが完全に俺から離れたヴィヴィオをぎゅっと抱きしめる

「約束、だよ」

「任しといて」

静かに2人そう言って抱き合う

…一件落着かな

他人がどうこう言うより、本人の口で言うのが一番だよな

「なら2人とも寝る。明日も早いぞ」

「じゃあかけるパパもだっこして」

甘えた声でヴィヴィオが言う

仕方ないな、と呟いてユウナごと抱きしめる

ユウナは一度身体をびくりと震わせたものそのまま身をゆだねる

まあ、本人的には一番慰めてもらいたいのにはユウナだろうしな

そんな事を思いつつ、眠りについた

お昼時、13時30分

ギンガの歓迎会とか何とかで昼ご飯食べた後に何かするらしい

「具体的には何するんだ？」

「ん？お菓子パーティーだよ。手作りのケーキをギンガ達に食べてもらうんだよ」

ヴィヴィオと手を繋ながらなのはが答える

「なのはママも何か作るの？」

「うん。そうだよヴィヴィオ。親の力の見せどころだよ」

やけに張り切ってるなあ

そのままなのはは食堂に入ってエプロンを着て、キッチンへ走っていった

改めて食堂を見渡す

「すごいなこれは…」

「エプロン姿の隊長達まじかわいいっす!」

「ヴァイス自重な」

「ロリコンに言われたくは無いですよ」

「このやる…」

ヴァイスが言った通り前線メンバーと女性一般局員がキッチンで何か作っていた

「なかなか豪勢にやるねえ」

「これには3日後の警備任務の激励の分もあるらしいですよ」

「なるほど」

確かに予言通りに行けば確実にハードな事になる

予言がなければアグスタに行った時みたいに少人数で済むんだけど
な…

しばらくするとエリオもこっちに気づいたのか近寄ってくる

…あれ？

何か違和感が

「キャロもキッチンに行ったのか？」

「はい。頑張りますって言ってキッチンに飛び込んで行きました」

ああ、キャロがないから違和感あるのか

しかしあれだな

誰に向かって頑張るって行ったのが気になる所だ

それを聞いてからか、ヴィヴィオが腕を引っ張ってきた

ああ、行きたいのか

「よし、ヴィヴィオもキッチン行くか」

「うん！」

ヴィヴィオが笑顔で頷く

しかし言って、後ろからの厳しい視線を感じる

これは、試されている！

ヴィヴィオを残せという事か？

!

いや違う、獣達の中に兎を放り込むような物だ

ならば何を求められている

この感覚、選択を間違えたら…死ぬ!

あ

「ヴィヴィオ、俺はここで待ってるからなのは手伝いしてきて

「はーい!」

キッチンへと走って行くヴィヴィオを背に、恐る恐る振り返るとヴ
アイスがいた

「いやー。ヴィヴィオの嬢ちゃんと一緒にキッチン行ってたらリン
チでしたわ」

ですよー

どうやら間違っただけだよ

「しかしこの待ち時間の間、男達集まって何するんだ?」

「キッチンを眺める」

「え」

「他の選択肢があるんすか?」

「…ないな」

まあ大富豪とかトランプで遊んでもいいのだが働いてる女子を待つのも男子の役目だろう

そう思いつつこっそり携帯端末に入れといたブラスタービットのプログラムを書いていた

「まさかのホールケーキが5分で無くなるとは」

「わがひがちにかからはこんばものべふよ」

通常サイズの倍はあるホールケーキを切り分けつつスバルが答える

あ、これウエディングケーキか…

というかスバルは口の中の物無くなってから喋れ

「『私達にかかればこんな物だ』って言ってるんですよ」

スバルと同じようにエプロンつけたティアナが答える

「さすが相棒。言ってることがわかるんだな」

「そ、それは置いといて」

相棒と言われるのは嬉しいんだろうか

さつき顔が一瞬笑顔になった

「かける隊長ももっと食べてくださいよ。1つじゃ足りないですよ
ね？」

「ん。じゃあもう1つもらおうか」

甘い物は苦手だが、ここは無碍にできない
それを受け取り辺りを見回す

「あれ？なのははまだキッチンにいるのか」

「はい。なんでもユウナに料理を教えるというか」

「隊長の1人が何してんだか……」

はやては何やらみんなにケーキを配り中
フェイトも飲み物を回している

「ヴィヴィオもキッチンか？」

「はい。なんでも出来たてが飲みたいって言うてて」

飲みたい？

…ああ、あれか

スバルとティアナに手を振り、ヴィヴィオがいるキッチンに向かう

キッチンに入ると予想通りの光景があった

コンロに向かう2人の女子
その2人の間から顔を覗かせて鍋を見ている少女

「あとは、鍋が焦げ付く前にコップに移し替えて」

なのはの説明をユウナがワクワクしながら聞いている

「何作ってるんだ？」

本当はわかってる

この甘い匂いはいつい最近も嗅いだ
家でも何回も作ってくれた

「ユウナちゃんがこの前キャラメルミルク飲みたいって言ってたからね。ちょっと作ってみたの」

1つずつマグカップに注いでいく

その上からユウナがシナモンパウダーを振りかける

程なくしてコップ10個分のキャラメルミルクが完成した

このタイミングでキッチンに入ったのはラッキーだった

出来たてが美味しいのだ

…出来たて以外飲んだことはあんまり無い気がするが

ユウナが味見用を1つ取って少し口に加える

「美味しい？」

なのはが聞く

「はい！でも、ちょっと熱すぎるような…」

「ならヴィヴィオには冷ましてから飲ませよう」

ユウナの手からコップを取り自分も飲む

「ん？いつもより甘い？」

しかし飲んだ瞬間ユウナとなのはの女子の顔がこっちを固まる

「あれ、どうした2人とも」

ユウナはなんだか次第に顔が赤くなっている

キッチンには急激な温度変化は見られない

「き、今日は六課みんなが飲むからね。かけるくんがいつも飲むより甘くしてみたんだ」

「いつも甘さ控えめにしてくれたのか」

さっきのケーキのおかげか、砂糖には少し耐性ができたのか
これはこれで十分おいしい

「師匠、あの、その、そろそろコップ返してください」

「ああ、悪かったな」

ユウナに返そうとする前になのはが俺の手から奪い取る

そしてそれを慎重に飲む

「…ふう」

賢者モード？

「確かに、いつもよりちょっと甘いかも」

なのははさつきより顔を赤くして小さく頷く

「いいなあ、かけると間接キスなんてうらやましいなあ」

声が出たので、慌てて後ろを振り向く

そこには腕を組んだフェイトとはやてがいた

「来るのがちょっと遅いかなーって、見てみたら…。説明してくれるかなあ？かけるくん」

しまった

食堂からキッチンって丸見えなんだった…

よく見ると男性局員の半分はデバイスを構えていた

「まあ、ここはダブル高町隊長の謝罪会見からスタートだな」

はやてがさも面白そうにいう

「…ダブル高町？」

「なのはちゃんも同罪やて。さ、行こか」

フエイトがキャラメルミルクが入ったコップを持ってみんなに配るのが見えて諦めた

「まあ、行くか。なのは」

「うん。ちょっとはしゃぎすぎちゃったかも」

「私は？」

「ユウナは未成年だからセーフや」

「」「どういうこと?!」「」

おお、ハモった

こうして歓迎パーティーは始まった

なんだかいつも謝ってばかりな気がする…

第60話 歓迎パーティー 下（後書き）

なんとかなった…

最後までかけるを謝らすか放置するか迷ったよ

とりあえずあれだ

物語には関係があるようでも無い話

虫歯菌は本来、自分の口の中にいません
ではどこから来るのか？

彼らは他人の口からやってくるのです
キスだけではなく、食べ移しなどからも来ます

お気をつけて

あと2話くらいで公開陳列会開く予定です
年内に行くといいな！…

第61話 守護者の役目（前書き）

今年終了まで10日切りました
白湯です

活動報告にちらりと書きましたが今日は、

なのはGODの発売日です！

少しやってみましたが前回よりもパワーアップしてる模様

ぜひ、楽しんでみてください！

スタートは闇の書事件からちょうど3日後、リインフォースとブレ
ストウイングの秘密の会話です

では、どうぞー！

第61話 守護者の役目

「入るぞ」

リインフォースが何も無い白い大地に降り立つ

広がる風景は視界を遮る物は何もなく

時間が経っても変わることもなく、その空間を維持し続けている

「早かったね。夜天」

天上から声が聞こえて上を見る

しかし何も無い

そういえばあの人はこの類の遊びが好きだったな

「今は夜天ではなく、新たな主から頂いた名で呼んで欲しいものだ」

「じゃあ、黒飴？」

「リインフォースだ」

本人的にはギャグを言ったつもりではあったのだろうが、私にはそうは感じれ無かった

「お話がしたいと望んだのはあなたでしょう。…ブレストウイング」

本名で呼びたいがこれではいたちごっこだ

先にこっちから言ってしまうおう

「わかったわよ、リインフォース。とりあえず、おかえりなさい」

そう言っただけで正面から抱きしめてくれる

なんだ

見えてなかったただ目で目の前に居たのか

「私はもう子供では無いですよ」

そう言っただけで背中を軽く叩く

「いいの。今はこうしてないとあなたを感じれ無いらなもの」

抱き締める力がよりいっそう強くなる

痛いけど少し我慢だ

寂しかったり、いろいろあったんだろうな

「ん、胸大きくなった？」

前言撤回

以前と変わって無いようです

「ディアボリックエミッション！」

詠唱直後、黒い球状の固まりが頭上に発生して、自分ごと彼女を広域魔法に取り込む

彼女の能力上、無駄だとわかっているが腹の虫が収まらない

「げほっ、げほっ。痛いじゃない。私よりも小さいくせ」

「ブラッディーダガー！」

「に?!」

「ナイトメアハンズ！」

「にゃー！」

追い討ちまでかけて完璧に仕留めた(?)

空間攻撃からの近接攻撃、そして仕上げの収束砲

お気に入りコンポがいい音をして決まった所でブレストウイングの方を見る

「あははは。…魔法は問題無く使えるみたいだね」

そこには右腕が吹き飛んでるにも関わらず高笑いする彼女がいた

「しっかし、痛いじゃない。あとちょっと強かったら私の身体消えてたよ?」

その身体のまま近づいてくる

「あ、あなたの力があればあれくらいなんとも無いんじゃない」

「や…リインフォース。私ね、いつもと違うユニゾンしたばかり

だから」

「…すいませんでした」

あれは主に負担がかかる

今はその分も受け持つてるのだろう

「あれ？」

でもユニゾンしたのは3日前だ

そこまで影響が響くとは思えない

そういう考えている内に彼女はベッドを出して横になる

「回復には寝るのが一番」

片腕で器用に布団を掛けて目を閉じる

「…治療魔法もあれば効果は倍増です」

ベッドの側に行き、彼女の腕に治療魔法をかける

「無駄だよ。と、言いたい所だけど魔力を貰って回復になるからありがたいや」

本来の使用用途ではないが役にたったようでちょっと嬉しい

「ごめんね、ゆっくり話ができるのはまだまだ先みたい。それまで持つとして」

「何をですか？」

「私から取っていった物。まだ私にはそれを持つほど回復してないの」

「でも、これは重要なプログラムの一つです。無かったらそれこそ力の行使に支障が出ます」

「……人肌恋しいな」

「話を聞いてください」

「…抱きついていい？」

「話を聞くなりいいですよ」

私もベッドの中に入ろうとしたが止めた

その時に傷だらけの肌がチラリと見えてしまったからだ

こちらの意を悟ったのか、ソファアーが出される

「今日はやけに甘えてきますね」

そこに座り一息ついて言った

「とりあえず、それは大事に持つといて」

「はい？だからこれは」

「私じゃなくて、マスターが求めたらあげて頂戴」

これをユニゾンデバイスでは無くて管理者であるマスターで渡す、
という事は

「まさか、」

「大丈夫。今度は上手くやるわ。いや、やってくれるわ」

この人が消えたときの映像が思い浮かぶ

爪先から消え入るように無くなる彼女
笑顔でいたままの彼女のマスター

「まだ、飛び足りないのですか…！」

返ってくる言葉はない

そのまま世界から突き放されるように身体が引つ張られる感覚

そして気づいたら自室のベッドの中で、猫のように丸くなっていた

ガタガタと震える手足

そうか、恐れているのか

「リイン、かけるくん来たから守護騎士召喚やるよー！」

遠くで主はやての声が聞こえる

そうだ今は主に負担をかけさせてはいけない

震える身体を自分でぎゅっと抱き締めて布団から出た

公開陳列会まであと2日

そんな時に本部から呼び出しがあった

「所属部隊と名前をお願いします」

「機動六課スターズ分隊隊長、高町翔」

受付嬢がキーボードを叩き対応する

年内にもう一度本局に来る事になるとは思わなかった

「はい、承認しました。今日は何の用でしょうか？」

「知らん」

「え」

いや、本当にわからないんだ

レジアス中將が勝手に呼び出したのだ

久しぶりに局員用の制服を引っ張り出して着ているが新品同様で折

り目の1つありゃしない

「高町教導官ですね？」

受付嬢があたふたと対応してる時に後ろから声がかけられる

「ああ、そうです。そういうあなたはオーリスさんですね」

「はい。覚えていただいて光栄です」

「早く連れて行ってください。みんな明後日の準備で忙しいんですから」

ちよつと口調を荒げて言った

なぜなら本能で感じていた

これからちよつと下手に出たら120%嫌なこと押し付けられる

「報告に逐一来ないとは、感心しないな」

「忙しかったもので」

「昨日はなかなか楽しかったみたいだな。六課局員がブログに呟いてたぞ」

チエックしてたんかい！

そんなツツコミを入れたら怒られるのは必至
話題を変えよう

「何の用で呼び出したんですか？」

「何、まずは座れ。オーリス、ちょっとお茶を頼む」

「わかりました、少しお待ちを」

なかなか本題に入らないしさらにお茶を出すという事は長い間話し
があるって事だ

ここは大人しく座る事にした

「まどろっこしい話は抜いて、単刀直入に聞こう。高町教導官、君
は聖王教会が出した予言について君はどう考える？」

思いの外、スパッと来た

というか予言信じてなかったんじゃなかった

「私の考えではやはり狙われるのは明後日の公開意見陳列会だと」

「ならばどういった解釈になるか少しでいいから儂に教えてくれ」

「推測ですがよろしいですか」

「構わん、続ける」

「一節に『なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ちる』とあります。それはこの地上本部が陥落するというと捉えました」
言い終わるとレジラス中將は少し首を捻って考えるポーズを取る

「儂のとは少し違うな」

「え、といたしますと？」

「『聖地より彼の翼が蘇る、その翼が空を舞うとき』とある。これは闇の書事件の中心にあったユニゾンデバイス。リインフォースの事だと考えている」

だとすると

地上本部を襲うのははやてとなる

「儂はどうもあの小娘達が好かん。世界を征する力を持っているのになぜその力を平和の為に使うのかわからん。儂なら力でもって圧政をするのだから」

「それは…、違います。はやて達は自分達の力をみんなの為に使いたがってます。それを認めてあげてください」

「罪滅ぼしか。一度犯した罪が消えるはずも無いのに」
罪滅ぼし、か

それも心の中にあるのかもしれない

「だが、実際奴らはこの時期に機動六課設立を求めて来たぞ。儂はここへ攻め込む部隊作りにはか思えん、妙な幻惑魔法を使って未来のエース達を潰すかもしれん」

…幻惑魔法？

あるの、そんなの？

言いがかりにもほどがあるだろ

「未来のエース達？」

「なんだ知らなかったのか。あそこは少数先鋭の部隊だ。未来のエース、過去のエースが集まっている。現在の主力に匹敵する戦力をな」

隊長達はともかくとして、守護騎士

そして一応主席のスバル

子供だが優秀な召喚師のキャロ

トラウマからの引退だが、優秀なスナイパーのヴァイス

オペレーターとして力のあるルキノ

デバイス技師のシャーリー

挙げるのも大変なほどいる

「そんな部隊で攻められたら地上本部（笑）状態だからな」

…あれ？

レジラス中将ってこんな人だったっけ？

「つまりレジラス中將はあまり六課を良く思っていないのですか」

「ああ。無論警備の任務から外す予定でいたが、最高評議会での審議の結果、配置についてもらう」

最高評議会つてあれか
所謂重役みたいな三人組

「そこでだ、君に私の直属のボディガードとしてついて欲しい。
魔導師殺しの力。儂のために使ってくれんか？」

「いやです」

即決だった

いや、襲撃されるのわかってるなら外の警備につきたい

「というか六課は危ないと言ったのに何故私を側に配属しようとするんですか」

「儂は君を信頼してるからな」

そう言つてニヤリと笑う

「儂を殺す気なら今の内に殺しとるからな」

「お茶です」

目の前に紅茶のティーカップが置かれる
反してレジアス中将の元には煎茶だった

…俺もあれがいいな

「よくできた娘だろ、いらんか？」

「いえいえ。今は成人して無いので」

「ミッドチルダの法では成人してるではないか。地球なんか忘れて、
どうだ？」

「必要ないです」

はっきりと言ったからか、オーリスが泣きそうになっている

なんたる、確かに出世コースに乗れるだろうが嫌だ

あの3人を置いていくのが嫌だ
でも一応フォローしとこう

「美しすぎてもつたいないです」

「ははは！つくづく思い通りにならん奴だ！」

オーリスは顔を伏せてもじもじしてる
…ちよつとやりすぎた

「これを持って行け」

一頻り笑った後、封筒を投げ渡された
宛名も何もかかれていない

「ここに六課の配置図が書かれている。当日は頼むぞ」

「ありがたくいただきます」

紅茶を少し飲んで見る

そこには六課だけでなく聖王教会騎士団や、陸士部隊のものまで事細かく書いてある

基本的には外回り

地上本部に入れるのは隊長達だけみたいだ

「んで、やっぱりあなたの護衛隊の中に私はいるんですね」

しかも一番上

横に係長を意味する二重丸があるのは気のせいであってほしい

「嬉しいか、警備隊は明日の昼から明後日夜までついてもらうからな。しっかり働いてくれよ」

恐らくここは最高評議会ではなく、レジアス中將が勝手に決めたのだらう

「さあ！今日はもう帰って休むといい、オーリス。送ってやってくれ」

「かしこまりました」

そうして、反論も拒否もできないまま廊下に連れ出された

「ただいま」

「わん」

「はい？ザフィーラ。お前どうして」

「わんわん」

「あ、かけるパパおかえりー！」

「ヴィヴィオ、ただいま。それよりザフィーラはどうして喋らない」

「かけるパパ、犬は喋らないんだよ？」

「一瞬空気が固まった」

「ザフィーラには人権はないと申すか」

「…いや、一応狼だけどさ」

「ヴィヴィオに聞こえないようにこっそり聞いてみる」

「ザフィーラ、辛いことがあるなら聞くが？」

「大丈夫だ、私は狼だ、守護騎士にして盾だ」

「駄目そうだな」

「これから各員の配置を発表する、みんなをブリーフィングルーム」

に呼んでくれ」

そう言っつてひょいとヴィヴィオを担ぎ上げる

「わーい、だっこ！」

「ヴィヴィオは俺が昼寝させとくから、ロングアーチ以外全員よろしく」

するとザフィーラは首を大きく縦に振り、走り去っていった

「そんなに嫌だったのか…、こんな可愛いのに」

「かけるパーパー」

「なんだ」

「トイレ」

どつちらベッドに行く前に寄り道があるみたいだ

「ほんで、ザフィーラはヴィヴィオちゃんの前では喋っちゃいけない設定なんやね」

「俺はまだ一言も喋ってないが」

「ザフィーラが泣きながら教えてくれたで」

…普通に人間体で行けば良かったのに
と内心思つとくが言わない方がいいだろう

「ほんで、直前に配置発表とは本局も仕事が遅いなあ」

「でもこれくらいなら予想の範囲内、ライトニングは大丈夫だよ」

「ライトニングはな…」

レジアス中将護衛役の所にある自分の名前を指差す

「どうやったならレジアス中将のお気に入りなれるのかしら？」

「ティア、やっぱり賄賂じゃないかな」

「師匠まさか！」

「ユウナはレジアス中將も知らないのに会話に入るな」

しよぼーんとなったユウナを慰めつつ会話を続ける

「はやてちゃんはどう思う？」

「私は意味がわからへん。戦力分断もできそうにないのにこんな事をする意味がない」

「本当に警護についてほしただけじゃない？」

「だよな、だけど俺はあんまり行きたくは無いだよな」

「「「「ですよねー」「」「」

「という訳で俺明日急に頭痛がして吐き気がして熱が40 であるか
ら」

「それ陸士部隊にいたときにスバルが言ってた気がします」

「こら、スバル！仮病はダメだよ。嫌なことがあっても学校は行かないきゃ」

「それを今かける隊長に言ってくださいよ」

「何の事やら」

そっぽを向いて答える

とりあえず俺は悪くない

「それで、配置はこうなるわけか」

リインフォースがホワイトボードに書きまとめてくれた
さすができる女は違う

フォアード+ヴィータ+リインフォースは外回り
隊長陣+シグナムは本部の中

そしてロングアーチと余った局員は全員六課にて待機

「それで俺は」

「かけるは本部でレジアス中将とらぶちゅっちゅっですな。爆発爆発」

「ねえ、さっきの話聞いてた?!」

誰がそんな展開を望むか!

ホワイトボードの文字を消して『自宅待機』と記す

「地球に帰るのですか」

「揚げ足取るな。六課で待機するだけだ」

「まあ、襲われるのは本部だけやし。隊長達が集まってできないことなんてあんまりない」

「予言通りならそれが妥当な判断だろうな」

まあ、六課に来ても迎撃するが

「おそらく最大の山場や。六課は被害を最小限にする事を考えて、一般市民を保護。公開意見陳列会が無事終わるまでが護衛任務や。みんなを気をつけてな」

最後は、部隊長の笑顔で締めくくられた
本当に何事も無ければいいのだが

第61話 守護者の役目（後書き）

これで、次回あたりから公開意見陳列会が始まります

間に1つ何か挟む予定ですが

アニメ的には半分を超えてちょっとしたくらい

シナリオ書くのに使ったルーブリーフも1stから数えて100枚
超えて132枚になりました

……ボツ案が半分くらいあるから実質使ったのは70枚くらいですが
これ、最後まで書いたら200超えるんじゃない？
とか思いつつ書いてます

最近更新ペース遅くてすいません（汗）

では、次回をお楽しみに！

ちなみに

（クリスマス企画は気が向いたらやるかも）

です

第62話 出発前夜（前書き）

正月の間は実家に帰らせていただきます
白湯です

今年もあと少し
やり残した事が無いように！

スタートはどっかのラボの中

では、どうゾー！

第62話 出発前夜

「ふわー、って私が最後っすか?!」

「遅いわよウエンディ。ドクター、これで全員揃いました」

「みんな、準備はいいかい？」

「いいです。ドクター」

「なら、始めようか。みんなしおりの11ページ。『公開意見陳列会時の行動』を開いて」

「あ、しおり忘れた」

「全く君は…、セインに見せてもらってくれ」

「すまん。セイン」

「いいよー。今ここだよ」

セインが指でタイトルを指し示す

「つい先ほどノーヴェとディードの武装が出来上がった。この会議が終わったら取りに行くように」

「わかった」

「わかりました」

「ドゥーエとチンク、ルーテシアにしおりは送ってくれたかな。クアットロ」

「はい。性能向上用のアップデートパッチも送つとききましたよ。ドクター」

クアットロと呼ばれた女は身体をやけにくねらせつつキーボード型の鍵盤を叩いていく

「うむ。首尾は上々。ガジェットも量産ラインは整ってきた」

ドクターはしおりに書かれたガジェットの総数を確認して笑みを浮かべる

「後はゴーサインを待つのみです」

「先ほどドゥーエから通信で全部隊の配置が送られてきました。予想との誤差は許容範囲内です」

ウーノが端的に述べて他の面々はチエックしていく

「次に体調チェック。何か不具合がある物は居るかね？」

「問題ない。ISもちゃんと使える」

「エアライナーがまだ上手く使えない。けど何回か全力でやれば大丈夫」

「いや。君の場合固有武装が無いから細かい調整ができないだけだ。ノーヴェは受け取ったらすぐにセットと格闘訓練に移るんだ」

「私とですか。手加減しませんよ」

「トーレは訓練に自由参加にしておく。何かあったら君自ら口出しするといい。」

「ありがとうございます。ドクター」

するとタイミングを見計らったようにドクターの端末の画面に『complete』の文字が浮かぶ

「ふむ、準備は整ったか」

スクリーンに地上本部、周辺家屋、陸士部隊などの画像が映される

「なら一つ大きな花火を、打ち上げようじゃないか！」

甲高い声で笑うドクター、その周りの少女達

「間違いなく！素晴らしい一時になる！」

それを疑う者は居らず、不適な笑みで静かに見守っていた

「眠れないんか？」

食堂で何を作ろうか考えているとはやてが部隊の制服を着たままの姿で現れた

「いや、お腹空いただけ」

時刻は1時15分を指している
昼ではなく夜の

そして今日の14時00分から警備任務が開始される

「はやては？」

「私は今の今まで仕事や。これからシャワー浴びて寝るところや」

「部隊長も一筋縄では行かないみたいだな」

「そうや。みんなごーでもえーことまで六課に任せて！」

「あはは」

フライパンを手に取り受け答えをする

そしてはやては立ち去る事はせず椅子に座った

「…2人分作れと？」

「かけるくんのつくだけだから無理せんでええよ」

「俺の調理レパートリーは少ないが？」

「一番いいのをよろしく」

「よろしい。ならば爪楊枝だ」

「もう食べ物じゃ無いやんけ…」

「一応受け答えできるくらいは余裕はあるらしい
ならちよつときつめでも大丈夫かな？」

冷蔵庫を開けてついこの前ヴィヴィオと買ってきたうどんを1玉取り出す

「…釜揚げ？」

「そこまで手を抜く気はない」

「すごい落胆してたのが可愛い
机にもたれかかって料理の完成を待っているの、なんとというか餌
待ちの犬みたいなの…」

「どないしたん？」

「い、いや。ちよつと考え事」

「私を餌待ちの猫みたいに思ってた？」

「だいたいあつてる！」

「手止まっとするで。ちやつちやつと作っちゃってコックさん」

「はいはい」

ネギを大きめにきつたりその他の具を用意していく

食材刻むトントンという音が厨房に広がり静かな時間が少し過ぎる

「レジアス中将とはどんな会話をしたん？まさか配置聞いて終わりじゃないでしょ」

「あー。予言の事についてだ。レジアス中将ははやてが攻めに来ると思ってるらしいぞ」

「なんでやねん。それよりも予言を信じるなんて」

「聖王教会大嫌いだったのにな。心境の変化でもあったのかな」

「予言ならだいたい解釈は出来てるんや。こっちは古代ベルカの生き残りがおるからな」

「リインフォースの事だろう」

「しかもブレストウイングも地上本部攻撃を読み取った」

「確定だろう」

「古き結晶はたぶんレリック。そのレリックを狙いにきたガジェットが保管場所の地上本部を攻撃」

「使者達はガジェット。それを操るスカリエツティは科学力という翼を取り戻して次元航行艦を破壊」

「…そりゃ大変だな」

フライパンで焼いたうどんを皿に盛り付ける

「でも後半の記述はわからんらしい。何より、リインフォースが意図的に伏せとる気がするんよ」

「伏せる？なんで」

「本人は改行してあるから別の事件の事だと言っとるけど、たぶん違う。しかもそれを意図的に伏せたって事はあの子が1人で解決しようとしてる気がする」

「なるほどねえ…。ま、つらくなったら援護要請来るだろ。それから動けばいいさ」

「そっちな」

はやては自販機でお茶を2つ買い、1つを飲んで一息つく

「予言は当たる。被害を最小限にする事が私達の仕事や」

「俺も病欠だが可能な限り早く行くさ」

「ふふつ。よろしゅうな。機動六課のエースさん」

「エースはなのはだろ」

「私の中ではかけるくんなんよ」

歩く質量兵器よりはまじだがなんだか恥ずかしい

「ほい。できたぞ」

少し多くなったが2人なら適量だろう

「お、焼きうどんやないか。地球で食べて以来や!」

「自慢の一品だが、どうだ?」

「うん。美味しい!」

それから他に誰もいない食堂で1つの焼きうどんをつついて食べた

「なのはちゃんとはお風呂入ったんよね?」

皿洗いをしながらはやてが聞く

なんでも働かざる者食うべからずと、一緒にやっている

「ああ、フエイトとも入ったぞ」

…なんだかこの話だけ聞くと遊び男みたいな

俺そんなキャラじゃないんだが…

「今日、私と入らんか?」

皿を落とした

割れる事無く、ズドンと足の小指に衝撃が走る

その場で涙目でうずくまるのをはやてがジト目で見ると

「動揺しすぎや」

「い、いや！あの、その」

「もう一度は言わんで。その、なんというか…恥ずかしい」

なのはとフェイトの時はヴィヴィオという緩衝材があったから助かっている

だが、今はなのはの部屋でフェイトと一緒に寝ている

「つまり、2人つきりと？」

「部屋のお風呂は使えんから訓練所のシャワールームでええから」
む、下調べは抜群と

「なら…行くか。5分後水着と着替えとタオル持って訓練所のシャワールームへ」

「了解や」

……出発前夜にはやて（部隊長）とお風呂
どうするの俺、今日ちゃんと寝れるかな

「はやて。もう来てたのか」

「む、遅刻やで」

「すまん。ユウナが徹夜でゲームしてたから止めてきた」

「ゲーム？」

「射撃訓練所でワルサーWA2000の試射」

「ワルサー…？ってスナイパーライフルやなかったっけ」

「しまった」

「まさか…実弾？」

「鉛玉」

手加減無し of 拳骨が頭に直撃した

魔力で筋力強化してたのは気のせいか？！

「いったああ」

「どこから持ってきたとか、ユウナちゃんがなんで持つとくかは聞かん。今後一切禁止」

「いや、ユウナなりのストレス発散で」

「部隊長権限！」

「職権乱用反対！まあ、ユウナが8割方悪いが」

「残り2割は？」

「用意した俺」

「あんたが全部悪いやんけ…」

本気で怒ってる

まあ、さすがにまずかったか

素直に謝るとはやはり少し諦めた感じのため息をついた

「ま、入ろっか」

多少紆余曲折あったが、シャワールームに水着に着替えて入った

「…何しようか」

シャワールームに入ってしばらく経つがお互い水を浴びているだけ
何をしようか考えて、結局行動できなくて

シャワールームは個室になっていて今も2人別々に入っている

「な、なのはちゃんの時は何したん？」

「えっと…髪洗って、それから湯船に入った」

「な、なら髪洗ってあげる！」

言うが早いかシャンプーを持ってこちらの部屋を開けて入ってきた

「ん、さすがに狭いな」

「あ、ああ。そうだな」

はやてが手のひらにシャンプーを広げて俺の頭に手をかける

「…届かへん。ちょっとしゃがんでくれるか？」

「そんな事言ったって、この狭さじゃ」

「ならしゃあないか。うん。しゃあないんや」

そう言っって胸が押し付けられる

手は届くようになったがかわりにまずい事になった

「…あれ？」

はやての水着が消え去ったのだ

始めからなかったように消え去ったのだ

当のはやては慌てて胸を隠そうとするが、離れたら見えてしまうからか、ひつついたままだ

「わ、私はただ押し付けようとしただけで外して無いんやで?!…つて、あ」

「なんで魔力で編んだ物持ってくるかな…」

「だ、だって早く入りたかったから部屋に戻らず、すぐに来てな」
魔力吸収が働いたのか
久しぶりにこの機能が余計な事をしたと思った

「その…、目瞑ってくれるか？」

「お、おう！」

自分の身体にあたる感触が確かにその場に居るんだと確信させる

「痛くない？」

「大丈夫だ」

少し身体が離れると頭からお湯がかけられる
するとまた身体が密着する

すぎの作業に入ったのか

「これで終いや」

唇に何故か感触があった

驚いて目を開くと

目の前にははやての顔がある

笑顔で笑っていた

「はやて…、なんて事を」

「ふふっ、驚いた？」

はやくと俺の間にはヴィヴィオがおもちゃで使ってる黄色いおもちゃのアヒルがいた

「ファーストキスがアヒルかよ…！」

「あはは！大丈夫やて。おもちゃはカウントされへんよ」

「でも…！」

なんだか心が汚された気がする

ひとしきり笑い終わるとはやくは深呼吸をする

「こんな場所やけど、今なら言える気がする」

「…頼むから地雷投下だけは止めてくれよ」

「ふふっ、地雷というか旗やな」

旗？

白旗か？

人差し指で俺の唇を押して上目使いではやくは言った

「私はね、待ってるから。いつまでも」

そついうとシャンプーを持ってシャワールームから出て行った

湯気で身体は見えなかったのは救いか、そばにあるアヒルを拾い上げ自問自答する

「俺、どうしたらいいのかな」

はやてが出て行ったのを確認して自分も身体を拭いて着替えにいった

第62話 出発前夜（後書き）

はい

キャストは

ナンバーズ、スカリエッティ、翔、はやての7人くらいでお送りしました

…少ない！

最初のスカリエッティが用意した『しおり』はどこの漫画にあったのでちょっとやってみただけだったり

夜食に焼きうどんですよ

白湯的には焼きうどんは好きです

ちょっと4日くらい前に作ってたから書いてみました

今回は初めからずっとはやてのターンにしてみました

なんでここに書いたかって、本編にこれからはやてが出る頻度が少ないので一気に…

という訳ではなく風呂シリーズに終止符を打つためだったり

いやー。かけるくんすごいね

スタイル抜群の女の子（ヴィヴィオ含む）4人とお風呂入って

はやては翔に気があります。それはなのはとフェイトも一緒

と、横にそれる話は置いていて

これから本編に入ります

今回は公開意見陳列会

ここから物語は一気に加速します

では、お楽しみに！

2012年もよろしくお願いします！

第63話 公開意見陳列会（前書き）

あけましておめでとつございます
白湯です

今年夏に2ndAsやるよー！
1st級の感動は来るのか？！

気を取り直して
公開意見陳列会スタート！

…なんか一気にすっ飛ばした気がするが気にしない
では、どござー！

第63話 公開意見陳列会

「はやて、ほら。ちゃんと目開けて。レジアス中将来だよ」

「うー。カリムあと5分……」

地上本部の中の大ホールにははやては目を擦りながら聖王協会騎士団長カリム・グラシアに訴える

「駄目だよ！ほら、シグナムさんもなんとか言ってください！」

「……………」

「シグナムさん？！」

「は、すまない騎士カリム。少し惰眠をむさぼっていたようだ」

「わかったならばはやて起こすの手伝ってください」

公開意見陳列会が始まって3時間

議会も終盤を迎えている

「故に、アインヘリアルは地上本部の新たな守りの要として希望をもたらすだろう！」

レジアス中將はさつきから衰える様子がなく、水も飲まずに喋っている

「大丈夫や。カリム。ちょっとした狸寝入りや」

「それ、今やる必要無いよね」

確かに今、問い自体は違うが本質は常に同じ事をいい争っている

本当に、アインヘリアルは人間が手にしていい兵器かどうか

「だからあれは質量兵器では無く、」

レジアス中將が言葉を紡ごうとした時、部屋のライトが一気に落ちた
変わりに嫌という程のAMFが展開される

「（あかん…、魔法の発動が出来へん）」

「どうした！灯りを点ける！」

レジアス中將が怒声を入り口付近の警備員にぶつける

「そ、それが非常警戒態勢が発令されました！要人達はここにて待機
の事、地上本部では一番ここが安全なので迎撃が終わるまでしばしお待ちを！」

会場内が一気に騒がしくなる

だがはやては慌てていなかった

さつき連絡に来た人を捕まえて、問い質す

「迎撃……、つまりガジェットが来たんか？」

「……っ！詳しい事はお伝え出来ませんので、どうか席にお戻りください」

凶星だろう

そりゃそうだ。六課はガジェットが来ることを事前に察知して居たのだから

「私は今ガジェットについては人一倍知っとるよ。なんせ、機動六課部隊長やからな」

はやてが胸をはる

伝令に来た人は何が言いたいかわかったらしくメモを取り出す

「では、対処法を教えてくださいませんか？」

「了解や。ガジェットは」

AMFで魔法が使えないと悟ったはやてはすぐさま情報を全て伝えた被害を抑えるために犠牲者が増えないように

「終了まであと2時間だ、ってのに」

「奴らは待ってくれそうに無いな」

ウィータがセットアップを済ませて迫り来るガジェット一つを叩き潰し、
リインフォースは手にした夜天の書から空間制圧用の魔法を取り出して躊躇無く使う

「遅れました！」

すぐさまフォアード陣が現れる

その手にはなのはとフェイトのデバイスがある

彼女達は今地上本部の中にいる

AMFが効いているが必ず何か無茶苦茶して出てくるだろう

「よし、ロングアーチ。かける隊長！指示をお願いします！」

『了解。みんな居るな』

ティアナが通信画面を開く

そこにはかけるが画面の向こうで似合わないヘッドホンを付けているのが見えた

地上本部経由の通信網は全滅だが、今六課のは幸いにも生きてるから指示が出せる

『さつきギンガから援護要請が来た。地下に不審者数名を発見。電力系統のジェネレーターを壊した張本人に違いない。フォアード陣は地上本部地下へ寄り道した後に向かってくれ』

「え、直接行ったらダメなんですか？」

『なのは達にデバイスを届けてきてくれ』
「わかりました」

スバルがレイジングハートを見て頷く

『地上本部からの脱出路は、電気は止まってるエレベーターしか無い』

「え、なら動かないんじゃないか」

『どうせワイヤー伝って降りてくる。終着点は地下5階だ』

「たくましいですね」

『なのは達が必ずそこから脱出する。そこにデバイスを届けにいつてくれ。フォアード陣はこれで終了。直ちに現場へ』

「了解！」

5人はセットアップして、ティアナを先頭に走って行く

「なかなか様になってるじゃねーか」

『割と恥ずかしい。こっちでは独り言をぼそぼそ言ってるんだ』

少しギャグを言ってみたがお互い目は笑ってない

『ヴィータとリインフォースにはガジェットのを叩いて欲しい』

「元？」

『転送魔法でガジェットは現れている。その辺りに召喚師が居るはずだ。そこを押さえたら増援は途絶える』

「なるほど。詳しい位置座標を頼む」

『わかった。つてあれ？』

画面の向こうで煩くアラームが鳴る

「かける、どうした！」

『ガジェット反応…機動六課に！』

「なに?!」

画面の左隅にレーダーマップが浮かぶ

「2、8、34…そんなに！」

地上本部に攻めに来たガジェットと同戦力が送られている

「六課保管庫のレリックが狙いだろう」

リインフォースが状況を分析する

なるほど

だが相手の親玉はスカリエッティ

何を企んでいるかわからない

『こっちはザフィーラと迎撃に出る。そっちは早く召喚師を見つけ
てくれ、通信はルキノに変わる』

そう言っつて一度通信が切られた

「なあ、リイン」

「なんだヴィータ」

「あいつらなら、大丈夫だよな」

ヴィータがどこか遠くを見る目でリインフォースを聞く

「六課を心配してるのか？それなら大丈夫じゃ」

「いや、目の前の部隊。ガジェット見て逃げ帰ってるぞ」

「え……。これは、長く持ちそうに無いな」

終わりが無い戦いになるから魔力消費を抑えたい所だが、難しそうだ

「みんな、いいタイミング」

地下に辿り着いた六課のフォアード陣を迎えたのは敵ではなく、頼りになる隊長2人だった

「なのはさん！フェイトさん！無事だったんですね！」

「うん。さつきからガジェットガジェットって聞こえて、不安になって来ちゃった」

背後にあるガラクタになったガジェットは気にしない方がいいのだろっ

「みんな預けていた物ある？」

「はい。レイジングハートと」

「バルディッシュです」

スバルとキャロがお互いの隊長にデバイスを渡す

「ありがとう。それで状況は？」

「ギンガが地下に主犯格と思われる人を発見、追跡中です」

「それとさつき通信で六課にもガジェットが来てるみたいです」

「わかった。なら二手に分かれよう」

フェイトが提案する

みんな異論は無いらしい

「ライトニングは六課に」

「スターズはその犯人を追うよ。あと今回の犯人はこの前出てきた戦闘機人達だよ」

「な、なんでそう言い切れるんですか？」

「この前と同じ砲撃が防御シールドを抜いて本部に直撃した。だからユウナ」

「はい！」

「うん、いい返事。ユウナは外から狙撃してる犯人を単独で拘束に行って」

「わかりました」

「よくないですよ！危険が多すぎます！」

「大人数で行くと気づかれやすい。だから単独で行くよ」

スバルが行くのを止めるがユウナがそれを否定する

「大丈夫。撃たれた方向とかわかったらだいたいの位置は予測できるから、適任だよ」

スバルとしては不安なのだ
もし、怪我でもしたらと

だが、本人が大丈夫と言うなら大丈夫なんだろう

「わかったわ。ユウナ、怪我しないようにね」

ティアナが言うのを聞くとすぐさまユウナ走り出した

「なら、みんな解散。安全確実に敵を無力化するよ」

「はい！」

機動六課フォアード陣は動き出す

犯人を確保するために

「東南から3発、続いて北北東から1発…」

走りながら渡された資料と地図に目を通す

同じ場所に2回居ることは無いのでそこから場所を予測していく

「それにしても…」

素人だ

建物攻撃の際はあらかじめ銃を大量に用意する物だ

だが相手は見るか切り1人で撃って回っている

「始めから地上本部へダメージを与える事が目的じゃない…?」

シールドを破るだけならそれでいいはず
だが4発目はシールドが破られてから撃っている

「よほど銃の出力に自信があるみたいですね」

地上に出て辺りを見回す

辺りが燃え盛り、ガジェットが跋扈している

魔力結合率1%以下、スナイプショット射程圏20cmになりました

そんな中フォーマルハウトが突然死の宣告をしてきた

「…ねえ、フォーマルハウト。それって私のアイデンティティ3割くらい持って行ってない？」

バスター収束不可、ショットガン射程0

「それが本当ならね、やることないじゃん」

ワルサー？

「あるの?!」

ありません。今朝没収されたばかりではないですか

それを聞いてがっかりするユウナ

AMFが更に濃くなり、身体に影響がでるレベルになっている

「…ま、直接叩きに行こ。次は北西、位置的に商業ビル屋上だよ」

なぜ？

フォーマルハウトをブレスレットに戻して走り出す

「他の位置から撃つとガジェットに当たるし。それと」

それと？

「AMF範囲内」

間違いない

相手は魔法を使わないのならその利点を必ず使ってくる

そう信じてビルの階段を駆け上がった

暗い階段を走り抜け、こつそりドアを開く

「(いた…)」

今まさに狙いを定めて、引き金を引こうとしている
都合のいい事にまだ気づかれていない

(マスター、早く確保に)

「(まだまだよ。まだ、撃ってない。撃った所を捕まえる)」

(…わかりました)

撃った瞬間に一番隙が出る
それを狙ってバインド&スタンショットだ

「発射」

「バインド！」

発射とか言ってくれて助かった！

バインドが見事に決まり、慌てて相手が振り向くが遅い

「ファイア！」

近距離射撃のスタンショットが相手の頭に直撃してノックアウト
バインドに捕らわれたまま頭が下がる

ミッションコンプリート

「うん。こんな銃落としちゃお。」

敵の銃を13階のビルから蹴り落とす
これでバインドが解けない限り無力化できた

フォーマルハウトが通信を開く
もちろん結果を報告するためだ

「なのは隊長、フェイト隊長。狙撃手の捕獲に成功。AMFが薄れてきたらここからバックアップをします」

だが聞こえるのはノイズのみ
ジャミングじゃない

嫌な想像が浮かぶ

通信管制室、つまり六課が落ちたのだ

「げ、休んでると思ったたらディエチ捕まってるじゃん」

そんな中背後から声が聞こえて慌てて振り返る

そこにはどこからともなく水色の髪の少女がいた

床に転がってる少女と同じスーツを着ている

向こうが気づいたのか、元からその気だったのか小さく手を降ってくる

「あ、お久しぶり。どうしても会いたくてね。ちょっと予定より早いけど待ちきれなくて！」

「…久しぶり？私はあなたと出会った記憶は無い」

フォーマルハウトをスナイプモードで展開する

一歩でも動いたら撃つ覚悟でいた

「ひどいなー。同じ101出身なのにね」

101…

第101管理外世界を指しているのか？

「…?」

わけがわからなくなった
あつた事は…ない

初めて聞く声だし…

「あ、そつかそつか。私、培養液の中だったのか。なら覚えてないのも無理ないか」

…培養液、第101管理外世界、会った事ある

……研究所？

そつだ。研究所だ

師匠が破壊した研究所

あそこに彼女はいた？

「…まさか、生き残り？」

声に変に上擦る

フォーマルハウトを持っている右手がガタガタ震えだす

あの中でしたことは嫌な思い出しかない

それが一気にフラッシュバックする

「うん。と、いっても2人しか生き残って無いからね。あと1人はかけるんに会いに行つたよ」

「…それって、」

しかし通信が割って入る

画面には赤髪の少女

『セイン！チンク姉が大変なんだ、急いで援護に来てくれ！』

「わかった、お姉ちゃんに任しとけ！」

仲間がいる？お姉ちゃん？

妹は何人いる？

逆に姉は何人いる？

いろいろ聞きたいが何故か声が出ない

その通信モニターの顔に見知った顔があったから

『セイン。時間稼ぎは終わった。回収に来てくれっ！てっ、危ないなおい！通信中に切りかかって来るなよ！』

「おっけー、トレイル。今からチンク姉助けてから行くね」

早く来いと叫んでいるようだが通信の音量を下げたせいでよくは聞こえなかった

「トレイルって、どういう事？あれは、師匠だよ」

だが画面に映った顔には見覚えがある

「うん。高町翔とトレイルって同じだよ。じゃ、またね。妹は預かって行くよ」

そう言うなりディエチと呼ばれた少女が地面に沈む

「待つて、待つてよ」

「IS発動、ディープダイバー」

ディエチと同じように本人も潜っていく

「待つてよ！」

「じゃあね。また会おう」

続く言葉は地面に潜ったせいかわかえなかった

「お前、誰だよ」

燃え盛る六課

それをバツクにそれに対峙する

「名前は無い。俺は結局プロジェクト名で呼ばれてるからな」

「どうしてだ。なんで今、俺の目の前に立ちふさがるんだよ」

研究所は破壊した

この手で徹底的に潰してきた

「俺はお前だ。そして、一番お前が大嫌いだ」

黒い髪が熱風でなびき、茶色の目がこちらを睨みつける

こちらの問いに答える気は無いらしい

「お前が本当に強いなら負けてやるさ、だがお前が弱いなら」

手にした2丁の拳銃を向ける
リボルバー式、装填最大数6発

こちらもそれに合わせるように1本の太刀を右手に持ち、向ける

「俺はお前を殺して高町翔という存在をもらおう」

倒壊した六課の中、敵はただそう言うなり交戦を開始した

第63話 公開意見陳列会（後書き）

ふう…

書いてて思った

展開早すぎたかも

いや、でも伏線はいろいろ回収したつもり
レポートにあつた子供2人の正体はセインとトレイルだったってん
です

…トレイルとは新キャラです。

その正体は…！

皆さんの予測通りです

その話はおいおい書きます

配置の確認でも

・はやて+シグナム
会場の中

・なのは+スバル+ティアナ
ギンガ援護のために地下通路へ

・フェイト+キャロ+エリオ（今回空気がつたのは気のせい）
六課へ戻る

・ヴィータ+リインフォース

地上でガジェット潰し

・かける+その他

六課にて迎撃

こんな感じかな

さて、なんだか六課も大変そうですね

次回は機動六課の内部であった事をする予定
お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2588r/>

魔法少女リリカルなのは ~羽根を持つ者~

2012年1月10日08時45分発行